福島県文化財調査報告書第 554 集

梅川筋改修事業遺跡発掘調査報告１

大 毛 内 Ｂ 遺 跡

令和４年３月

福 島 県 教 育 委 員 会
福　島　県　土　木　部

福島県文化財調査報告書第 554 集

梅川筋改修事業遺跡発掘調査報告１

大毛内（だいもううち）Ｂ遺跡

令和４年３月

福島県教育委員会
福島県土木部

序　　文

福島県教育委員会では、埋蔵文化財についてそれぞれの地域の歴史・文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、地域の歴史や文化を正しく理解し、地域に愛着を持つために欠くことの出来ないものと捉え、次の世代に伝えていくべく適切な保存及び活用に取り組んで参りました。

一方、福島県では安心・安全で住みよい県土の構築を目指し、県内各所で河川等の改修工事を実施しています。福島県教育委員会では、工事に先立ち、遺跡保存のための協議を行い、現状保存が困難な場合には記録を保存するための発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は相馬市を流れる梅川の河川改修事業において、令和２年度に発掘調査を実施しました大毛内Ｂ遺跡について調査結果をまとめたものです。今回の調査では、古墳時代から奈良・平安時代を中心とする集落跡など複数の時代にわたる人々の暮らしが確認されました。各時代の様子が垣間見える生活用品に加え、柱穴に詰まった貝や土製の錘などから、海や川の近くで暮らした知恵を感じることができます。

今回の調査により地域の歴史が着実に記録され、その成果が県民の皆様にとって地域の歴史はもとより文化財に対して理解を深めるための一助となれば幸いです。

結びに、発掘調査の実施に当たって御理解と御協力をいただきました相馬市教育委員会、公益財団法人福島県文化振興財団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和４年３月

福島県教育委員会

教育長　　鈴 木　淳 一

緒　　言

1　本書は、梅川筋改修事業遺跡発掘調査において、令和２年度に実施した相馬市に所在する大毛内Ｂ遺跡の発掘調査報告書である。

　大毛内Ｂ遺跡：相馬市大曲字大毛内（遺跡番号：20950218）

2　本遺跡発掘調査事業は、福島県教育委員会が福島県土木部と協定を締結して実施し、調査に係る費用は福島県土木部が負担した。

3　本遺跡の発掘調査は福島県教育委員会が実施し、発掘調査報告書作成支援業務を株式会社島田組に委託した。

4　福島県教育委員会では、文化財課（南相馬市駐在）の職員を配置して調査にあたった。

　副課長兼専門文化財主査　津田 直子（令和２年度）　木村直之（令和３年度）

　文化財主査　岡部 睦美　　文化財副主査　入倉徳裕（令和３年度）

　文化財副主査　渡部 紀　　文化財副主査　大栗 行貴　　文化財主事　安藤 淳

　文化財調査員　佐藤 啓（公益財団法人福島県文化振興財団出向）（令和２年度）

公益財団法人福島県文化振興財団から、副主幹　香川慎一、専門文化財主査　國井秀紀が臨時的に派遣された（令和２年度）。

5　Ｘ線透過写真撮影については、福島大学行政政策学類菊地芳朗教授及び同学類考古学研究室の協力を得た。

6　本書に掲載した自然科学分析は、次の機関に委託し、その結果を掲載している。

獣骨・貝類同定、放射性炭素年代測定、貝殻成長線分析：パリノ・サーヴェイ株式会社

7　本書に収録した遺跡の記録及び出土資料は、福島県教育委員会が保管している。

8　発掘調査及び報告書作成に際して、次の機関・個人の助言・協力を頂いた。

（敬称略・順不同）

相馬市教育委員会、公益財団法人福島県文化振興財団、福島大学行政政策学類考古学研究室

吉田 秀享、飯村 均、能登谷 宣康、福田 秀生、菅原 祥夫、青山 博樹

菊地 芳朗、田中 敏、五十嵐 純一、川田 強

用　　例

1　本報告書における遺構図版の用例は以下の通りである。

方　　位：表記がない遺構図は、すべて本書の天を北とした。

縮　　尺：各挿図中にスケールとともに縮小率を示した。

標　　高：断面図及び地形図における標高は、海抜標高を示す。

座　　標：平面図における座標は、平成23年３月11日に発生した「東北地方太平洋沖地震」による歪みを補正した平面直角座標系のⅨ系の数値を示している。

ケ　　バ：遺構内の傾斜部は「卌」、相対的に緩傾斜の部分には「〒」の記号で表現した。

用　　例：挿図中の網点等は以下を示す。これ以外は、同図中に用例を示した。

焼土化　　凝灰岩

土　　層：基本土層はアルファベット大文字Ｌとローマ数字を組み合わせ、遺構内の堆積土はアルファベット小文字ℓと算用数字を組み合わせて表記した。

土　　色：土層注記に使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局他監修『新版標準土色帖』に基づいている。()内にその番号を表示した。

遺 構 番 号：説明対象遺構は正式名称、その他の遺構は略号で記載した。

2　本書における遺物図版の用例は以下のとおりである。

（1）縮　尺：各挿図中にスケールとともに縮小率を示した。

（2）番　号：遺物は挿図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は、図１の１番の遺物を「図１−１」、写真図版中では「１−１」と示した。

（3）断　面：金属製品・須恵器の断面は黒塗りとした。輪積痕を１点鎖線で表現した。

（4）用　例：挿図中の網点は以下を使用した。これ以外は、同図中に用例を示した。

黒色処理

（5）計 測 値：各挿図中に示した。()内の数値は推定値、[]内の数値は遺存値を示す。

3　本書ならびに遺物整理上使用した略号は以下の通りである。

相 馬 市：ＳＭ　大毛内Ｂ遺跡：ＤＭＵ．Ｂ　竪穴住居跡：ＳＩ　掘立柱建物跡：ＳＢ
柱穴列跡：ＳＡ　土坑：ＳＫ　溝跡：ＳＤ　柱穴・小穴：Ｐ　トレンチ：Ｔ
基本土層：Ｌ　遺構内堆積土：ℓ

目　　次

第１章　調査経過と遺跡の環境

第１節　調査に至る経緯・・・

第４章　総括
第１節　遺物について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・141
第２節　遺構について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・144
第３節　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・148

挿図・表・写真目次

［挿図］

図１　相馬市位置図・・・・・・・・・・・・・・２
図２　相馬市地質図・・・・・・・・・・・・・・４
図３　周辺の遺跡位置図・・・・・・・・・・・６
図４　調査区の位置図・・・・・・・・・・・・11
図５　グリッド配置図・・・・・・・・・・・・14
図６　第１面遺構配置図・・・・・・・・・・・16
図７　第２面遺構配置図・・・・・・・・・・・17
図８　第３面遺構配置図・・・・・・・・・・・18
図９　第４面遺構配置図・・・・・・・・・・・19
図10　基本土層図・・・・・・・・・・・・・・20
図11　１号住居跡・・・・・・・・・・・・・・22
図12　１号住居跡出土遺物・・・・・・・・・・23
図13　２号住居跡・・・・・・・・・・・・・・24
図14　２号住居跡出土遺物・・・・・・・・・・25
図15　３ａ・ｂ・ｃ号住居跡・・・・・・・・・27
図16　３ａ号住居跡・・・・・・・・・・・・・28
図17　３ａ号住居跡出土遺物・・・・・・・・・29
図18　３ｂ号住居跡・・・・・・・・・・・・・30
図19　３ｂ号住居跡出土遺物・・・・・・・・・31
図20　３ｃ号住居跡・・・・・・・・・・・・・33
図21　４号住居跡・・・・・・・・・・・・・・35
図22　４号住居跡出土遺物・・・・・・・・・・36
図23　５号住居跡・・・・・・・・・・・・・・38
図24　５号住居跡出土遺物（１）・・・・・・・40
図25　５号住居跡出土遺物（２）・・・・・・・41
図26　６号住居跡・・・・・・・・・・・・・・42
図27　６号住居跡出土遺物・・・・・・・・・・43
図28　７・８号住居跡（１）・・・・・・・・・45
図29　７・８号住居跡（２）・・・・・・・・・46
図30　７号住居跡出土遺物・・・・・・・・・・47
図31　８号住居跡出土遺物・・・・・・・・・・48
図32　９号住居跡・東区南部土層・・・・・50
図33　９号住居跡出土遺物・・・・・・・・・51
図34　10号住居跡・出土遺物・・・・・・・・52
図35　11号住居跡・・・・・・・・・・・・・54
図36　11号住居跡出土遺物・・・・・・・・・55
図37　12号住居跡・東区東部土層・・・・・56
図38　13号住居跡・・・・・・・・・・・・・57
図39　13号住居跡出土遺物・・・・・・・・・58
図40　14号住居跡（１）・・・・・・・・・・・60
図41　14号住居跡（２）・・・・・・・・・・・61
図42　14号住居跡出土遺物・・・・・・・・・62
図43　15号住居跡（１）・・・・・・・・・・・64
図44　15号住居跡（２）・・・・・・・・・・・65
図45　15号住居跡出土遺物（１）・・・・・・・67
図46　15号住居跡出土遺物（２）・・・・・・・68
図47　15号住居跡出土遺物（３）・・・・・・・69
図48　16号住居跡・東区北東部土層・・・・71
図49　16号住居跡出土遺物・・・・・・・・・72
図50　１号建物跡・出土遺物・・・・・・・・74
図51　１・２・３号柱穴列跡・・・・・・・・76
図52　１～３号土坑・・・・・・・・・・・・78
図53　４～８号土坑・・・・・・・・・・・・81
図54　９～12号土坑・・・・・・・・・・・・83
図55　13～17号土坑・・・・・・・・・・・・86
図56　18～22号土坑・・・・・・・・・・・・88
図57　23～26号土坑・・・・・・・・・・・・90
図58　27～30号土坑・・・・・・・・・・・・93
図59　31～34号土坑・・・・・・・・・・・・95
図60　35～38号土坑・・・・・・・・・・・・97
図61　39～41号土坑・・・・・・・・・・・・98
図62　土坑出土遺物（１）・・・・・・・・・・99

図63　土坑出土遺物（２）・・・・・・・・・・100
図64　１・２号溝跡・・・・・・・・・・・・・102
図65　３・４号溝跡・・・・・・・・・・・・・104
図66　５・７・９・17号溝跡・・・・・・・・・107
図67　６・８・16号溝跡・・・・・・・・・・・108
図68　10・11・12・14・15号溝跡・・・・・・110
図69　13号溝跡・・・・・・・・・・・・・・・111
図70　溝跡出土遺物（１）・・・・・・・・・・112
図71　溝跡出土遺物（２）・・・・・・・・・・113
図72　第１面小穴配置図・・・・・・・・・・・115
図73　遺構外小穴（１）・・・・・・・・・・・116
図74　遺構外小穴（２）・・・・・・・・・・・117
図75　小穴群出土遺物・・・・・・・・・・・・118
図76　遺物包含層のグリット別出土遺物点数・119
図77　遺物包含層出土遺物（１）・・・・・・121
図78　遺物包含層出土遺物（２）・・・・・・122
図79　遺物包含層出土遺物（３）・・・・・・123
図80　遺構外遺物のグリッド別出土点数・・・124
図81　遺構外出土遺物（１）・・・・・・・・126
図82　遺構外出土遺物（２）・・・・・・・・127
図83　相馬市松川浦のS60～H31平均日別
　　定地水温（℃）　・・・・・・・・・・・130
図84　暦年較正結果・・・・・・・・・・・・・131
図85　アサリ左殻殻長分布・・・・・・・・・134
図86　貝殻成長線・・・・・・・・・・・・・・135
図87　貝類死亡季節・・・・・・・・・・・・・136
図88　出土骨（１）・・・・・・・・・・・・・137
図89　出土骨（２）・・・・・・・・・・・・・138
図90　腹足綱・二枚貝綱・・・・・・・・・・139
図91　貝殻成長線試料・・・・・・・・・・・140
図92　遺構変遷図・・・・・・・・・・・・・・150

［表］

表１　周辺の遺跡一覧・・・・・・・・・・・・８
表２　大毛内Ｂ遺跡の骨貝同定試料一覧・・・128
表３　大毛内Ｂ遺跡の年代測定
　　・貝殻成長線分析試料・・・・・・・・129
表４　放射性炭素年代測定結果・・・・・・・131
表５　骨同定結果・・・・・・・・・・・・・・133
表６　ウマ歯冠高・臼歯列長測定結果・・・・133
表７　検出動物分類群一覧・・・・・・・・・133
表８　貝類検出個数及び最小個体数・・・・・134
表９　貝計測結果・・・・・・・・・・・・・・134
表10　貝殻成長線分析結果・・・・・・・・・134
表11　鉄滓集計・・・・・・・・・・・・・・・143

［写真］

Ph.1　工事立会状況（１）北から・・・・・・13
Ph.2　工事立会状況（２）東から・・・・・・13
１　遺跡遠景（西から）・・・・・・・・・・155
２　遺跡遠景（東から）・・・・・・・・・・155
３　西区西半調査区〈第１面〉全景（上が西）156
４　西区東半・東区調査区〈第１面〉
　　全景（上が北）・・・・・・・・・・・・156
５　西区西半調査区〈第２面〉全景（上が西）157
６　西区東半調査区〈第２面〉全景（上が西）157
７　東区調査区〈第２面〉全景（上が北）・・158
８　東区調査区〈第３面〉全景（上が北）・・158
９　調査前状況（西から）・・・・・・・・・159
10　基本土層〈東区西壁〉（東から）・・・・159
11　１号住居跡全景（東から）・・・・・・・160
12　２号住居跡全景（南から）・・・・・・・160
13　２号住居跡（１）・・・・・・・・・・・161
14　３ａ号住居跡全景（南から）・・・・・・161
15　３ａ・３ｂ・３ｃ号住居跡・・・・・・・162
16　３ｂ号住居跡全景（南から）・・・・・・162
17　３ｂ号住居跡（１）・・・・・・・・・・163
18　３ｃ号住居跡全景（南から）・・・・・・163
19　３ｃ号住居跡（１）・・・・・・・・・・164
20　４号住居跡全景（東から）・・・・・・・164
21　４号住居跡（１）・・・・・・・・・・・165
22　５号住居跡全景（西から）・・・・・・・165
23　５号住居跡（１）・・・・・・・・・・・166
24　６号住居跡全景（東から）・・・・・・・166
25　６号住居跡（１）・・・・・・・・・・・167

26　７号住居跡西部分（南から）・・・・・・・167
27　７号住居跡（１）・・・・・・・・・・・・・168
28　８号住居跡全景（南から）・・・・・・・・・168
29　８号住居跡（１）・・・・・・・・・・・・・169
30　９号住居跡全景（南から）・・・・・・・・・169
31　９号住居跡（１）・・・・・・・・・・・・・170
32　10号住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・170
33　11号住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・170
34　12号住居跡全景（西から）・・・・・・・・・171
35　13号住居跡全景（南から）・・・・・・・・・171
36　13号住居跡（１）・・・・・・・・・・・・・172
37　14号住居跡全景（上が北）・・・・・・・・・172
38　14号住居跡（１）・・・・・・・・・・・・・172
39　14号住居跡（２）・・・・・・・・・・・・・173
40　15号住居跡全景（南から）・・・・・・・・・173
41　15号住居跡（１）・・・・・・・・・・・・・173
42　15号住居跡（２）・・・・・・・・・・・・・174
43　16号住居跡全景（南から）・・・・・・・・・174
44　16号住居跡（１）・・・・・・・・・・・・・175
45　１号建物跡全景（東から）・・・・・・・・・175
46　１号建物跡（１）・・・・・・・・・・・・・176
47　１～４号土坑・・・・・・・・・・・・・・・176
48　６～14号土坑・・・・・・・・・・・・・・・177
49　15～22号土坑・・・・・・・・・・・・・・・178
50　23～29号土坑・・・・・・・・・・・・・・・179
51　30～33・35～38号土坑・・・・・・・・・・180
52　39～41号土坑・・・・・・・・・・・・・・・181
53　１・２号溝跡全景（南東から）・・・・・181
54　１・２号溝跡土層（南西から）・・・・・182
55　３・４号溝跡・・・・・・・・・・・・・・・182
56　５～11号溝跡・・・・・・・・・・・・・・・183
57　12・14・15号溝跡全景（上が西）・・・・184
58　12～15号溝跡・・・・・・・・・・・・・・・184
59　16・17号溝跡全景（北東から）・・・・・185
60　小穴群（１）・・・・・・・・・・・・・・・185
61　小穴群（２）・・・・・・・・・・・・・・・186
62　遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・186
63　作業風景・・・・・・・・・・・・・・・・・186
64　１号住居跡出土遺物
・２号住居跡出土遺物（１）・・・・・・187
65　２号住居跡出土遺物（２）
・３ａ号住居跡出土遺物（１）・・・・・188
66　３ａ号住居跡出土遺物（２）
・３ｂ号住居跡出土遺物（１）・・・・・189
67　３ｂ号住居跡出土遺物（２）
・４号住居跡出土遺物（１）・・・・・・190
68　４号住居跡出土遺物（２）
・５号住居跡出土遺物（１）・・・・・・191
69　５号住居跡出土遺物（２）・・・・・・・192
70　５号住居跡出土遺物（３）・・・・・・・193
71　６号住居跡出土遺物
・７号住居跡出土遺物（１）・・・・・・194
72　７号住居跡出土遺物（２）
・８号住居跡出土遺物・・・・・・・・・・195
73　９・10・11号住居跡出土遺物・・・・・・196
74　13号住居跡出土遺物
・14号住居跡出土遺物（１）・・・・・・197
75　14号住居跡出土遺物（２）
・15号住居跡出土遺物（１）・・・・・・198
76　15号住居跡出土遺物（２）・・・・・・・199
77　15号住居跡出土遺物（３）・・・・・・・200
78　15号住居跡出土遺物（４）・・・・・・・201
79　15号住居跡出土遺物（５）
・16号住居跡出土遺物（１）・・・・・・202
80　16号住居跡出土遺物（２）・・・・・・・203
81　掘立柱建物跡出土遺物・土坑出土遺物（１）204
82　土坑出土遺物（２）・・・・・・・・・・・205
83　溝跡出土遺物（１）・・・・・・・・・・・206
84　溝跡出土遺物（２）・・・・・・・・・・・207
85　溝跡出土遺物（３）・小穴出土遺物・・・208
86　遺物包含層出土遺物（１）・・・・・・・209
87　遺物包含層出土遺物（２）・・・・・・・210
88　遺物包含層出土遺物（３）
・遺構外出土遺物（１）・・・・・・・・・211
89　遺構外出土遺物（２）・・・・・・・・・212
90　遺構外出土遺物（３）・・・・・・・・・213
91　金属製品Ｘ線写真・・・・・・・・・・・214

第１章　調査経過と遺跡の環境

第１節　調査に至る経緯

１　二級河川梅川水系河川整備の概要

福島県は、相馬市を流域とする梅川の河川改修を平成元年度より実施している。梅川は宇多川右岸の相馬市今田地区より水田地帯を東流し、同市新田地区において松川浦に注ぐ、流域 8.09 ㎢、法河川延長 4.53 ㎞の二級河川である。梅川の流下能力は小さく、河川氾濫の被害が繰り返されてきた。昭和 61 年８月の台風 10 号及び豪雨による出水被害は、浸水家屋 130 戸、農地浸水 84ha、一般資産被害額約 6,200 万円に上った。このような状況から、築堤、掘削及び護岸工などの河川改修により、治水安全度の向上を図る必要が生じていた。

平成 20 年２月に策定した「二級河川梅川水系河川整備基本方針」では、梅川水系における河川の総合的な保全と利用に関する基本方針を次のとおり定めている。

「河川工事の現状、水害発生の状況、河川の利用の現況並びに河川環境の保全を考慮し、関連地域の社会経済情勢の発展に対応するよう、「新福島県長期総合計画」等との整合を図り、相馬地域開発計画等の関連事業、関連工事に十分配慮して、水源から河口まで一貫した計画のもとに、次のように工事を実施するものとする。梅川は、沿川に広がる水田地帯や相馬市市街地の一部を流下する河川であることから、安全で安心できる地域をつくる「治水」、水利用の適正な管理を行う「利水」、多様な動植物の生育・生息環境の保全及び河川利用の場を提供する「河川環境」のバランスのとれた河川整備を進めていくものとする。その中でも、中流域の市街地部は、出水による影響が大きいため、治水の整備を促進する。また、関連計画、関連事業との調整を図り、より地域に密着した河川になるよう、地域住民、ボランティア団体及び関係機関と協働し河川整備を進めていくものとする。」

平成 23 年３月に発生した東北地方太平洋沖地震において大きな被害を受けた梅川水系では、震災後に災害復旧工事等が進められたが、洪水や高潮波浪に対して、流域資産状況を勘案した継続した治水対策の実施が依然として課題とされてきた。

平成 30 年 10 月に「二級河川梅川水系河川整備計画」が策定され、相馬市市街地における洪水被害の防止・軽減を目的に、国道６号バイパスからＪＲ常磐線橋りょうまでの 1,870 ｍについて築堤、掘削による河積の増大を図った河川改修を実施することとした。

２　調査に至る経緯

令和元年９月 11 日、梅川水系河川整備計画を受けて、福島県土木部相双建設事務所長（以下「相双建設事務所長」という。）は福島県教育委員会教育長（以下「教育委員会教育長」という。）に対し工事予定対象区域である相馬市馬場野字寺内、大曲字大毛内ほか 16,800 ㎡について埋蔵文化財包蔵地範囲を照会した。教育庁文化財課南相馬市駐在（以下「南相馬市駐在」という。）では、令和元年 10 月 10 日に分布調査を行った。その結果、周知の埋蔵文化財包蔵地である篠竹遺跡及び寺内遺跡が工事予定対象区域と重複していることを確認した。また、埋蔵文化財包蔵推定地が２箇所あると判断した（SM-UM.B1 及び SM-UM.B2 と便宜上呼称）。

SM-UM.B1 は梅川の右岸、相馬市馬場野字寺内地内及び同市大曲字大毛内地内に所在する。遺物は採集できなかったが、篠竹遺跡及び寺内遺跡と連続する地形面であることから、埋蔵文化財包蔵地の範囲が広がる可能性があると判断した。また SM-UM.B2 は梅川の左岸、相馬市大曲字大毛内に所在する。篠竹遺跡東側に近接する宅地跡である。B1 と同様、地形的に埋蔵文化財包蔵地である可能性があると判断した。この結果について、教育委員会教育長より相双建設事務所長に令和元年 10 月 30 日付けで文書により回答した。

令和２年度に入り、相双建設事務所事業部河川砂防課（以下「相双建設事務所」という。）と南相馬市駐在による協議において SM-UM.B2 の東端地点の工事着手が直近であることが判明し、南相馬市駐在では７月１日、２日に急きょ試掘・確認調査を実施した。７月１日に設定したトレンチ２本から、溝跡、土坑、ピットを検出し、内面黒色処理されたロクロ成形の土師器杯等の遺物が出土した。１日目の調査結果を受け、同工事区域である市道東部 381 号の東側にも地形が連続することから３本のトレンチを２日に設定した。その結果、小穴、土師器、須恵器、土製品が出土し、工事区域全域で遺跡の広がりを確認した。なお、試掘・確認調査においては設定トレンチが限られたため、土坑、

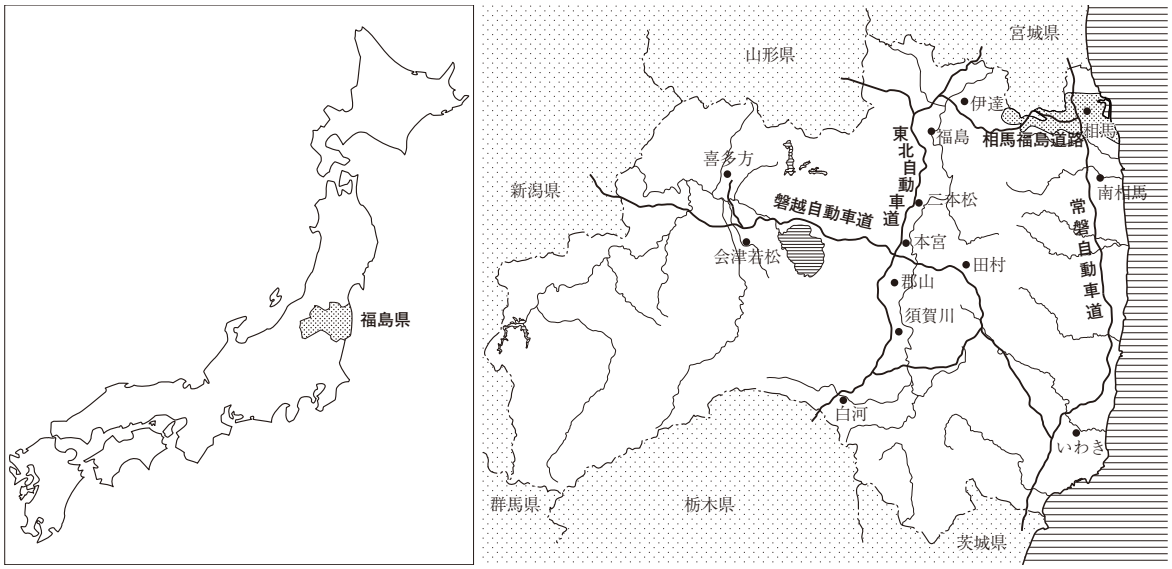


図１　相馬市位置図

小穴が検出される中世の文化層と平安時代の文化層の２層の把握及び古墳時代に属する遺物が出土することを認識するに留まった。

埋蔵文化財包蔵推定地における遺構・遺物の出土を受け、工事着手が迫るなか相双建設事務所と南相馬市駐在で保存協議を行った。河川整備工事は既に発注済であり工法及び設計変更が困難であったため、記録保存目的の本発掘調査を実施せざるを得ない状況であった。これまで福島県教育委員会実施の本発掘調査は、公益財団法人福島県文化振興財団に業務委託してきたが、早急の発掘調査実施が不可避となり直接実施する方向で調整を行った。

一方、遺跡が確認された SM-UM.B2 の範囲は、令和２年７月 27 日付けで大毛内Ｂ遺跡として埋蔵文化財包蔵地に新規登録（遺跡番号 20950218）した。これに伴い、既に登録されていた大毛内遺跡（遺跡番号 20950119）は大毛内Ａ遺跡に名称変更を行った。

その後、相双建設事務所と南相馬市駐在で実施方法について協議を重ね、令和２年８月 20 日付けで相双建設事務所長より文化財保護法第 94 条第１項に基づく通知がなされ、教育委員会教育長より同年９月８日付で発掘調査を勧告し、同月14 日に発掘調査に着手した。

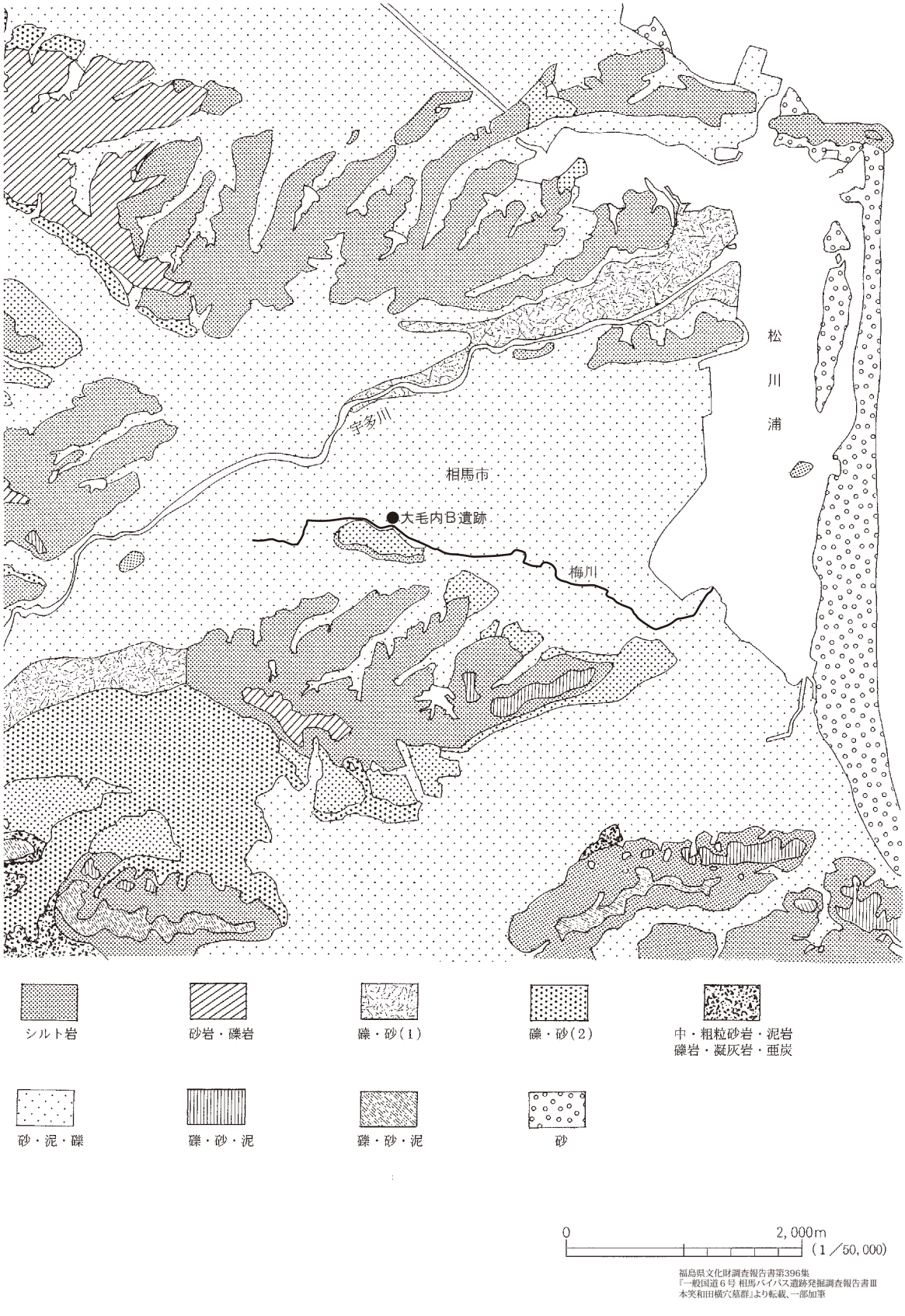
第２節　地理的環境

福島県の面積は 13,780 ㎢と北海道、岩手県に次ぐ都道府県では３番目の面積を有する。広い県土は東西方向にやや長い不整長方形を呈し、南北に走る２条の山地によって、地質的、気候的に大きく３区分される。西寄りの山地は、東北地方の脊梁山脈である奥羽山脈である。比較的急峻な山脈であるため、いわゆる「太平洋側」と「日本海側」の気候区分帯ともなっている。東寄りの阿武隈高地については、広域ではあるが比較的穏やかな高原状を呈する。一般に、奥羽山脈以西を「会津地方」、阿武隈高地東縁付近以東を「浜通り地方」、福島市や郡山市が所在する両地域に挟まれた県中央部を「中通り地方」と呼称する。

相馬市は、阿武隈高地東縁をほぼ南北方向に走る双葉断層以東の沿岸部に形成された、いわゆる「浜通り低地帯」の北端近くに位置する。沿岸部は北に新地町を介するが、内陸部は宮城県と接している。

相馬市中心部は、地域で最大の河川である宇多川の開析した低地帯にあたる。宇多川は阿武隈高地北部に位置する霊山（標高 825 ｍ）の南方に端を発し、東方約 10 ㎞に位置する天明山（標高 488 ｍ）を南に回り込みながら、ほぼ東流する。低地に入ってからは広い三角州を形成しつつ太平洋に達するが、太平洋との接点は南側から延伸する大きな砂州により潟湖となっており、松川浦と呼ばれている。相馬市の中心市街地は、この三角州の上端部に西から張り出した丘陵末端の微高地に位置している。

今回調査対象となった大毛内Ｂ遺跡は、上記の相馬市中心市街地より東南東約１㎞に位置する。宇多川の形成した三角州のほぼ南縁に位置し、現況では東流する小河川、梅川の中流域左岸に所在する。遺跡のすぐ北側には宇多川起源とみられる自然堤防が、梅川の流路に沿うように西南西から



福島県文化財調査報告書第396集
『一般国道６号 相馬バイパス遺跡発掘調査報告書Ⅲ
本笑和田横穴墓群』より転載、一部加筆

図２　相馬市地質図

東南東に帯状に繋がっている。梅川の上流部は大きく流路変更されているとみられるが、下流部は概ね宇多川三角州の南縁の形状に沿うことから、宇多川の旧河道跡である可能性が考えられる。したがって、大毛内Ｂ遺跡の基盤堆積物は、宇多川に由来するとみてよい。

宇多川の流路上の基盤岩については、概ね阿武隈高地内で玄武岩質の霊山層・天明山層と、両者の間に挟む北上花崗岩類を開析し、双葉断層付近で相馬中村層群、東に延伸する丘陵部で竜の口層など泥岩・砂岩・凝灰岩質の仙台層群を開析して、対象地周辺に堆積物を供給しているとみられる。遺跡周辺の表層土壌については、仙台層群を起源とすると思われる、乾燥すると明褐色を示す泥岩質または砂岩質シルトから同質の亜角礫が中心である。

前述のように梅川そのものには大きな浸食力はないものとみられ、自然堤防と後背湿地との比高差は僅かであり、痕跡的なものに過ぎない。ただし、現在に至るまで集落形成はこの北側の微高地に沿ったものとなっており、遺跡の立地も同様の意図をもったものかとみられる。

遺跡周辺の土地利用については、阿武隈丘陵、周辺の丘陵頂部は泥岩から凝灰岩質の仙台層群であり、水はけもよく畑作地が多い。一方で低湿地は水田が卓越する。気候的には浜通り地方は沿岸部らしく穏やかで、夏に比較的涼しく冬も温暖な、いわゆる太平洋側の気候を示し、冬場は晴天が多く強く乾燥する傾向にある。降水は主に夏が中心となるが、冬場の乾燥で翌年の水不足に陥りやすいため、浜通り各地には大小の溜池や貯水池が散在している。また、東北地方太平洋沿岸部では、春から初夏にかけてしばしば吹く冷涼多湿な北東風が「やませ」と呼ばれ、この影響が強い年は冷害になりやすいことが広く知られている。

第３節　歴史的環境

大毛内Ｂ遺跡（図３中のＡ）が立地する相馬市では、令和３年１月時点で 218 遺跡を登録している。また、本遺跡から北に５㎞離れた新地町では 163 遺跡を登録している。相馬市では県史跡に「中村城跡」、新地町では国史跡に「新地貝塚　附　手長明神跡」、県史跡に「観海堂跡」「三貫地貝塚」が指定されている。そのほか、相馬市では国指定重要文化財に「相馬中村神社　本殿・幣殿・拝殿」「八幡神社　本殿・幣殿・拝殿・摂社若宮八幡宮本殿、末社亀齢社本殿、随身門」が所在する。また、相馬市・新地町を含む市町村では国指定重要無形民俗文化財「相馬野馬追」が指定されている。特に相馬市の指定文化財では、鎌倉時代から明治維新に至るまで一度の国替えもなく相馬氏の統治下にあったため、一貫した武家文化が現在まで引き継がれた背景を伺うことができる。

これまで区域内では、三貫地貝塚等における学術調査、相馬地域総合開発、国道 113 号バイパス、国道６号相馬バイパス、常磐自動車道、一般国道 115 号相馬福島道路などの開発事業における記録保存目的調査、東日本大震災の復興事業に伴うほ場再整備や土取事業、道路改良事業などの試掘・確認調査などの埋蔵文化財調査が行われてきた。ここではこうした調査成果も加えて、大毛内Ｂ遺跡が立地する相馬市周辺の歴史的環境を概観する（図３、表１）。

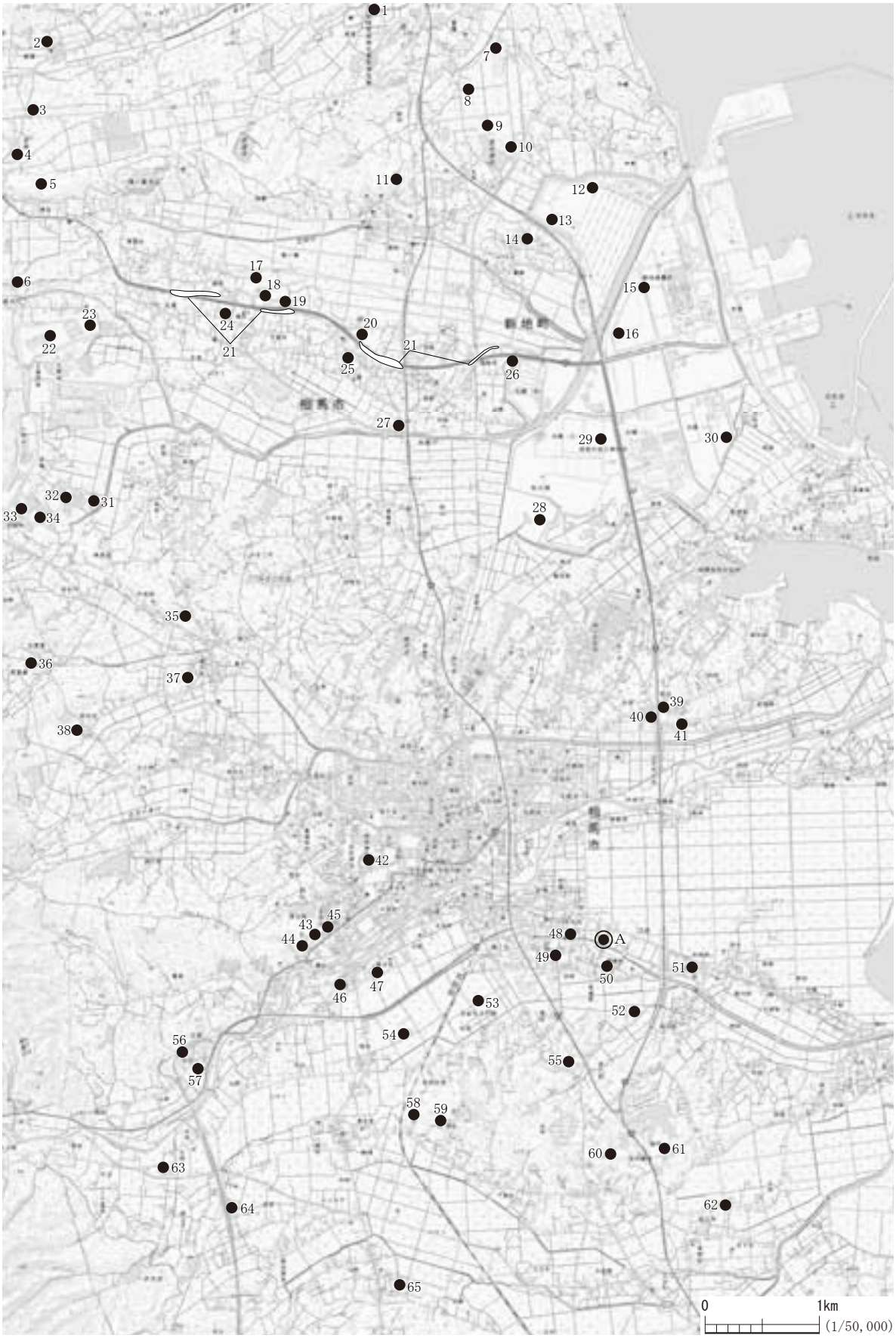

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
A
0
1km
(1/50,000)

図３　周辺の遺跡位置図

旧石器時代

旧石器時代の遺物は、地蔵川流域の段ノ原Ａ遺跡（22）・段ノ原Ｂ遺跡（23）・北原遺跡（24）でナイフ形石器や細石刃核が出土していることが確認されている。新地町三貫地遺跡（18）では石器集中部が検出され、流紋岩製のナイフ形石器や神山型彫器などが出土している。単設打面の石刃技法を多用していることから、時期は後期旧石器時代後半期に位置づけられる。当該時代の遺跡は調査事例が少ないが、段丘上に点在して分布している。

縄文時代

縄文時代に入ると、阿武隈山地からのびる丘陵地や段丘上に立地する遺跡が増加する。相馬地域開発に伴って、段ノ原Ｂ遺跡・山田Ｂ遺跡（32）・猪倉Ｂ遺跡（34）などで縄文時代早期末葉から前期前葉にかけての大規模集落跡が確認されている。山上地区の萩平遺跡（図郭外）では縄文時代早期末葉から中期初頭、晩期の集落跡が確認され、山間部における集落形成もうかがえる。縄文時代前期中葉～中期前葉にかけては、新地町師山遺跡（15）で大木２～４・６～７ａ式の遺物包含層、宿仙木Ａ遺跡（38）で大木２ｂ～３式の遺物包含層などが見つかっている。この時期は遺物包含層及び遺物のみが見つかるだけで、住居跡などは確認されていない。縄文時代中期後葉の馬見塚遺跡（35）や縄文時代中期末葉の新地町大槻遺跡（２）などでは複式炉を有する集落跡が認められる。縄文時代後期になると貝塚も形成されるようになり、考古学史上著名な新地町新地貝塚（１）や三貫地貝塚（17）が認められる。また、低湿地に立地する大森Ａ遺跡（26）では後期前葉の櫂状木製品や晩期の丸木弓などの木製品が出土している。その他、鷲塚遺跡（30）や新地町師山遺跡などで縄文時代晩期の土器が出土しており、沖積地に面した低い段丘上で集落が形成されていたことがうかがえる。

弥生時代

藤堂塚遺跡（53）において、縄文時代晩期後半及び弥生時代前期末の土坑墓または再葬墓、中期後半の土器棺墓と推定される土器が出土している。また、武井Ｅ遺跡（９）・向田Ｇ遺跡（７）では中期後葉の土器棺墓が検出されている。集落跡としては、柴迫Ａ遺跡（39）・柴迫古墳群（41）において中期前葉・後葉の集落跡が確認され、向田Ｅ遺跡（10）・武井Ｄ遺跡（８）では中期後葉の住居跡が調査されている。そのほか聖遺跡（25）や新地町境Ｂ遺跡（20）等で桜井式期の土器、石庖丁等の石器、新地町師山遺跡で天王山式の遺物包含層が確認されている。

古墳時代

古墳時代の遺跡では、新地町山中遺跡（13）で塩釜式期の土師器が集中して出土し、祭祀跡が推定されている。古墳の調査事例では、古墳時代中期の丸塚古墳（54）からは円筒や人物、馬形埴輪が出土し、古墳時代後期の高松古墳群（59）の１号墳からは円筒・形象埴輪のほか金銅製椀や金銅製歩揺付雲珠、その他装飾品、武器等豊富な出土が見られる。また、宇多川流域に福迫横穴墓群（55）・西山横穴墓群Ａ～Ｃ（42 ～ 44）、小泉川水系には本笑和田横穴墓群（40）など多数の横穴墓が確認されている。なかでも福迫横穴墓群からは金銅製双龍環頭大刀柄頭が出土している。集落跡として

表１　周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	種別	時代
A	大毛内Ｂ遺跡	相馬市大曲字大毛内	集落跡	古墳・平安
1	新地貝塚	新地町小川字貝塚西	貝塚	縄文
2	大槻遺跡	新地町杉野目字大槻	集落跡	縄文・平安・近世
3	赤柴遺跡	新地町駒ヶ嶺字赤柴前	散布地	古代
4	赤柴前遺跡	新地町駒ヶ嶺字赤柴前・鴻ノ巣・大沢北	集落跡・製炭跡	縄文・平安
5	鴻ノ巣遺跡	新地町駒ヶ嶺字鴻ノ巣	集落跡・製炭跡	縄文・平安・中世
6	白子下Ｃ遺跡	新地町駒ヶ嶺字白子下・猪コロバシ 相馬市椎木字椎木川	集落跡・街道跡	縄文・平安・近世
7	向田Ｇ遺跡	新地町駒ヶ嶺字向田	製鉄跡・集落跡	弥生・奈良・平安
8	武井Ｄ遺跡	新地町今泉字武井他	製鉄跡・集落跡	弥生・平安・近世
9	武井Ｅ遺跡	新地町今泉字武井	製鉄跡・集落跡	縄文・弥生・平安
10	向田Ｅ遺跡	新地町駒ヶ嶺字向田	製鉄跡	縄文・弥生・奈良・平安
11	駒ヶ嶺城跡	新地町駒ヶ嶺字館	城館跡	中世
12	唐崎釜屋群	新地町今泉字唐崎	製塩跡	近世
13	山中遺跡	新地町駒ヶ嶺字山中	散布地	古墳～平安
14	山中Ｂ遺跡	新地町駒ヶ嶺字山中	集落跡・散布地	縄文・古墳・平安・近世
15	師山遺跡	新地町駒ヶ嶺字師山	散布地	縄文・弥生
16	南川尻Ｂ遺跡	新地町駒ヶ嶺字南川尻	製塩跡	縄文・近世
17	三貫地貝塚	新地町駒ヶ嶺字田丁場	貝塚	縄文
18	三貫地遺跡	新地町駒ヶ嶺字三貫地西	集落跡・散布地	旧石器・縄文・奈良・平安
19	高田遺跡	新地町駒ヶ嶺字白薄	集落跡・古墳	縄文・古墳～平安
20	境Ｂ遺跡	新地町駒ヶ嶺字境	散布地	縄文・弥生・平安
21	藩境跡	相馬市椎木字北原他	土塁	近世
22	段ノ原Ａ遺跡	相馬市椎木字段ノ原	集落跡	旧石器・縄文・奈良・平安
23	段ノ原Ｂ遺跡	相馬市椎木字段ノ原	集落跡	旧石器・縄文・平安
24	北原遺跡	相馬市椎木字北原	集落跡・散布地	旧石器・縄文・奈良・平安
25	聖遺跡	相馬市塚部字聖	散布地	弥生・奈良・平安
26	大森Ａ遺跡	相馬市長老内字大森	水田跡・包含層	縄文・奈良・平安
27	善光寺遺跡	相馬市塚部字善光寺	窯跡	弥生・奈良・平安
28	古川尻Ａ遺跡	相馬市塚部字古川尻	散布地	古墳
29	古川尻Ｂ遺跡	相馬市塚部字古川尻	製塩跡	近世
30	鷲塚遺跡	相馬市新沼字広須賀	製塩跡・散布地	縄文・近世・近代
31	山田Ａ遺跡	相馬市大坪字山田	製鉄跡	古代
32	山田Ｂ遺跡	相馬市大坪字山田	集落跡・製鉄跡	縄文・古代
33	猪倉Ａ遺跡	相馬市初野字猪倉	製鉄跡	古代
34	猪倉Ｂ遺跡	相馬市初野字猪倉	製鉄跡・集落跡	縄文・古代
35	馬見塚遺跡	相馬市黒木字薬師堂	集落跡	縄文
36	南萱倉遺跡	相馬市初野字南萱倉	集落跡	弥生・平安・近世
37	黒木城跡	相馬市黒木字西館他	城館跡	中世
38	宿仙木Ａ遺跡	相馬市黒木字宿仙木	集落跡・散布地	縄文・奈良・平安・近世
39	柴迫Ａ遺跡	相馬市和田字柴迫	集落跡・製鉄跡・散布地	古墳・奈良・平安
40	本笑和田横穴墓群	相馬市本笑字馬場添・西和田	横穴墓	古墳
41	柴迫古墳群	相馬市和田字柴迫・西和田・馬場添	古墳	古墳
42	相馬中村城跡	相馬市中村字北町、西山字西山・水沢	城館跡	中世・近世
43	西山横穴墓群Ａ	相馬市西山字表西山	横穴墓	古墳
44	西山横穴墓群Ｂ	相馬市西山字表西山	横穴墓	古墳
45	西山横穴墓群Ｃ	相馬市西山字表西山	横穴墓	古墳
46	熊野堂城跡	相馬市中野字堂ノ前・清水	城館跡	中世
47	黒木田遺跡	相馬市中野字明神前	郡衙関連・散布地	古墳・奈良・平安
48	篠竹遺跡	相馬市百槻字篠竹・赤屋敷、大曲字大毛内	散布地	奈良・平安
49	馬場野横穴墓群	相馬市馬場野字岩崎	横穴墓	古墳
50	寺内遺跡	相馬市馬場野字寺内・鹿島前	散布地	奈良・平安
51	大毛内Ａ遺跡	相馬市大曲字権現・天神前	散布地	奈良・平安
52	馬場野館跡	相馬市馬場野中谷地・上谷地・堤下	城館跡	中世
53	藤堂塚遺跡	相馬市成田字藤堂塚	散布地	縄文・弥生・古墳
54	丸塚古墳	相馬市成田字船橋	古墳	古墳
55	福迫横穴墓群	相馬市馬場野字福迫・岩下・岩穴前	横穴墓	古墳
56	山岸硝庫跡	相馬市山上字山岸	硝庫跡	古代・近世
57	明神遺跡	相馬市山上字明神・広瀬	集落跡	縄文・古代
58	高松横穴墓群	相馬市坪田字高松	古墳	古墳
59	高松古墳群	相馬市坪田字高松	古墳	古墳
60	太郎穴横穴墓群	相馬市立谷字高根沢	横穴墓	古墳
61	潜石横穴墓群	相馬市程田字潜石	横穴墓	古墳
62	地ノ内遺跡	相馬市日下石字地ノ内	集落跡	縄文・奈良・平安
63	東羽黒平遺跡	相馬市今田字東羽黒平	集落跡	縄文・平安
64	西原遺跡	相馬市坪田字西原	散布地	縄文・平安・近世
65	新関遺跡	相馬市坪田字新関	製鉄跡	奈良・平安

は後期に推定される古川尻Ａ遺跡（28）が確認されている。湿地帯に立地する遺跡であり、試掘調査によって平地式の住居跡が倒壊した状態のままで埋没していることが想定されている。大森Ａ遺跡では５世紀後半から７世紀後半の水田跡と水利関連遺構が確認され、馬鍬等の木製農具が多数出土している。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の代表的な遺跡としては、宇多郡衙または寺院に比定されている黒木田遺跡（46）が挙げられ、素弁八葉蓮華文軒丸瓦や複弁蓮華文軒丸瓦が出土している。これらの瓦の供給源と推定されている善光寺遺跡（27）があり、瓦陶兼用窯跡が確認されている。また製鉄関連遺跡として、丘陵地西部に立地する山田Ａ遺跡（31）や猪倉Ｂ遺跡（34）などが存在し、新地町では海浜部の近くに７～10 世紀にかけて操業された武井地区製鉄遺跡群（向田Ｅ遺跡（10）、向田Ｇ遺跡（７）、武井Ｄ遺跡（８）、武井Ｅ遺跡（９））が存在する。山田Ａ遺跡などでは製鉄関連遺構以外に鋳造関連遺構が確認されており、出土した鋳型から香炉や梵鐘などの仏具を製作していたことが分かっている。集落跡としては、明神遺跡（57）や南萱倉遺跡（36）、宿仙木Ａ遺跡（38）、北原遺跡（24）、三貫地遺跡原口地区などが挙げられ、竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが確認されている。特に明神遺跡では調査によって８世紀代の計画的に配置された掘立柱建物跡群で構成された集落跡が見つかっており、同時期に同じく宇多川流域に立地する黒木田遺跡との関係が想定される。

中世・近世

中世から近世にかけては、文治５（1189）年の源頼朝による奥州征伐の論功によって、下総国相馬郡の千葉氏（後の相馬氏）が所領として拝領したことを契機として相馬氏の支配下に置かれる。南北朝期から戦国時代までは戦乱が続くような不安定な情勢であったためか、各地に城館が築かれるようになる。南朝方の拠点である霊山城に対しては黒木城（37）や熊野堂城（45）などが築城された。さらに伊達氏と抗争を繰り広げていた相馬氏によって、新地城や駒ヶ嶺城（11）なども築城された。戦国期の相馬氏は伊達氏などと領土を巡って争っていたが、天正 18（1590）年には小田原の役の功績により豊臣秀吉から宇多・行方・標葉の３郡を安堵される。しかし、慶長５（1600）年の関ヶ原の戦いには、不参したことで徳川家康より一旦は改易されたものの、最終的には本領が安堵されることとなった。

近世初頭には仙台藩と相馬中村藩の境界が確定するにあたり、境界に沿って藩境土塁である藩境跡（21）が構築された。この境界はほぼ現在の行政区境と一致し、仙台藩側が新地町、相馬藩側が相馬市となっている。白子下Ｃ遺跡（６）では藩境土塁に続くとされる道路跡や切り通しが調査されている。相馬氏は慶長 16（1611）年には中世以来の居城であった小高城から相馬中村城（42）へと居を移し、城下の整備を始めた。以後、相馬中村城は相馬６万石、相馬氏 13 代にわたる居城となった。相馬中村城跡は別名馬陵城とも呼ばれ、中世の館を利用しながら慶長期に拡張された平山城である。城下では藩の御用窯で相馬駒焼が陶工田代清右衛門により操業され、現代まで残っている。その他、近世の遺跡として、旧新沼浦の沿岸部においては古川尻Ｂ遺跡（29）、新地町南川尻Ｂ遺跡

(16)、唐崎釜屋群（12）等の製塩跡が確認されている。調査によって、多数の釜場と鹹水層が設けられ入浜式製塩による製塩業が盛んであったことが分かっている。塩は街道を抜けて、会津藩や二本松藩などへ供給され、消費されていた。さらに宇多川北の丘陵に穴を穿ち造られた山岸硝庫跡(56)は、相馬中村藩の火薬庫として『奥相志』に記載されている。

幕末においては、駒ヶ嶺城が仙台藩領の南側の拠点となり、これを巡って周辺の山野は新政府軍と仙台藩軍の戦場となった。白子下Ｃ遺跡に近接した地点に確認されている堡塁跡は、この時に築かれたと考えられている。

明治４（1871）年の廃藩置県で、相馬中村藩は中村県となり、明治９（1876）年には福島県に属した。その後、昭和 29（1954）年には相馬市が成立し、現在に至る。

第４節　調査経過

令和２年９月９日、南相馬市駐在は発掘調査着手にあたり、梅川筋河川改修工事請負者である草野建設（株）及び 発掘調査支援業務を担当した（株）島田組の三者により調査計画について現地確認を行った。なお、調査区については調査区中央に市道東部 381 号と水道管が通っているため、それらを境に西区と東区に分けて調査を行うことも合わせて現地で確認した。

９月 14 日に西区で重機による表土及び遺跡上層のＬⅡの剥ぎ取りを開始した。９月 15 日に終了したが、調査区が梅川と住宅地に挟まれた限定的な土地であるため、重機やクローラーダンプの作業スペース確保が困難な状況が生じ、西区の東壁から西側へ凸状に張り出す形で未掘部分を残した状態のまま、西区遺構検出面の第１面（ＬⅢａ、ＬⅢｂ）・第２面（ＬⅢｃ）の調査を着手した。９月 15 日から調査員２名、作業員 10 名体制により遺構検出面１面目における遺構検出作業を開始した。

第１面（ＬⅢａ）では、土坑６基、小穴約 150 基を検出し、試掘調査時に想定していた遺構数の２倍以上の検出となった。小穴のなかには、柱痕と判別できる堆積土が確認されるものも存在し、検出した柱穴の土層、配置により、組み合わせ方を検討した結果、２棟の掘立柱建物跡を想定した（その後１棟に修正）。また、この面の調査では小穴底部や土坑内堆積土層に貝殻を人為的に詰め、その結果、貝層が観察できる事例が一定割合で確認された。９月下旬には台風が襲来し、作業中止はもとより、台風襲来後の調査区内の排水を行いながらの作業を余儀なくされた。10 月６日にはドローンを用いた西区全景の空中写真撮影を行い、西区第１面の調査が終了した。また、同日には南相馬市駐在・相双建設事務所・（株）島田組・草野建設（株）の関係機関による第１回連絡調整会議を開催した。当初は調査終了を 11 月下旬頃と見込んでいたが、想定より多くの遺構が出てきているため、調査終了が 12 月にずれ込む可能性があることなどを確認した。以降、同関係機関による連絡調整会議を定期的に設定し、調査の進捗状況、問題点の把握等の情報共有を図った。

10 月７日以降は西区第２面の調査を行うため、重機でＬⅢａ、ＬⅢｂを剥ぎ取り、ＬⅢｃ上面において人力による遺構検出作業を開始した。遺構検出の結果、竪穴住居跡６軒、土坑７基、小穴約

50 基を検出した。中旬には遺構検出作業が終了し、遺構の掘り下げに着手した。本調査区では竪穴住居跡の密集度が高く、各住居内の堆積土がＬⅢｃを主体として類似するため重複関係及び周壁・床面の把握に時間を要した。また、銅椀や鉄鏃、中国製の白磁が出土する住居跡を検出し、より高い社会階層の集落が形成されていた可能性が想定された。10 月 27 日には第２回連絡調整会議を開催した。第２面についても遺構数や遺構の重複が多く調査困難度が高いことから、調査の迅速化を図るために公益財団法人福島県文化振興財団からの職員派遣を要請することを確認した。10 月 30 日にはドローンを用いて調査区全景の空中写真撮影を行い、西区第２面の調査が終了した。同日には東区において調査着手するため、市道東部 381 号の通行止めと市道撤去を行い、重機による表土とＬⅡの剥ぎ取りを行った。

11 月に入り、東区内において表土及び堆積土除去を終えた箇所から第１面の人力による遺構検出作業を開始した。11 月９日には西区に残る未掘部分の表土及びＬⅡの重機による剥ぎ取りも行った。遺構検出の結果、西区で土坑２基、溝跡２条、小穴 25 基程度、東区で土坑 11 基、溝跡２条、小穴約 100 基を検出した。なお、11 月９日から 20 日にかけては、公益財団法人福島県文化振興財団から職員派遣を受けて、調査員３人体制で調査を行った。11 月 19 日にはラジコンヘリコプター搭載カメラで東西調査区全景の空中写真撮影を行った。11 月 24 日からは東区及び西区残存部で第２面の調査を行うため、重機でＬⅢａ、ＬⅢｂを剥ぎ取り、ＬⅢｃ上面において人力による遺構検出作業を開始した。遺構検出の結果、西区で竪穴住居跡３軒、土坑３基、溝跡１条、小穴約 15 基、東区

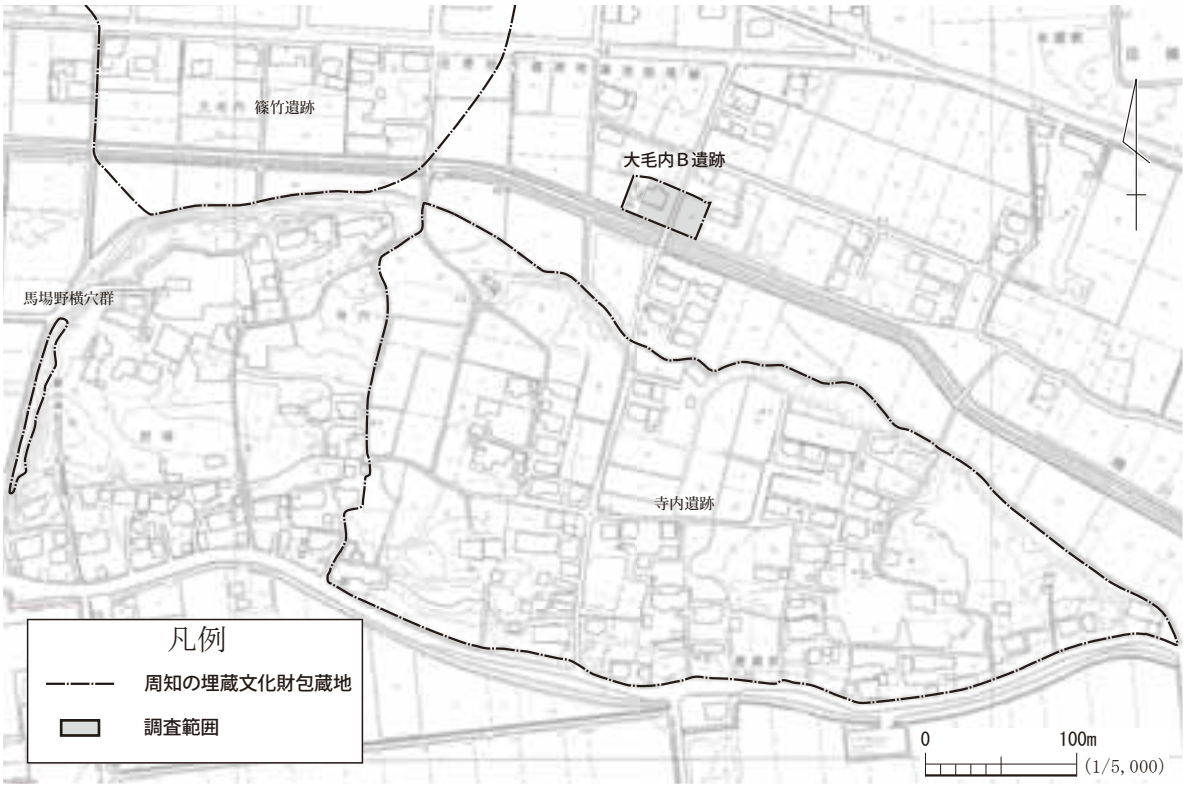


図４　調査区の位置図

で竪穴住居跡２軒、土坑６基、溝跡 12 条、小穴約 70 基を検出した。東区第２面では西区第２面と比べ竪穴住居跡の分布は希薄だが、溝跡の密集度が高い。11 月 27 日にはＬⅢｃ下層の状況を把握するために東区北東部の一部を深掘りした結果、ＬⅢｃの 30 ～ 40 ㎝下で古墳時代の所産とみられる土師器片を確認し、次いでＬⅢｃ下層に更に遺構面が存在する可能性を確認した。11 月 30 日に第３回連絡調整会議を開催した。ＬⅢｃ下層の遺構面については広がりが限定的であると想定し、工事及び市道通行止めの工程を考慮し、年内における調査終了を目途とした。また、調査期間中に撤去不可能な水道管部分については、本発掘調査終了後に工事立会対応により遺跡状況の確認を行うことを確認した。

12 月は引き続き東西調査区の第２面の調査を行った。12 月 11 日には第３面の遺構面の有無を確認するため、遺構調査が終了し下層が確認される東区東側において重機によりＬⅢｃを除去し、下層のＬⅢｄについて人力による遺構検出を行った。その結果、竪穴住居跡と考えられるプランを３軒確認した。これを受けて、12 月 15 日に第４回連絡調整会議を開催した。新たに確認された第３面の遺構検出状況から、調査終期の延長を検討した結果、現場引渡し予定日を２月 10 日とすることを確認した。12 月 23 日にはドローンを用いて第２面の東西調査区全景の空中写真撮影を行った。12 月 24 日には全区域における第２面の調査が終了し、年末年始のため一旦調査を休止した。

年が明け、１月に入ると降雪による除雪作業や降霜の影響により泥濘化した状態における調査が余儀なくされ、遺構の検出や精査に計画以上の時間を要した。加えて、ＬⅢｃより下層ではグライ化が進み、土層色調の識別が難しく、グライ化した層位が地点により異なる状況がみられた。住居跡の調査においては床面自体がグライ化しているため、床面の把握や住居跡に伴う主柱穴などの有無の判別が困難を極めた。調査は１月７日に再開し、重機掘削により東区西側のＬⅢｃを剥ぎ取り、翌日からＬⅢｄにおける遺構検出を行った。その結果、新たに１軒の竪穴住居跡を検出し、第３面の遺構検出面では竪穴住居跡計４軒、土坑２基の検出となった。１月８日には第５回連絡調整会議を開催し、検出遺構増加はあるが工事工程を考慮し、現場引渡し日は引き続き２月 10 日とし、調査を継続することとした。

２月に入り、２月４日にはラジコンヘリコプター搭載カメラで３面目の調査区全景の空中写真撮影を行い、同日に第３面検出の 15 号住居跡のカマド断ち割りを行ったところ、下から 15 号住居跡より古い焼土粒を含む土層を検出した。旧カマドの存在を想定したが、土層の広がりが確認されたため、さらに下層に第４面が存在することが判明した。第４面はＬⅢｅと呼称し、最終的に 16 号住居跡及び 40 号土坑を検出した。並行して調査収束に向けた作業も実施した。２月９日には遺構の全景写真撮影を行った。２月 10 日には遺構調査を終了し、関係機関により調査終了確認と調査区の現地引渡しを行った。

調査終了後の２月 22 日には、本遺跡内で水道管撤去工事が実施されたため、南相馬市駐在では工事立会を行った。工事立会を行った範囲は水道管によって調査区外となっていた東区と西区の間のＢ３、Ｃ１～３グリッドに位置する。水道管撤去に伴って掘削した面を精査した結果、大部分き損

しているが、西側の水道管埋設坑断面で焼土層及び炭化物層、土坑を確認した。土坑はＬⅢｃ層を検出面とし、断面形は椀状である。焼土層及び炭化物層はＬⅢｄを検出面とし、調査区では３面目の遺構検出面と同時期と考えられる。カマドの一部または住居床面の可能性もあるが、検出箇所と連続する住居跡が調査区内で検出されておらず、住居跡全容を把握することが困難であった。工事立会により確認された遺構を含めると、調査区内では竪穴住居跡が 17 軒検出したことになるが、前述のとおり不明な点も多いため、本報告では竪穴住居跡 16 軒について報告する。

Ph. 1　工事立会状況（１）（北から）

Ph. 2　工事立会状況（２）（東から）

第５節　調査方法

今回の調査では、国土座標に基づいて 10 m四方のグリッドを設定した【図５】。グリッドの原点は、Ｘ＝ 199, 380、Ｙ＝ 97, 260 である。各グリッドは北から南に算用数字を、西から東にアルファベット大文字を順番に付けて、それらを組み合わせてＡ１グリッド、Ａ２グリッドというように呼称した。なお、前節の調査経過で述べたように大毛内Ｂ遺跡の調査区については、西区と東区に大きく２分割し、さらに重機等の作業上の都合から西区は２分割して調査を行った。

基本土層はアルファベット大文字「Ｌ」とローマ数字を用い「ＬＩ・ＬⅡ…」とし、細分した場合はアルファベット小文字を付して「ＬＩａ・ＬＩｂ…」と表記した。遺構内堆積土については、アルファベット小文字と算用数字を用いて「ℓ１・ℓ２…」と表記している。

調査区内における掘削は、現表土、試掘調査で遺構検出面と判断しなかったＬⅡ及び記録保存が終了した遺構面を重機で掘り下げ、遺物包含層及び遺構面検出については原則として人力で遺物の出土状況に留意しながら掘削した。遺構の掘り込みにあたっては、遺構の特性や遺存状況等に応じ土層観察用畦を設定し、遺構の埋没状況や遺物の出土状況に留意しながら精査を行った。具体的には、竪穴住居跡は４分割法、それ以外の遺構は２分割法を基本とした。なお、堆積土の観察には、『新版標準土色帖』を参考に用い、その表記法に従って記載した。遺物は、遺構及びグリッド単位で取り上げを行い、出土層位を記録している。

発掘調査の記録は、遺構の実測図作成と写真撮影を行った。遺構の実測図作成にあたっては、平面図と土層断面図の作成を原則とし、トータルステーションを用いて実測した。作図の際の縮尺は竪穴住居跡や土坑、小穴は縮尺 1/20、掘立柱建物跡や溝跡は縮尺 1/40 を基準として記録した。調査区全体の地形図は縮尺 1/200 で作成した。写真撮影は、調査過程に応じて随時撮影し、撮影にはデジタルカメラを用いた。調査区全景写真には、事業者及び工事側から提供されたドローン、またはラジコンヘリコプター搭載カメラを用いて撮影した。

発掘調査で得られた各種記録や出土遺物の整理作業は、（株）島田組に委託して行った。調査で出土した獣骨・貝類の同定・貝類の成長線分析・放射性炭素年代測定については、パリノ・サーヴェイ（株）に委託して分析を行った。

報告書刊行後、出土遺物などの発掘調査で得られた記録類は福島県文化財センター白河館に収蔵・保管する予定である。

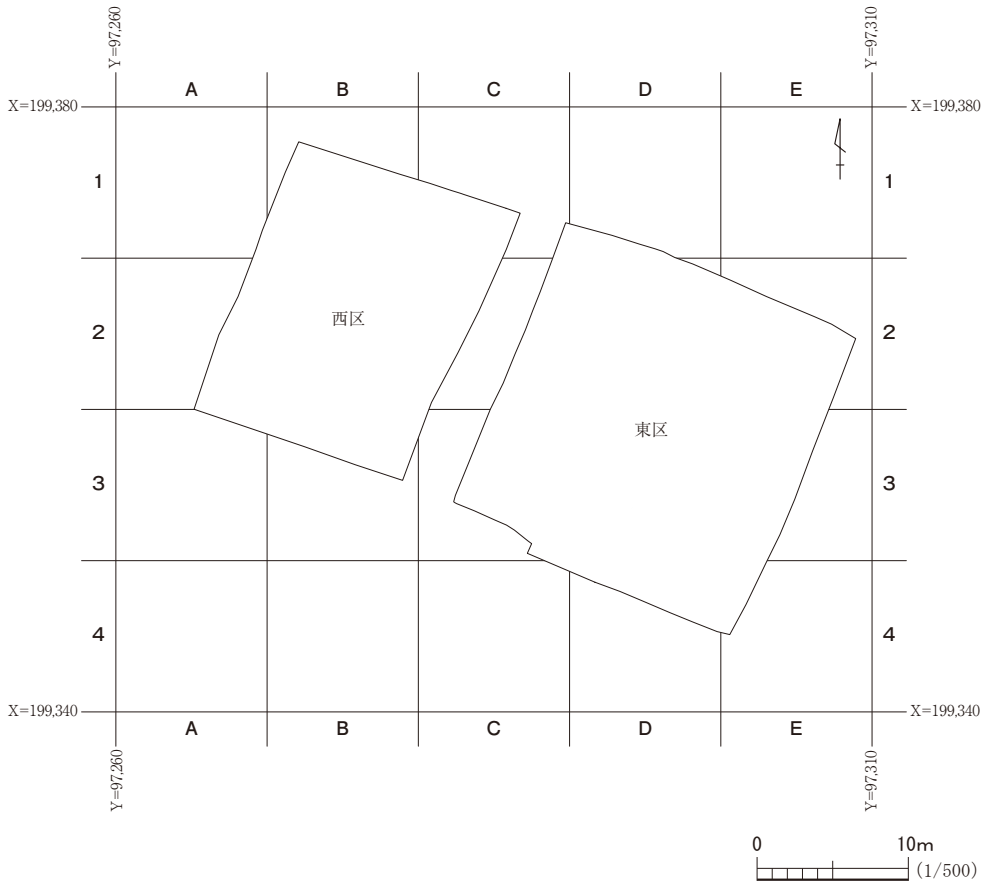


図５　グリッド配置図

第２章　調査成果

第１節　調査の概要と基本土層

調査の概要（図６～９、写真１～８）

大毛内Ｂ遺跡の調査区は、第１章で述べたように、調査区中央の市道と水道管設置状況から２分割し、作業上のスペース確保のため西区はさらに２分割し調査を行った。また、年代差をもつ４面の遺構検出面について層序的に調査した。

発掘調査により検出した遺構は、竪穴住居跡 16 軒・掘立柱建物跡１棟・柱穴列跡３列・土坑 41 基・溝跡 17 条・小穴 401 基である（工事立会結果を除く）。これらの遺構は、４面の土層から検出しており、遺構の性格や年代は比較的理解しやすい。第１面は掘立柱建物跡、柱穴列跡、溝跡、小穴からなり、中世後半頃に比定できる。第２面は竪穴住居跡と土坑、溝跡、小穴からなり、平安時代から中世前半に比定できる。第３面と第４面は竪穴住居跡と土坑、遺物包含層からなり、古墳時代に比定できる。遺構検出面が複数にわたる理由は、河川の氾濫により頻繁に土砂が堆積したためと考えられ、今後周辺地区の調査にあたっては、複数の遺構検出面を想定して調査計画を立てる必要があろう。

出土遺物は、土師器・須恵器・赤焼土器・陶磁器・金属製品・石器・石製品・土製品の他、獣骨と貝殻等の自然遺物である。土師器が主体的であり、第２面から第４面において竪穴住居跡や土坑などの遺構内堆積土のほか、遺物包含層からも多数出土している。陶磁器は、第２面の溝跡からの出土例が多い。金属製品では第２面検出の竪穴住居跡から出土した鉄鏃と銅椀が特筆され、本遺跡の性格がうかがえる重要な資料といえる。このほか銭貨も出土している。石器は磨製石斧が１点出土した。石器の形状から弥生時代の所産である可能性が高い。周辺に弥生時代の集落が存在する可能性がある。石製品・土製品は少ないが、石製模造品や土製勾玉など古墳時代に属する祭祀具が出土し、また土製品では土錘の出土割合が高い点に地域性を見出せる。さらに、貝殻が多数出土していることも特筆される。第１面と第２面から検出された遺構内から出土しており、なかでも掘立柱建物跡や小穴では、底面の抜き取られた柱痕に堆積する例が特徴的である。ほかに土坑や溝跡内に貝殻が廃棄された状態で出土した例もある。

基本土層（図 8・10、写真 10）

基本土層は、令和２年７月に実施した試掘・確認調査時の層位をもとに、調査区境の壁面で観察・記録した。図 10 Ａ－Ａ’は、東区西壁面である。ＬＩは表土の黒褐色シルトで、地点により砕石や盛土が認められる。ＬⅡは明るい色調の旧表土で、ＬⅡａ～ＬⅡｃに細分した。近世・近代の相馬

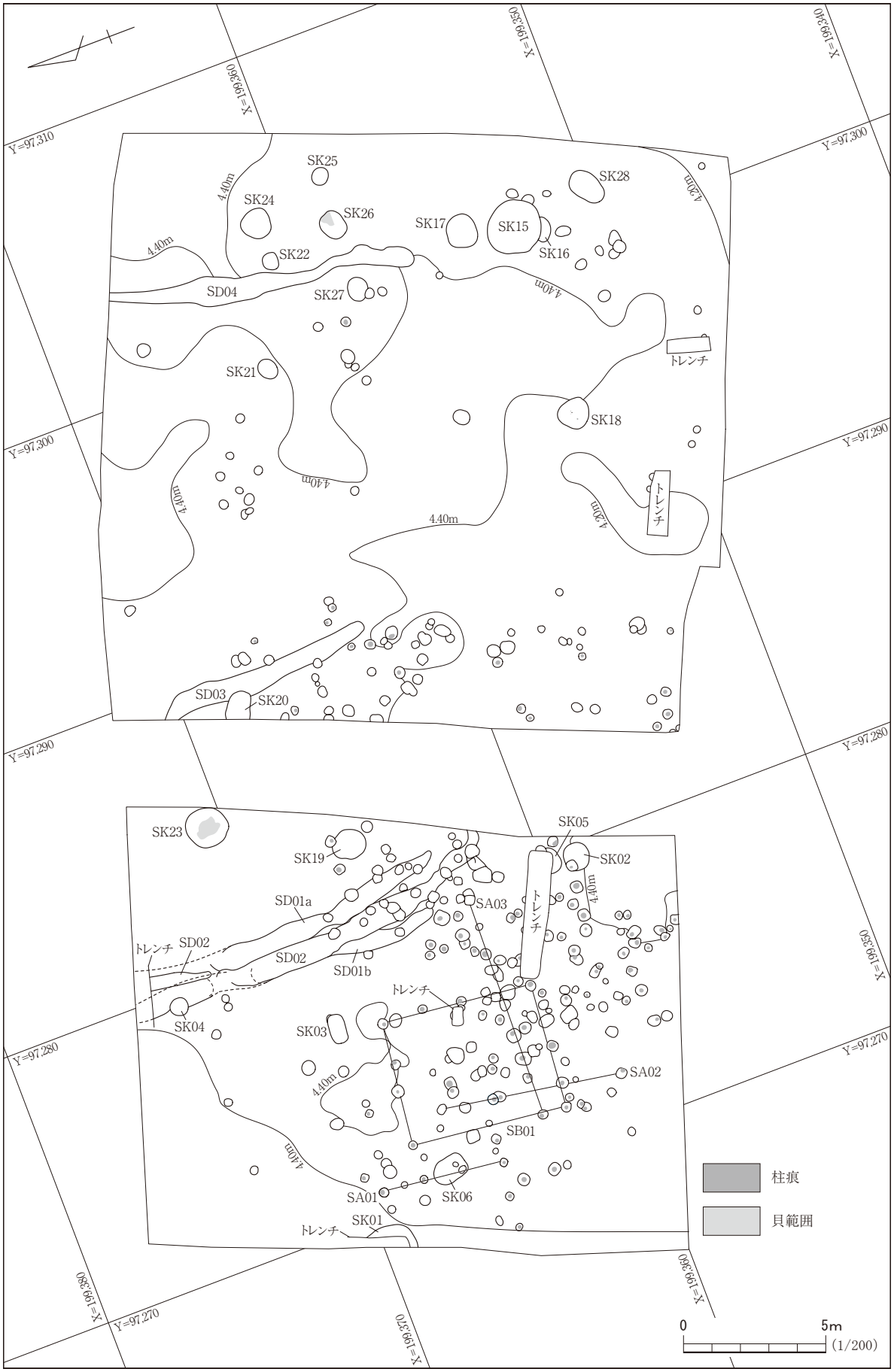

X=199,350
X=199,340
X=199,360
Y=97.310
Y=97.300
Y=97.290
Y=97.280
Y=97.270
X=199,320
X=199,380
X=199,370
SK25
SK24
SK26
SK22
SK17
SK15
SK16
SK28
SK27
SD04
SK21
SK18
SK20
SD03
トレンチ
4.40m
4.20m
SK23
SK19
SK05
SK02
SD01a
SA03
SD02
SD01b
SK04
SK03
SA02
SB01
SA01
SK06
SK01
柱痕
貝範囲
0
5m
(1/200)

図６　第１面遺構配置図

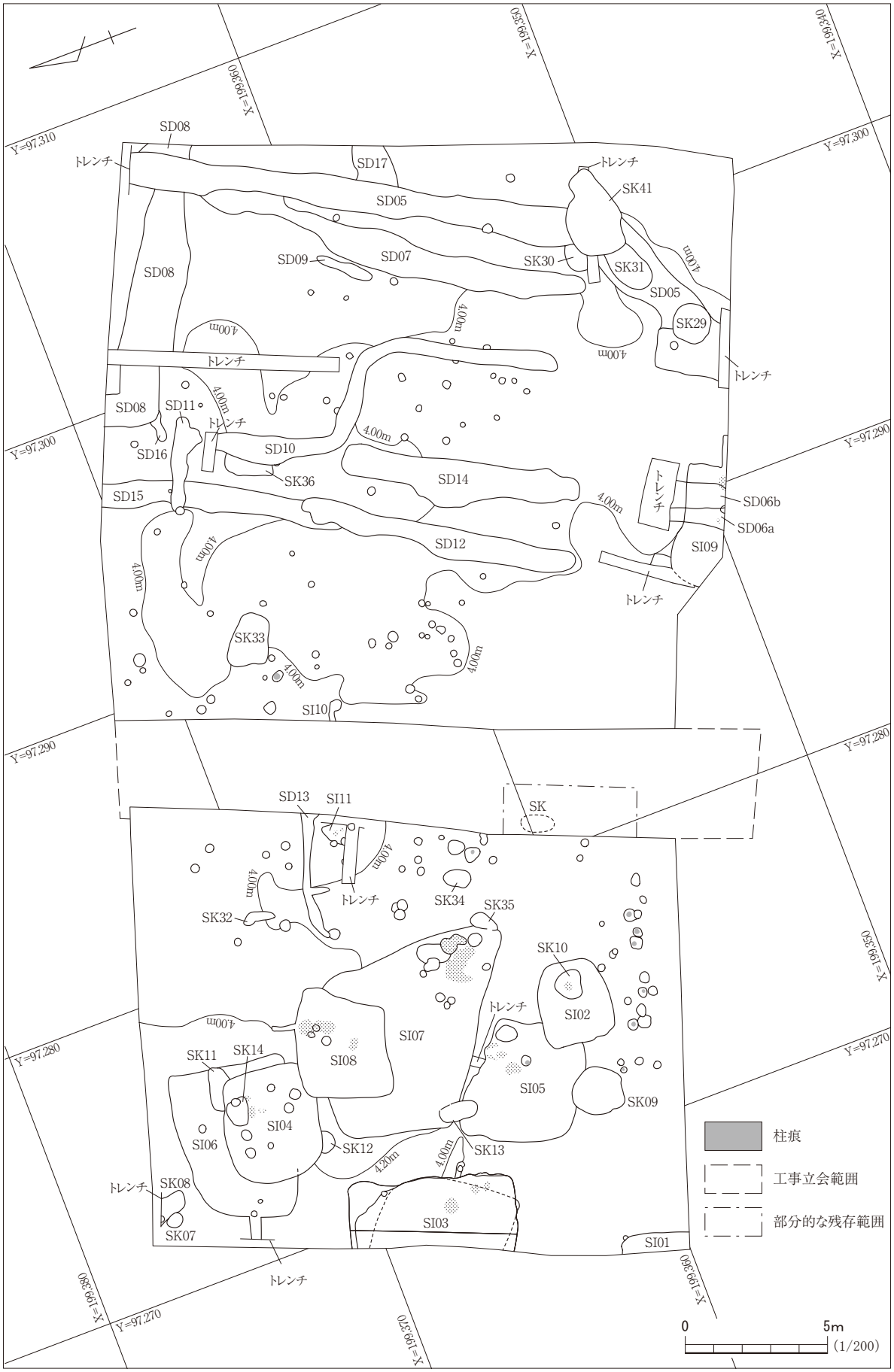

X=199,350
X=199,340
X=199,360
Y=97.310
Y=97.300
Y=97.290
Y=97.280
Y=97.270
X=199,330
X=199,370
SD08
トレンチ
SD17
SD05
SK41
SD09
SD07
SK30
SK31
SK29
4.00m
SD11
SD16
SD10
SK36
SD14
SD15
SD06b
SD06a
SI09
SD12
SK33
SI10
SD13
SI11
SK
SK34
SK35
SK32
SK10
SI02
SI07
SI08
SK11
SK14
SI04
SI06
SK12
SK13
SI05
SK09
SK08
SK07
SI03
SI01
柱痕
工事立会範囲
部分的な残存範囲
0
5m
(1/200)

図７　第２面遺構配置図

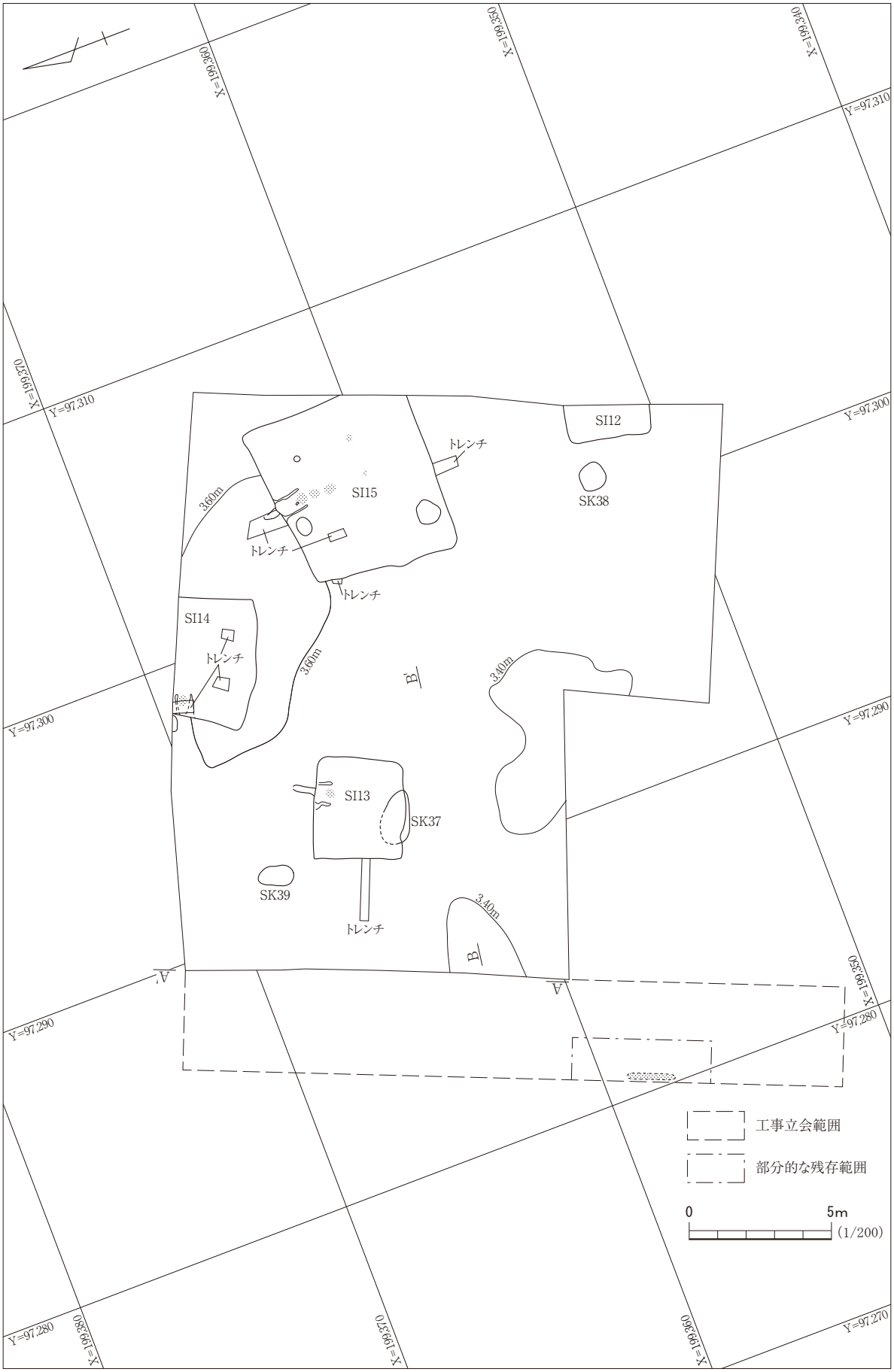

X=199,350
X=199,340
X=199,360
Y=97,310
X=199,370
Y=97,310
Y=97,300
SI12
トレンチ
SI15
SK38
3.60m
トレンチ
トレンチ
SI14
トレンチ
3.60m
B'
3.40m
Y=97,300
Y=97,290
SI13
SK37
SK39
3.40m
トレンチ
B
A'
A
X=199,350
Y=97,290
Y=97,280
工事立会範囲
部分的な残存範囲
0
5m
(1/200)
Y=97,280
X=199,380
X=199,370
X=199,360
Y=97,270

図８　第３面遺構配置図

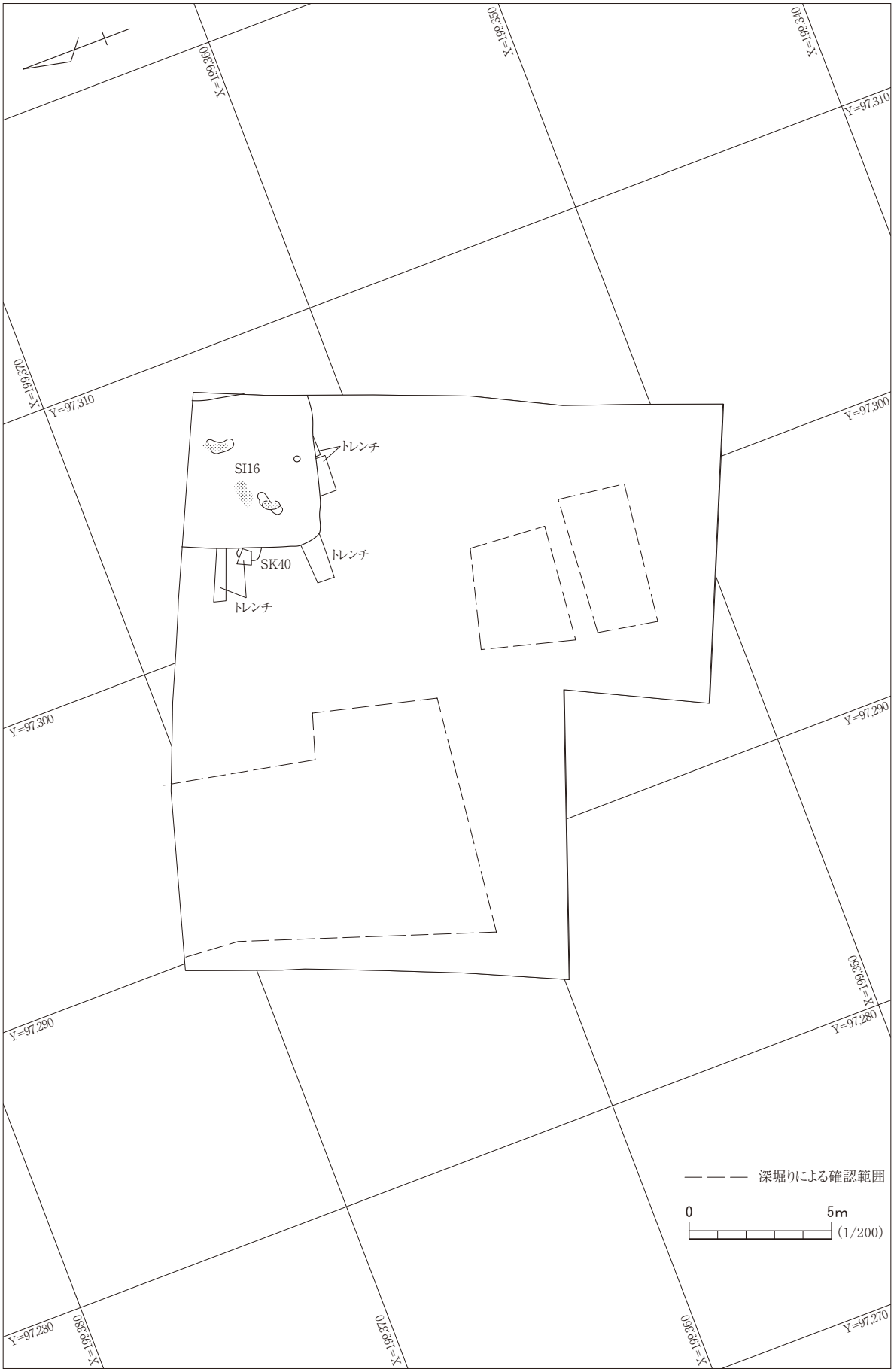
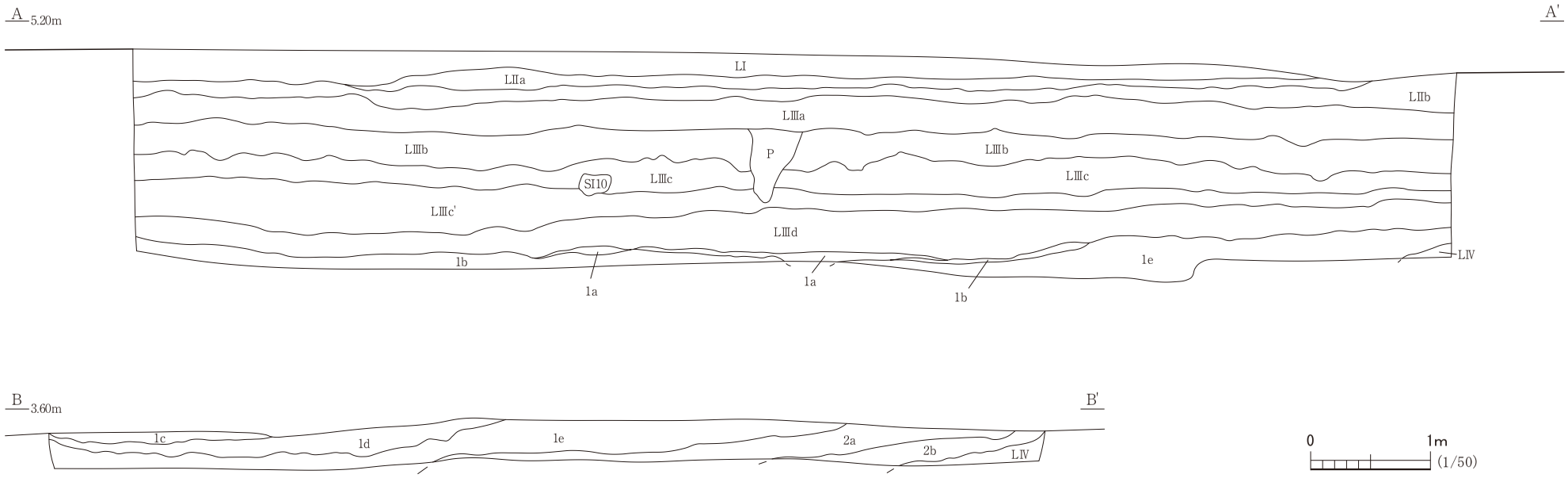

X=199,340
X=199,350
X=199,360
Y=97,310
Y=97,300
Y=97,290
Y=97,280
Y=97,270
X=199,370
X=199,380
SI16
SK40
トレンチ
トレンチ
トレンチ
深堀りによる確認範囲
0
5m
(1/200)

図９　第４面遺構配置図



基本土層（A−A'）

LI　黒褐色砂質シルト　10YR2/2（西区上部に砕石層）
LIIa　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3（白色砂粒少量）
LIIb　灰黄褐色砂質シルト　10YR4/2（白色砂粒少量）
LIIIa　暗褐色砂質シルト　10YR3/4
LIIIb　暗褐色シルト　10YR3/3（LIIIaより暗、炭化物少量、しまりあり）
LIIIc　にぶい黄褐色シルト　10YR4/3（炭化物微量、しまりあり）
LIIIc'　にぶい黄褐色シルト　10YR4/3（白色砂細粒多量）
LIIId　灰黄褐色砂質シルト　10YR4/2（炭化物少量、凝灰岩細粒少量）
LIIIe　にぶい黄褐色シルト　10YR4/3（炭化物微量、グライ化）
LIV　オリーブ黒色粘質シルト　5Y2/2（グライ化、しまりあり）
LV　黒褐色粘質シルト　2.5Y3/2（LIVより明で砂多い）

東区西遺物包含層堆積土（B−B'）

1a　黒色砂質シルト　10YR2/1（炭化物多量、粘性あり）
1b　褐灰色砂　10YR4/1（炭化物少量、互層状に砂層）
1c　灰黄褐色砂質シルト　10YR4/2
1d　灰黄褐色砂質シルト　10YR4/2
（凝灰岩塊・粒多量、西端部に焼土多量）
1e　灰黄褐色砂質シルト　10YR4/2
（凝灰岩細粒・炭化物多量、下端に炭化物層）
2a　オリーブ黒色粘質シルト　5Y3/1（炭化物微量、互層状に砂層）
2b　オリーブ黒色粘質シルト　5Y3/1（グライ化、しまり強）

図10　基本土層図

焼が出土している。ＬⅢは明るい色調の土層と暗い色調の土層が互層となる土層群である。ＬⅢａ～ＬⅢｅに細分した。ＬⅢａ・ＬⅢｃ・ＬⅢｅは明るい色調の土層で、ＬⅢａが第１面、ＬⅢｃが第２面、ＬⅢｄが第３面、ＬⅢｅが第４面の遺構検出面である。ＬⅢｂ・ＬⅢｄは比較的暗い色調の土層である。第２面で検出した遺構がＬⅢｂを掘り込んでいることが確認されているが、面的な検出作業は困難と判断したため、ＬⅢｃを第２面の遺構検出面とした。これらの土層には少量ながら炭化物や凝灰岩に由来する粘土粒などが含まれていた。また、ＬⅢｃより下層ではグライ化が進み色調の把握が困難な地点もある。グライ化する層位は地点によって異なり、近接している地点でも一定していないため、遺構検出面の比定に困難が生じたことも少なくない。ＬⅢａからＬⅢｃは調査区全体に分布するが、ＬⅢｄはほぼ東区周辺、ＬⅢｅは東区北東部分に確認される。

調査区内では遺物包含層を２箇所確認している。ＬⅢｃ下位に混入物を多量に含む東区北東部遺物包含層（図 48)、東区西半ではＬⅢｄ下位に土器や混入物を含む東区西遺物包含層（図 10）が部分的に分布する。なお、基本土層記録位置は、第８図第３面遺構配置図に記載している。

第２節　竪穴住居跡

大毛内Ｂ遺跡の発掘調査では、竪穴住居跡は 16 軒検出した。そのうち１軒では建替え及び重複が見られ３時期の住居跡を確認し、延べ 18 軒について記録保存目的の調査を行った。東区・西区双方に分布するが、西区では重複を含め密な状況での検出である。検出層位はＬⅢｃ・ＬⅢｄ・ＬⅢｅの３面である。本節ではこれらの竪穴住居跡について個別に報告する。

１号住居跡　ＳＩ 01

遺　構【図 11、写真 11】

本遺構は、西区南西隅のＡ２・３グリッドに位置する。調査区周囲に深掘りを兼ねて排水溝を掘削した際にＬⅢｃの下から炭化物を含む層を検出し、遺構の存在が想定されたため、周辺にて遺構検出作業を行い、炭化物含有層の上層であるＬⅢｃにおいて住居跡の一部を確認した。北東部で小穴１基と重複し、本遺構の方が新しい。

検出範囲内では遺構内堆積土は６層に分層できる。ℓ１・２はＬⅢｃを基調とするにぶい黄褐色砂質シルトであり、比較的水平な堆積状況である。ℓ３には少量の炭化物、ℓ４には多量の炭化物及び少量の焼土粒を含む。ℓ５は本遺構の中央部のみに堆積する褐色砂質シルト、ℓ６は本遺構の北部に堆積する層であり、ℓ４を除きいずれも自然堆積の様相を呈する。

本遺構の大半が調査区外にあるため全容は不明であるが、平面形は隅丸方形と推定され、南北 2.2 m、東西 0.6 mを検出した。ＬⅢｃを床面としている。検出した東壁の軸線は、N 16°Ｅを示す。

調査範囲においては主柱穴、カマドなどは確認できなかった。

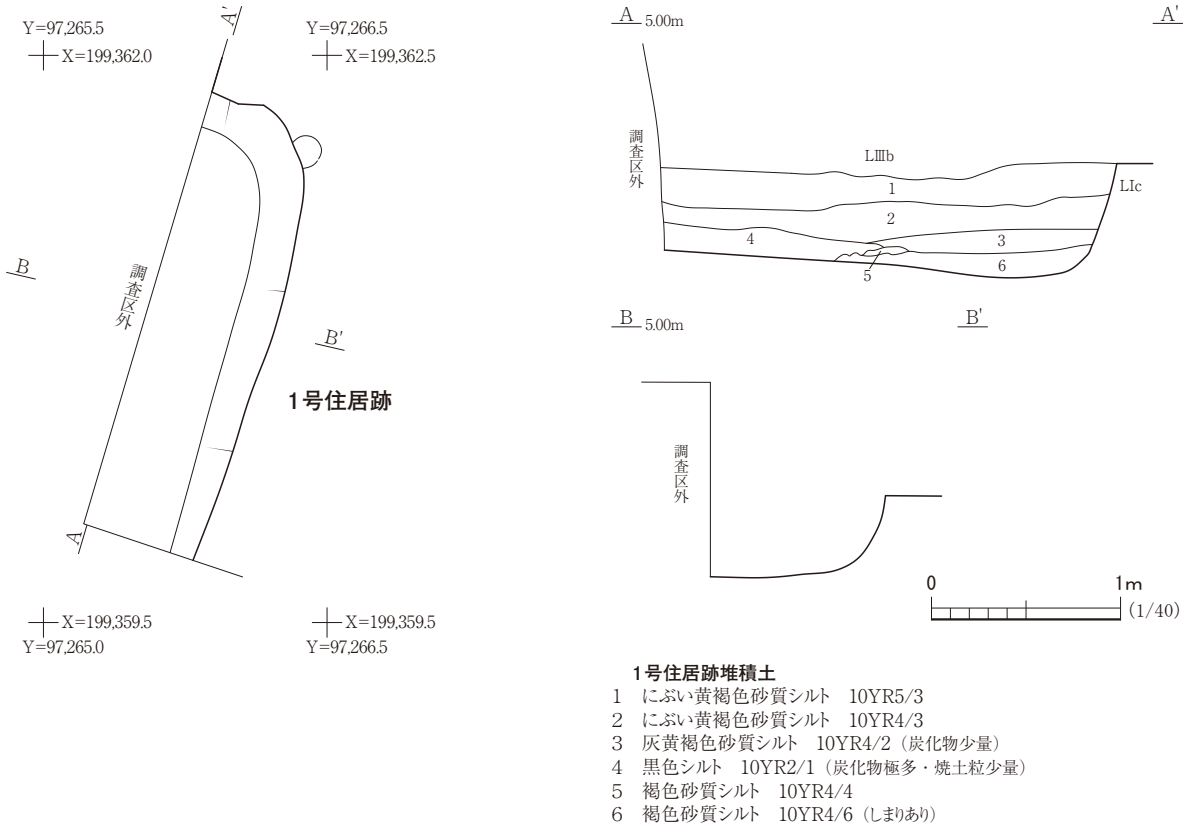


図11　１号住居跡

遺　物【図 12、写真 64】

本遺構からは、破片数にして土師器 94 点、須恵器６点、羽口１点、鉄滓 15 点（228.2g）が出土している。土師器等はいずれも小片で、多くがℓ１・２及びℓ４から出土し、鉄滓はℓ１～５より出土しており、ℓ４からの出土量が最も多い。

図 12－１・２は、ロクロ成形の土師器杯である。内面はヘラミガキの後に黒色処理が施されている。１は、深い器形で、体部に丸みを持つ。２は、底部を回転糸切りした後、体部下端に手持ちヘラケズリが施される。

３は羽口で、先端部を除いた大半が欠損し、吸気部は残存しない。先端部は溶損し、鉄滓が付着している。体部には、にぶい橙色を呈する被熱による色調変化が認められ、縦方向にナデ調整されている。

ま と め

本遺構は、平面形が隅丸方形と考えられる竪穴住居跡である。検出範囲が限定的なため、主柱穴やカマド等の住居内の施設は確認できず詳細は不明である。ただし堆積土層において、床面に自然堆積したℓ５、ℓ６の上層に炭化物を含むℓ４が南側で厚く堆積し、北側に行くにつれやや上向きに消滅していく状況を呈しており、住居廃絶後一定期間が経過したのちに住居の上屋構造が燃焼し崩落した可能性を指摘できる。

本遺構の年代は、遺構内堆積土の出土遺物から９世紀後半頃までに廃絶したと考えられる。

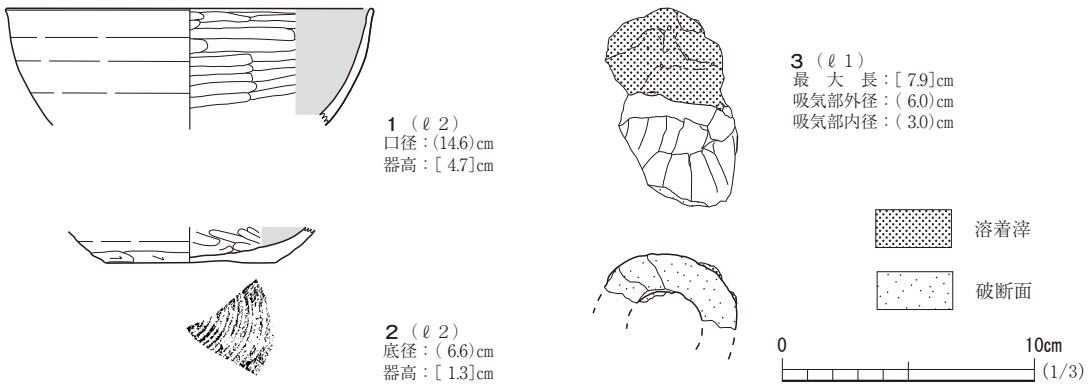


図12　１号住居跡出土遺物

２号住居跡　ＳＩ 02

遺　構【図 13、写真 12・13】

本遺構は、西区南部のＢ２・３グリッドに位置する。ＬⅢｃで遺構検出を行ったところ、方形状に黒色砂質シルトが広がることを確認した。５号住居跡、10 号土坑と重複し、本遺構が新しい。

遺構内堆積土は４層に大別したうえで、６層に細分化した。ℓ１・２はいずれも堆積状況から自然堆積と考える。ℓ３は炭化物、焼土粒、ＬⅢｃ粒を多く含むため、人為的な埋土の可能性がある。ℓ４は壁際に堆積しているため、壁面からの崩落土と考える。

本遺構は、東側が丸みを持つ不定形な隅丸方形を呈し、規模は東西 2.90 ｍ、南北 2.54 ｍを測る。床面はＬⅢｃを平坦に整え、10 号土坑と重複する範囲に貼床を施している。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。南北の中軸線方向はＮ８°Ｅである。

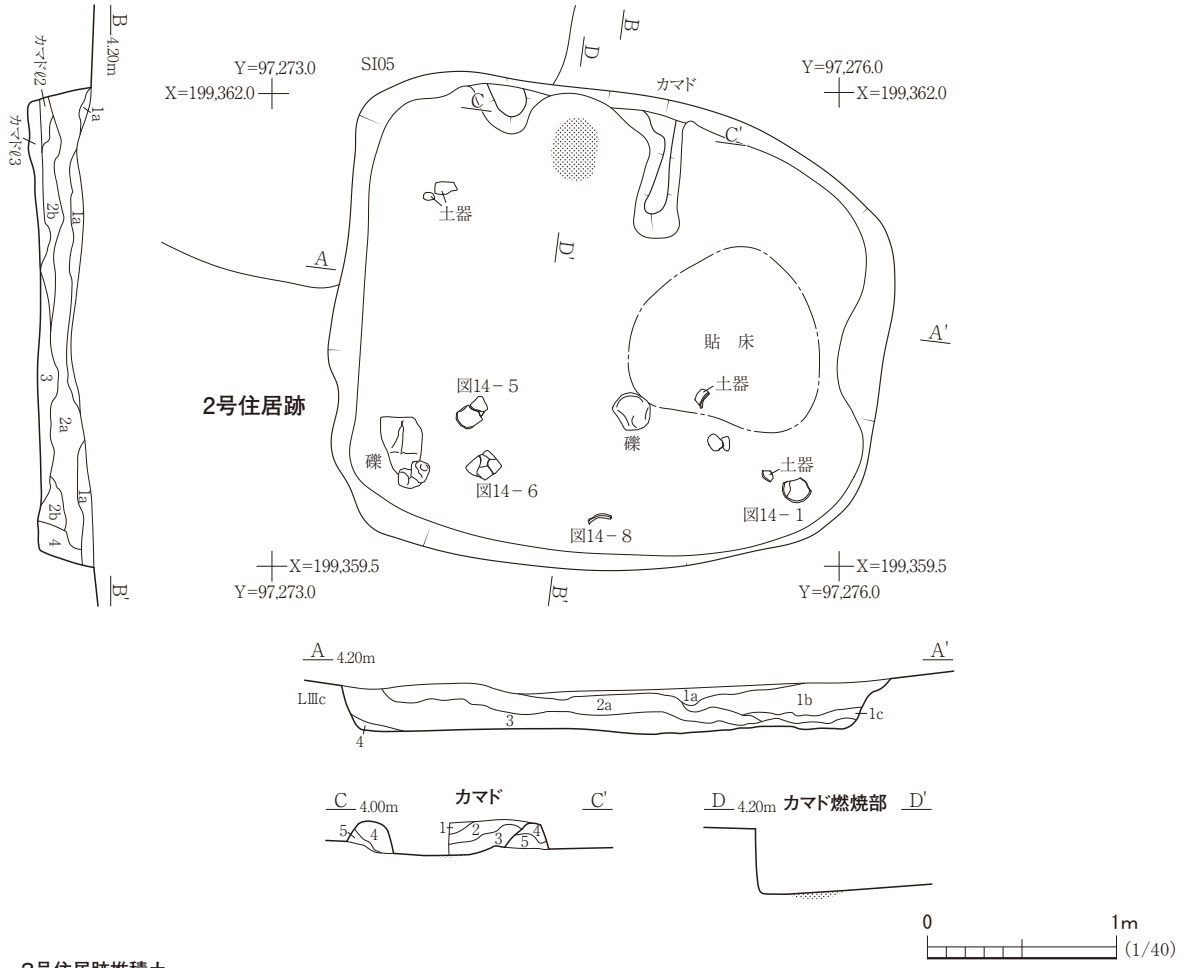
住居に付属する施設には、カマド１基がある。カマドは北壁の中央やや西寄りに位置する。煙道部は遺存せず、燃焼部、ソデ部が遺存する。カマドの規模は現状で全長 52 ㎝、幅 78 ㎝を測る。燃焼部は東西 16 ㎝、南北 20 ㎝の楕円形を呈し、最も厚いところで２㎝酸化していた。ソデ部は、凝灰岩系の石材を芯材として用い、その上にＬⅢｃ由来の土を貼り付け構築している。左ソデの遺存状況が悪いが、右ソデの遺存状況は比較的良く、長さ 45 ㎝、幅 14 ㎝、床面からの高さは 10 ㎝である。カマド内堆積土は５層に分層した。ℓ１～３にはＬⅢｃ塊やＬⅢｃ粒が多く含まれていることから天井部や壁面からの崩落土と考える。ℓ４・５はソデの構築土と判断した。本遺構に付属する主柱穴は検出できなかった。

遺　物【図 14、写真 64・65】

本遺構からは、破片数にして土師器 225 点、須恵器４点、土錘９点、砥石１点が出土している。

出土状況の特徴として、遺構内の南西部・南東部の２箇所に土師器が集中する。南西部では床面直上で､南東部では床面から 15 ㎝程度上層で出土していることから廃棄時期が異なることが想定できる。

図 14－１～３は、ロクロ成形の赤焼土器である。１は外傾する形状で、外面には墨書の可能性がある痕跡が確認された。２は小型であり、３はカマド構築土から出土し、低い高台を持つ。４は、



2号住居跡堆積土
1a　黒褐色シルト　10YR2/2（炭化物微量）
1b　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（焼土粒多量、炭化物少量）
1c　黒色粘質シルト　10YR2/1（焼土細粒少量、炭化物多量）
2a　にぶい黄褐色粘質シルト　10YR4/3（暗褐色土やや多量）
2b　暗褐色粘質シルト　10YR3/3（2aより暗い）
3　黒褐色粘質シルト　10YR3/1（炭化物・焼土細粒・LⅢc粒多量）
4　暗オリーブ褐色粘質シルト　2.5Y3/3（LⅢc粒多量、しまり強）

2号住居跡カマド堆積土
1　にぶい黄褐色粘質シルト　10YR4/3（LⅢc土塊主体）
2　黒色粘質シルト　10YR2/1（LⅢc粒多量、しまりなし）
3　黒色粘質シルト　10YR1.7/1（LⅢc土塊多量、炭化物・焼土細粒少量）
4　にぶい黄褐色粘質シルト　10YR4/3（LⅢc土塊主体、凝灰岩塊多量）
5　黒色粘質シルト　10YR2/1（LⅢc粒・炭化物・焼土細粒多量）

図13　２号住居跡

小型の非ロクロ成形杯で、外面に手持ちヘラケズリを施す。このほか図示できないものの床面直上から内面黒色処理の土師器杯も確認されている。

５～７は非ロクロ成形の土師器甕である。５・６は床面から出土し、被熱により器面が劣化し、煤が付着する。７は、胎土に粗い砂を含む。８は土師器壺で、色調は褐灰色を呈する。９・10は、管状土錘である。11は、砥石で２面に磨き面と線状痕が確認できた。

また、床面から比較的大型で扁平な石が出土した。表面観察の結果、焼面や擦り痕等は見られず、本遺構との関連は不明である。

ま　と　め

本遺構は、平面形が隅丸方形の竪穴住居跡である。本遺跡内で検出された住居跡内では小型である。カマドは北壁の中央やや西寄りにあり、住居規模に比して大型である。

出土遺物の特徴から、10世紀前半頃の遺構と考える。

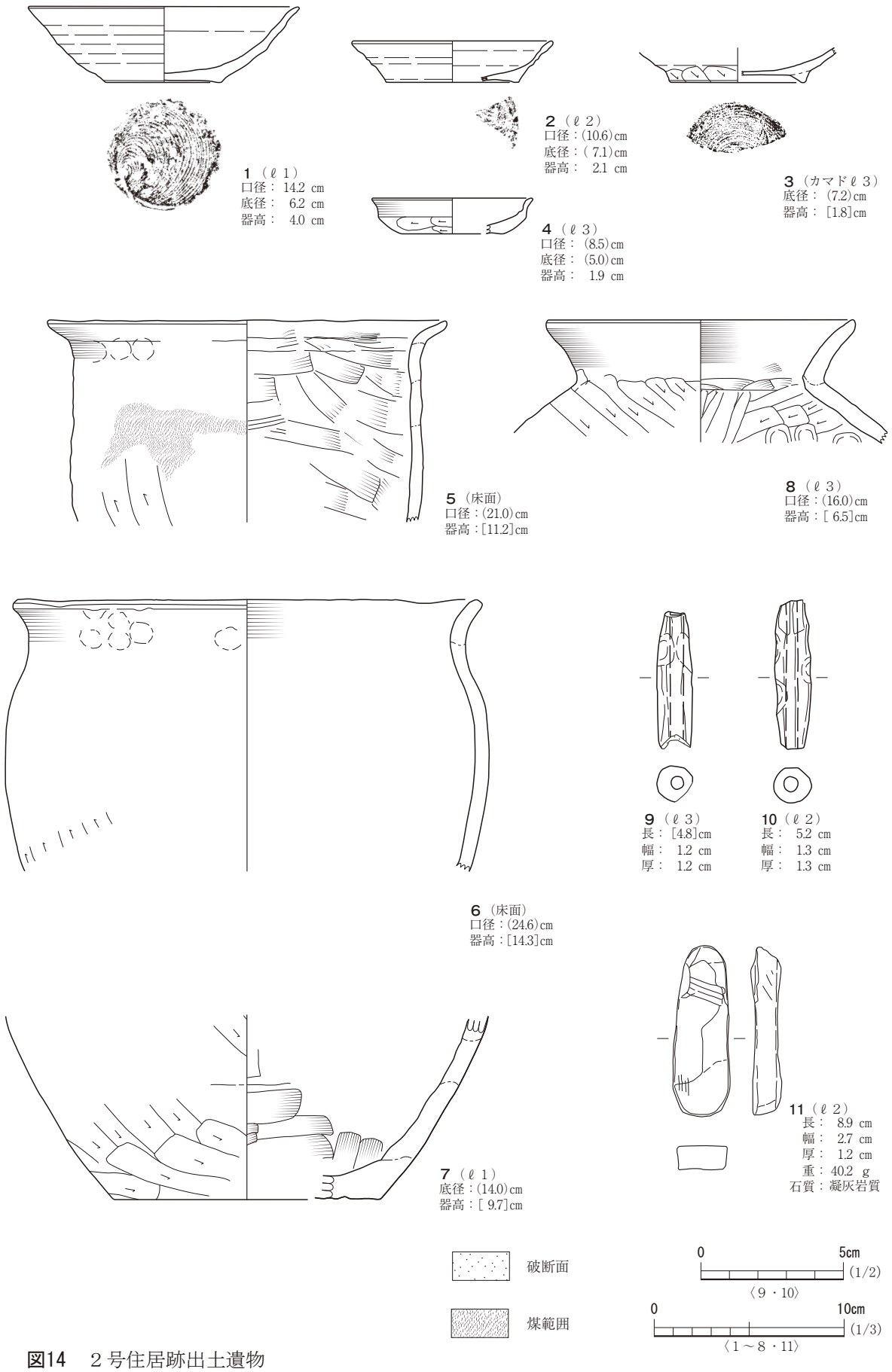


図14　２号住居跡出土遺物

３ａ号住居跡　ＳＩ 03 ａ

遺　構【図 15・16、写真 14・15】

本遺構は、西区西際となるＡ１・２、Ｂ１・２グリッドに位置する。ＬⅢａにおいて検出されたＳＫ 01 の精査中に存在が判明し、掘り下げた結果、ＬⅢｃで検出した。ただし、住居跡の掘り込みはＬⅢｂから行われている可能性が高い。本遺構の堆積土は、土壌に水分を多く含むため土層の識別が難しく、ほぼ全体を掘り下げた後、カマドの位置やベルト土層観察により、新旧３時期あることが判明した。そこで最も新しい段階の住居跡をＳＩ03ａ、次の段階をＳＩ03ｂ、最古段階をＳＩ03ｃとして報告する。なお、ＳＩ03ａとＳＩ03b は建替えによる新旧、ＳＩ03ｃは別住居が重複しているものと判断した。

ＳＩ03ａの遺構内堆積土は、ℓ１～３ａまでが対応する。ℓ１はＬⅢｂに類似する自然堆積土である。ℓ１ａが本遺構の東側一部に堆積する。ℓ２はＬⅢｃが混じり判別困難であるが、遺物や焼土・炭化物の含有状況から人為的堆積の可能性がある。ℓ３ａが本住居跡に属する貼床と判断した。

本住居跡は、南北の周壁の位置から推察すると３分の２程度が調査区外に延びる。平面形は方形と考えられ、北東部分では丸みを持つが、この部分は床面把握の誤認による可能性がある。規模は南北 5.67 ｍを測り、検出範囲では東西 1.90 ｍを検出した。比較的大型の住居跡である。床面には貼床が大部分で認められるが、南側約 1.4 ｍには確認されていない。周壁は北東付近で緩やかとなるが、先述した土層誤認の可能性がある。検出した東壁の方向は、約Ｎ 20°Ｅである。

付属施設は、カマド１基である。カマドは東辺の南寄りで検出した。燃焼部とソデ部の一部が残存し、遺存状態はあまり良くない。煙道は検出されず、奥壁から燃焼部端部まで全長 64 ㎝、ソデ部の幅 87 ㎝が残る。燃焼部は奥壁 50 ㎝、幅 40 ㎝を測り、平坦な底面から奥壁で急激に立ち上がる。燃焼部の焼土は径 32 ～ 37 ㎝の範囲にわたり最厚５㎝堆積している。残存するソデ部は左ソデが長さ 43 ㎝、床面からの高さは３㎝、右ソデは長さ 38 ㎝、床面からの高さ６㎝のみである。

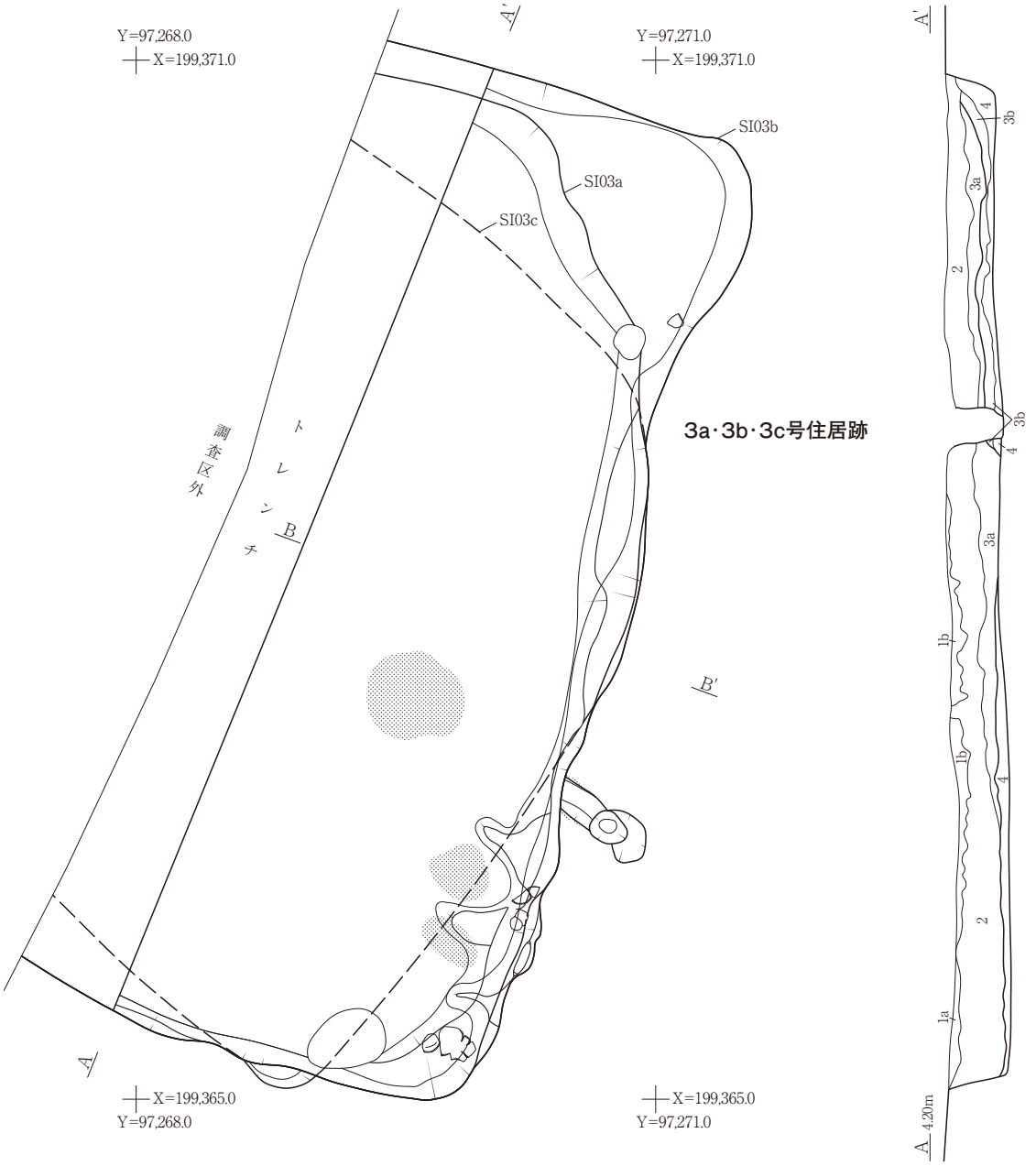
カマド内堆積土は５層に分類される。ℓ１は廃絶後の堆積土、ℓ２は炭化物主体でありカマド機能時に堆積していた可能性がある。ℓ３～５は、ソデ部構築土である。ℓ３には凝灰岩塊が含まれており芯材として使われていたと推定される。

遺　物【図 17、写真 65・66】

本遺構からは、破片数にして土師器 321 点、須恵器３点、土錘１点、鉄滓８点（259.6 ｇ）が出土している。小破片が多く図示できるものは少ないが、貼床から内面黒色処理された土師器杯と床面から土錘が出土している。

図 17－１～２は、貼床堆積土ℓ３ａから出土したロクロ成形の杯である。１は内面黒色処理され、やや丸みを持ち深い器形である。２は、被熱のため内面黒色処理の有無は判然としないが体部下端に回転ヘラケズリの再調整が施される。このほか土師器甕も底面から出土している。

３は管状土錘で、ケズリにより面取りが施され、小口面は平滑、孔断面は雫に近い形状となる。

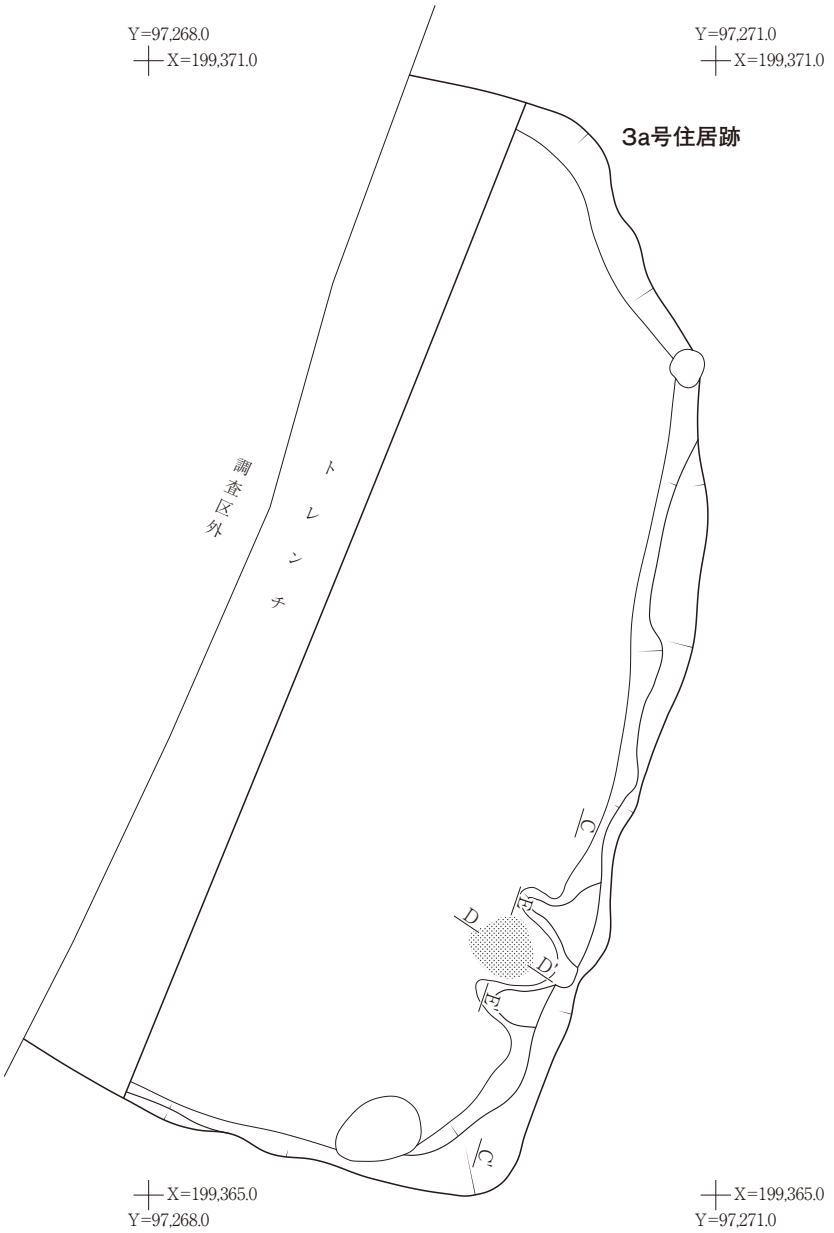


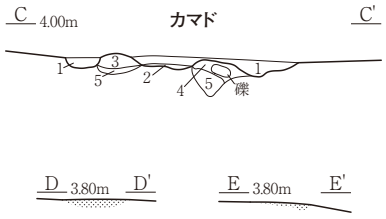
3a･3b･3c号住居跡堆積土

1a	黒色シルト　10YR1.7/1（炭化物多量、焼土細粒少量）	SI03a 堆積土
1b	黒褐色シルト　10YR3/2	SI03a 堆積土
2	暗褐色シルト　10YR3/3（LⅢc粒多量、焼土細粒少量）	SI03a 堆積土
3a	黒色粘質シルト　10YR1.7/1（炭化物主体）	SI03a 堆積土
3b	褐灰色粘質シルト　10YR4/1（炭化物多量、焼土細粒少量）	SI03b堆積土
4	にぶい黄褐色粘質シルト　10YR4/3（LⅢc主体）	SI03b堆積土

0　1m
(1/40)

図15　３ａ・３ｂ・３ｃ号住居跡





3a号住居跡カマド堆積土

1　灰黄褐色粘質シルト　10YR4/2（LⅢc塊主体）
2　黒色粘質シルト　10YR1.7/1（炭化物主体、焼土細粒多量）
3　黒褐色粘質シルト　10YR3/1（凝灰岩塊）
4　黒褐色粘質シルト　10YR3/1（炭化物・焼土細粒多量、凝灰岩塊少量）
5　褐灰色粘質シルト　10YR4/1（LⅢc主体、炭化物・焼土やや多量）

図16　３ａ号住居跡

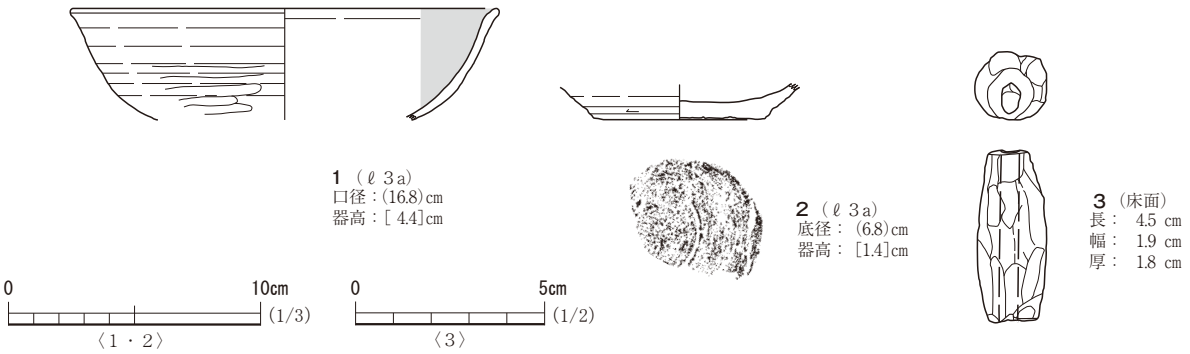


図17　３ａ号住居跡出土遺物

ま　と　め

本遺構は、３軒が重複する住居跡の中で最も新しい住居跡である。残存状況はあまりよくないが、貼床、カマドの一部を確認することができた。柱穴と類推できる施設は確認できず住居構造は判別できなかったが、南北の壁長から比較的大型の住居跡であると推定される。本遺跡内では同地点での建替えが唯一見られる住居であり、集落内で何らかの拠点的役割を担った可能性も推定できる。

年代決定が可能な土師器の出土が少ないが、出土遺物の特徴から、９世紀後半から10世紀前半頃の遺構と考える。

３ｂ号住居跡　ＳＩ03ｂ

遺　構【図15・18、写真16・17】

本遺構は、ＳＩ03ａの貼床であるℓ３ａの下層で判別した住居跡である。ＳＩ03ａカマドの右ソデ部分において、下層にカマド跡が確認され、住居跡に新旧があることを確認した。したがって本住居跡がＳＩ03ａより古い。ＳＩ03ａで先述したとおり堆積土の把握が困難であり、断面観察の結果、ＳＩ03ａの貼床であるℓ３ａ下層のℓ３ｂ及びℓ４が本住居跡の貼床と判断した。

本住居跡は、東壁・南壁についてはＳＩ03ａとほぼ共通する。ただし北東隅部分において本住居跡では整った隅丸方形となるが、ＳＩ03ａ段階では弧状に縮小化する。ＳＩ03ａと住居の軸方向は同じであるが、南北の長さは本住居跡が5.86ｍとＳＩ03ａより19㎝長い。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、東辺のカマド付近では、幅５㎝程度の貼壁土層を確認した。検出した東壁の方向は約Ｎ22°Ｅである。

付属施設としてはカマドが確認された。ＳＩ03ａカマドに壊されており、燃焼部と右ソデの一部のみ残る。火床部は奥行48㎝、酸化した燃焼面は長軸37㎝、短軸20㎝の楕円形を呈する。ソデ部の残存部分は、長さ33㎝、床面からの高さは21㎝である。残存するカマド内堆積土はソデの構築土のみである。土層内には板状の凝灰岩が残存しており、芯材だったものと推測される。

遺　物【図19、写真66・67】

本遺構からは、破片数にして土師器143点、須恵器３点、土錘２点、鉄鏃１点、鉄滓４点（37.5ｇ）が出土している。住居跡北側の１ｍ×0.7ｍの範囲の貼床堆積土及びカマド周辺の２箇所からまと

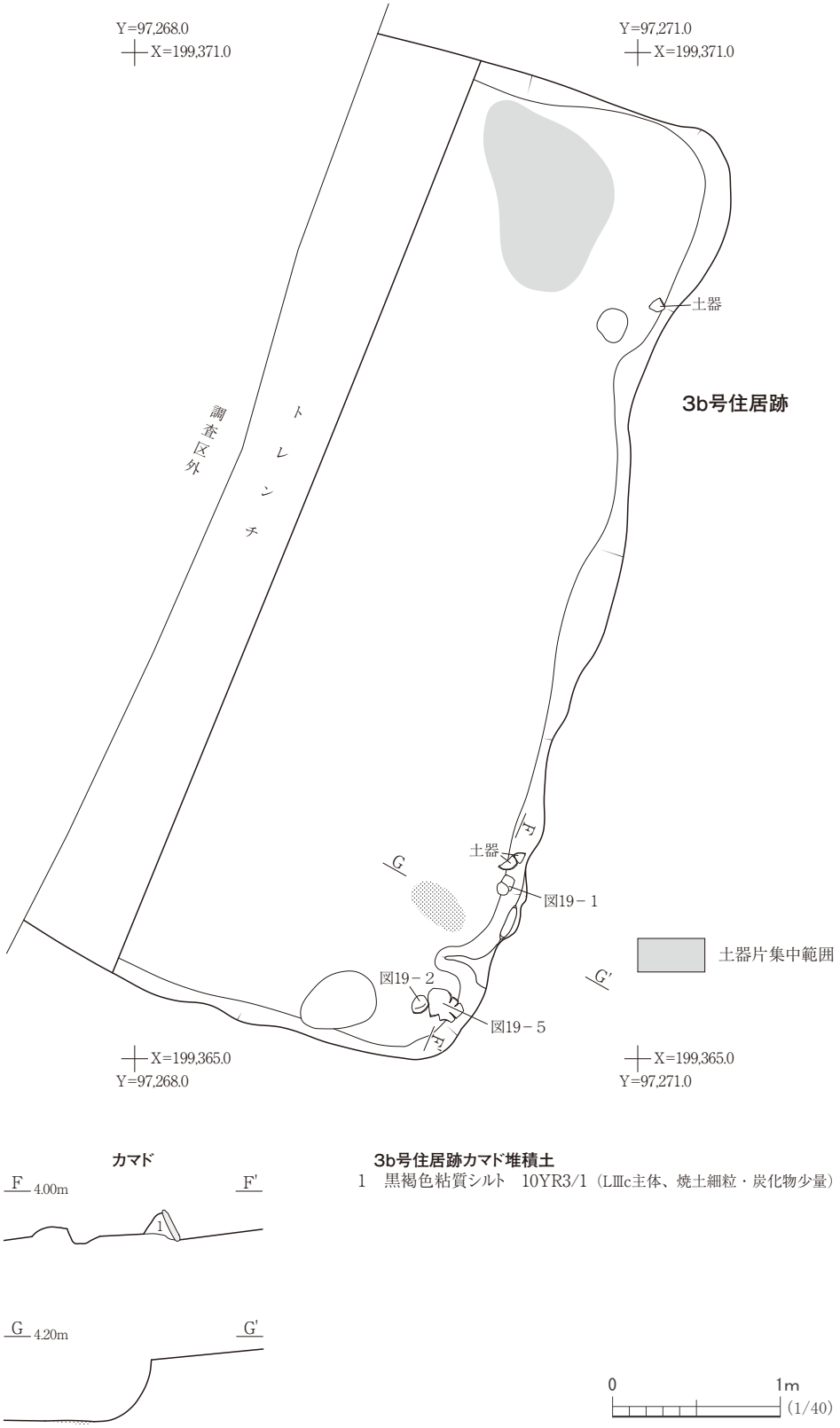

Y=97,268.0
X=199,371.0
Y=97,271.0
X=199,371.0
土器
3b号住居跡
調査区外
トレンチ
F
G
土器
図19－1
土器片集中範囲
G'
図19－2
図19－5
F'
X=199,365.0
Y=97,268.0
X=199,365.0
Y=97,271.0
カマド
F 4.00m
F'
1
G 4.20m
G'
3b号住居跡カマド堆積土
1　黒褐色粘質シルト　10YR3/1（LⅢc主体、焼土細粒・炭化物少量）
0
1m
(1/40)

図18　３ｂ号住居跡

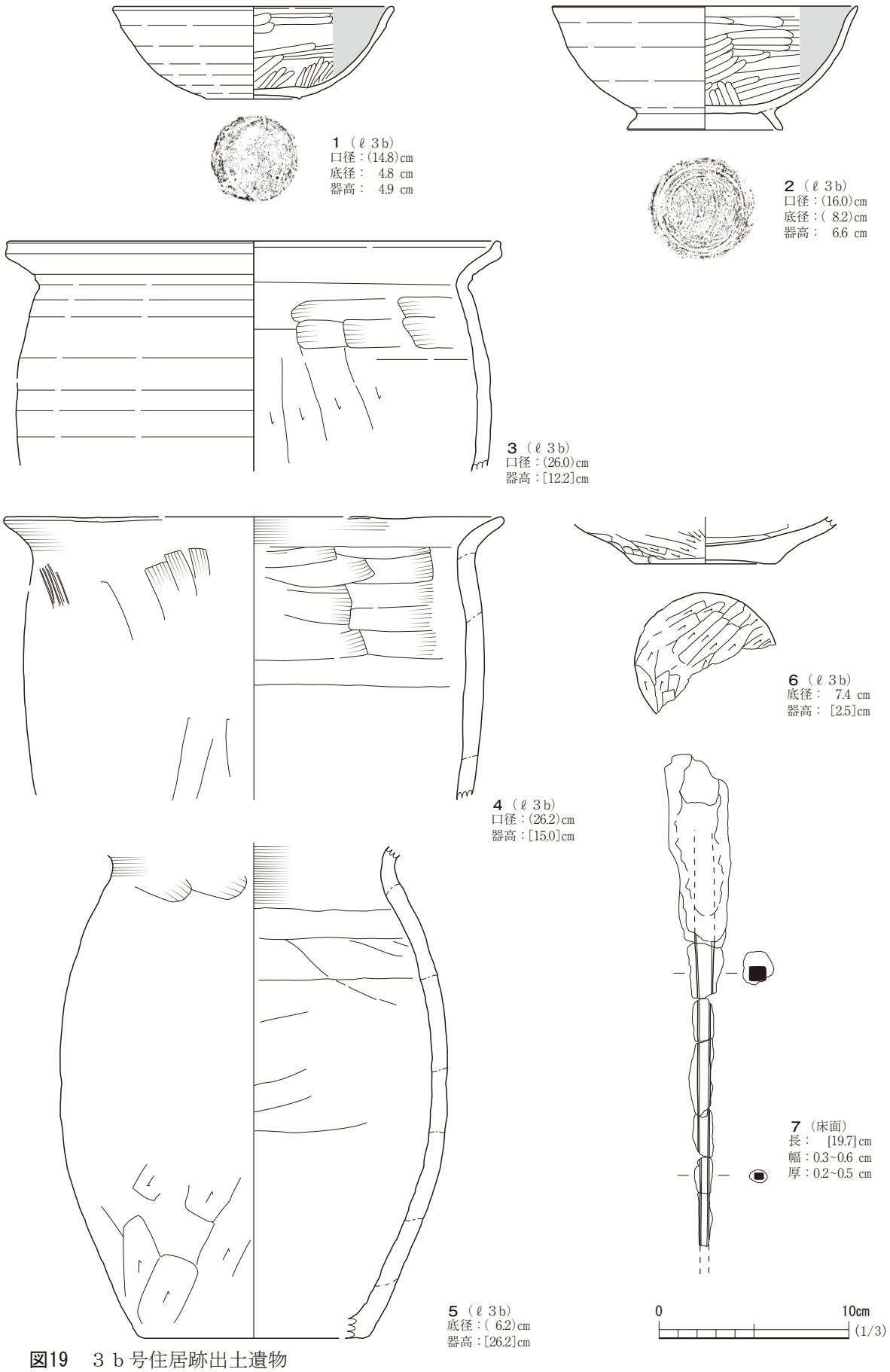


図19　３ｂ号住居跡出土遺物

まった土器の出土がみられた。

図 19－１・２は、ロクロ成形で内面黒色処理された杯でカマド周辺から出土している。口径に対して底径が小さく、深い形状で、２は高台を持つ。

３～５は土師器甕で、３はロクロ成形、４・５は非ロクロ成形である。５は、胎土に石英を多く含み焼成も不良で、胴部中央で最大径を測り、底径も大きい。６は、土師器甕または壺の底部でケズリを施す。３・４は北側の土器片集中範囲、５・６はカマド周辺から出土している。

７は、鏃身部を欠損するが長頸鏃の茎から頸部又は、棒状の不明鉄器と考えられる。断面形状方形で、図面下端に向かって小さくなる。

ま　と　め

本遺構は、ＳＩ03ａの下層から検出された古期の住居跡である。カマドはＳＩ03ａに大部分が壊されているが、据付位置はＳＩ03ａカマドより南側に寄る。ＳＩ03ａと東・南壁を共有するが、ＳＩ03ａよりも若干規模が大きいことから建替が行われたと考えられる。

本遺構のカマド周辺及び貼床内から出土した土器の様相から、９世紀後半の遺構と考える。

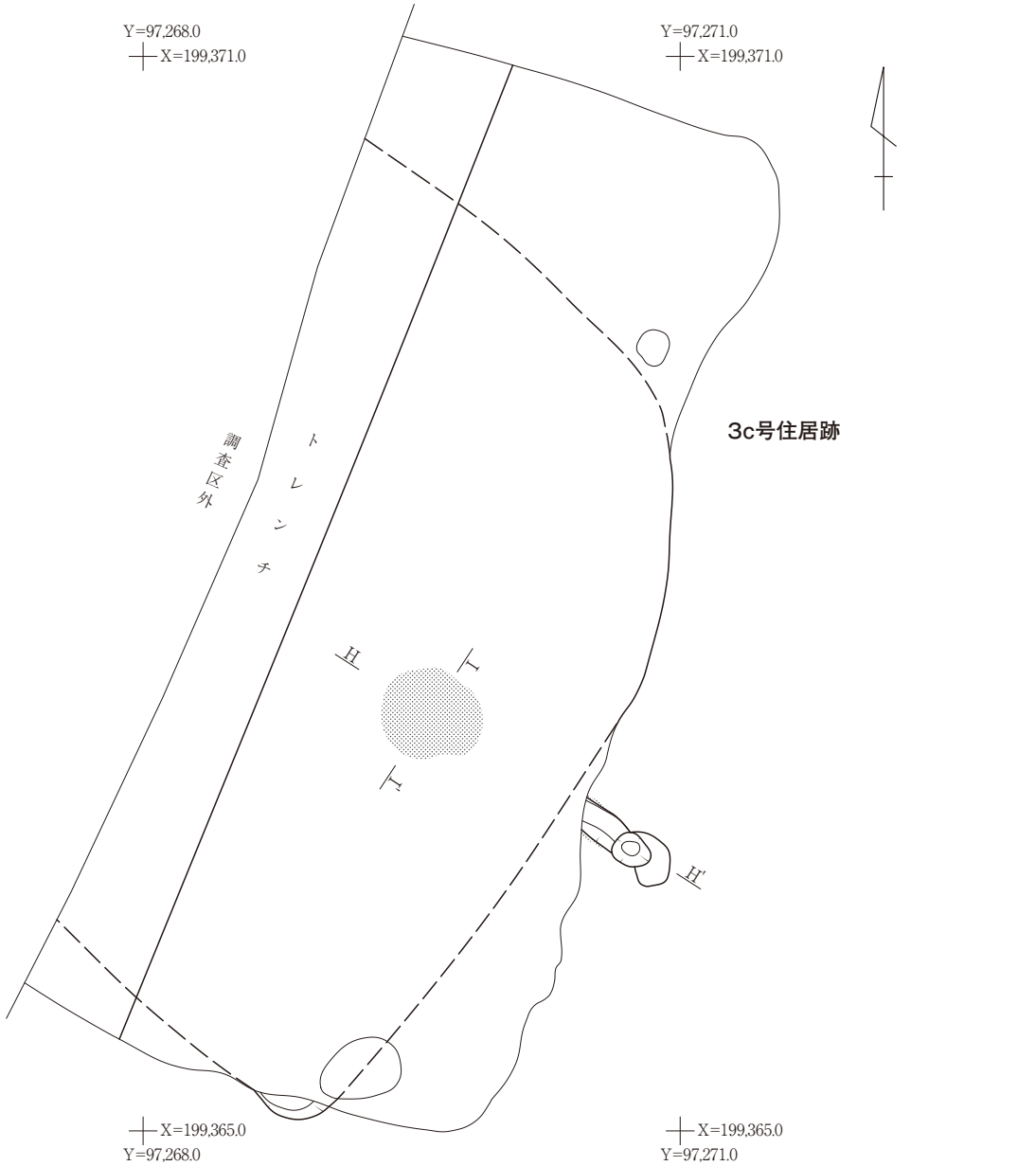
３ｃ号住居跡　ＳＩ03ｃ

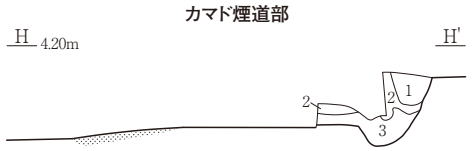
遺　構【図 15・20、写真 18・19】

本遺構は、ＳＩ03ｂの床面精査中に下層から焼土面が検出されたため、さらに古段階の住居跡を想定し、精査を行った。その結果、住居跡東辺の精査で煙道跡を確認し、住居跡と判断した。本住居跡は、周壁、床面ともにＳＩ03ｂ構築時に大部分が壊されており、本住居跡由来の堆積土はほぼ確認できなかった。周壁は南東隅となる径 40 ㎝の弧状部分、及び北東部においてＳＩ03ａ・ｂと軸線がややずれる弧状のラインが本遺構の隅部に該当するものと推定した。

周壁の立ち上がりは急峻であり床面からの高さは 41 ㎝である。また、東辺の北側部分でＳＩ03ｂとほぼ壁を共有すると推定するとＳＩ03ａ、ｂよりも中軸が東に傾き、本住居跡とＳＩ03ａ、ｂは別住居跡と考えられる。想定する周壁では南北長さ 4.48 ｍを測り、次段階のＳＩ03ａ、ｂよりも小さい。推定される東壁の方向は、約Ｎ 35°Ｅである。

付属施設としてはカマド跡のみを検出した。カマド跡は住居跡東辺の中央付近に存在していたものと推測される。燃焼部は周壁の推定ラインから 60 ㎝内側に楕円状の火床面を検出した。酸化した燃焼面は硬化しており深さ４㎝、長軸 59 ㎝、短軸 50 ㎝を測る。煙道部は、ＳＩ03ａ、ｂの周壁外となり破損を免れた範囲で検出した。燃焼部東端からは 70 ㎝離れている。残存する煙道部はトンネル状の構造を確認でき、上端で一部焼土化が認められる。残存する長さは煙道部 24 ㎝、幅 17 ㎝、横坑長さ 59 ㎝である。横坑から燃焼部までの長さから、本来のカマドは 1.89 ｍの長さで構築されていたものと考えられる。煙出部は 20 ㎝× 17 ㎝の円形で煙道部より深く、深さは 17 ㎝である。煙道部内では３層の土層堆積を確認した。いずれも廃絶後に堆積したものと考えられる。





3c号住居跡カマド堆積土

1　黒褐色粘土　2.5Y3/2（炭化物・焼土細粒微量）
2　暗オリーブ褐色粘質シルト　2.5Y3/3（炭化物少量、焼土細粒微量）
3　黒褐色粘土　2.5Y3/1（LⅢc粒 多量、焼土細粒少量）

図20　３ｃ号住居跡

遺　物

本遺構に確実に伴う遺物は出土しなかった。

ま　と　め

本遺構はＳＩ03ａ、ｂ構築時の破損により不明な点が多いが、住居の軸方向、カマドの据付箇所からＳＩ03ａ、ｂとの関連は希薄であり、時期が異なる別個の住居跡と推定される。本遺構に伴う遺物が出土していないため、住居機能時期は不明であるがＳＩ03ｂの機能時期と推定される９世紀後半までには廃絶している。

４号住居跡　ＳＩ 04

遺　構【図 21、写真 20・21】

本遺構は、西区北西部のＢ１グリッドに位置する。ＬⅢｃで遺構検出を行ったところ、黒褐色シルトが方形に広がることを確認した。６・８号住居跡、11・12・14 号土坑と重複する。本遺構は６号住居跡、11・12 号土坑より新しく、14 号土坑より古い。８号住居跡とは南東隅周壁のごく一部での重複となるが、新旧関係の把握まで至らなかった。

遺構内堆積土は４層に大別した上で５層に細分化した。ℓ１・２は混入物が少なくレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考える。これに対し、ℓ３はＬⅢｃを主体とし炭化物を含み、住居跡全面に厚く堆積しており人為堆積と判断した。また、ℓ４は炭化物や焼土粒を含み、床面のほぼ全面に薄く堆積する人為堆積とみられる。

本遺構は、平面形が隅丸方形を呈し、規模は、南北 3.30 ｍ、東西 3.76 ｍを測る。貼床は確認されず、ＬⅢｃを平坦に整えて床面としている。南北の中軸線方向はＮ８°Ｅである。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、最も高い地点で床面から 49 ㎝の高さがある。

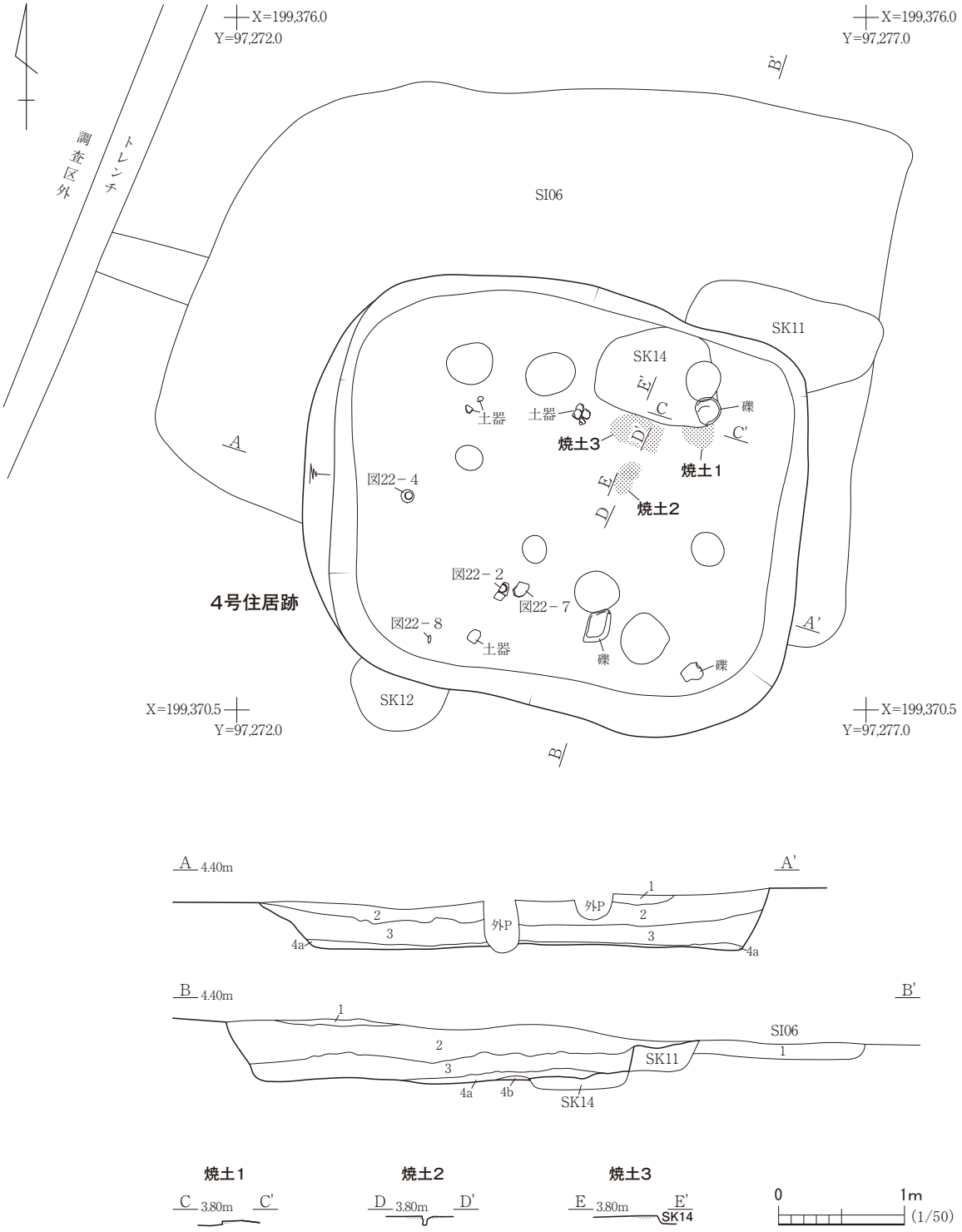
住居跡の北東部に焼土面を３箇所検出した。また焼土面北側に隣接して 14 号土坑を検出している。14 号土坑は底面に堆積する土層が炭化物層であることから、焼土面と併せカマドの燃焼部であった可能性を想定したが、焼土面を合わせると南北、東西いずれも１ｍ程度の大きさとなり、住居跡の規模に比して大型で、またソデの検出がなく焼土面が住居跡床面よりレベル的に下がる点等を総合的に判断し、本遺構には付属しない別遺構と考えた。なお、住居跡焼土面を掘り込んでいることから、土坑が新しいと判断した。ただし、住居跡堆積土ℓ４が土坑上面に堆積していることから時期差はあまりないものと考えられる。

そのほか８基の小穴が検出されたが、いずれも深さが著しく浅く主柱穴とは考え難い。

遺　物【図 22、写真 67・68】

本遺構からは、破片数にして土師器 125 点、須恵器 14 点が出土し、このほか土錘２点、砥石１点とℓ１～３で鉄滓６点（116.1 ｇ）を確認した。

図 22－１～５は、ロクロ成形の杯である。１～４は内面黒色処理され、５は赤焼土器である。４・５の小型の器種を含む。６は、底部外面に手持ちヘラケズリが施された小型の杯である。３を除き、



4号住居跡堆積土

1　褐色砂質シルト　10YR4/6
2　黒褐色粘質シルト　10YR2/3
3　暗褐色粘質シルト　10YR3/3（炭化物）
4a　灰黄褐色砂質シルト　10YR4/2（炭化物）
4b　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR5/3（炭化物）

図21　４号住居跡

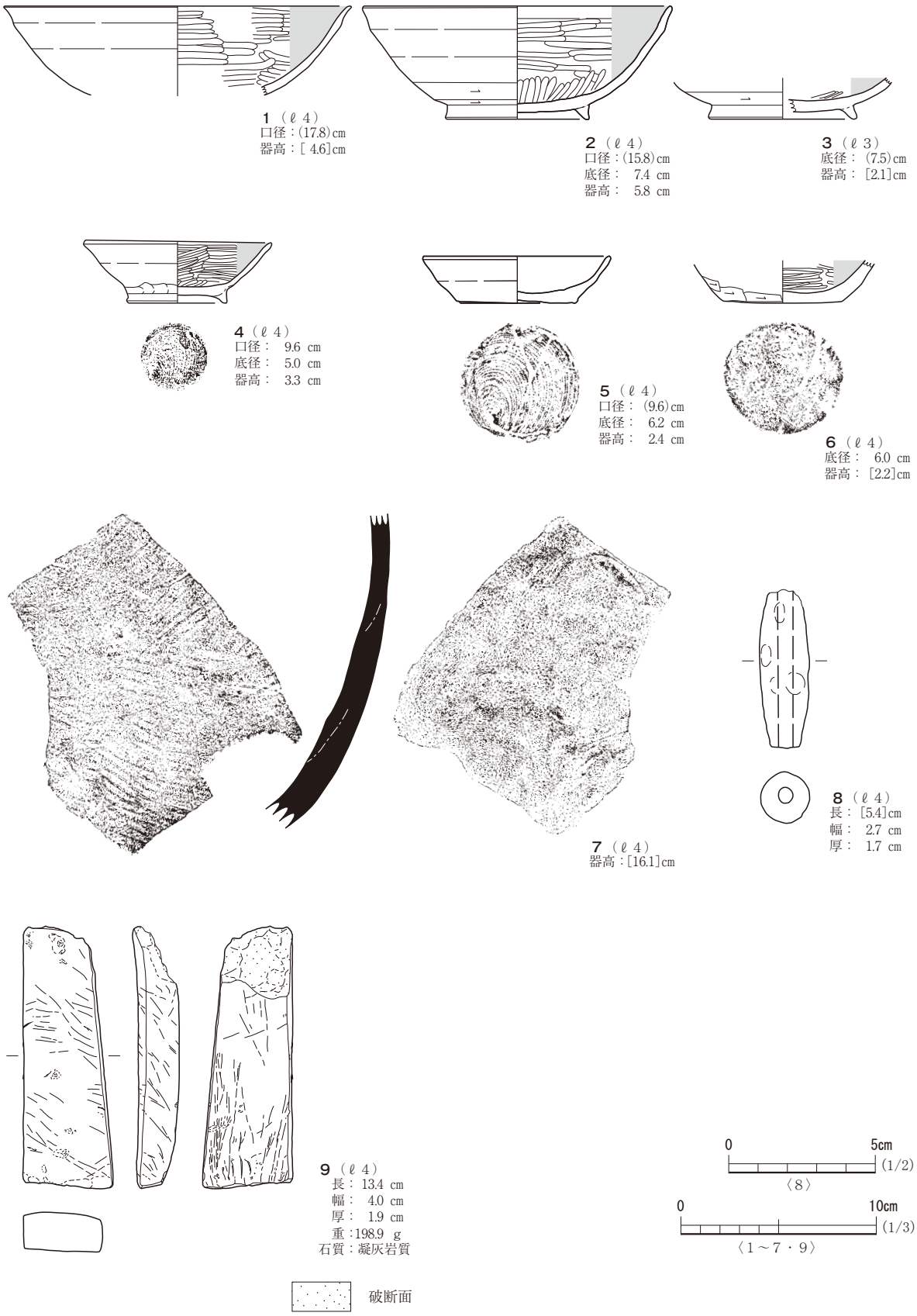


図22　４号住居跡出土遺物

床面に近いℓ４から出土している。

７は、須恵器甕の体部片である。８は、管状土錘である。９は、砥石で小口を除く４面が使用され、裏面は線条痕が明瞭に残る。大きさから持ち砥石と考えられる。

ま　と　め

本遺構は平面形が隅丸方形の竪穴住居跡である。住居跡に確実に伴う付属施設は確認できなかった。本遺跡のなかでは小型の住居跡である。

出土遺物の特徴から、10 世紀前半の遺構と考える。

５号住居跡　ＳＩ05

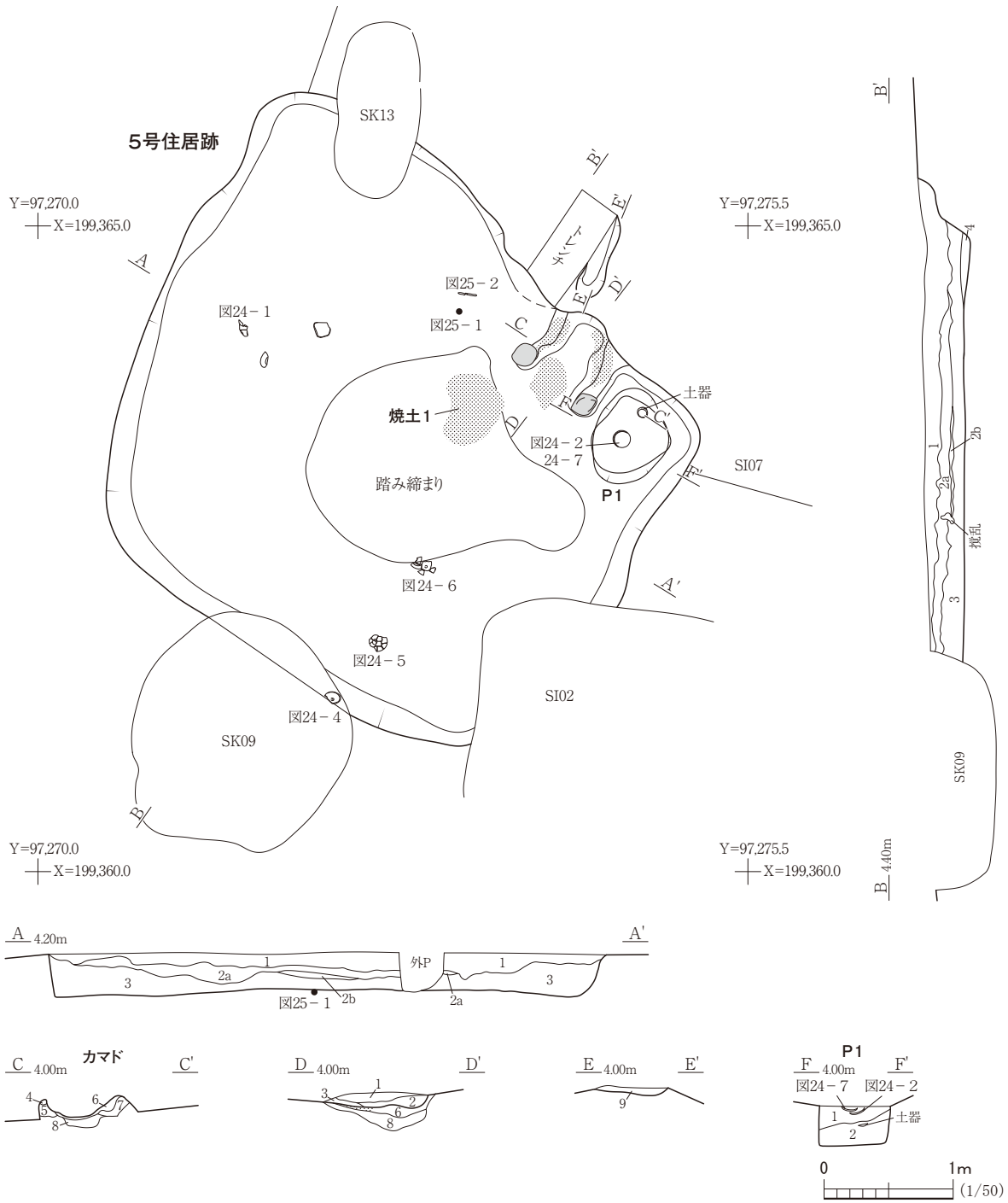
遺　構【図 23、写真 22・23】

本遺構は、西区南部のＢ２グリッドに位置する。ＬⅢｃで炭化物、焼土細粒を含む暗褐色シルトが方形に広がることを確認し、調査を開始した。土層での判別が難しく、北側の一部においてトレンチ状に掘り下げた。２・７号住居跡、９・13 号土坑と重複し、７号住居より新しくそれ以外の遺構よりも古い。

遺構内堆積土は４層に分層し、さらに５層に細分化した。ℓ１は土中に混入物が少量のため自然堆積とみられる。ℓ２はＬⅢｃを主体とする層で、炭化物、焼土細粒を多く含む層をℓ２ｂ、炭化物、焼土細粒を少量含む層をℓ２ａとした。いずれも人為堆積とみられる。ℓ３はほぼ純粋なＬⅢｃであり、東部に焼土、炭化物が多く含まれる。床面から厚く堆積しており、一気に埋め戻したとみられる。ℓ４は本遺構の東部の狭い範囲のみに分布する層であり、炭化物を少量含んでいる。

本遺構は、隅丸方形を呈する。北西部がやや歪に突出するが、これは本遺構掘り込み途中で 13 号土坑を認識したために、境界を把握できず掘り過ぎたことによる。規模は、東西 4.22 ｍ、南北 3.60 ｍを測る。貼床は確認されず、ＬⅢｃを床面としている。南北の中軸線方向はＮ 17°Ｅである。また、住居跡中央からカマドにかけて硬く踏みしめられ、その北端は強く焼けて酸化している。周壁は概ね急峻に立ち上がり、東辺で床面から 11 ㎝、南西隅で 30 ㎝を測る。北辺西側は直に立ち上がるように見えるが、上述の掘りすぎによるものである。

住居に付属する施設には、カマド１基、貯蔵穴１基、焼土面１箇所がある。カマドは北壁の中央からやや東寄りに位置する。燃焼部、ソデ部、煙道部が遺存する。カマドの規模は全長 1.6 ｍ、幅 68 ㎝を測る。燃焼部は東西 32 ㎝、南北 74 ㎝、うち火床部は東西 26 ㎝、南北 40 ㎝の不整形を呈し、最も厚いところで 1.6 ㎝焼けている。ソデ部は、床面上に黒褐色粘質シルト、灰黄褐色粘土、灰黄褐色粘質シルトを積んで構築している。ソデ端部には凝灰岩塊を据えている。右ソデは長さ 50 ㎝、幅 20 ㎝、左ソデは長さ 45 ㎝、幅 15 ㎝以上である。右ソデは左ソデに比べて、南北に延びている。カマド内堆積土は８層に分層した。ℓ１～３には焼土細粒や炭化物、ＬⅢｃ粒が多く含まれていることから天井部や壁面からの崩落土と考えられる。ℓ４～７はソデの構築土と判断した。ℓ８はカマド掘方埋土、ℓ９は煙道内の堆積土と考える。



5号住居跡堆積土

1　暗褐色粘質シルト　10YR3/3（炭化物・焼土細粒微量）
2a　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（LⅢc粒多量、炭化物・焼土細粒少量）
2b　黒色粘質シルト　2.5Y2/1（炭化物主体、焼土細粒少量）
3　灰黄褐色粘質シルト　10YR4/2（LⅢc主体、東部に炭化物・焼土多量）
4　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（炭化物少量、しまり強）

P1 堆積土

1　黒褐色シルト　10YR3/1（炭化物多量・焼土細粒やや多量）
2　灰黄褐色シルト　10YR4/2（炭化物・焼土細粒少量）

5号住居跡カマド堆積土

1　黒褐色粘質シルト　10YR3/1（焼土細粒・炭化物多量）
2　灰黄褐色粘土　10YR4/2（LⅢc粒・焼土細粒多量）
3　暗灰黄色粘土　2.5Y5/2（灰・LⅢc細粒・炭化物の混土）
4　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（焼土塊・酸化した粘土塊多量）
5　黒褐色粘質シルト　10YR3/2
6　灰黄褐色粘土　10YR4/2（炭化物・焼土細粒少量、しまりなし）
7　灰黄褐色粘質シルト　10YR4/2（LⅢc粒・炭化物少量）
8　灰黄褐色粘質シルト　10YR4/2（しまり弱、粘性強）
9　黒褐色粘質シルト　10YR3/2

図23　５号住居跡

焼土面は、カマド左ソデ部の手前に位置し、南北 56 ㎝、東西 48 ㎝、深さ約３㎝を測る。

Ｐ１は住居跡北東部のカマド右脇に位置し、東西 45 ㎝、南北 65 ㎝、深さ 30 ㎝を測る。ℓ１から土師器杯２個体が入れ子状に出土している。ℓ２上部からも比較的大きめの土師器の破片が出土し、貯蔵穴と考えられる。

遺　物【図 24・25、写真 68 ～ 70】

本遺構からは、破片数にして土師器 471 点、須恵器 10 点が出土し、このほか土錘 24 点、刀子１点、銅椀１点、白磁片１点とℓ１～３で鉄滓 29 点（483.4 ｇ）を確認した。そのうち 20 点を図化した。

図 24－１～８は、ロクロ成形の杯である。１～３は内面黒色処理され、内面にミガキを施す。底部外面下半の再調整は希薄で、２はわずかに口唇部で外反するが外傾する形状である。４～８は赤焼土器である。１～３に比べ器高が低く、８は皿状の小型器種である。４・６・７は体部付近でやや丸みを帯びながら外傾する形状を持ち、底部外面下半の再調整は、７で回転ヘラケズリ調整が確認されるが、希薄である。２と７はカマド東側のＰ１ℓ１で入子状に共伴して出土し、７には口縁部に煤が付着している。９は、ロクロ成形の土師器甕である。

10・11 は、筒形土器である。輪積痕が明瞭に残り、ヘラナデ調整が残る。いずれもカマド東側のＰ１ℓ１から出土している。

12 ～ 17 は、管状土錘である。完形に近いものを図示し、全長５～７㎝程度の大きさが想定される。

図 25－１・２は、床面から出土した金属製品である。１は、銅椀の口縁部片で、断面形状からやや丸みを帯びながら直立的に伸び、口唇部で屈曲する形状である。口唇が波状になるが、器厚が薄く、錆化が進んでいることから、本来の形状とは断定できない。また、沈線等はみられないものの、内外面に繊維状の付着物が僅かに確認された。２は、刀子で、茎部が湾曲する。また、刃部に近い茎部断面が五角形に近い形状から、現状は関が背側のみ確認されるが、本来両関であったものが使用過程で研ぎ込まれた可能性があると考える。

３は、堆積土上位のℓ２から出土した中国製の白磁椀破片資料である。釉薬の色調は黄緑色で、胎土は淡黄灰色を呈する。口縁部に向かって直線的に外傾する形状で、体部内外面にヘラ押圧による縦線文と口唇部に輪花が確認できる。大宰府条坊跡での陶磁器分類（太宰府市教育委員会 2000）によれば白磁碗Ⅰ－５類に該当すると考えられ、９世紀末～ 10 世紀前半の年代が想定されている。

ま　と　め

本遺構は、平面形が隅丸方形を呈する小型の竪穴住居跡である。北壁から東側、北辺を３分割する位置にカマドを構築している。床面中央付近の踏み締まりやカマド前の酸化面の存在から、鍛冶炉の可能性も考えられるが、鍛造剥片など積極的に根拠となる資料は出土していない。また、床面から銅鋺が、ℓ２から白磁が出土するなど他の住居では見られない遺物が出土する。貯蔵穴１基をカマド右脇で検出し、堆積土層から入れ子状に完形の杯が出土している。

出土遺物の特徴から、10 世紀前半の遺構と考える。

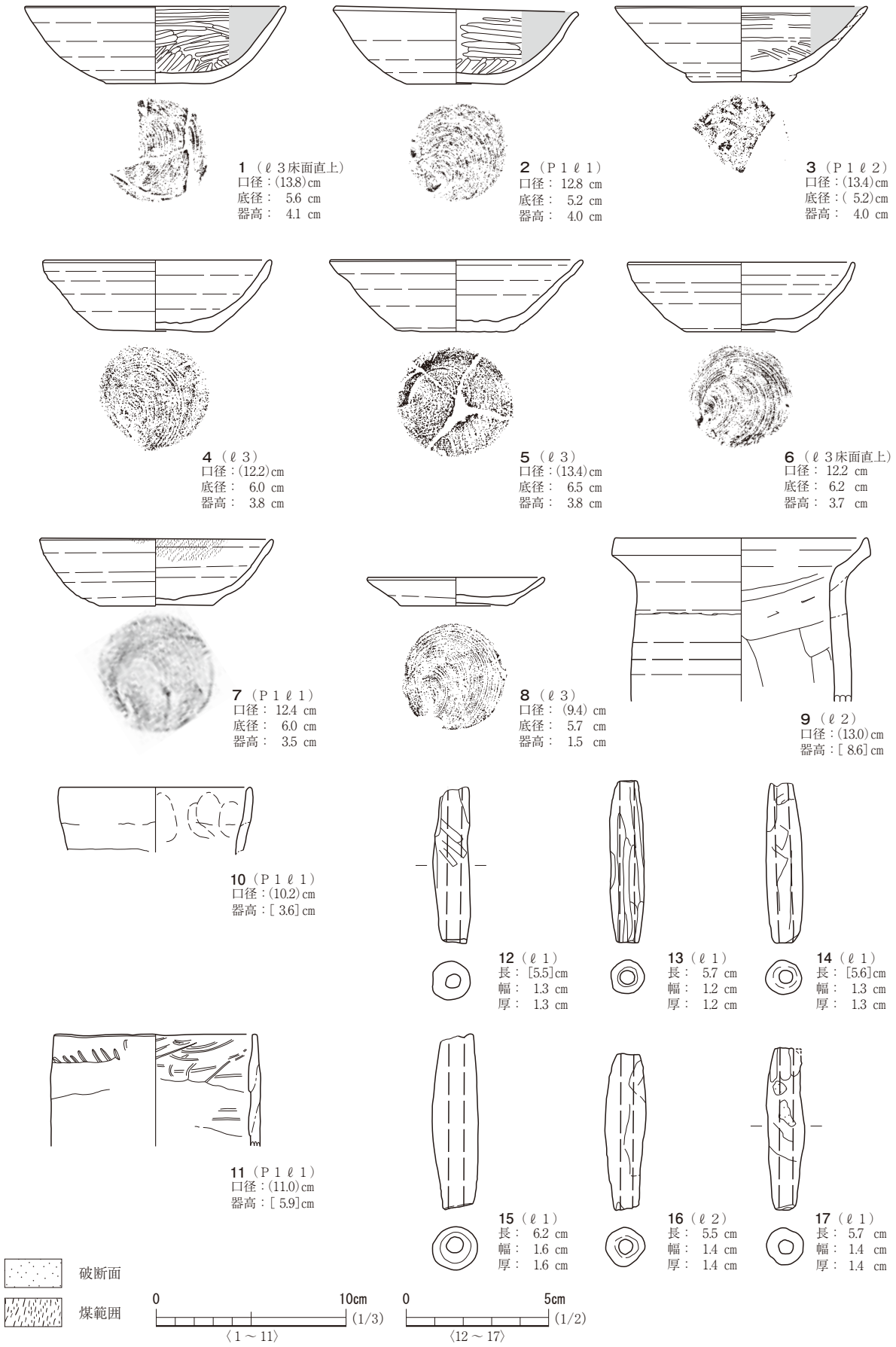


図24　５号住居跡出土遺物（１）

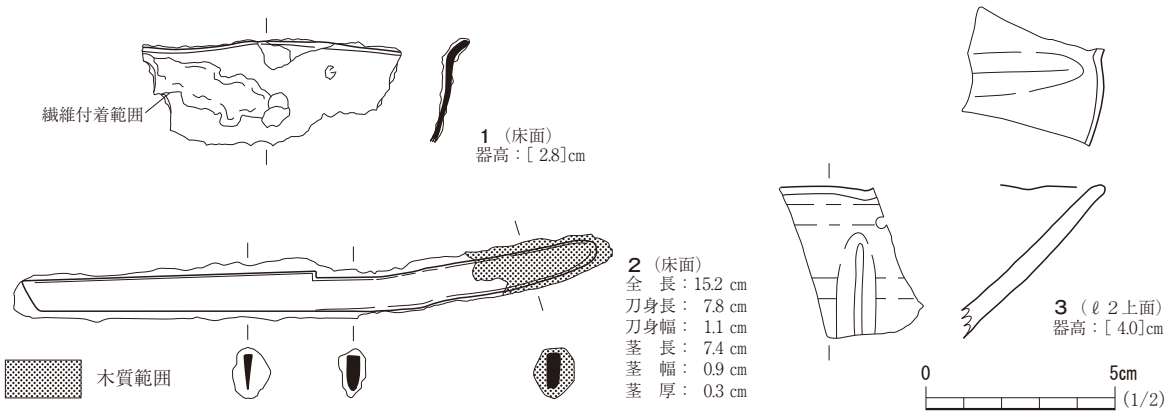


図25　５号住居跡出土遺物（２）

６号住居跡　ＳＩ 06

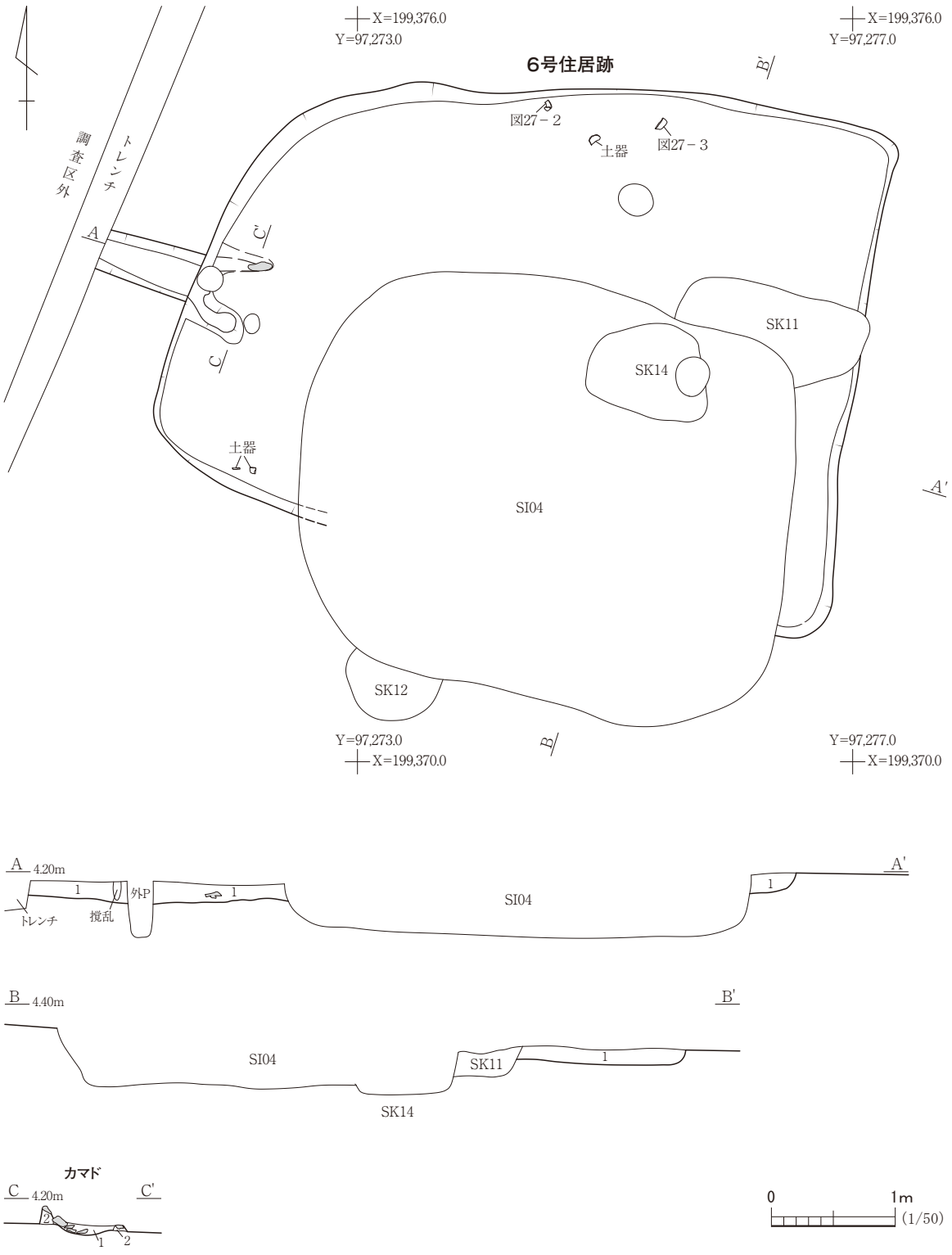
遺　構【図 26、写真 24・25】

本遺構は、西区北西部のＢ１グリッドに位置する。４号住居跡調査中に、暗褐色シルトを当該住居よりも広い範囲で方形に確認したため、調査を開始した。４号住居跡、11・14 号土坑と重複し、本遺構が古い。

遺構内堆積土は暗褐色砂質シルトの単層である。ℓ１は焼土細粒やカマドの芯材と思われる凝灰岩破片が混入することから人為堆積と考える。

本遺構は、平面形は東西に長い隅丸長方形を基調とし北西側が丸みを帯びる。規模は、東西 5.43 m、南北 4.14 mを測る。貼床は確認されず、ＬⅢｃを平坦に整えて床面としている。東壁の中軸線はＮ９°Ｅである。残存する周壁は床面に近い部分であり、立ち上がりは緩やかとなる。床面からの残存高さは９～ 13 ㎝である。

住居に付属する施設にはカマド１基がある。カマドは西壁の中央からやや南寄りに位置する。燃焼部、ソデ部、煙道部が遺存するが、一部調査区外となり遺存状況は良くない。残存する検出範囲は、全長 1.32 m、幅 65 ㎝である。燃焼部は幅 40 ㎝と想定され、わずかな凹みが観察できたが明瞭な焼土は確認できなかった。ソデ部は床面上に褐色砂質土を貼り、その上に凝灰岩塊を置いて構築していたと考える。煙道は西壁から 75 ㎝遺存しているが遺存状況は悪く、一部は調査区外にあるため、全容は不明である。カマド堆積土は２層に分層した。ℓ１には凝灰岩塊や焼土細粒、炭化物を含むことから、カマドの崩落土と考える。ℓ２はカマド構築土である。そのほか本遺構に付属する施設は検出できなかった。



6号住居跡堆積土

1　暗褐色砂質シルト　10YR3/3（焼土細粒、凝灰岩細粒少量）

6号住居跡カマド堆積土

1　褐色砂質シルト　10YR4/4（凝灰岩塊多量、焼土細粒・炭化物少量）

2　褐色砂質土　10YR4/6

図26　６号住居跡

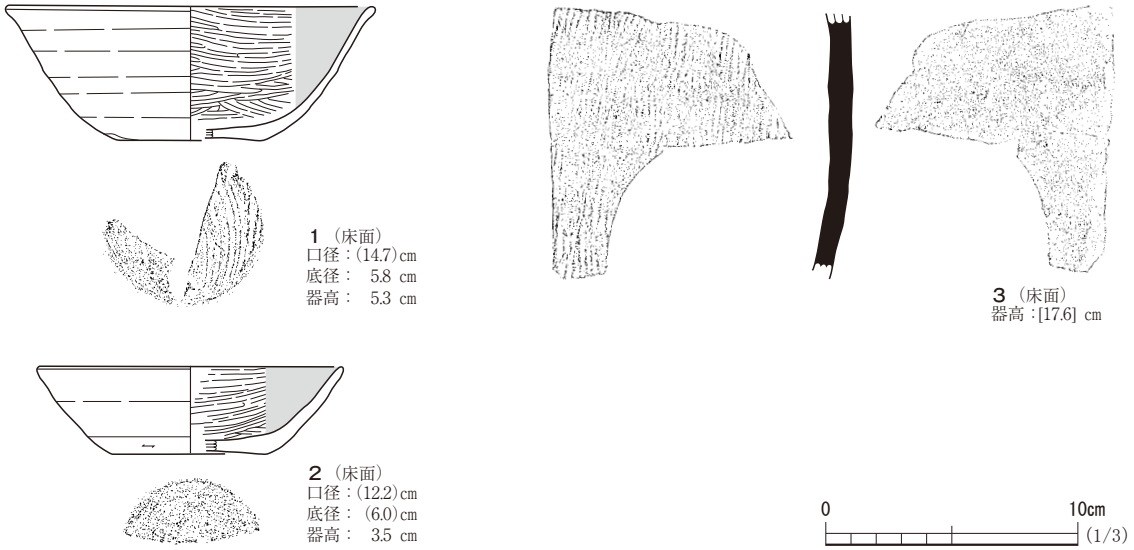


図27　６号住居跡出土遺物

遺　物【図 27、写真 71】

本遺構からは、破片数にして土師器 219 点、須恵器 33 点が出土し、このほか土錘１点、金属製品１点、ℓ１から鉄滓 11 点（136.5 ｇ）を確認した。そのうち３点を図化した。

図 27－１～２は、内面黒色処理されたロクロ成形の杯である。内面にミガキを施し、２は底部外面下半の再調整に回転ヘラケズリを施す。口径に対して比較的底径が大きく、１は器形が深い。

３は、須恵器の甕である。外面にタタキと浅い沈線が確認できる。内面は調整をナデ消している。

ま　と　め

本遺構は平面形が隅丸方形の竪穴住居跡である。本遺跡の中では大型の住居跡の部類に入るが、遺存状況が良くないため不明な点も多い。

出土遺物の特徴から、９世紀前半の遺構と考える。

７号住居跡　ＳＩ 07

遺　構【図 28・29、写真 26・27】

本遺構は、西区中央部のＢ２グリッドに位置する。本遺構の西辺ラインをＬⅢｃで検出し、住居跡を想定し検出作業を行った。

後半の調査において本遺構が８号住居跡と重複していることが判明した。また、本遺構は８号住居跡以外に 13・35 号土坑とも重複する。さらに周壁確認が困難であった南辺が推定されるラインは５号住居跡と重複する。本遺構が重複する遺構の中では最も古い。

遺構内堆積土は４層に大別した。ℓ１～４のいずれにも焼土細粒や炭化物といった混入物が多く含まれることから人為堆積と考える。

本遺構は、歪な方形の平面形である。本遺構は２分割して行った調査区の境界にあたり、２回に

分けて表土及び堆積土除去を行った結果、平面形の確認が不十分となり見誤ったものと考えられる。本来は南辺が南側に広がり、台形に近い住居跡となるものと想定される。検出範囲では、東辺の長さ6.4ｍ、住居中央地点での東西の長さ6.4ｍである。貼床は確認されず、ＬⅢｃを平坦に整えて床面としている。仮に西壁を主軸とすると、主軸方向はＮ14°Ｅである。周壁を確認した西辺、北辺、東辺では、急峻な立ち上がりとなり床面からの高さは18～33㎝を測る。

住居に付属する施設として焼土と小穴を確認した。東壁南東隅付近には焼土とともに凝灰岩塊が分布していた。焼土の範囲は東西1.18ｍ、南北74㎝の不定形で広範囲に強く酸化し、硬くしまる。凝灰岩塊は焼土より広い範囲に分布しており、カマド天井部の崩落土の可能性が高い。本来、東壁の南寄りにカマドが存在していた可能性が考える。

小穴は９基検出し、住居の南東部に集中している。Ｐ１からＰ６は円形、Ｐ７、Ｐ９は楕円形、Ｐ８は不整形である。規模や位置関係を考慮するといずれも主柱穴とは考え難い。Ｐ９はカマドが想定される箇所に隣接し、1.16ｍ×68㎝、深さ６～10㎝を測る。遺物の出土量が他の小穴より多く、貯蔵穴の可能性がある。

遺　物【図30、写真71・72】

本遺構からは、破片数にして土師器458点、須恵器15点が出土し、このほか土錘１点、刀子２点、ℓ１～４（床面）から鉄滓29点（455.5ｇ）を確認した。そのうち７点を図化した。

図30－１は、内外面に黒色処理とミガキを施す高台杯である。見込部分は、放射状にミガキを施している。杯部は浅く、口縁部にかけて外反し開く形状である。２は、内外面に黒色処理とミガキを施す杯である。３は、内面黒色処理を施すが二次被熱を受けていると考えられるロクロ成形の杯である。底部外面下半の再調整に手持ちヘラケズリを施す。４は非ロクロ成形の土師器甕で、内面横方向のヘラナデ、外面縦方向のナデを施す。５は、管状土錘で完形品である。

６・７は、Ｐ８ℓ１から出土した刀子である。いずれも両関で、７は刃部の多くを欠損するが、茎部が刃部に対して湾曲した形状をしている。

ま　と　め

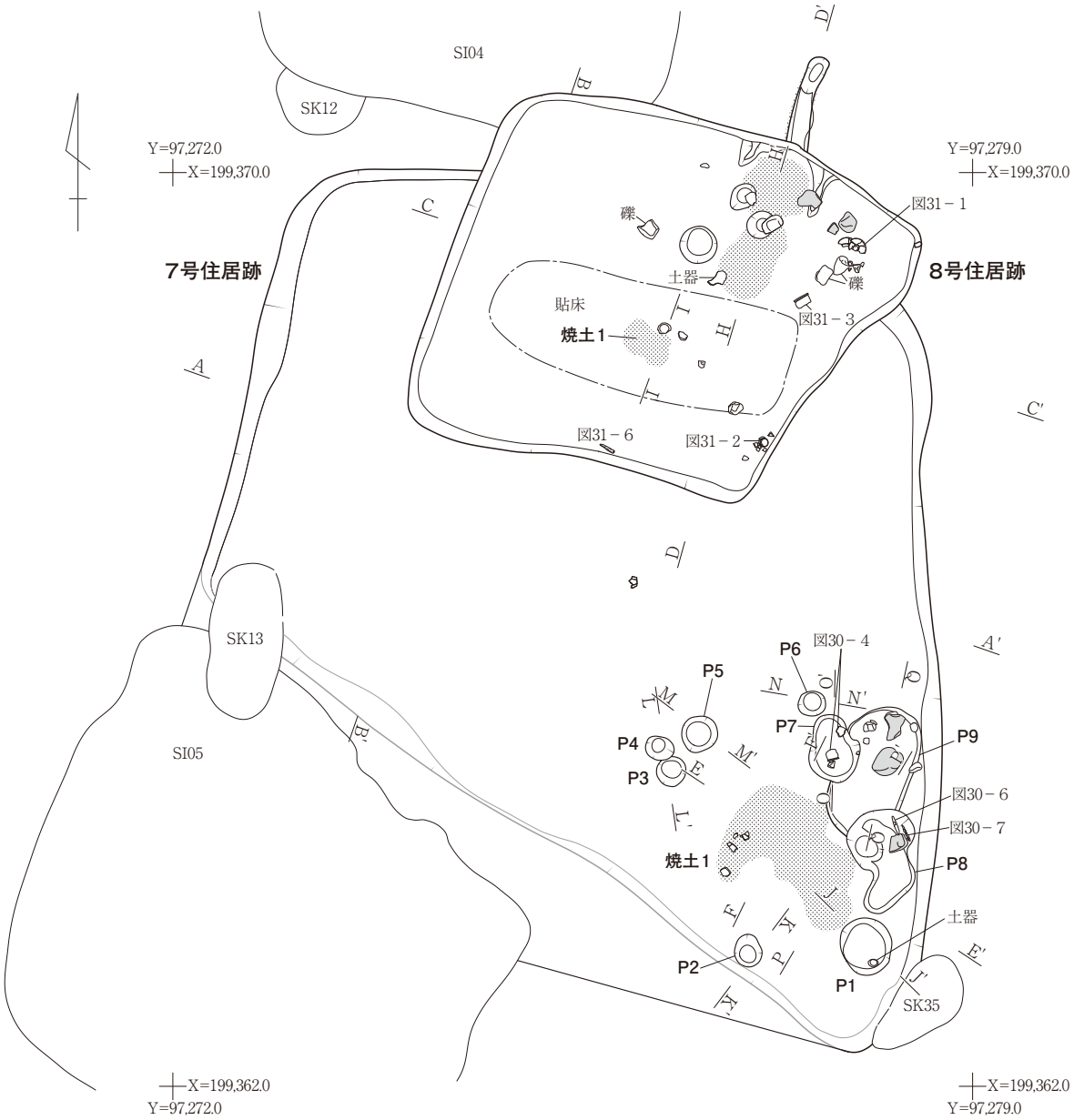
表土除去を含め、調査が２回に分かれたため全容を把握できず、平面形の把握を含め詳細は不明である。本来は南辺が５号住居跡まで広がり、本遺跡の中でも大型の住居跡であったものと推定される。カマドは東辺南側に位置していたものと考えられ、同様に大型住居である３ａ号住居、３ｂ号住居と共通点を持つ。

出土遺物の特徴から、９世紀後半から10世紀前半の遺構と考える。

８号住居跡　ＳＩ08

遺　構【図28・29、写真28・29】

本遺構は、西区中央部のＢ１・２グリッドに位置する。当初はＬⅢｃでカマド燃焼部を検出し７号住居跡に伴うものと見込んだが、精査した結果それより新しい住居跡に伴うものと判断し、８号



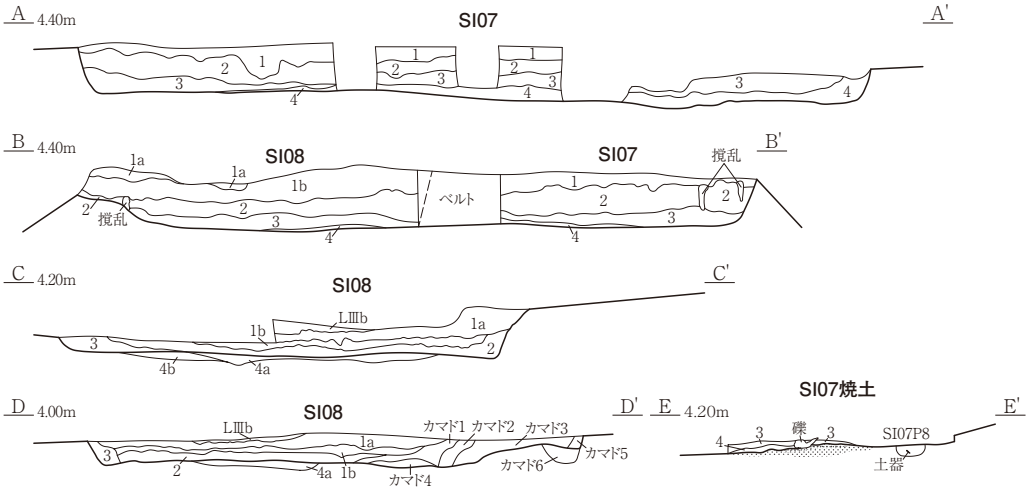
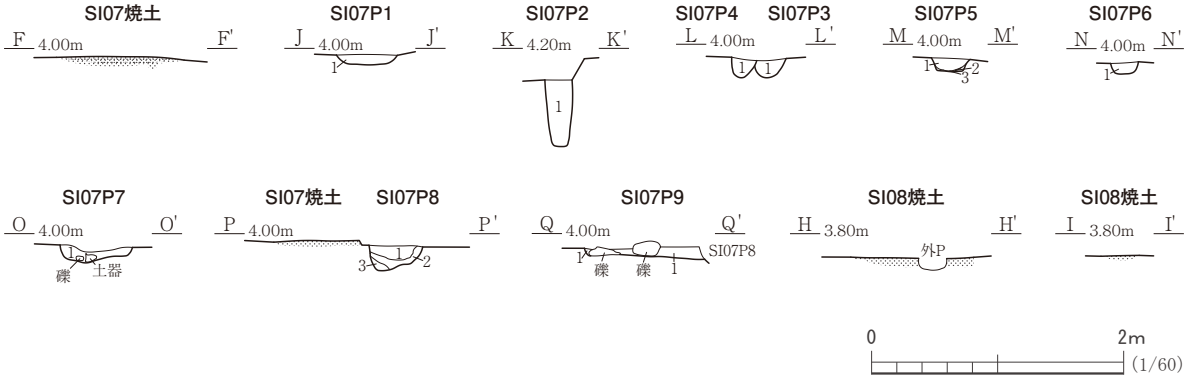


図28　７・８号住居跡（１）

0　2m
(1/60)



7号住居跡堆積土
1　黒褐色シルト　10YR3/2（焼土細粒・炭化物やや多量）
2　灰黄褐色シルト　10YR4/2（LⅢ細粒やや多量、焼土細粒少量）
3　にぶい黄褐色シルト　10YR4/3
（焼土細粒・炭化物やや多量、2より明）
4　灰黄褐色シルト　10YR4/2（炭化物やや多量、3より暗）

7号住居跡 P1・6・7堆積土
1　黒褐色粘質シルト　10YR3/1（焼土・炭化物・粘土粒多量）

7号住居跡 P2堆積土
1　暗褐色粘質シルト　10YR3/3（白色粘土粒）

7号住居跡 P3堆積土
1　暗褐色粘質シルト　10YR3/3（焼土塊・炭化物・焼土少量）

7号住居跡 P4・5堆積土
1　灰黄褐色粘質シルト　10YR4/2（混入物少）

7号住居跡 P8堆積土
1　暗褐色粘質シルト　10YR3/3（炭化物・焼土粒・凝灰岩粒）
2　褐灰色土粘質シルト　10YR4/1
3　暗褐色シルト　10YR3/4

7号住居跡 P9堆積土
1　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（白色粘土塊多量、焼土細粒少量）

8号住居跡堆積土
1a　にぶい黄褐色粘質シルト　10YR4/3（炭化物多量・焼土粒少量）
1b　暗褐色土粘質シルト　10YR3/4（炭化物・焼土粒多量、1より暗）
2　黒褐色粘質シルト　10YR2/2（LⅢc粒・炭化物・焼土粒多量）
3　にぶい黄褐色シルト　10YR4/3（LⅢc主体に暗褐色土多量）
4a　黒褐色粘質シルト　10YR3/2
（LⅢcと黒褐色粘土の混土、上面は踏みしまる）
4b　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（LⅢcと黒褐色粘土の混土）

8号住居跡カマド堆積土
1　黒褐色粘質シルト　10YR3/1（焼土細粒・炭化物極多量）
2　黒褐色粘質シルト　10YR3/1（混入物微量）
3　黒色粘質シルト　10YR2/1（焼土細粒・炭化物少量）
4　黒色粘質シルト　10YR1.7/1（炭化物多量、下面に炭化物層）
5　黒褐色粘質シルト　10YR3/1（混入物微量）
6　黒褐色粘質シルト　10YR3/2
7　にぶい黄褐色粘質シルト　10YR4/3
（炭化物・焼土粒やや多量、左ソデ下端に灰層）

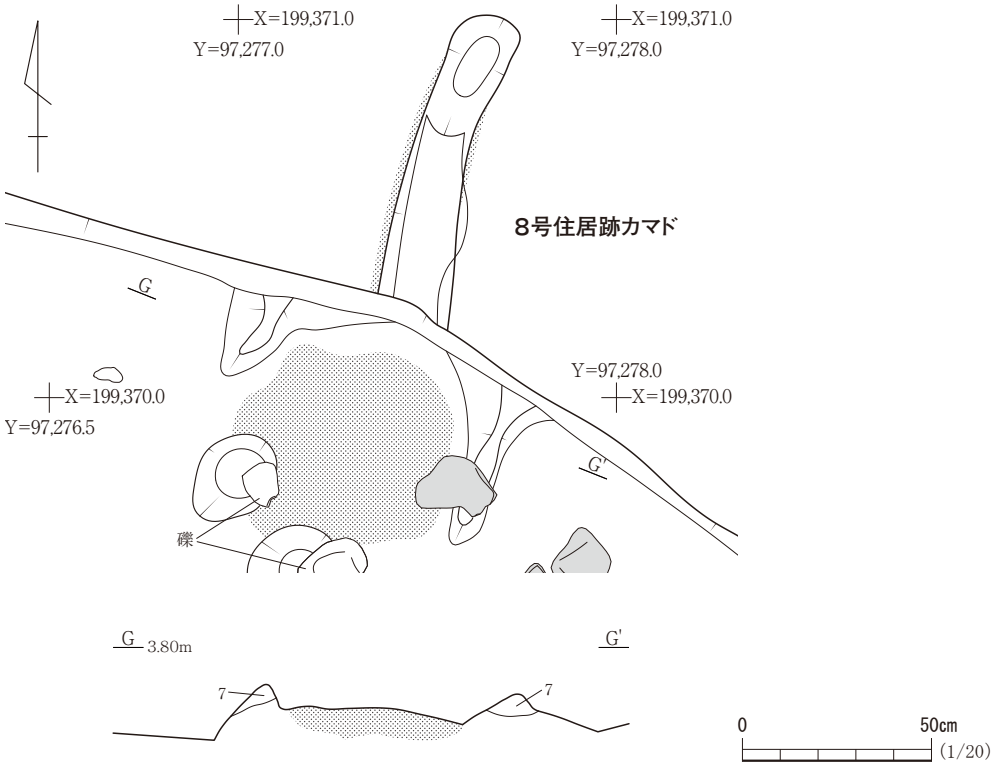


図29　７・８号住居跡（２）

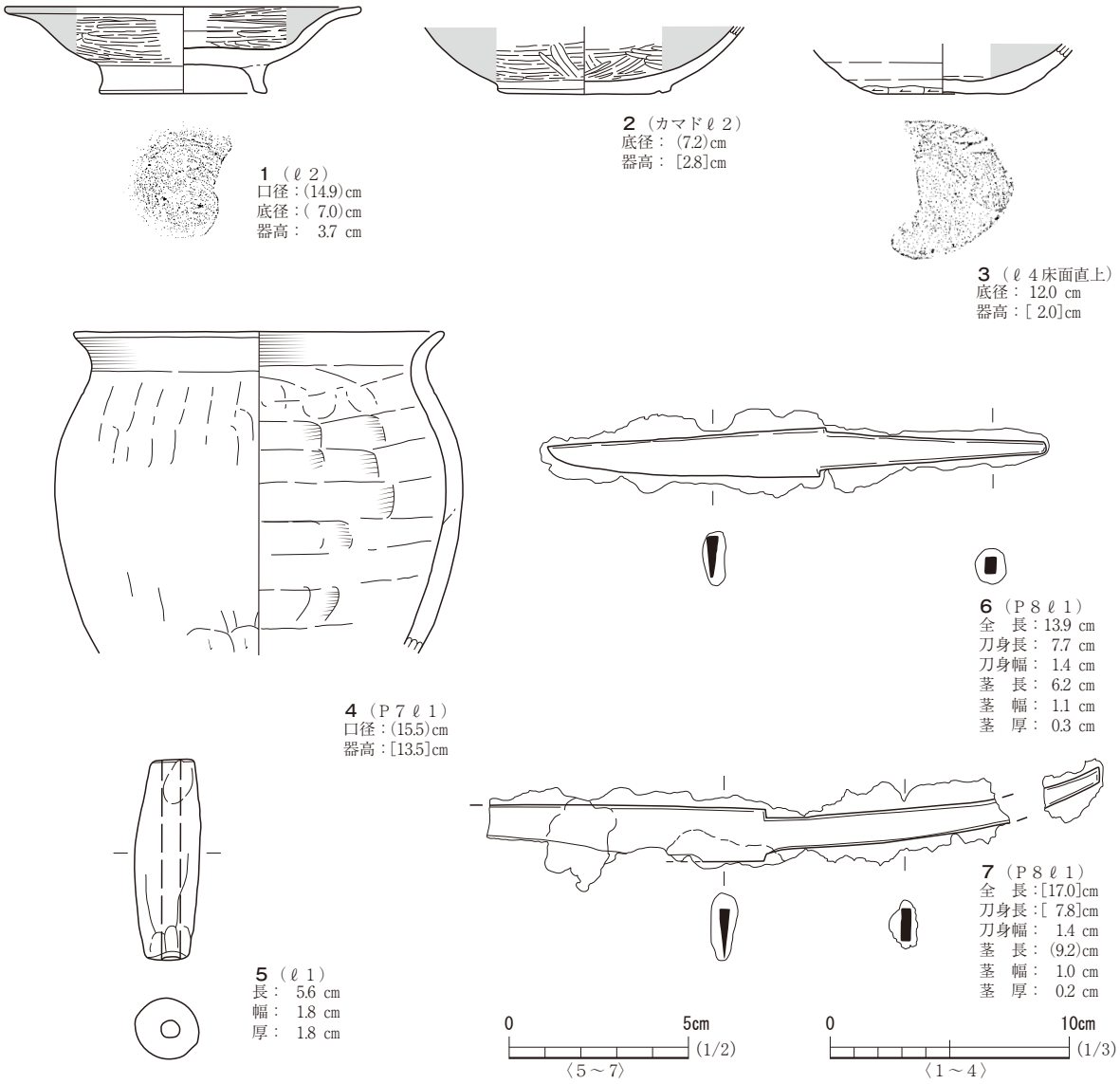


図30　７号住居跡出土遺物

住居跡として調査を開始した。本遺構は４・７号住居跡と重複し、７号住居跡よりも新しい。４号住居跡との新旧は判然としない。

遺構内堆積土は４層に大別し、さらに５層に細分層した。ℓ１・２には炭化物や焼土粒が多量に混入する。またℓ３にはＬⅢｃ主体に暗褐色土が多量に混入する。混入物及び堆積状況からℓ１～３は人為堆積と考える。ℓ４は貼床内埋土と考えられ、２層に細分化できる。

本遺構は、北東辺を掘りすぎてしまったが平面形は方形を呈すると考える。規模は、南北 3.13 m、東西 3.43 mを測る。床面はＬⅢｃを平坦に整えて設けられているが、住居中央部の南半分には貼床が東西 2.66 m、南北 98 cmの楕円状に施されている。南北の中軸線方向はＮ 18°Ｅである。周壁は北辺、東辺でほぼ垂直、西辺、南辺では急峻に立ち上がる。北辺では床から 26 cmの高さを測るが、東辺、南辺での残存は７cmである。

住居に付属する施設にはカマド１基、焼土面、小穴がある。カマドは北壁の中央からやや東寄り

に位置する。燃焼部、ソデ部、煙道部が遺存し、遺存状況は比較的良好である。カマドの規模は全長 1.49 m、幅 81 ㎝を測る。燃焼部は東西 54 ㎝、南北 48 ㎝の不整円形をしており、最も厚いところで 6.6 ㎝酸化していた。ソデ部はにぶい黄褐色粘質シルトで構築されている。芯材とみられるものは遺存していないが、カマド周辺で 10 ～ 25 ㎝程度の凝灰岩塊を検出しているので、本来は凝灰岩塊をソデ部の芯材として構築していた可能性がある。カマド堆積土は７層に分層した。ℓ１～４には焼土細粒や炭化物を含むことから、カマド天井部の崩落土と考える。ℓ５・６は堆積状況から煙出し部から流入した自然堆積土または煙出し部の壁面の崩落土と考える。ℓ７はカマド構築土である。貼床中央に焼土面を確認した。長さ 46 ㎝、幅 30 ㎝、深さ４㎝で焼けている。カマド周辺で円形の小穴を３基検出している。掘り込みが浅く底面は不整形であることから、位置的にも住居に伴う主柱穴や貯蔵穴の可能性は低いと判断した。

遺　物【図 31、写真 72】

本遺構からは、破片数にして土師器 396 点、須恵器５点が出土し、そのほか鉄鏃１点、ℓ１～４（床

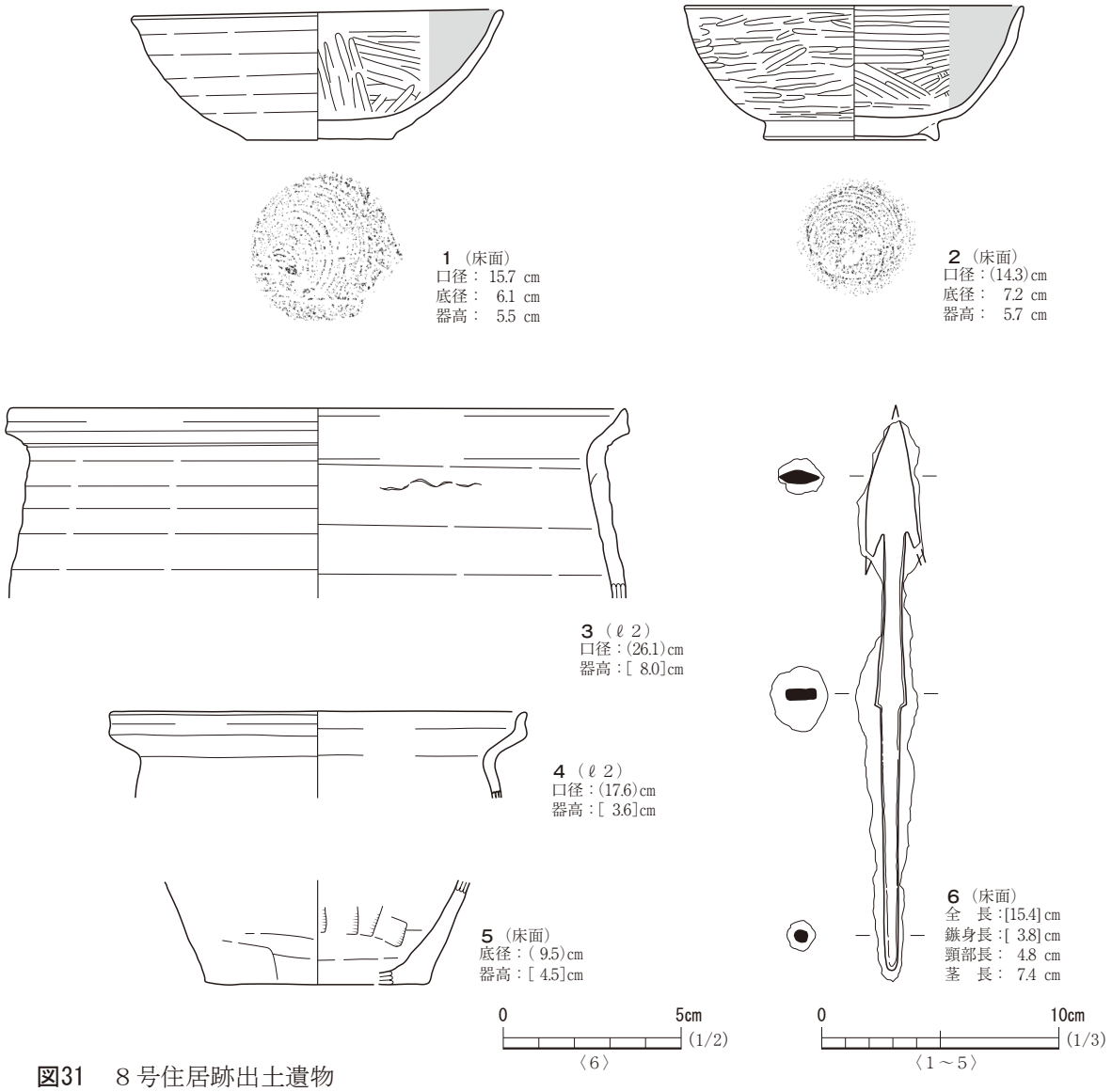


図31　８号住居跡出土遺物

面）で鉄滓３点（22.4 ｇ）が出土している。それらのうち６点を図化した。

図 31－１は、床面出土のロクロ成形の土師器杯で、内面黒色処理されている。体部から口縁部にかけてはやや丸みを持ちながら外傾する形態である。二次被熱を受けている。２は、床面出土の高台を持つ杯で、内外面をミガキ、内面黒色処理を施す。体部に丸みをもちながら口縁部にいたる形態である。このほか、破片資料だが赤焼土器がℓ２から出土している。

３・４は、ロクロ成形の土師器甕である。頸部から口縁部にかけて屈曲し、受口状となる。５は床面出土の土師器甕の底部で、内外面にヘラナデを施す。外面底面が平滑であることから、３・４と同様にロクロ成形であると考えられる。

６は、床面出土の長頸鏃である。鏃身部は柳葉形状で、鏃身関部に逆刺を持つ。頸部の断面形状は長方形で茎部との境は段をもつ角関である。茎部の断面形状は、やや丸みを持つ。

ま　と　め

本遺構は平面形が方形を呈する小型の竪穴住居跡である。

出土遺物のうち土師器杯等の特徴から、９世紀後半から 10 世紀前半の遺構と考えるが、遺構の重複関係からＳＩ７より新しい。

９号住居跡　ＳＩ 09

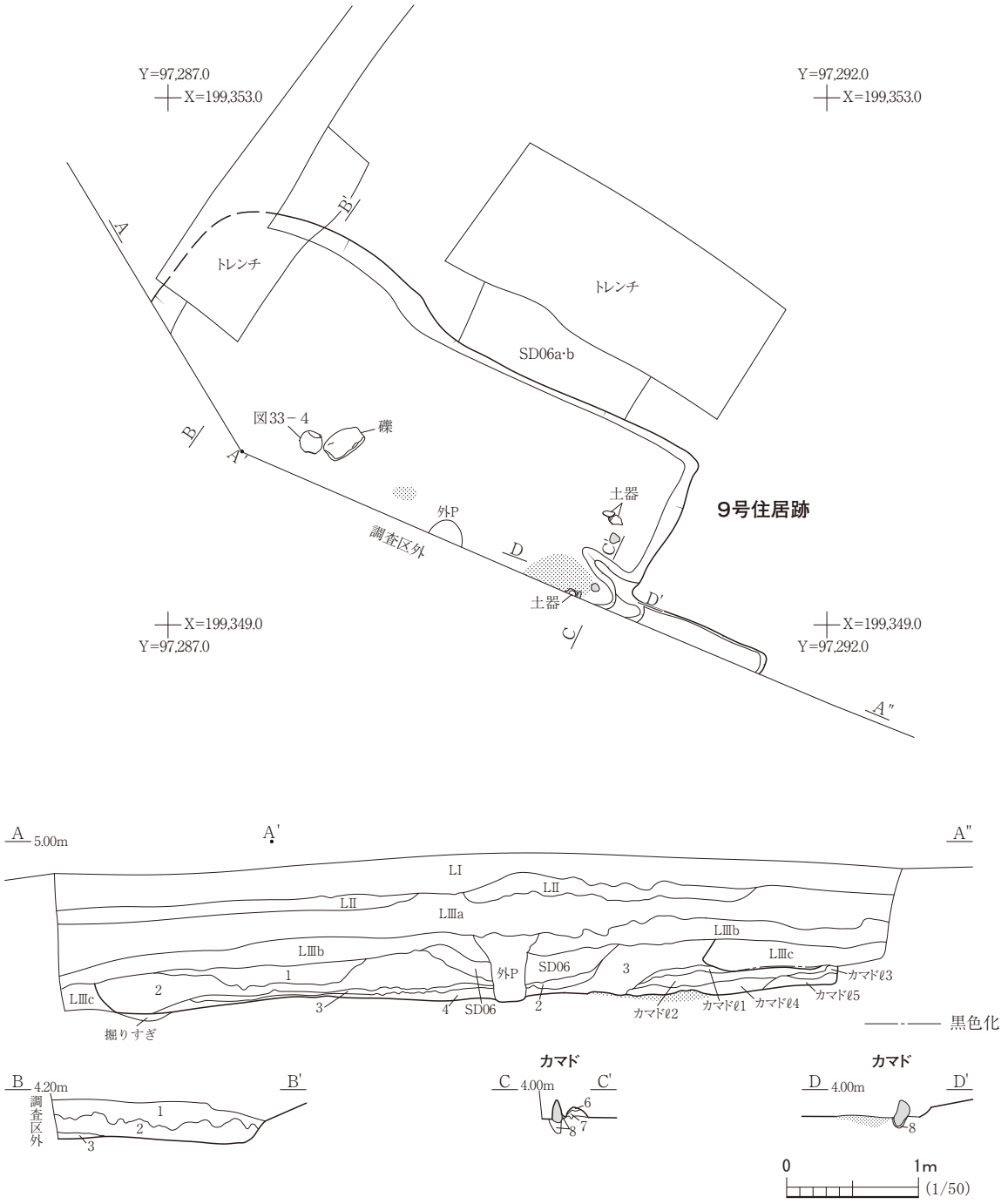
遺　構【図 32、写真 30・31】

本遺構は、東区南部のＣ３・４、Ｄ３・４グリッドに位置する。当初は遺物包含層として調査したが、ＬⅢｃ上面において黒褐色シルトや炭化物、焼土細粒を含む灰黄褐色シルトが水平に検出され、床面の広がりを確認したため住居跡と判断した。６ａ号、６ｂ号溝跡と重複し、本遺構が古い。

遺構内堆積土は４層に分層した。ℓ１はＬⅢｃ細粒を多く含み、しまりが強い。ℓ２はＬⅢｃや炭化物、焼土細粒を含む。ℓ３は層状に浅黄色粘土が水平に堆積する層で、カマド付近に厚く堆積する。ℓ４は炭化物層であり、床面の一部に薄く堆積する。住居機能時の敷物痕の可能性がある。本遺構堆積の土層はいずれも人的堆積と判断される。

本遺構は、平面形が方形を呈し、南側は調査区外に延びている。規模は、東西 4.26 ｍを測り、南北 1.38 ｍを検出した。貼床は確認されず、ＬⅢｃを床面としている。ℓ４を除去すると、住居中央部中心に硬化面が分布する。南北の中軸線方向はＮ 27°Ｅである。周壁は最も遺存状況のよい北東辺では垂直に立ち上がり、床面から 35 ～ 40 ㎝の高さとなる。西辺の立ち上がりは緩やかで、10 ～ 15 ㎝の高さとなる。

住居に付属する施設には、カマド１基がある。一部は調査区外にあるが、住居の東西辺の大きさから推定すると、カマドは東壁中央より北に寄った位置と推測する。燃焼部、ソデ部、煙道部が遺存する。カマドの規模は全長 1.92 ｍを測り、幅は 38 ㎝検出した。燃焼部は東西 50 ㎝、南北 26 ㎝以上となる楕円形を呈していると考えられ、最も厚いところでは６㎝酸化していた。ソデ部は灰黄褐色粘質シルトで構築されていた。左ソデ際には凝灰岩製の支脚が設置されている。煙道はＬⅢｃ



9号住居跡堆積土

1　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（LIIIc細粒多量、しまり強）
2　灰黄褐色粘質シルト　10YR4/2（LIIIc主体に炭化物、焼土細粒少量）
3　灰黄褐色粘質シルト　10YR4/2（層状に浅黄色粘土）
4　炭化物層

9号住居跡カマド堆積土

1　灰黄褐色粘質シルト　10YR4/2（焼土粒多量）
2　灰黄褐色粘質シルト　10YR4/2（焼土粒・還元化粒多量）
3　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（還元化粒・炭化物やや多量）
4　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（還元化粒・炭化物微量）
5　黒色粘質シルト　10YR2/1（還元化粒多量、焼土塊少量、しまり弱）
6　灰黄褐色粘質シルト　10YR4/2（炭化物少量）
7　灰黄褐色粘質シルト　10YR4/2（焼土化した6）
8　灰黄褐色粘質シルト　10YR4/2（混入物微量）

図32　９号住居跡・東区南部土層

中をトンネル状に掘り込まれ、東壁から 1.16 m延びている。カマド内堆積土は８層に分層した。ℓ１～５には焼土粒、焼土塊、炭化物、還元化粒が含まれていることから天井部や壁面からの崩落土と考えられる。ℓ６・７はソデの構築土、ℓ８は支脚設置時の掘方埋土と判断した。

遺　物【図 33、写真 73】

本遺構からは、破片数にして土師器 100 点、須恵器２点が出土し、うち４点を図化した。

図 33－１・２は、ロクロで成形された赤焼土器の高台杯と杯である。２はカマド燃焼部の堆積土ℓ３から出土している。底部外面下半に回転ヘラケズリの再調整を加えている。３は、土師器甕である。外面縦方向のナデ及びケズリ、内面縦方向のナデと横方向のヘラナデが確認される。

４は、須恵器甕の底部である。底面平底で、外面に平行タタキを施し、外面下半と内面ではナデ消している。

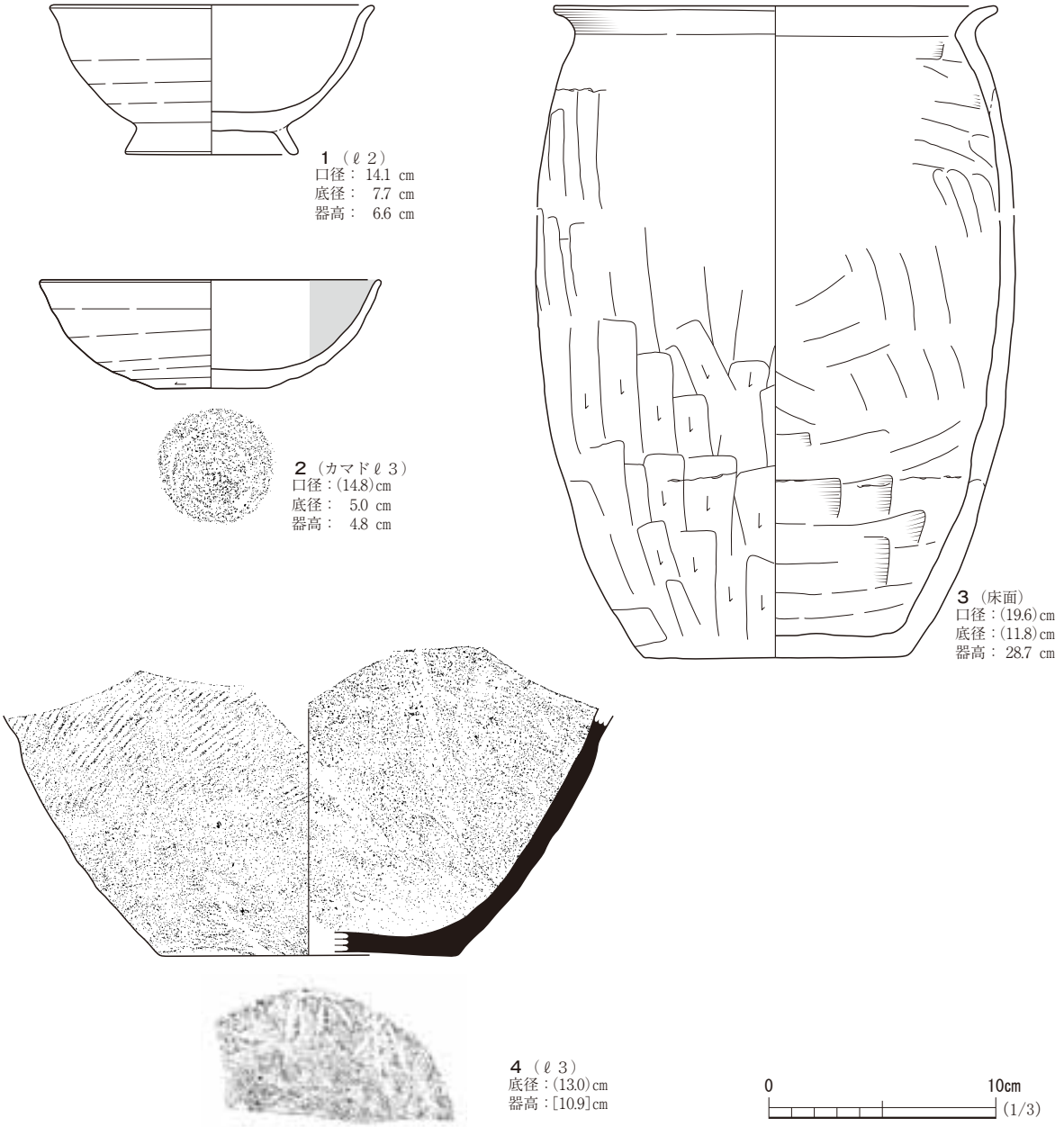


図33　９号住居跡出土遺物

ま　と　め

本遺構は、平面形が方形を呈する住居跡であり、本遺跡内では小型の部類である。東壁にカマドが１基ある。

出土遺物の特徴から、10 世紀前半の遺構と考える。

10 号住居跡　ＳＩ 10

遺　構【図 34、写真 32】

本遺構は、東区西部のＣ２グリッドに位置する。ＬⅢｃでカマドの煙道及び煙出部を検出したため、調査を開始した。

カマドの煙道部に伴う住居跡は西側の調査区外に存在する。

検出されたカマドは、煙道部の一部から煙出部の範囲となり、規模は現状で長さ 77 ㎝を測る。煙道の底面は煙出部に向かってほぼ水平を保っている。煙道の周辺は厚さ５㎝程度酸化している。煙出部は煙道部主軸より南側にずれているため、煙出部は住居外側から、煙道部は燃焼部側から、別々

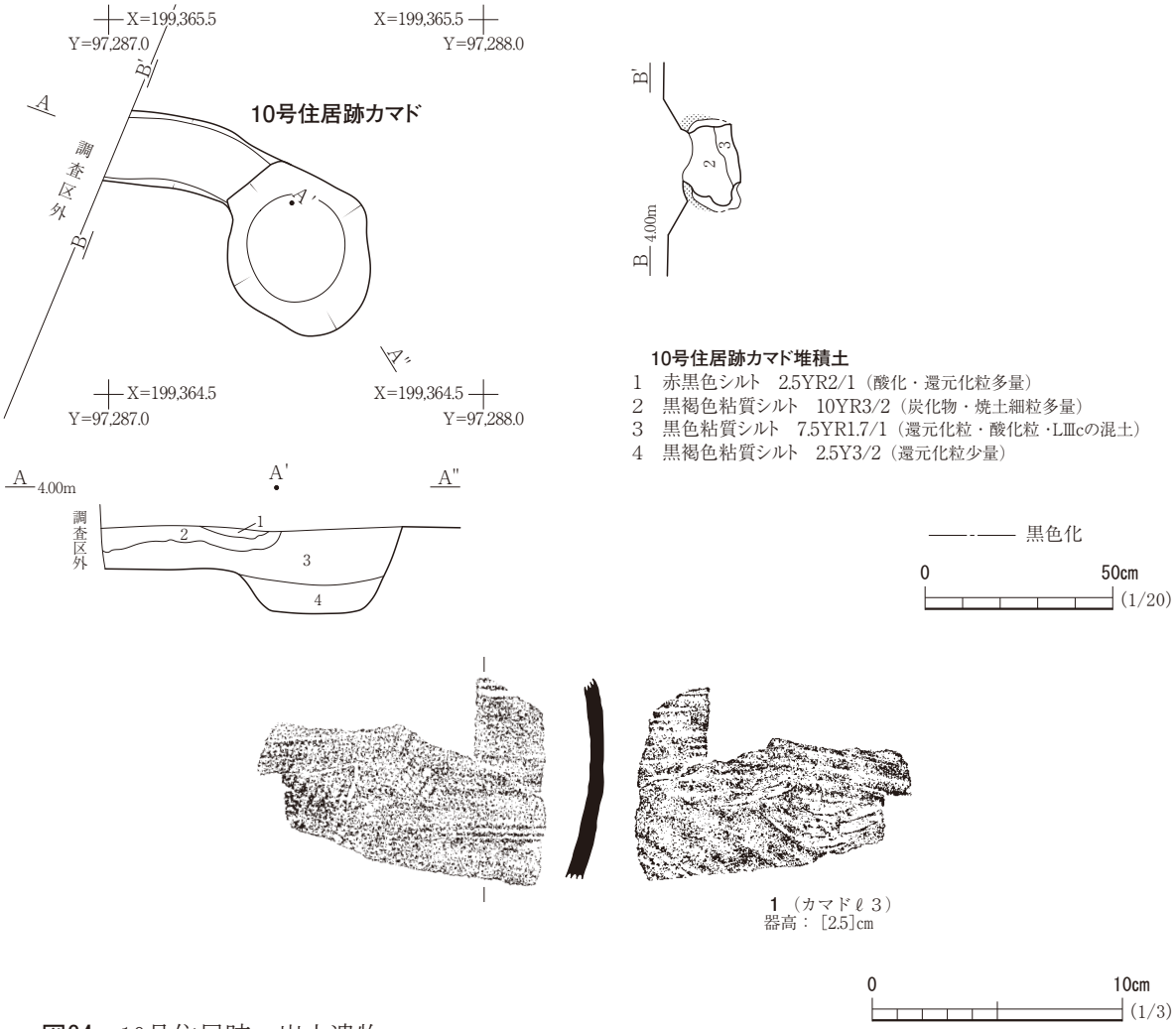


図34　10号住居跡・出土遺物

に掘り込まれたものと考えられる。土層は４層に分層した。ℓ１・２には酸化粒、還元化粒、炭化物、焼土細粒が含まれ、煙道部の天井部崩落土と考える。ℓ３には酸化粒、還元化粒、ＬⅢｃが含まれ、堆積状況から煙出部から流入した自然堆積土と考えるが、煙道部から煙出部の壁面の崩落土も含まれる。以上のことからℓ１～３は住居廃絶後の堆積土と考える。ℓ４は煙出部の崩落土と考えるが、住居機能時か廃絶後かは判然としない。

遺　物【図 34、写真 73】

本遺構からは、破片数にして土師器 10 点、須恵器７点が出土し、うち１点を図化した。

図 34－１は、須恵器甕と考えられ、器面が灰褐色を呈する。内外面ともにタタキ目をナデ消している。外面横方向に３～４状の筋が確認できる。

このほか、内黒土師器やケズリ調整の甕が出土している。

ま　と　め

本遺構は、住居に伴うカマドの煙道の一部と煙出部のみの検出である。住居跡本体が確認できず、水道管敷設幅の２ｍ以内の小型の住居であったか、耕作等によるき損により残存しないか等の要因が考える。

出土遺物のなかには内黒の土師器を確認できた。破片資料であるため、時期の特定はできなかったが、検出層位から、９世紀から 10 世紀前半の遺構と考える。

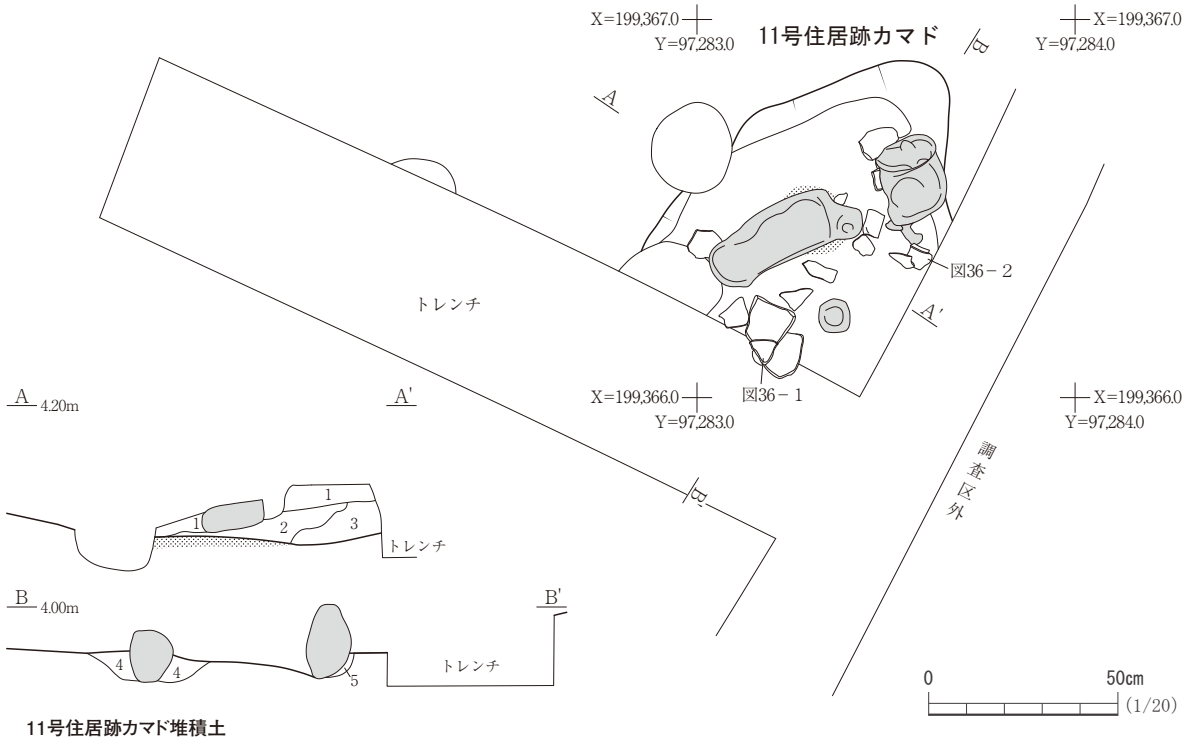
11 号住居跡　ＳＩ 11

遺　構【図 35、写真 33】

本遺構は、西区東部のＣ２グリッドに位置する。表土除去後に西区東部壁際に焼土や凝灰岩粒が分布することを確認し十字のトレンチにより掘り下げた結果、焼土面と支脚とみられる凝灰岩塊を検出したことから、本遺構を住居跡と判断した。検出面はＬⅢｃである。重複する遺構は存在しないが、住居跡の広がりを想定すると７・８・10 号住居跡と重複していた可能性がある。

本遺構は、崩壊したカマド１基を検出したのみで、住居の平面形、規模や床面などについては不明である。設定トレンチ断面においても住居跡の壁や床面を確認できず、またカマド中心に南北及び西へ約２ｍの範囲において粘土粒及び凝灰岩粒が分布するが、その下層に床面と比定できる土層は確認できなかった。後世の耕作などによりカマド周辺を除いて失われた可能性がある。

カマドは、燃焼部やソデ部の位置から住居の東壁に位置していたものと推測される。燃焼部、左ソデ部の一部が遺存するが、遺存状況は良くない。凝灰岩塊を多用して、天井及びソデを構築したと考えられ、検出時はこれらが崩れた状態になっていた。凝灰岩塊と土層及び土器を除去したところ燃焼部を検出した。規模は東西 23 ㎝、南北 18 ㎝、楕円形を呈しており、最も厚いところで２㎝酸化している。ソデ部は凝灰岩塊を芯材にして構築していたと考えられる。また、凝灰岩製の支脚も出土している。カマド内堆積土は５層に分層した。ℓ１～３はカマド天井部の崩落土とその後の自然流入土、ℓ４はカマドソデ部の掘方埋土、ℓ５は支脚設置時の掘方埋土とみられる。



11号住居跡カマド堆積土

1　黒褐色粘土　10YR3/2（白色凝灰岩細粒微量）
2　黒褐色粘土　10YR3/2（凝灰岩塊・焼土粒やや多量）
3　黒褐色粘土　10YR3/2（焼土粒多量、炭化物少量）
4　黒褐色粘土　10YR3/2（白色凝灰岩粒やや多量）
5　黒色粘質シルト　10YR2/1（焼土粒・炭化物多量）

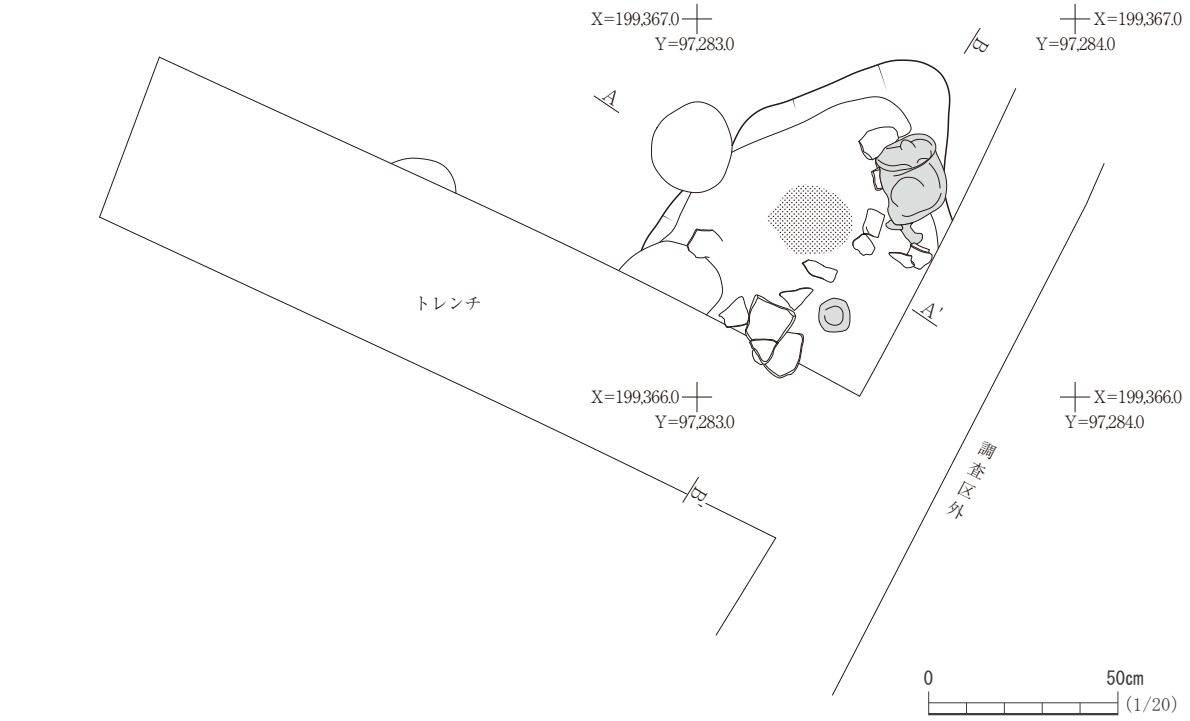


図35　11号住居跡

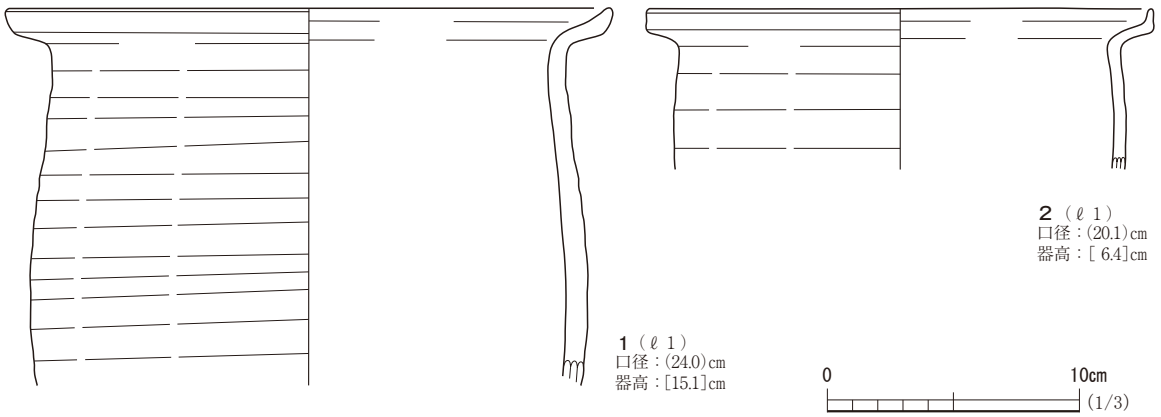


図36　11号住居跡出土遺物

遺　物【図 36、写真 73】

本遺構からは、破片数にして土師器 21 点が出土し、うち２点を図化した。

図 36－１・２は、カマド内の堆積土から出土したロクロ成形の土師器甕である。ともに頸部から口縁部にかけて屈曲するが、２はより屈曲が強く口唇部で伸びる形状を持つ。このほか、内面黒色処理を施した土師器杯も出土している。

ま　と　め

本遺構は、崩壊したカマドのみが検出された住居跡である。カマド跡の燃焼面検出状況から、床面は上層にあったものと推測されるが、把握することはできなかった。

検出遺構と遺物の特徴から、９世紀後半の遺構と考える。

12 号住居跡　ＳＩ 12

遺　構【図 37、写真 34】

本遺構は、東区東部のＦ４グリッドに位置する。ＬⅢｅにおいて検出したが、本遺構周辺にはＬⅢｄの堆積が極めて薄いため、本来の掘り込みはＬⅢｄに相当する可能性が高い。東区東部の調査区境で凝灰岩細粒、炭化物、焼土細粒を少量含む黒褐色シルトが広がることを確認し、調査を開始した。重複する遺構はない。住居跡の東半分は調査区外となる。

遺構内堆積土は２層に分層した。ℓ１・２はいずれも混入物が少量のため、自然堆積と判断した。

本遺構は、東側の大半が調査区外に存在するが、方形を呈していると推定する。規模は、南北 2.99 ｍを測り、東西中央部で 1.18 ｍを検出した。貼床は確認されず、ややグライ化したＬⅢｅまたはＬⅣ上面を床面としている。南北の中軸線方向はＮ 13°Ｅである。周壁は、北辺及び西辺でほぼ垂直に立ち上がる。床面からの高さは 15 ㎝である。南壁ではやや緩やかな立ち上がりとなる。

住居に付属する施設は調査範囲の中では確認できなかった。

遺　物

本遺構からは、破片数にして土師器 33 点が出土した。いずれも小破片であり図示できるものはないが、古墳時代の所産の甕・壺の破片が出土している。

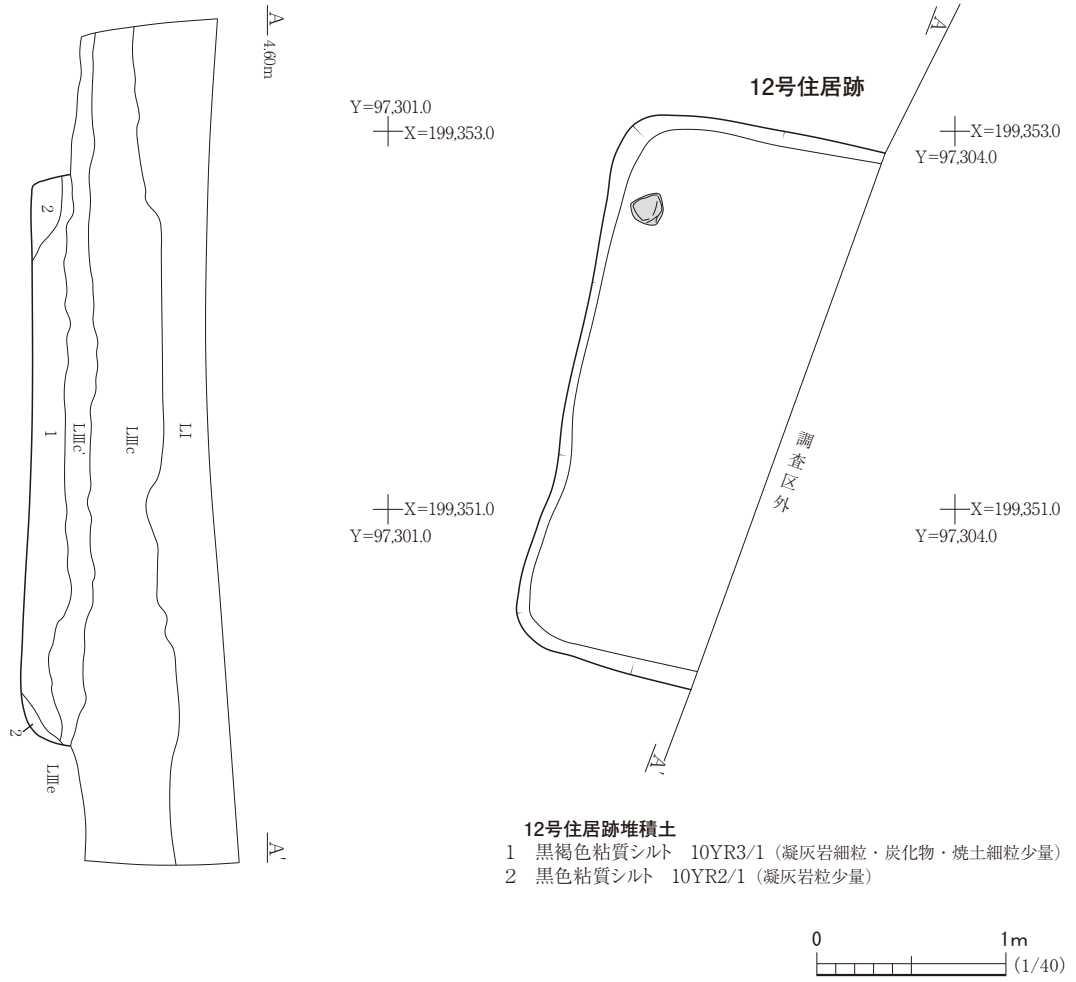


図37　12号住居跡・東区東部土層

ま　と　め

本遺構は、平面形が方形を呈すると想定される竪穴住居跡である。東側の大半が調査区外にあるため、全容は不明であり、住居に付属する施設も検出できていない。

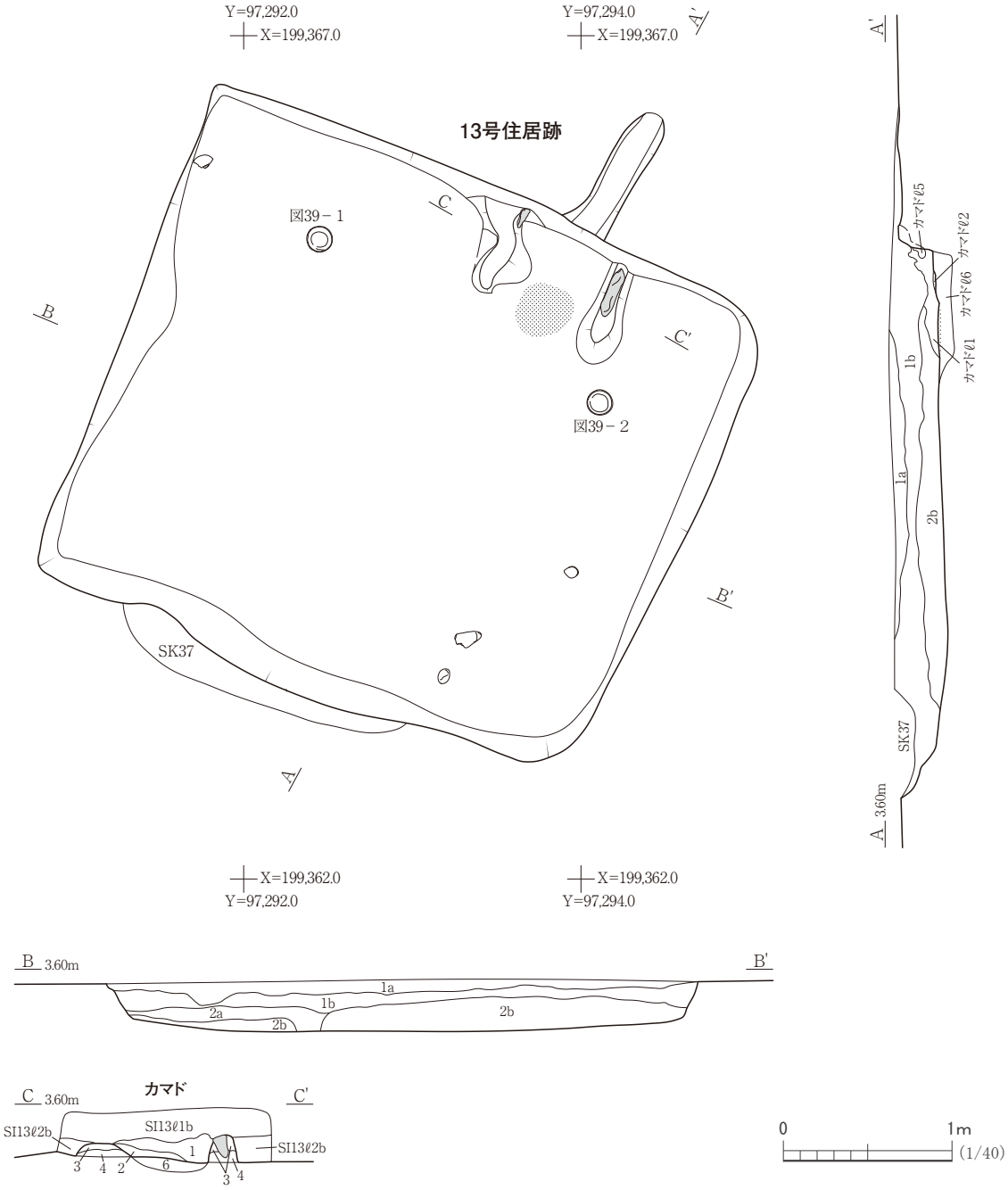
遺構検出面から、古墳時代終末期頃の遺構と考える。

13 号住居跡　ＳＩ 13

遺　構【図 38、写真 35・36】

本遺構は、東区北西部のＤ２グリッドに位置する。ＬⅢｄ上面で黒色土粒を含む灰黄褐色シルトの広がりを確認し、調査を開始した。本遺構北側では炭化物の分布が確認できるが、遺構周辺の土壌はややグライ化している。南辺において 37 号土坑と重複し、本遺構が古い。

遺構内堆積土は２層に大別し、さらに４層に細分層した。ℓ１ａ・１ｂ・２ａは黒色土粒や凝灰岩粒などの混入物が少なく、ℓ２ｂは比較的多い。ℓ１ａ・１ｂ・２ａは自然堆積、ℓ２ｂは人為堆積とみられる。



13号住居跡堆積土

1a　灰黄褐色粘質シルト　10YR4/2（黒色土粒少量）
1b　にぶい黄褐色粘質シルト　10YR4/3（1aより明、黒色土粒微量）
2a　黒色粘土　2.5Y3/1（炭化物・凝灰岩粒少量）
2b　オリーブ黒色粘土　7.5Y3/1（黒色土粒・凝灰岩粒少量、グライ化）

13号住居跡カマド堆積土

1　極暗赤褐色粘質シルト　5YR2/3（酸化した凝灰岩塊主体）
2　黒褐色粘土　5YR3/2（炭化物・焼土細粒多量）
3　黒褐色粘土　10YR3/1（焼土粒・LⅢ粒多量）
4　オリーブ黒色粘土　10YR3/1（LⅣ主体に炭化物少量）
5　黄灰色粘土　2.5Y4/1（LⅣ類似）
6　オリーブ黒色粘土　10Y3/1（焼土粒・炭化物少量）

図38　13号住居跡

本遺構は、隅丸方形を呈している。規模は、東西 3.53 m、南北 3.26 mを測る。貼床は確認されず、グライ化したＬⅢｅまたは L Ⅳを床面としているため、極めて軟質であるが、住居跡中央からカマドにかけてはややしまりがある。南北の中軸線方向はＮ 21°　Ｅである。周壁は急峻に立ち上がり、床面からの高さは 12 ～ 26 ㎝を測る。

住居に付属する施設には、カマド１基がある。柱穴は検出していないが、床面がグライ化しており、識別できなかった可能性もある。

カマドは北壁の中央からやや東寄りに位置する。燃焼部、ソデ部、煙道部が遺存し、比較的良好な状態である。カマドの規模は全長 1.52 m、最大幅 1.0 mを測る。燃焼部の火床面は東西 32 ㎝、南北 33 ㎝の不整円形であり床面よりわずかに低くなる。狭い範囲ながらも明瞭に酸化し、最も厚いところでは 1.9 ㎝酸化する。ソデ部は、床面上に粘土を積み、その上に凝灰岩を据え、さらに粘土を貼り付けて構築しているとみられる。煙道の規模は現状で長さ 80 ㎝、幅おおよそ 20 ㎝を測る。煙道の上部は崩落しているが住居側では被熱による酸化面を確認した。カマド内堆積土は６層に分層した。ℓ１・２には酸化した凝灰岩塊や焼土細粒、炭化物が多く含まれていることから天井部や壁面からの崩落土と考える。ℓ３・４はソデの構築土と判断した。ℓ５は煙道内の堆積土の可能性がある。ℓ６はカマド掘方埋土と考える。

遺　物【図 39、写真 74】

本遺構からは、破片数にして土師器 378 点、須恵器 12 点が出土し、このほかℓ１ｂ～２で鉄滓 14 点（202.0 ｇ）を確認した。そのうち３点を図化した。

図 39－１・２は、外面調整にケズリのあと口縁部ヨコナデ、内面にミガキ調整と内黒処理を行い、底面平底の杯である。１は、口縁部が内湾する形状で、底面に木葉痕がみられる。２は、カマド近くの底面から出土し、器形がやや歪み、被熱を受けている。

３は、小型丸底鉢と考えられ、内外面ミガキが施され底面は平底である。古墳時代前期の所産と考えられ、本遺構に伴わず、流れ込みの遺物である。

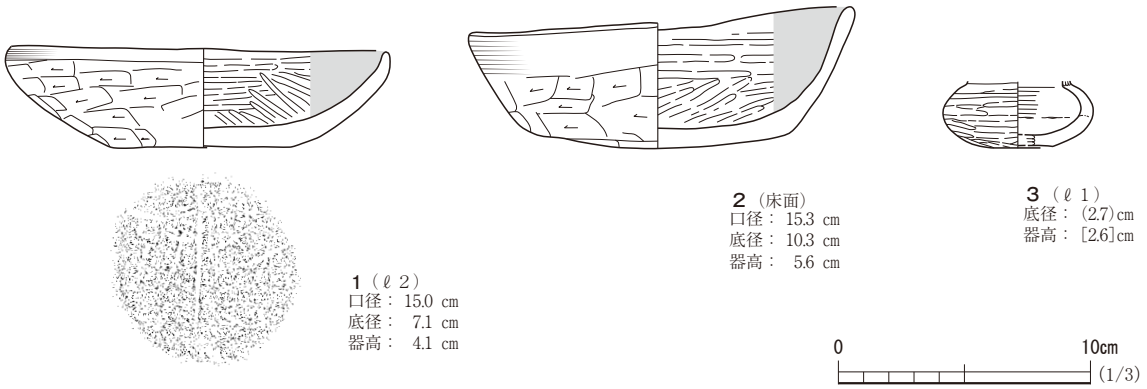


図39　13号住居跡出土遺物

ま　と　め

本遺構は、平面形が隅丸方形を呈する小型の竪穴住居跡である。北壁中央からやや東寄りの位置にカマドが１基ある。カマドの位置に関しては第２面で検出した５・８号住居跡との共通性がある。

出土遺物の特徴から、古墳時代終末期の遺構と考える。

14 号住居跡　ＳＩ 14

遺　構【図 40・41、写真 37 ～ 39】

本遺構は、東区北部のＤ２・Ｅ２グリッドに位置する。ＬⅢｄで周辺に混入物を含む土層の広がりを確認したため、トレンチを入れたところ北側でカマドが検出されたことから調査を開始し、この際にカマドを一部き損している。

遺構内堆積土は４層に分層した。ℓ１・３は混入物が多いため、人為堆積とみられるが、ℓ３の南側では砂層がみられるので流水の影響も指摘できる。ℓ４は自然堆積とみられる。

本遺構は、北側半分が調査区外に存在するが、平面形は方形を呈すると推測される。規模は、東西 4.29 ｍを測り、南北は 2.81 ｍを検出した。ＬⅢｅを床面としており、カマド前面で比較的しまりがある床面を検出したが、周辺にいくにつれて、しまりはなくなっていく。南北の中軸線方向はＮ 22°Ｅである。周壁の判別が困難であり、把握可能なカマド地点から検出を始め南壁まで推定した。東壁は土壌のグライ化が著しいが、ℓ３・４の終結するラインでの検出に努めた。

住居に付属する施設には、カマド１基がある。住居跡南部の２箇所をトレンチ状に深掘りし、柱穴や貯蔵穴の検出に努めたが確認できなかった。カマドは西壁のほぼ中央に位置すると考える。煙道部、燃焼部、ソデ部が遺存するが、遺存状況は良くない。カマドの規模は一部が調査区外にあるが全長約 86 ㎝を測り、最大幅 94 ㎝を検出した。燃焼部は東西 53 ㎝、南北 40 ㎝を測り、そのうち火床面は東西 41 ㎝、南北 30 ㎝の不整楕円形をしており、最も厚いところでは 3.8 ㎝酸化していた。ソデ部は、左右ともに床面上に凝灰岩塊を据えて芯材とし、そこに黒褐色粘質シルトを貼り付けて構築しているとみられる。煙道は平面ではわずかしか検出されていないが、断面で煙出穴に上っていく様子が確認できる。カマド内堆積土は４層に分層した。ℓ１には酸化した凝灰岩塊や焼土細粒、炭化物が多く含まれていることから天井部や壁面からの崩落土と考えられる。ℓ２は煙道の天井崩落土とみられる。ℓ３はソデの構築土である。ℓ４はカマド掘方埋土と考える。トレンチを設定し、柱穴の検出に努めたが確認できなかった。

遺　物【図 42、写真 74・75】

本遺構からは、破片数にして土師器 288 点、須恵器４点が出土し、そのうち５点を図化した。カマド左側の床面からはまとまった出土状況が見られ、そのうち図 42 － ５は倒位で出土している。

図 42 － １は、土師器杯である。半球状の体部からやや外反する口縁部を持つ。器面が摩滅しているが、体部外面にはケズリの後にナデ調整がみられ赤彩を確認できる。古墳時代中期の所産と考えられ堆積層から出土することから埋没時の混入と判断される。

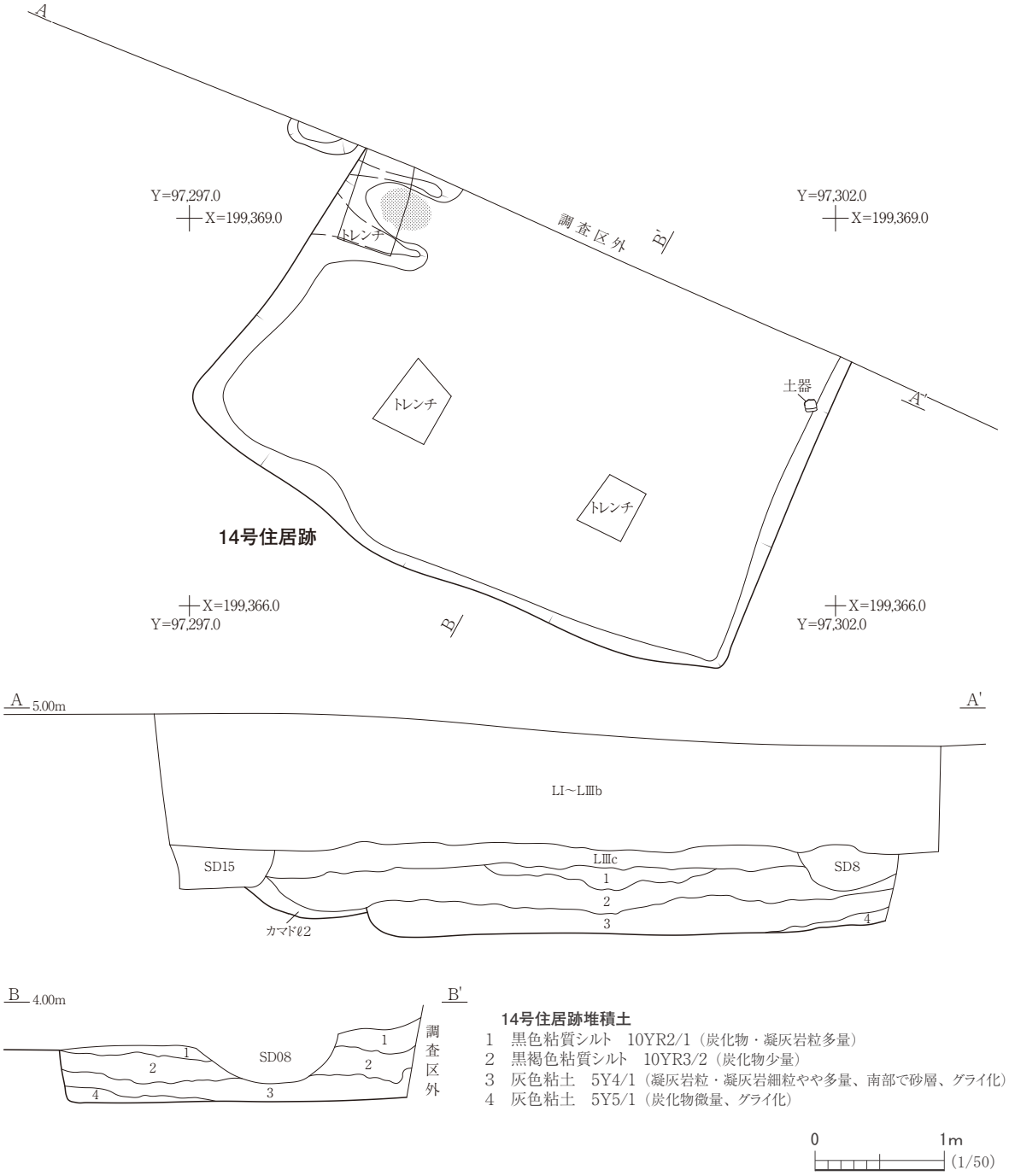


図40　14号住居跡（１）

２は、口縁部が直線的に立ち上がる鉢と考えられる。外面調整はハケメの後にヨコナデ、内面調整にナデが確認される。下記の３・４に比べ焼成は良好で、調整も丁寧になされている。

３・４は、粘土紐痕跡が残り比較的粗雑なつくりの鉢である。３は口縁部が外反し、４はやや内湾する。外面調整ハケメまたはナデで、内面調整はヘラナデが確認される。

５は、床面から出土した長胴の土師器甕である。底面に木葉痕が確認でき、外面縦方向のヘラナデの後に底部ケズリ、内面横方向のヘラナデを施す。

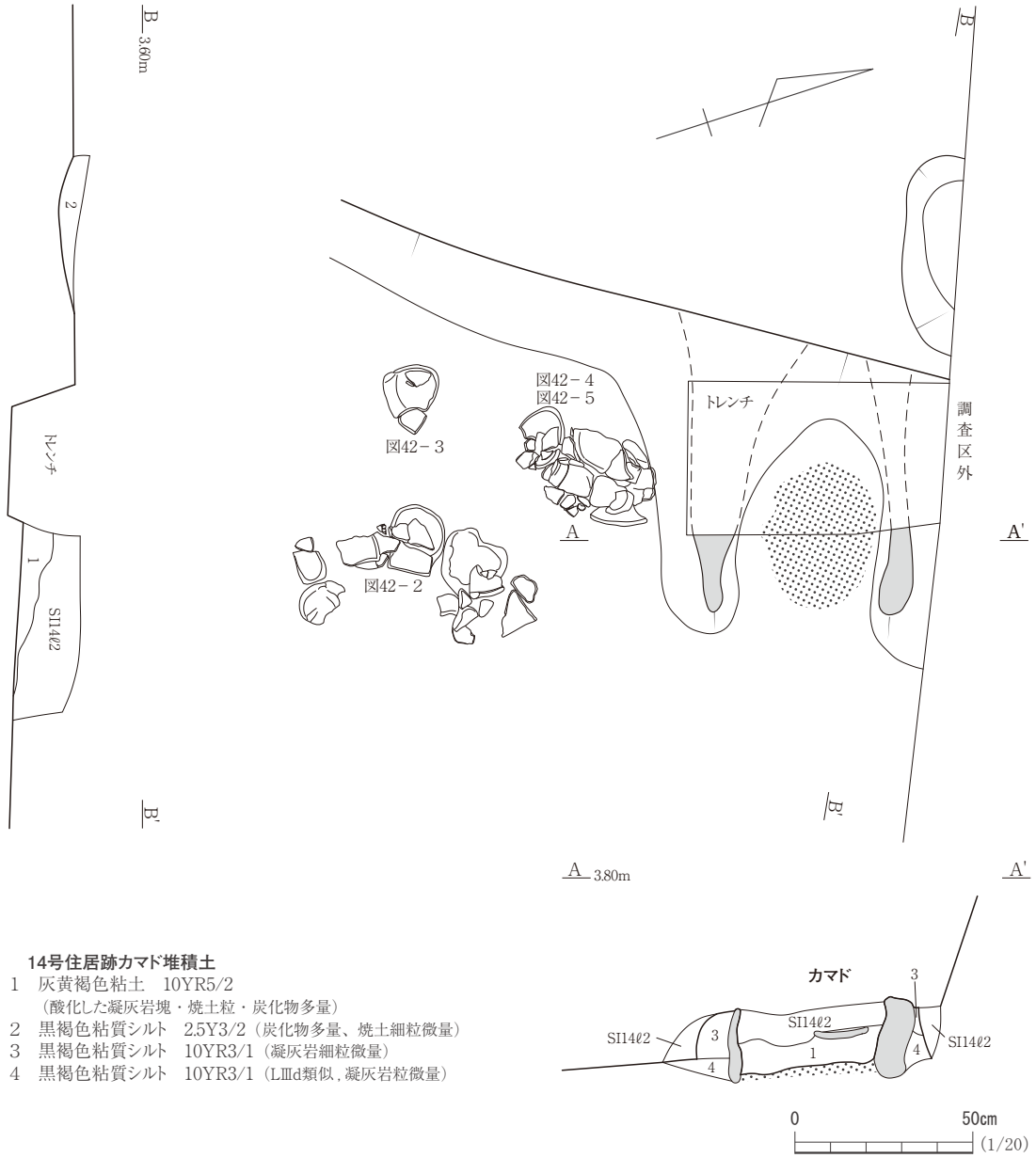
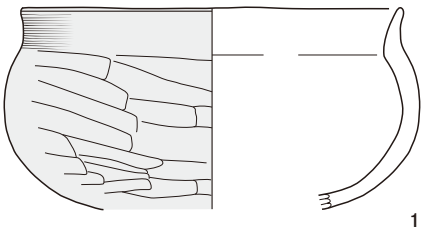


図41　14号住居跡（２）

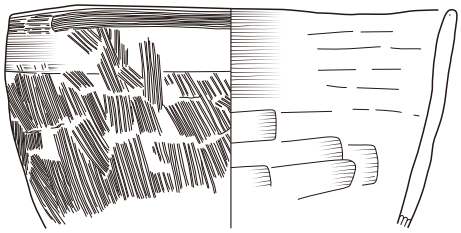
ま　と　め

本遺構は、平面形が方形を呈すると推定される竪穴住居跡である。西壁中央とみられる位置にカマドが１基あるが調査時に大きくき損した。床面がグライ化しているため、柱穴や周溝の有無については判断が困難であった。また、カマドに向かって左側の床面で出土している土師器の出土状況から、土器を床面に倒置した状態を想定した。住居廃絶に伴う祭祀行為と推測する。

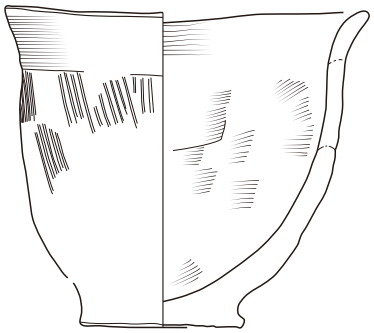
出土遺物の特徴から、古墳時代終末期の遺構と考える。

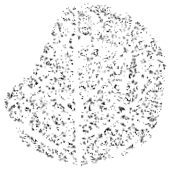


1（ℓ２）
口径：(15.2)cm
器高：[8.0]cm

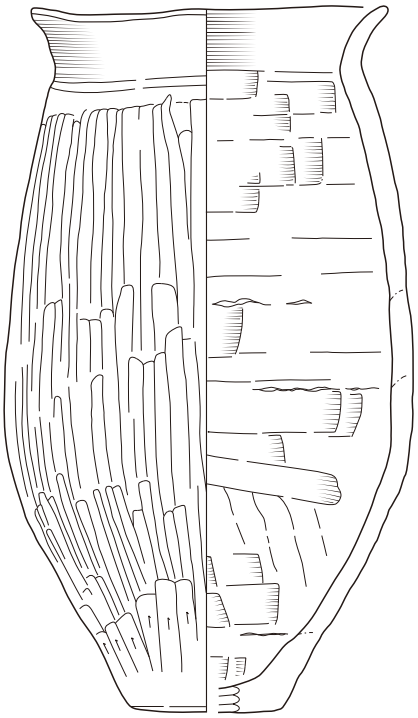


2（床面）
口径：(17.7)cm
器高：[8.7]cm

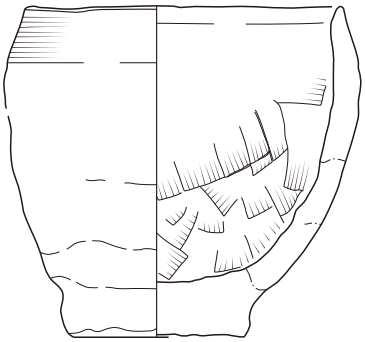


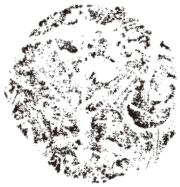


3（床面）
口径： 14.4 cm
底径： 6.5 cm
器高： 12.6 cm



5（床面）
口径： 14.2 cm
底径：(6.0)cm
器高： 28.0 cm





4（床面）
口径：(14.4)cm
底径： 7.2 cm
器高： 13.0 cm

赤彩

0　10cm
(1/3)

図42　14号住居跡出土遺物

15 号住居跡　ＳＩ 15

遺　構【図 43・44、写真 40 ～ 42】

本遺構は、東区北東部のＥ２・３グリッドに位置する。ＬⅢｄで遺物や混入物が確認できたことから、トレンチを設定して掘り下げたところ、カマド跡を検出したことから住居跡と認定し調査を開始した。16 号住居跡より新しい。堆積土は５層に分層でき、いずれもグライ化している。グライ化は下層でより著しい。このうちℓ１～３は、混入物も少なくレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。これに対しℓ４・５は、床面上に薄く堆積する土層で炭化物を含む。なかでもℓ５は炭化物を多く含み、遺構の北半部に分布する。カマド跡周辺から住居中央部にかけてのℓ５下位から小規模な焼土面が検出されることから、ℓ４・５は床面上の敷物ないし上屋材が炭化した土層の可能性が高い。

本遺構は、平面形が方形を呈し、南東部は調査区外に延びている。規模は、南北 5.80 ｍ、東西 6.41 ｍを測る。床面はＬⅢｅないしＬⅣを平坦に整えているが、特に南部でのグライ化が著しいため色調での識別は困難であった。カマド跡周辺から住居跡中央部にかけてわずかな硬化面が認識できたが、周辺に向かってなくなっていく。周壁も同様で、特に西壁と南壁では混入物の有無で認定せざるをえなかった。南北の中軸線方向はＮ６°Ｅである。

住居に付属する施設には、カマド跡と小穴３基、焼土面２箇所がある。カマド跡は北壁中央に位置しており、燃焼部・ソデ部・煙道部が遺存する。全長 1.69 ｍ、幅 0.80 ｍである。燃焼部は径 40 ㎝の範囲が厚さ３㎝にわたり酸化していた。また、燃焼部手前に同程度の焼土を２箇所検出した。燃焼部には支脚が据えられており、土師器杯が逆位に載っている。

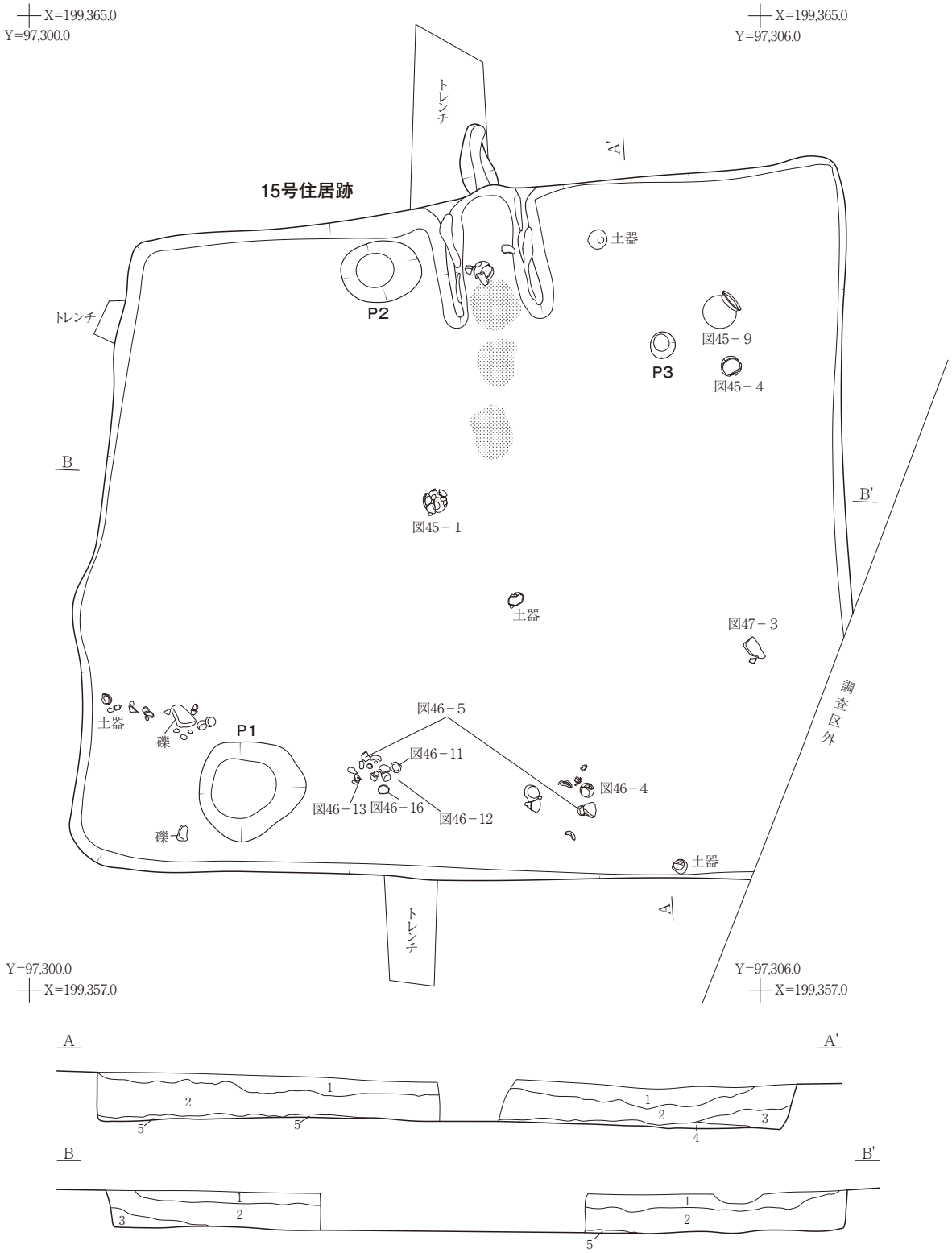
ソデ部の遺存状態は良好で、北壁から長さ約 1.1 ｍ延びている。構築方法は、長さ 30 ㎝・幅 30 ㎝・厚さ５～６㎝に整形した凝灰岩を芯材として３個ずつ並べ、これに粘土を貼り付けてソデを構築している。煙道は北壁から 53 ㎝遺存していたが、遺存状態は良くない。

主柱穴とみられる小穴がＰ３である。Ｐ３は住居跡の北東部に位置しており、床面では検出できなかったが、16 号住居跡を調査した際に、同住居の堆積土を掘り込んでいたため、本遺構に伴うと考えた。床面がグライ化しているため、住居跡北西部にトレンチを設定し、これ以外の柱穴の確認に努めたが確認できなかった。

貯蔵穴と推定されるのがＰ１・Ｐ２である。Ｐ１は住居跡南西部に位置し、長さ 90 ㎝、深さ 80 ㎝、深さ 17 ㎝の不整円形である。Ｐ１からは土師器甕や土師器壺などが出土している。Ｐ２はカマドの西に位置する楕円形の土坑で、規模は 64 × 49 ㎝、深さ 10 ㎝を測る。ℓ２上面から土師器杯２点が出土している。

遺　物【図 45 ～ 47、写真 75 ～ 79】

本遺構からは、破片数にして土師器 544 点、須恵器６点が出土し、そのほか砥石１点、石製模造品１点を確認している。そのうち 29 点を図化した。

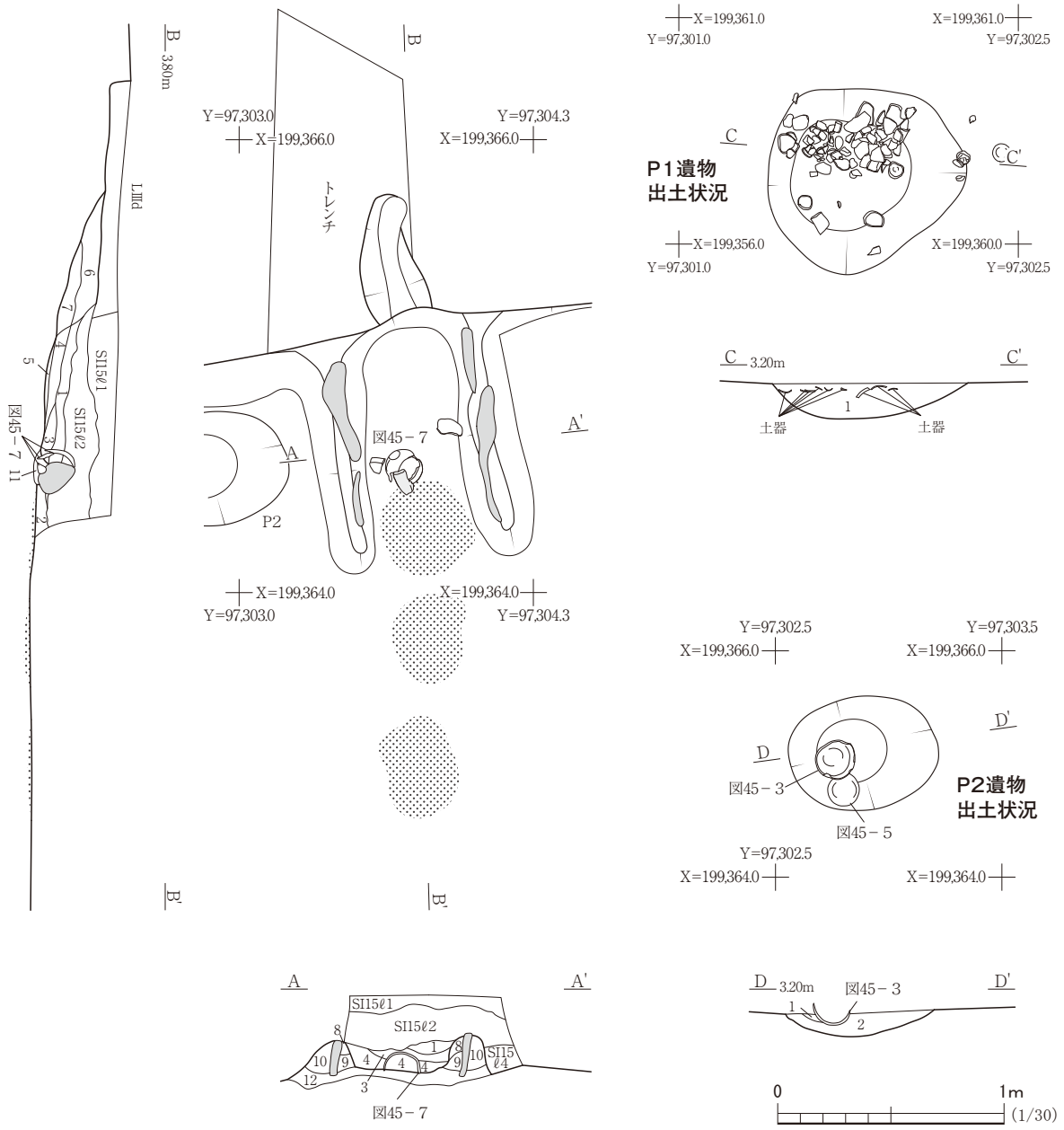


15号住居跡堆積土

1　にぶい黄褐色シルト　10YR4/3（LⅢc類似）
2　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（凝灰岩塊・炭化物少量）
3　黄灰色粘質シルト　2.5Y4/1（炭化物微量、グライ化）
4　黒褐色粘質シルト　2.5Y3/1（炭化物・凝灰岩粒少量）
5　黒褐色粘質シルト　2.5Y3/1（炭化物多量、焼土細粒・凝灰岩粒少量）

0　1m
(1/50)

図43　15号住居跡（１）



15号住居跡カマド堆積土

1　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（凝灰岩粒・還元化細粒・焼土細粒多量）
2　黒褐色粘質シルト　2.5Y3/1（上部に焼土塊極多量）
3　暗オリーブ褐色粘土　2.5Y3/3（焼土粒・凝灰岩粒・黒色土の混土）
4　極暗赤褐色細砂　5YR2/3（還元化粒と焼土粒主体、炭化物多量）
5　黒色粘質シルト　10YR2/1（炭化物多量）
6　灰黄褐色シルト　10YR4/2（凝灰岩粒少量）
7　黒褐色粘質シルト　10YR2/2（煤・焼土粒極多量）
8　黒褐色粘質シルト　10YR3/1（一部酸化した凝灰岩粒多量）
9　黒褐色粘質シルト　10YR3/1（焼土細粒多量）
10　黒褐色粘質シルト　10YR3/1
11　黒褐色粘質シルト　10YR3/1（しまりあり）
12　黒褐色粘質シルト　10YR3/1（炭化物・黄灰色砂少量）

15号住居跡P１堆積土

1　黒色粘土　10YR2/1（炭化物少量、凝灰岩粒微量）

15号住居跡P2堆積土

1　黒褐色粘土　10YR3/1（炭化物・焼土細粒少量）
2　黒褐色粘土　2.5Y3/1（北東部に砂層、グライ化）

15号住居跡P3堆積土

1　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（炭化物少量、しまりなく下半が空洞）

図44　15号住居跡（２）

図 45－１～６は、土師器杯である。１～５は半球状の体部からやや外反する口縁部を持つ。１は平底で、外面調整はケズリ後にナデ、内面調整はミガキを施し、内外面に赤彩が塗布されている。２は床面から出土し、外面調整ミガキ、内面調整ナデを施し、内外面赤彩を塗布する。３は、丸底で内外面にミガキと赤彩を施す。４は、平底で内外面にミガキと赤彩を施す。５は、３とともにＰ２床面から出土し、丸底で外面調整にケズリを施す。６は、Ｐ１ℓ１から出土し、ほかの杯に比べ器高が低く、底部から口縁部にかけて扁平な半球状の形態である。外面には底部付近にケズリ調整が施されている。

７は、カマド床面から出土した土師器鉢である。外面体部下半から底部にケズリ調整を施し、内外面に赤彩が確認される。

８は、Ｐ１ℓ１から出土した小型の土師器壺である。素口縁で、体部上半に丸みを持ち、底部は平底となる。

９は、完形で出土した土師器甕である。胴部は球形で中央部に最大径がくる。外面調整は、斜位のヘラケズリまたはヘラナデで、内面調整はヘラナデが施される。体部外面下半に被熱痕跡が確認される。

図 46－１は、土師器甕である。外面調整はタテハケが施され、口縁部付近で外反する形態である。器厚が薄く、内面調整はナデ調整が施されている。

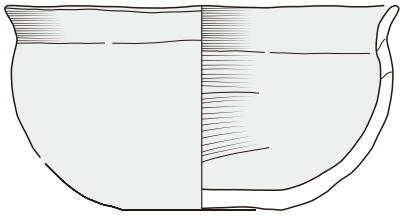
２・３は、小型の土師器甕で、体部から直線的に口縁部に至る。内外面にヘラナデを施し、底面に木葉痕が確認される。２は口唇部が波状になり、３は内面を黒色に処理するなど、後述する４～17 の手づくね成形の土器に共通する要素を持つ。また、２は焼成後に内面から打撃を加え穿孔されている特徴も持つ。

４～17 は、手づくね成形の土器で、鉢を表現していると考えられる。一部に内面を黒色に処理しているものが確認される。４～７は比較的大きく、ヘラナデやナデの調整が施されているが、輪積痕が残り、口縁部の形状も一定ではない。８～17 は小型で、内外面に指頭痕が残り、口縁部は波状となる。掲載資料を含め、28 点の手づくね土器が出土している。

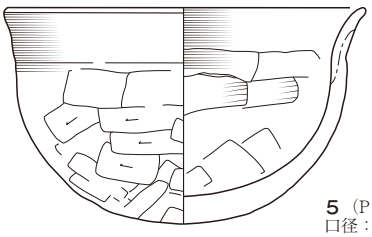
図 47－１は、特異な形状の土師器壺である。頸部から口縁部の形状は不明であるが、体部が樽型に広がる形状が想定される。外面調整は底部付近のケズリとハケメが確認される。体部側面で器厚が肥大し、内面には体部中央を中心にヘラナデが施されている。このことから 90 度倒立させて成形していたことが想定される。

２は、剣形の石製模造品である。上下を欠損しているが断面三角形状で鎬がつくり出されている。遺存面には擦痕が確認できる。

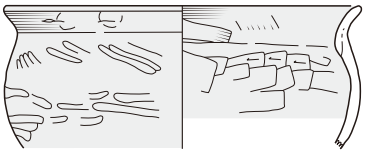
３は、床面から出土した置砥石である。表裏の２面を砥面として使用し、左右側面付近には研ぎ減りによる凹面状の匙面がつくられている。四方の側面は、一部欠損もあるが概ね粗割りの凹凸を残すと考えられる。



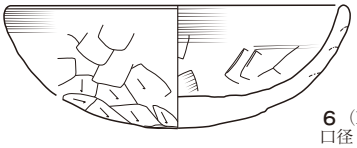
1（ℓ２下部）
口径：(15.6)cm
底径：　6.2 cm
器高：　8.1 cm



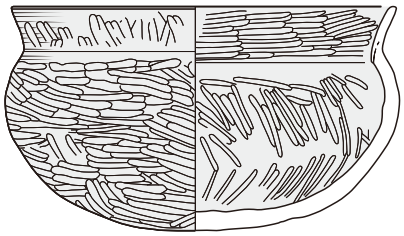
5（P２底面）
口径：14.8 cm
底径：12.6 cm
器高：　8.6 cm



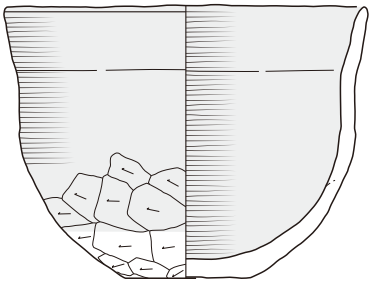
2（床面）
口径：(14.2)cm
器高：[5.7]cm



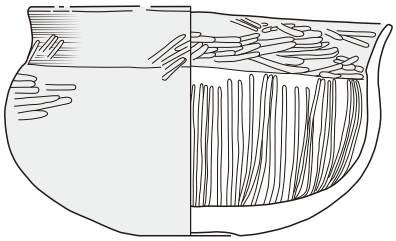
6（P１ℓ１）
口径：(13.4)cm
底径：　2.5 cm
器高：　4.8 cm



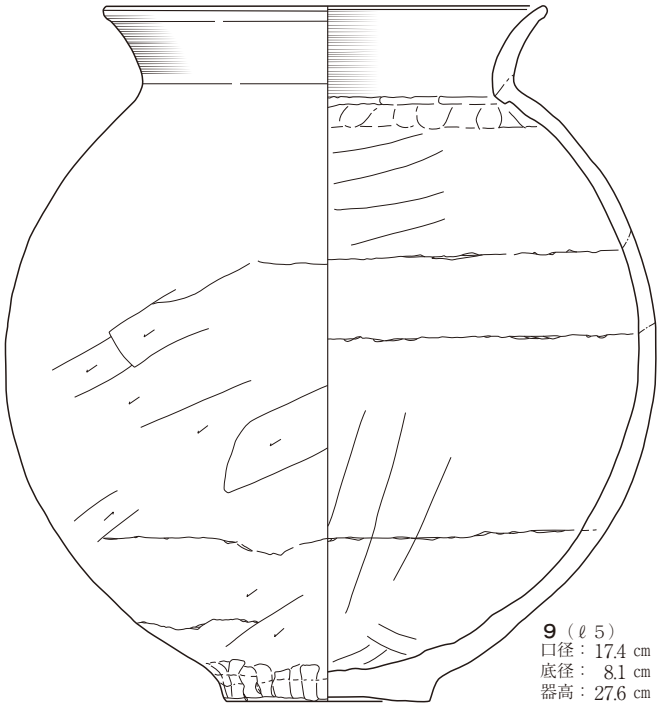
3（P２底面）
口径：(15.7)cm
底径：　2.5 cm
器高：　8.9 cm



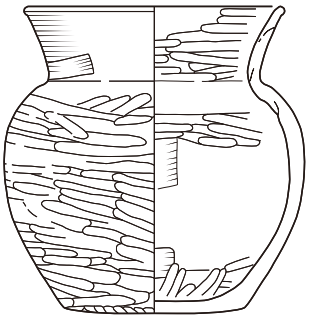
7（カマド底面）
口径：(14.4)cm
底径：　5.0 cm
器高：10.8 cm



4（ℓ５）
口径：14.5 cm
底径：　4.0 cm
器高：　9.1 cm



9（ℓ５）
口径：17.4 cm
底径：　8.1 cm
器高：27.6 cm



8（P１ℓ１）
口径：10.4 cm
底径：　7.2 cm
器高：12.2 cm

赤彩

0　10cm
(1/3)

図45　15号住居跡出土遺物（１）

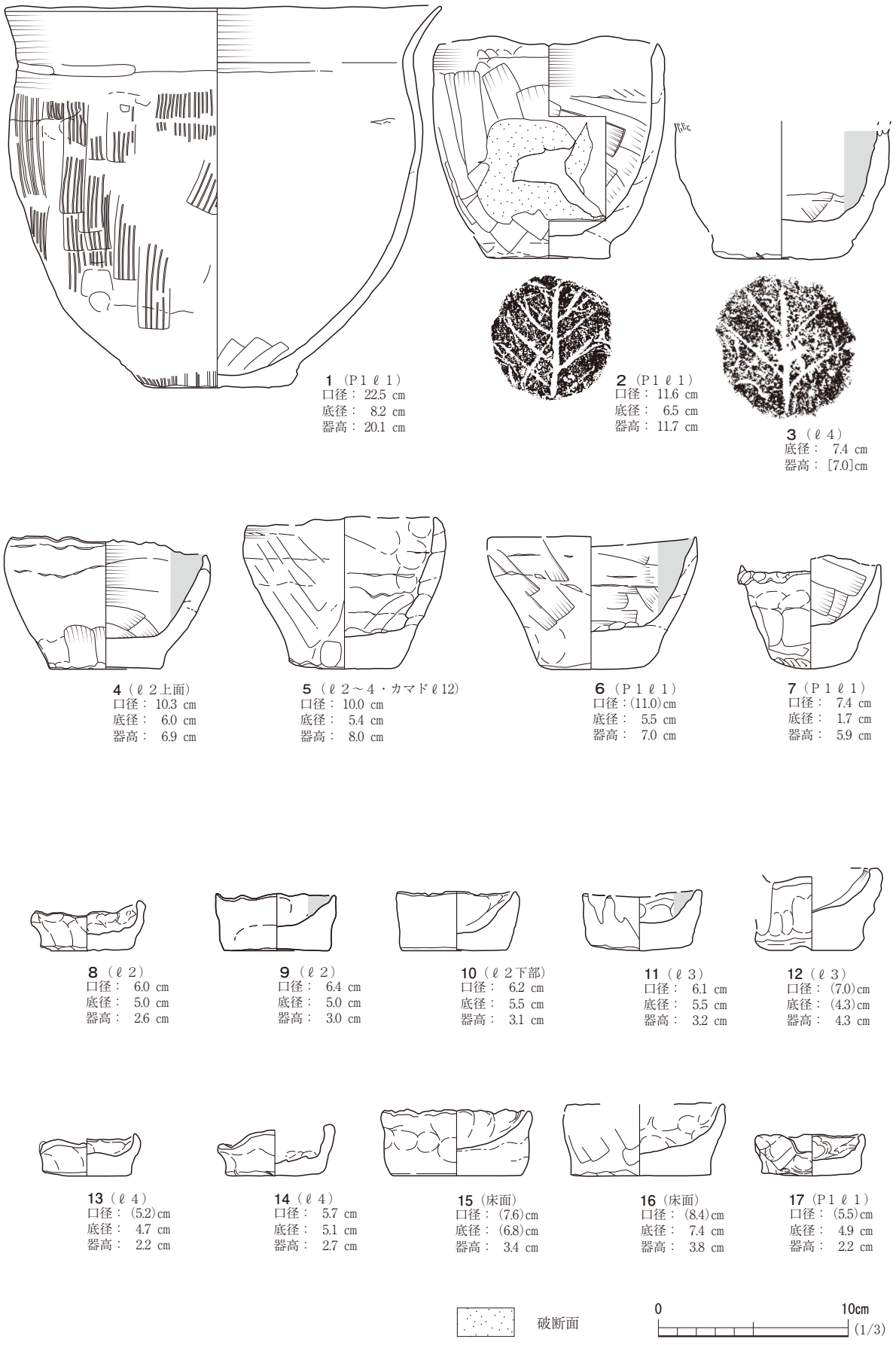


図46　15号住居跡出土遺物（２）

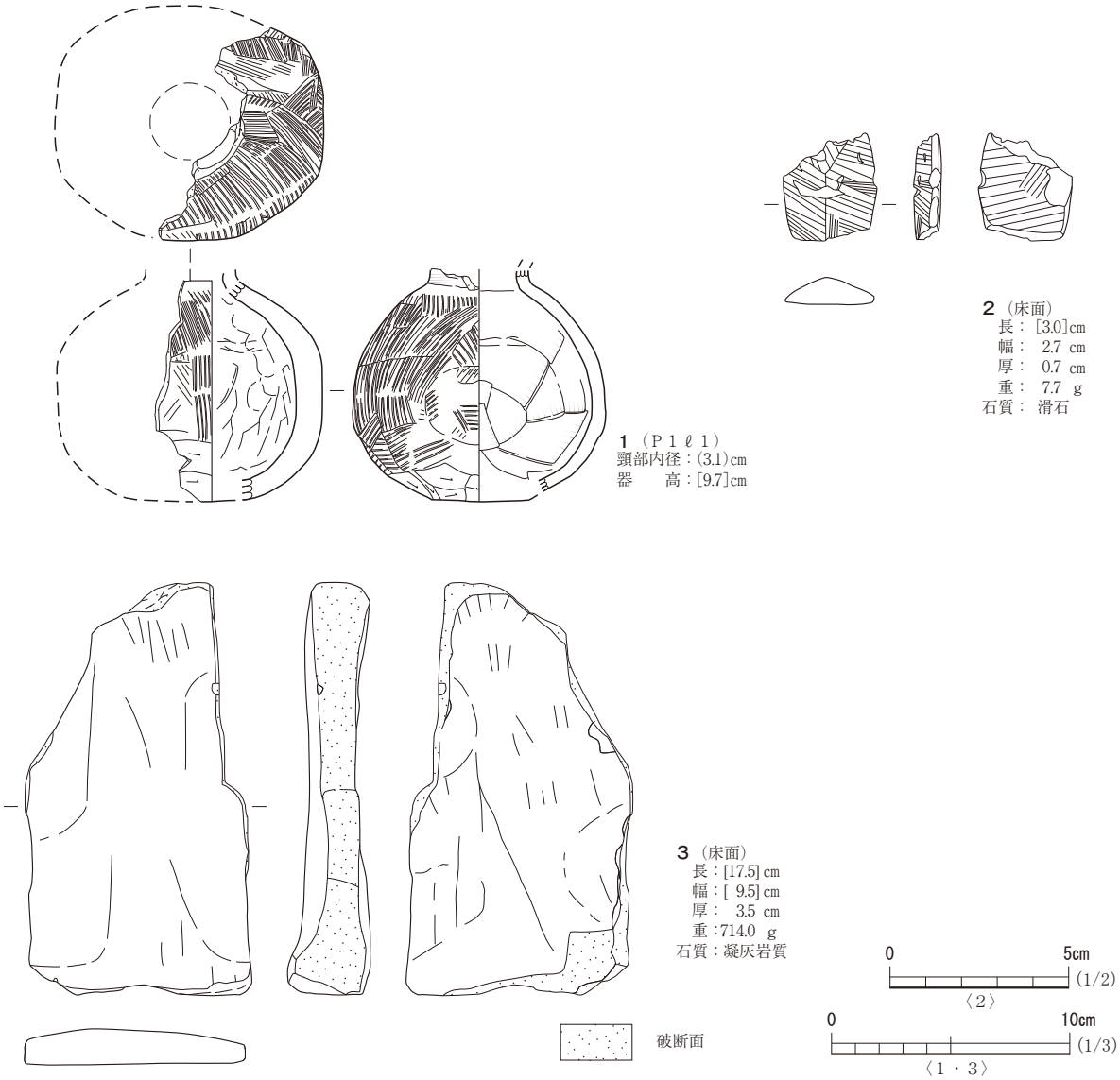


図47　15号住居跡出土遺物（３）

ま　と　め

本遺構は、比較的大型の住居跡であり、カマド跡も大きく丁寧に構築されている。柱穴は１基しか確認できなかったが、グライ化によって認識できなかったものと考えられ、本来は４本柱だった可能性が高い。住居南部から祭祀具とされる手づくね土器も多数出土していることから、住居廃絶時に何らかの祭祀行為を想定することも可能である。本遺構が集落内に存在していたことも想定され、調査区周辺においても同時代の遺構が分布している可能性が高い。

出土遺物の特徴から、古墳時代中期から後期初頭の遺構と考える。

16 号住居跡　ＳＩ 16

遺　構【図 48、写真 43・44】

本遺構は、東区北東隅のＥ２グリッドに位置する。北壁付近及び南東壁部分は調査区域外となる。15 号住居跡のカマド跡を断割り調査した際に、下層に検出された焼土粒を含む土層の広がりを確認したところ、さらに住居跡が存在することが判明し、16 号住居として精査を行った。遺構検出面はＬⅢｅであるが、本土層は調査区域のうち東区北東部のみに分布する 40 号土坑より新しい。

堆積土は３層に分層し、そのうちℓ３は炭化物及び焼土が主体であり、火災により堆積した土層の可能性がある。検出面であるＬⅢｅ、堆積土ℓ１・２はいずれもグライ化し、さらに水分を多く含んで泥濘化しており、土層観察から住居跡の床面及び周壁を把握することが困難であったため、ℓ３を精査し、ℓ３が途切れた地点で床面及び同壁と認定した。

平面形は隅丸方形を呈する。一部が調査区外に延びるため全体規模は把握できないが、残存範囲では東西 5.37 ｍを測り、南北 4.62 ｍを検出した。床面はＬⅢｅまたはＬⅣを利用し平坦に整えているが、いずれもグライ化が著しく識別困難である。周壁は急峻に立ち上がると考えられるが、これは先述の調査方法により壁を想定したためであり、上層部分での壁の角度は不明である。検出面から床面までの高さは、西辺で 45 ㎝を測り東に向かい減じてくる。住居跡の方向は、西壁を基準とするとＮ 22°Ｅと推定される。

住居跡に付属する施設としては、焼土面を３箇所で検出した。いずれも形は不定形であり、焼土１は長さ 90 ㎝・幅 45 ㎝、焼土２は長さ 66 ㎝・幅 36 ㎝、焼土３は長さ 94 ㎝・幅 29 ㎝の範囲において、いずれも約５㎝の厚さで被熱している。３地点ともに硬化した酸化面の下層に還元反応と思われる黒色系土層を確認し、相当の高温または長時間にわたり熱を受けたものと推測される。なお、本遺構に伴う柱穴と想定されるピットは検出されなかった。ℓ３上面で検出のピットは本遺構ではなくＳＩ 15 に付属する施設と判断した。堆積土のグライ化及び湧水が著しく、焼土以外の付属施設の検出は困難であった。

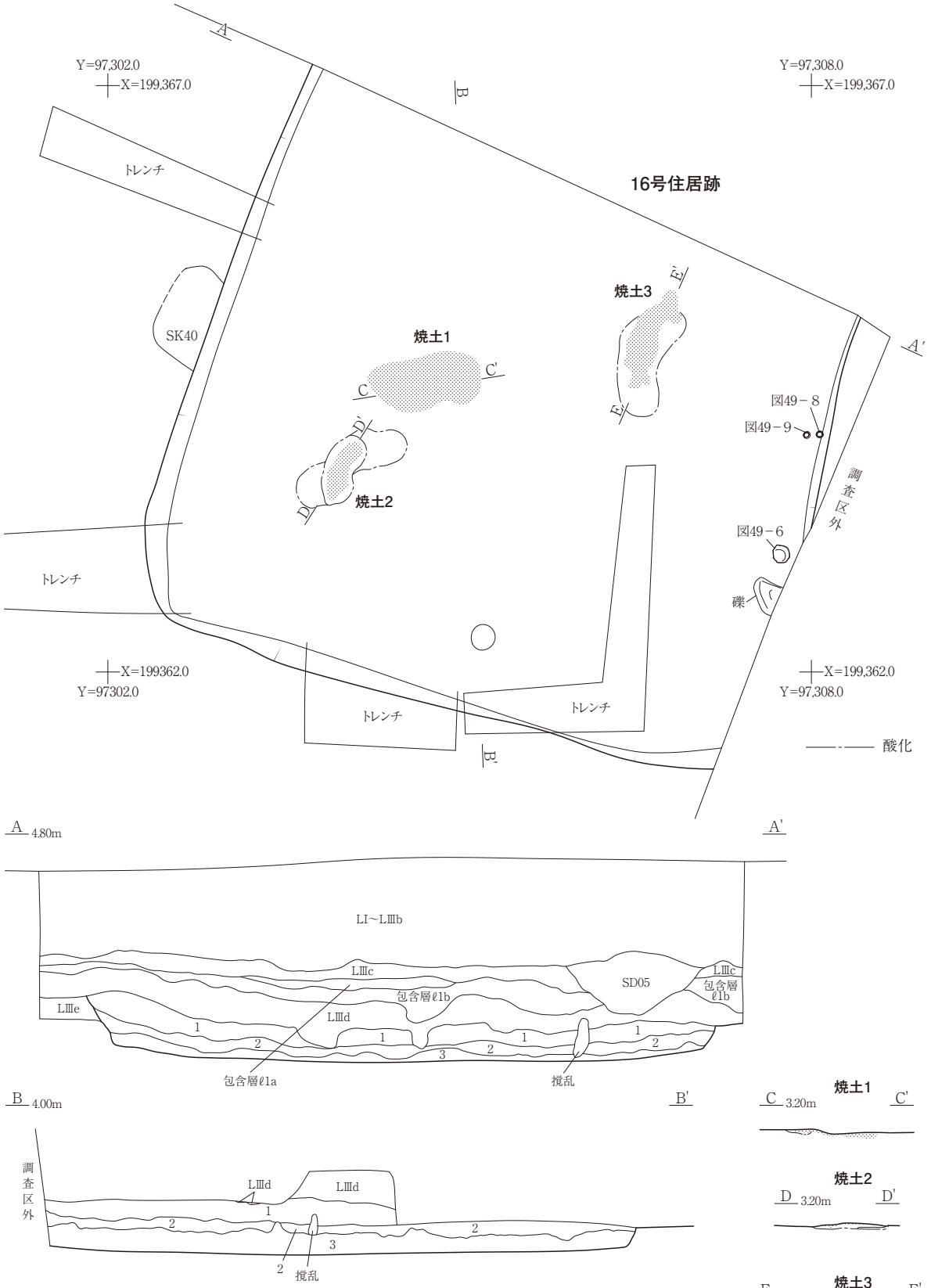
遺　物【図 49、写真 79・80】

本遺構からは、破片数にして土師器 168 点が出土し、そのうち９点を図化した。

図 49－１～２は、土師器高杯の脚部である。調整は外面にミガキが、内面にナデが施され、１は赤彩が塗布されている。

３は、土師器の有孔鉢である。口縁部は複合口縁で、底部に穴が穿たれている。孔は単孔で、内外面の両方から面取りされている。調整は外面にミガキが、内面にヘラナデが施されている。

４～６は、土師器の壺である。４は頸部から体部の破片で、調整は外面にミガキと内面にナデが確認される。５は二重口縁壺の屈曲部から口縁部の破片で、内外面にミガキ及びナデが施され、赤彩が確認できる。６は壺の底部で、色調が灰白色で器厚が薄い。外面調整ミガキ、内面調整ヘラナデが確認できる。



16号住居跡堆積土

1　オリーブ黒色粘土　7.5Y3/1（グライ化、炭化物・黒色土粒少量）
2　黄灰色粘質シルト　2.5Y4/1（炭化物少量、ややグライ化）
3　黒褐色粘土　7.5Y3/1（焼土粒・焼土細粒・炭化物極多量）

東区北東部遺物包含層堆積土

1a　灰黄褐色砂質シルト　10YR4/2（炭化物やや多量、凝灰岩細粒少量）
1b　黒褐色砂質シルト　10YR3/2（炭化物やや多量、凝灰岩粒・焼土細粒少量、粘性あり）

図48　16号住居跡・東区北東部土層

７～９は、土師器の小型丸底鉢と考えられる。口縁部をいずれも欠くが、外面調整に丁寧なミガキが施され、８は外面に赤彩が良好に残る。形態は、７は球状に近く、８・９は扁平である。底面はいずれもやや凹む平底である。８・９は横に並べられた状態で出土した。

ま　と　め

本遺構は、調査区域の北東隅部分のみに分布するＬⅢｅが検出面となる。一部調査区外に延びるが、概ね方形を呈する小型の住居跡である。３箇所の焼土面は、焼土１が位置的には炉跡であった想定もされるが、炭化材の検出状況を踏まえると住居の上屋構造の燃焼による可能性もある。炭化物を極めて多く含むℓ３から小型壺が出土していることから、住居廃絶に伴う燃焼時の祭祀儀礼も推測できるがグライ化した堆積土状況の中で確実な情報を得ることは困難であった。

出土遺物の特徴から、古墳時代前期の遺構と考える。

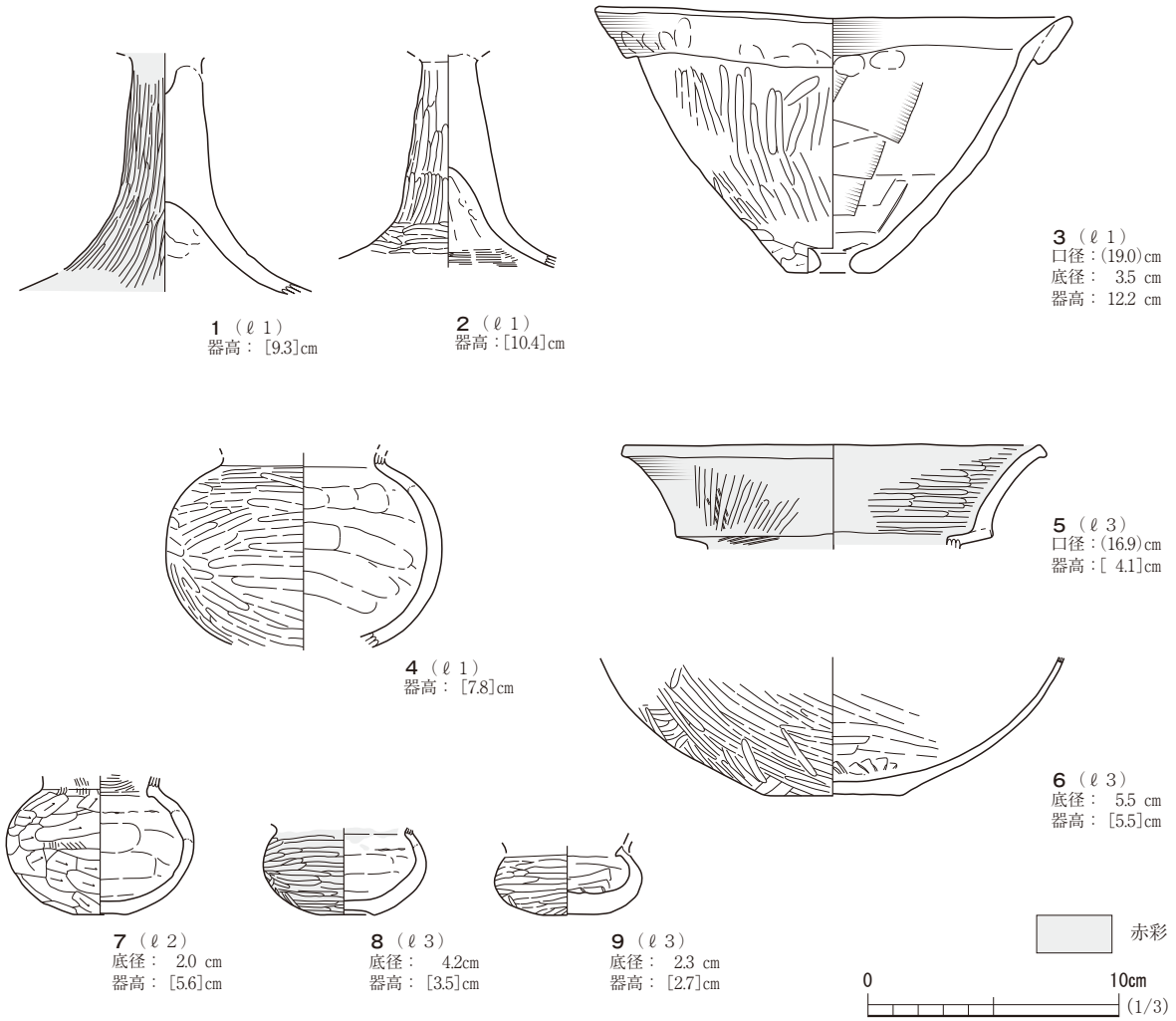


図49　16号住居跡出土遺物

第３節　掘立柱建物跡・柱穴列跡

掘立柱建物跡１棟、柱穴列跡３列を検出した。検出層位はＬⅢａであり、いずれの遺構も西区調査区で検出した。本節ではこれらの遺構について個別に報告する。

１号建物跡　ＳＢ 01

遺　構【図 50、写真 45・46】

本遺構は、西区西部のＢ２グリッドに位置する掘立柱建物跡である。桁行２間×梁行２間の南北棟と考えられ、棟の方位はＮ６°Ｅである。柱間寸法は桁行が北側 2.82（東）～2.77（西）ｍ、南側 2.53（東）～ 2.76（西）ｍ、梁行が西側 1.99（南）～ 1.98（北）ｍ、東側 2.29（南）～ 2.43（北）ｍである。

柱穴の掘方の平面形は円形を基調としている。柱穴の規模は径 24 ～ 42 ㎝程度で、深さは現況で 28 ～ 54 ㎝程度を測る。断面形は箱形ないし逆台形状をなし、各柱穴の底面は平坦のもの、ＰＡ２・ＰＡ３・ＰＣ１のように柱を据えた部分が窪むものがある。ＰＡ１－ℓ３、ＰＡ２・ＰＣ１～３－ℓ２、ＰＡ３－ℓ１・２は黒褐色土で柱を据えた痕跡と考えられるが、ＰＡ３以外のℓ１の状況から柱は人為的に抜き取られたものと考えられる。ＰＣ２・ＰＣ３では貝殻が土壌に多量混入しており、柱を抜き取った後に何らかの理由で貝殻を人為的に入れたものと推測される。その他、ＰＡ１～３の底面には粉砕状の貝殻（ＰＡ１-ℓ４、ＰＡ２-ℓ４、ＰＡ３-ℓ５）が堆積している。ＰＣ２・ＰＣ３の抜き取られた柱痕に詰められた貝殻とは様相を異にする。

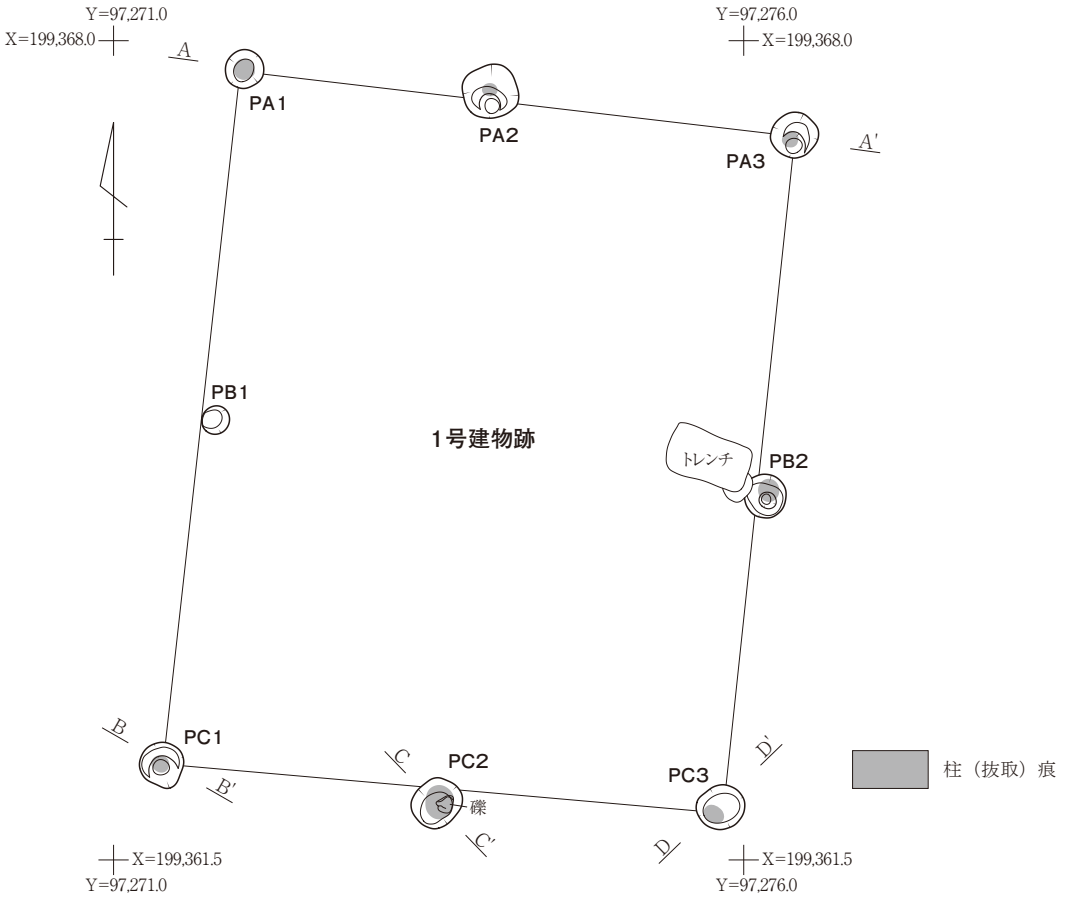
遺　物【図 50、写真 81】

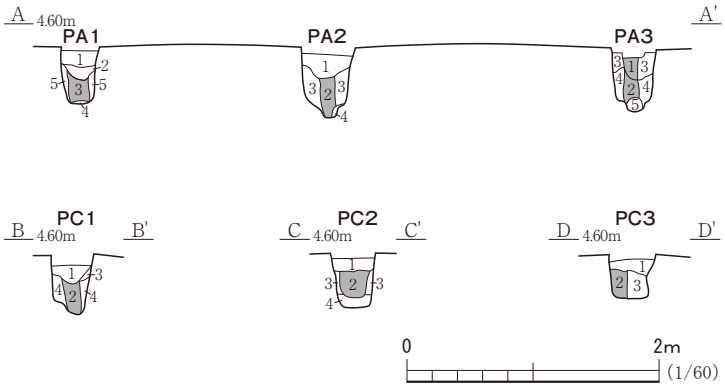
本遺構の柱穴からは、土師器 11 点、管状土錘３点、鉄滓２点（10.5g）が出土した。土師器はいずれも細片であり図示不可能であるが、黒色処理された杯破片３点を含む。管状土錘のうちＰＣ１ℓ４出土の完形品を図 50－１に示した。遺物はいずれも柱掘方堆積土からの出土であり、人為的な埋め戻しの際に混入したものと考えられる。

ま　と　め

本遺構は、桁行２間×梁行２間の南北棟である。本遺構は、棟方向が西側に隣接する１号柵列跡の方位と概ね一致することから、同柱穴列跡と関連して機能していたと考える。

ＰＣ３のℓ２で出土した貝殻に対して、放射性炭素年代測定を実施した。１σ歴年代範囲において 1445－1575cal ＡＤであり、15 世紀半ばから 16 世紀後半の年代範囲を示す。出土遺物からは本遺構の時期を絞り込むことは難しく、放射性炭素年代測定の結果から本遺構の時期は中世後半～末と推測する。





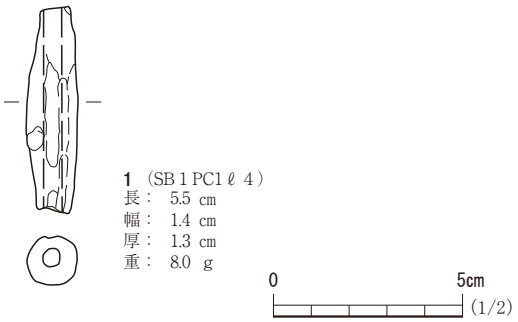


図50　１号建物跡・出土遺物

1号建物跡

PA1堆積土
1　暗褐色シルト　10YR3/4（炭化物）
2　暗褐色シルト　10YR4/4
3　黒褐色シルト　10YR3/2（炭化物）
4　粉砕貝殻層
5　にぶい黄褐色シルト　10YR4/3

PA2堆積土
1　暗褐色シルト　10YR3/4（炭化物）
2　黒褐色シルト　10YR3/2（炭化物）
3　灰黄褐色シルト　10YR4/2
4　粉砕貝殻層

PA3堆積土
1　黒褐色シルト　10YR3/2（炭化物・土器細片）
2　黒褐色シルト　10YR3/2
3　暗褐色シルト　10YR3/4（炭化物、しまり強）
4　暗褐色土　10YR5/3（粘性あり）
5　粉砕貝殻層

PC1堆積土
1　灰黄褐色シルト　10YR4/2（暗褐色土との混土）
2　黒褐色粘質シルト　10YR3/1（炭化物少量）
3　暗褐色粘質シルト　10YR3/3
4　黒褐色粘質シルト　10YR3/2
5　黒褐色粘質シルト　10YR3/2
（炭化物少量、しまりなし）

PC2堆積土
1　黒褐色シルト　10YR3/2
（黄褐色砂粒・炭化物多量、しまり強、上面に石）
2　黒褐色シルト　10YR3/1（貝殻極多量）
3　黒褐色シルト　10YR3/1
4　黒褐色シルト　10YR3/1（貝殻少量）

PC3堆積土
1　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（炭化物微量）
2　黒褐色粘質シルト　2.5Y3/2（貝殻、混土貝層）
3　暗オリーブ褐色粘質シルト　2.5Y3/3
（LⅢa細粒多量）

１号柱穴列跡　ＳＡ 01【図 51】

本遺構は、西区西部のＢ２グリッドに位置する。６号土坑と重複し、本遺構が新しい。

本遺構は４基の柱穴で構成される南北３間の柱穴列跡で、方位はＮ６°Ｅである。柱間寸法は 1.42 ～ 1.51 ｍを測る。掘方の平面形は不整円形を呈し、規模は直径 25 ～ 31 ㎝を測る。遺物はＰ４ℓ１から陶器小片１点が出土したが、時期不明である。

本遺構は、南北３間の柵列跡である。１号建物跡と近接し、南北方向が概ね一致することから、これに関連するものと考える。本遺構の時期は、検出層位や１号建物跡との関連から中世後半～末頃と考える。

２号柱穴列跡　ＳＡ 02【図 51】

本遺構は、西区西部のＢ２グリッドに位置する。４基の柱穴による南北３間で、方位はＮ９°Ｅである。１号建物跡と重複するが新旧は不明である。１号建物と比べやや東に傾く。柱間寸法は 2.10 ～ 2.26 ｍを測る。掘方の平面形は不整円形ないし楕円形を呈する。規模は直径 40 ～ 45 ㎝を測る。遺物はＰ２・Ｐ３より土師器４点が出土している。本遺構の時期は、検出層位や周辺遺構との関連から中世後半～末頃と考える。

３号柱穴列跡　ＳＡ 03【図 51】

本遺構は、西区西部のＢ２グリッドに位置する。５基の柱穴による東西４間で、方位はＮ 91°Ｅである。柱間寸法は 1.92 ～ 2.11 ｍである。掘方の平面形は不整円形ないし隅丸方形を呈する。規模は直径 32 ～ 59 ㎝を測る。遺物はＰ１～５より土師器５点、須恵器１点が出土している。本遺構の時期は、検出層位や周辺遺構との関連から中世後半～末頃と考える。

第４節　土坑

土坑は 41 基を検出した。検出層位はＬⅢａ・ＬⅢｃ・ＬⅢｄ・ＬⅢｅである。本節ではこれらの土坑について個別に報告する。

１号土坑　ＳＫ 01【図 52、写真 47】

本遺構は、西区西端のＡ１・２グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。東半部は調査区外となり様相は不明であるが、平面形は不整な円形または楕円形となると思われる。規模は検出範囲内で長軸 2.2 ｍ、短軸 80 ㎝を測り、深さは 48 ㎝である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は中央に向かって窪む。遺構内堆積土は９層に分層される。いずれも炭化物を含む黒色系のシルトである。炭化物の混入状況及び堆積状況から人為的に埋め戻されたものと考えられる。なお、ℓ６、７、９

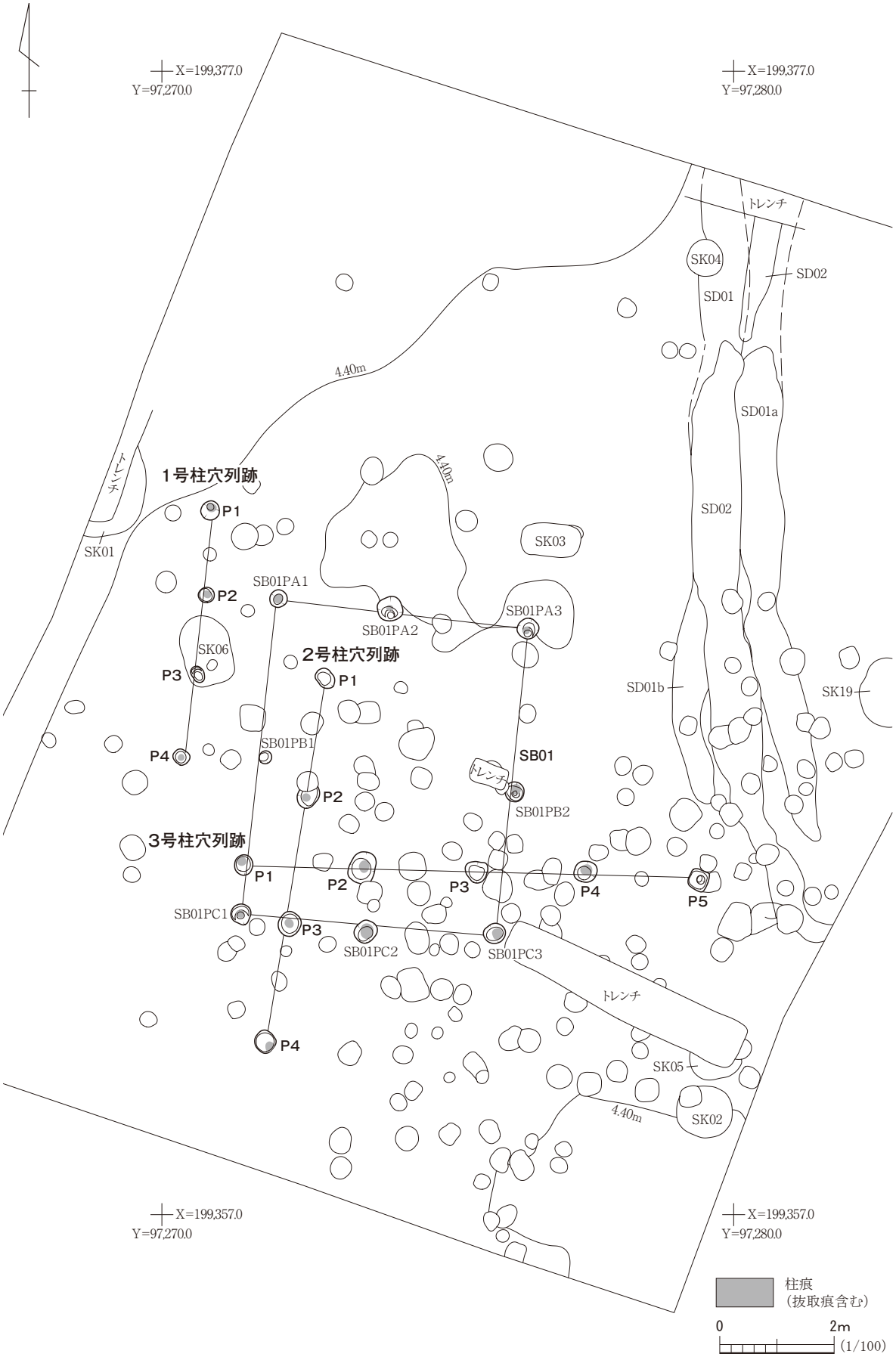


図51　１・２・３号柱穴列跡

と他の土層で別土坑の可能性もあるが、平面的には重複状況を確認することができなかった。

本遺構からは、黒色処理された杯１点を含む土師器３点が出土している。いずれも破片で、図示できる資料はない。本遺構の時期は検出層位から中世以降と推定される。

２号土坑　ＳＫ 02【図 52、写真 47】

本遺構は、西区南東部のＢ３グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。小穴Ｐ 11 と重複しており、本遺構が古い。平面形は円形である。規模は検出面で直径 96 ㎝、底面で直径 88 ㎝を測り、深さは 18 ㎝である。壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦である。遺構内堆積土は３層に分層され、いずれも黒褐色系である。ℓ１は炭化物、貝殻、凝灰岩細粒を多く含み、焼土細粒をわずかに含む。ℓ２は白色粘質土を多く含み、炭化物を少量含む。ℓ３は炭化物やＬⅢａ粒を少量含む。いずれも多くの混入物が含まれており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

本遺構からは、破片のため図示できないが土師器杯１点がℓ３で出土している。杯は底面に回転糸切痕が確認できる。本遺構の時期は検出層位から中世以降と推定される。

３号土坑　ＳＫ 03【図 52、写真 47】

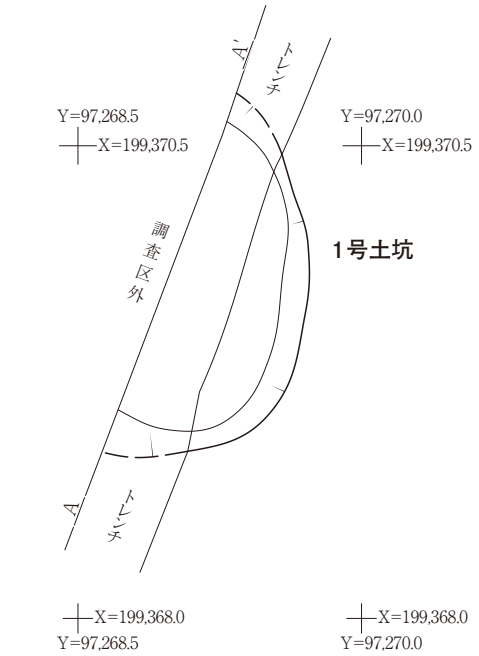
本遺構は、西区中央のＢ２グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。平面形は隅丸長方形である。規模は検出面で長軸 1.04 ｍ、短軸 58 ㎝、底面で長軸 94 ㎝、短軸 46 ㎝を測り、深さは 32 ㎝である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。遺構内堆積土は２層に分層され、ℓ１は暗褐色シルト、ℓ２は黒褐色粘土が堆積している。いずれもレンズ状の堆積を示すことから自然堆積と考える。

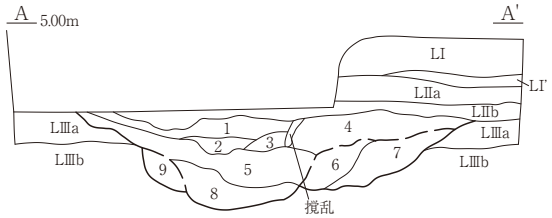
本遺構からは、破片数にして土師器９点、金属製品２点が出土している。出土状況はℓ１から杯２点、甕１点、鉄製品１点が出土した。鉄製品については鉄釘とみられるが、小片である。ℓ２からは甕１点、杯５点、鉄製品１点が出土している。甕は胴部小片とみられ、内面にヘラケズリが施されている。杯はいずれも細片であるが、内面黒色処理を１点含む。鉄製品は断面方形の鉄釘とみられ、遺存長は約４㎝である。本遺構の時期は検出層位から中世以降と推定される。

４号土坑　ＳＫ 04【図 53、写真 47】

本遺構は、西区北部のＢ１グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。１号溝跡と重複し、本遺構が新しい。平面形は不整円形である。規模は検出面で直径 64 ㎝、底面で直径 36 ㎝を測り、深さは 20 ㎝である。壁は外傾し、底面は東側に向かってやや傾斜する。南壁の一部に中段が形成される。遺構内堆積土は２層に分層され、ℓ１・２は黒褐色シルトであり、ℓ２はℓ１よりしまりが弱い。堆積状況から人為的な埋め戻しの可能性がある。

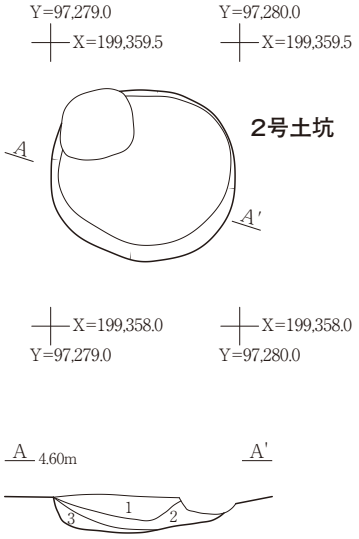
本遺構からは、破片数にして土師器２点、鉄器片１点が出土している。出土はいずれも下層のℓ２からである。いずれも図示できる資料はないが内面にナデ調整が確認でき、甕１点を含む。本遺





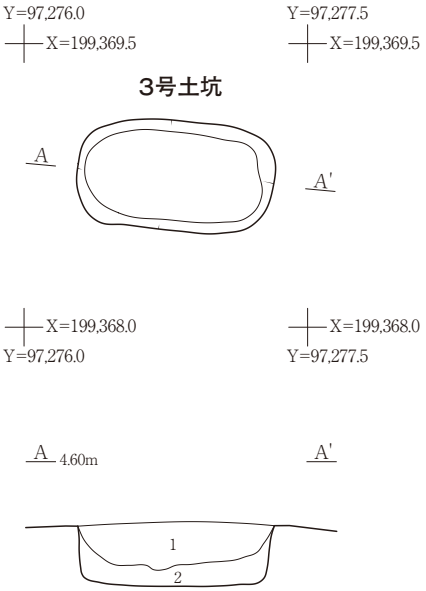
1号土坑堆積土

1　黒褐色粘質シルト　10YR2/2（炭化物・凝灰岩粒やや多量）
2　黒褐色粘質シルト　10YR3/1（凝灰岩粒1より多）
3　暗褐色シルト　10YR3/3（斑状に2含む）
4　暗褐色砂質シルト　10YR3/3（炭化物微量）
5　黒褐色粘質シルト　10YR3/1（斑状に暗褐色土含む、炭化物微量）
6　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（炭化物微量）
7　にぶい黄褐色シルト　10YR4/3（炭化物微量）
8　黒褐色粘質シルト　10YR3/1（斑状に9含む）
9　灰黄褐色粘質シルト　10YR4/2（部分的にLIIIb、炭化物）



2号土坑堆積土

1　黒褐色シルト　10YR3/2
（炭化物・貝殻・凝灰岩細粒やや多量、焼土細粒微量）
2　黒褐色粘質シルト　10YR3/2
（白色粘質土やや多量、炭化物少量、粘性ややあり）
3　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（炭化物・LIIIa細粒少量）



3号土坑堆積土

1　暗褐色シルト　10YR3/4（炭化物少量）
2　黒褐色粘土　10YR3/1（炭化物微量）

0　1m
(1/40)

図52　１～３号土坑

構の時期は検出層位及び１号溝跡との重複から中世以降と推定される。

５号土坑　ＳＫ 05【図 53・62、写真 81】

本遺構は、西区南東部のＢ３・Ｃ３グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。北東側で小穴Ｐ 21 と重複し、本遺構が古い。なお、本遺構の北半分は試掘調査時のトレンチによって壊されている。遺存部から平面形は不整円形であったとみられる。現存部分の規模は検出面で直径 90 ㎝、底面で直径 76 ㎝を測り、深さは 12 ㎝である。壁は外傾し、底面は中央に向かって緩く下降している。遺構内堆積土は２層に分層され、いずれも黒褐色系である。ℓ１は貝殻、酸化した凝灰岩細粒を少量含み、ℓ２は焼土細粒、炭化物を少量含む。混入物の状況から人為的に埋め戻されたものと考えられる。

本遺構からは、破片数にして土師器８点、管状土錘２点が出土している。出土はいずれも上層のℓ１からである。図 62－１はロクロ成形の高台を持つ杯である。外面は体部下半が回転ヘラケズリ、底面は高台を張り付けた後に、ナデ調整されている。内面は丁寧なヘラミガキ後、黒色処理されている。２は管状土錘である。両端が細く整形されている。

本遺構の時期は検出層位から中世以降と推定される。

６号土坑　ＳＫ 06【図 53、写真 48】

本遺構は、西区西部のＢ２グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。小穴と重複し、本遺構が古い。

平面形は北辺が突出する隅丸長方形を呈し、掘方内に最大厚８㎝の粘質シルト（ℓ３）を貼っている。検出面における規模は掘方で長軸 1.36 ｍ、短軸 1.04 ｍ、底面で長軸 1.02 ｍ、短軸 76 ㎝を測り、深さは 16 ㎝である。シルト貼り内では、検出面において長軸 1.22 ｍ、短軸 86 ㎝となる。壁は外傾し、底面は平坦である。遺構内堆積土は２層に分層され、ℓ１～２はいずれも暗褐色シルトであり、堆積状況から自然堆積の可能性が考えられる。

本遺構からは、破片数にして土師器６点（杯４点、甕２点）が出土している。出土はいずれもℓ１からで、小片である。堆積状況を考えると流れ込みであった可能性が高い。杯については内面黒色処理した２点を含む。本遺構の時期は検出層位から中世以降と推定される。掘方にシルトを貼る点が特徴である。

７号土坑　ＳＫ 07【図 53、写真 48】

本遺構は、西区北西部のＢ１グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。８号土坑と重複し、本遺構が新しい。平面形は楕円形である。規模は検出面で長径 60 ㎝、短径 48 ㎝、底面で長径 32 ㎝、短径 28 ㎝を測り、深さは 12 ㎝である。壁は外傾し、底面は平坦である。遺構内堆積土は２層に分層される。ℓ１は焼土粒、炭化物、黄褐色土粒を多量に含み、ℓ２はＬⅢｃを主体に黒色土、炭化物を多量に含む。混入物の状況から、いずれも人為的な埋め戻しの可能性がある。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出層位から９～10 世紀以降と考えられる。

８号土坑　ＳＫ 08【図 53、写真 48】

本遺構は、西区北西部のＢ１グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。北側は土層観察用のトレンチによって壊されている。７号土坑、小穴と重複し、本遺構が古い。

平面形は隅丸長方形を呈していたとみられる。現存部分の規模は、検出面で長軸 92 ㎝、短軸 68 ㎝、底面で長軸 80 ㎝、短軸 44 ㎝を測り、深さは 10 ㎝である。壁は外傾し、底面は平坦である。遺構内堆積土は１層のみだが、ＬⅢｃ粒、炭化物を多量に含むため、人的な影響の可能性がある。本遺構からは、管状土錘１点が出土しているが、破片である。本遺構の時期は、検出層位から９～10 世紀以降と考えられる。

９号土坑　ＳＫ 09【図 54・62、写真 48・81】

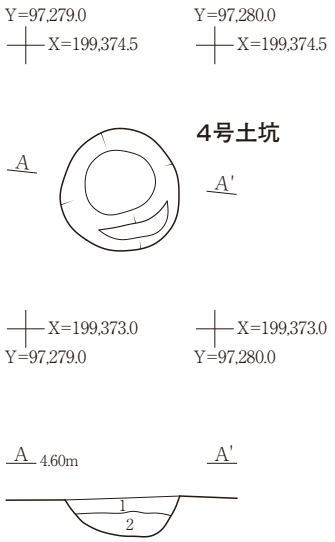
本遺構は、西区南西部のＢ２グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。本遺構の南東部分の一部は土層観察用のトレンチによって壊されている。５号住居跡と重複し、本遺構が新しい。

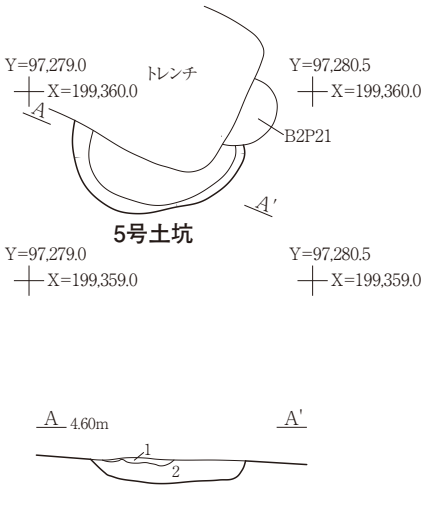
平面形は不整円形である。規模は、検出面で直径 116 ㎝、底面で直径 92 ㎝を測り、深さは 32 ㎝である。壁は外傾し、底面はほぼ平坦であるが、南西側の一部は少し落ち込む。遺構内堆積土は６層に分層され、ℓ１～５はレンズ状の堆積を示す一方、土中に炭化物、焼土細粒、凝灰岩塊、ＬⅢａ細粒、ＬⅢｃ粒が含まれる。ℓ６は底面の一部がピット状に窪んでおり、掘方を人為的に埋めた可能性がある。

本遺構からは、破片数にして土師器 35 点、土錘４点が出土している。出土状況はℓ１、２、４に集中する。図 62－３はロクロ成形の高台を持つ杯である。底部外面には高台を張り付けた後に、接合部付近を強く回転ヘラケズリした痕跡が確認できる。底部は糸切後にナデ調整されている。内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。４の内黒の杯は劣化が激しく、ヘラミガキはされていたと思われるが加工痕跡を追えない。底面には回転糸切痕が明確に残り、その後は未調整である。５・６は管状土錘である。５はℓ１・２から、６はℓ４からの出土である。表面はヘラ状工具によるナデ及びユビオサエで調整されている。本遺構の時期は出土遺物と重複する５号住居跡の年代から 10 世紀前半の遺構と考えられる。

10 号土坑　ＳＫ 10【図 54、写真 48】

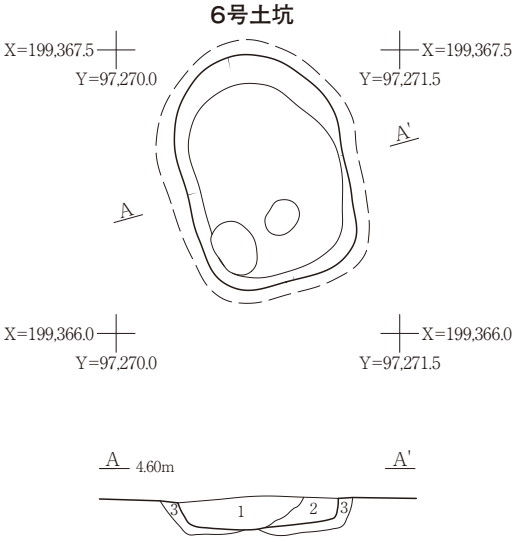
本遺構は、西区南西部のＢ２グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。２号住居跡と重複し、本遺構が古い。平面形は不整円形である。規模は、検出面で直径 100 ㎝、底面で直径 88 ㎝を測り、深さは 20 ㎝である。壁は外傾するが、南側の下半分付近には段が付くことから、一度掘り直されている可能性がある。底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は５層に分層される。ℓ１の灰褐色粘質シルトは２号住居跡の貼床構築土である。ℓ２は炭化物・焼土粒を多く含み、ℓ３の焼土層の影響

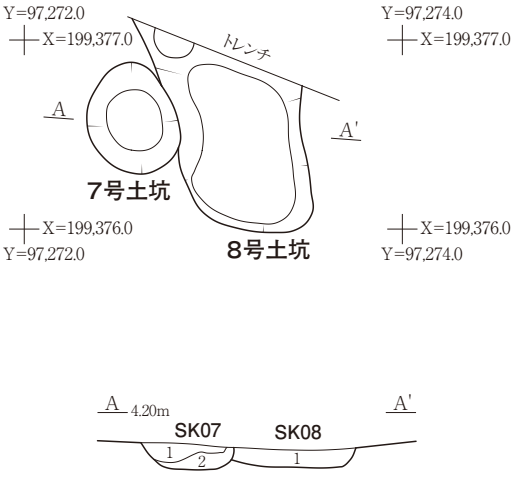




4号土坑堆積土
1　黒褐色シルト　10YR3/2（炭化物少量）
2　黒褐色シルト　10YR3/1（炭化物微量、しまり弱）

5号土坑堆積土
1　黒褐色粘質シルト　10YR3/1（貝殻・酸化した凝灰岩細粒少量）
2　黒褐色粘質シルト　10YR3/1（焼土細粒・炭化物少量）





6号土坑堆積土
1　暗褐色シルト　10YR3/4（LⅢa粒多量、炭化物少量）
2　暗褐色シルト　10YR3/4（炭化物微量）
3　にぶい黄褐色粘質シルト　10YR4/3
（LⅢa主体に暗褐色土やや多量、しまり強）

7号土坑堆積土
1　黒色粘質シルト　2.5Y2/1（焼土粒・炭化物・黄褐色土粒多量、しまり弱）
2　にぶい黄褐色粘質シルト　10YR4/3（LⅢc主体に黒色土・炭化物多量、しまり強）

8号土坑堆積土
1　黒色粘質シルト　N2/1（炭化物極多量、LⅢc粒多量、しまりなし）

図53　４～８号土坑

を受けた堆積である。ℓ４は壁付近に堆積しており、自然堆積と考えられる。ℓ５は炭化物層である。

本遺構からは、破片数にして土師器８点が出土している。出土は全て２号住居跡の構築に関連するとみられるℓ１・２からである。器種は甕・杯が存在し、総じて細片で図示できる資料はない。本遺構の時期は２号住居跡との関連から10世紀前半頃までには埋め戻されたものとみられる。本遺構は堆積土中に炭化物層や焼土層を確認できることから鍛冶炉等の可能性も考えられるが、鍛造剥片等の出土がなく断定できない。

11号土坑　ＳＫ11【図54、写真48】

本遺構は、西区北西部のＢ１グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。４号住居跡と重複し、本遺構が古い。また、６号住居跡と重複し、本遺構が新しい。平面形は不整楕円形を呈していたとみられる。現存部分の規模は検出面で長軸1.52ｍ、短軸72㎝、底面で長径140㎝、短径63㎝、深さは18㎝を測る。壁は垂直気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は単層であり、炭化物や粘土を含む。

本遺構からは、破片数にして土師器16点が出土している。器種は甕が８点、壺が３点、杯が５点であり、杯については内黒２点を含む。いずれも小片で図示できる資料はない。４号住居跡との関連から10世紀前半までには廃絶したものと考えられる。

12号土坑　ＳＫ12【図54、写真48】

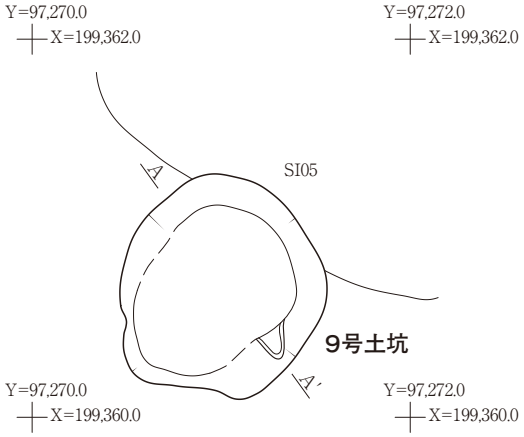
本遺構は、西区北西部のＢ１グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。４号住居跡と重複し、本遺構が古い。平面形は円形を呈していたと推定される。現存部分の規模は検出面で直径76㎝、底面で直径44㎝、深さは28㎝を測る。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は３層に分層され、いずれも堆積状況から人為的な埋め戻しの可能性がある。

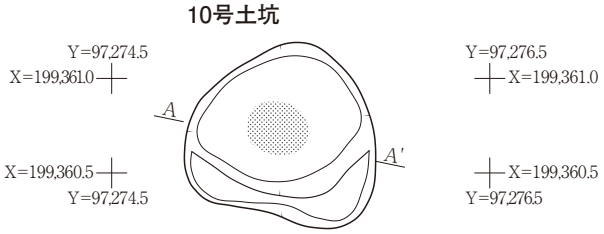
本遺構からは、ℓ２より土師器１点が出土している。内黒の杯の底部付近の破片であり、底面には回転糸切痕が残っている。４号住居跡との関連から10世紀前半までには廃絶したものと考えられる。

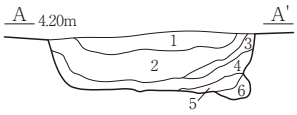
13号土坑　ＳＫ13【図55・62、写真48・81】

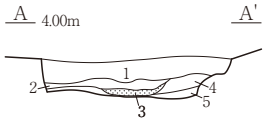
本遺構は、西区南東部のＢ３・Ｃ３グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。５・７号住居跡と重複し、本遺構が新しい。平面形は不整楕円形である。規模は検出面で長軸1.36ｍ、短軸64㎝、底面で長軸1.32ｍ、短軸52㎝を測り、深さは８㎝である。壁は緩やかに外傾するが、南壁のみ垂直気味に立ち上がる。底面は南側に向かって傾斜する。遺構内堆積土は３層に分層され、ℓ１は暗褐色粘質シルトを主体に鉄滓、炭化物を多く含む。ℓ２は黄色粘土と白色粘土の混土である。ℓ２は底面に堆積し鉄滓を多く含む褐色粘質シルトである。ℓ１・２は製鉄に関わる何らかの行為に伴う堆積、ℓ３は土坑構築時の堆積と考えられる。

本遺構からは、破片数にして土師器11点出土している。出土状況はℓ１が９点、ℓ２上面が１点、







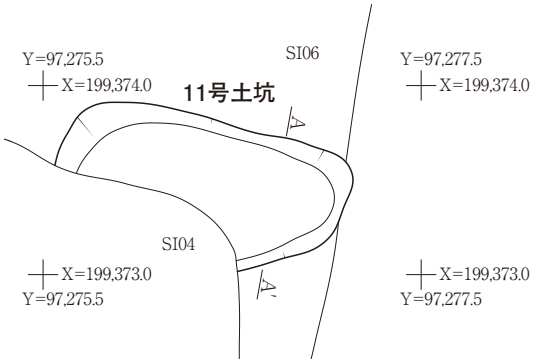


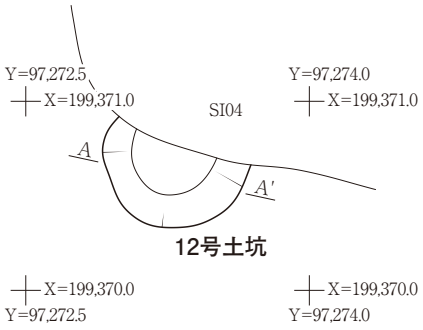
9号土坑堆積土

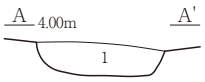
1　暗褐色シルト　10YR3/3（炭化物・焼土細粒少量）
2　黒褐色粘質シルト　10YR3/1
　（LⅢc粒多量、炭化物・焼土細粒少量）
3　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（凝灰岩塊多量、LⅢa細粒少量）
4　黒褐色粘質シルト　10YR3/1
　（下部に炭化物多量、焼土細粒少量、しまり弱）
5　黒褐色粘質シルト　10YR3/2
6　黒褐色粘質シルト　10YR3/1（しまりあり）

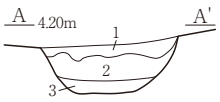
10号土坑堆積土

1　褐灰色粘質シルト　10YR4/1
　（LⅢc主体、焼土細粒・炭化物やや多量）
2　褐灰色粘質シルト　10YR4/1
　（炭化物・焼土粒・焼土細粒多量）
3　暗赤褐色粘質シルト　5YR3/4（焼土層）
4　にぶい黄褐色粘質シルト　10YR4/3（ほぼ純粋なLⅢc）
5　黒色粘質シルト　10YR1.7/1（炭化物主体）









11号土坑堆積土

1　暗褐色砂質シルト　10YR3/4（炭化物・粘土）

12号土坑堆積土

1　黒褐色粘質シルト　10YR3/2
2　黒褐色粘質シルト　2.5Y3/1
3　黒褐色粘質シルト　10YR3/1（LⅢc粒多量）

図54　９～12号土坑

床面で１点である。加えて鉄滓 118 点（3,535.3 ｇ）がℓ２を中心に、ℓ１～底面で出土している。鉄滓は再結合滓が主体を占め、椀形滓が一部存在する。

図 62－７は非ロクロ成形の甕である。胎土に白色の細石が混入しており、外面には縦方向のヘラナデ、内面はヘラナデ及び指頭圧痕が観察できる。底面には木葉痕が残り、一部に鉄滓が付着している。

本遺構内から多量に出土する鉄滓が再結合滓であることから、別箇所で排出した鉄滓が本遺構に廃棄されたものと考えられる。出土遺物の特徴と重複する住居跡との関連から 10 世紀前半以降の構築と考えられる。

14 号土坑　ＳＫ 14【図 55、写真 48】

本遺構は、西区北西部のＢ１グリッドに位置する。４号住居跡と重複し、本遺構が新しい。平面形は不整隅丸長方形である。規模は検出面で長軸 90 ㎝、短軸 75 ㎝、底面で長軸 80 ㎝、短軸 60 ㎝を測り、深さは 12 ㎝である。壁は緩やかに外傾し、底面は平坦である。遺構内堆積土は２層に分層され、ℓ１はＬⅢｃ粒と炭化物の混土であり、人為的に埋め戻されたものと考えられる。ℓ２は炭化物堆積による土層である。土師器１点が出土している。出土状況はℓ２で、甕とみられる破片であるが、小片で詳細は不明である。

本遺構は４号住居跡床面を掘り込んでおり、10 世紀前半以降の構築と考えられる。また、土坑底面に炭化物堆積を確認することができるため、燃焼を伴う使用が考えられる。

15 号土坑　ＳＫ 15【図 55、写真 49】

本遺構は、東区東部のＥ３グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。小穴Ｐ２、16 号土坑と重複し、本遺構が新しい。平面形は不整円形である。規模は検出面で直径 1.88 ｍ、底面で直径 1.60 ｍを測り、深さは 30 ㎝である。壁は外傾し、底面は中央付近で少し窪む。遺構内堆積土は４層に分層され、ℓ１・２は炭化物や焼土を含み、人為的に埋め戻された可能性がある。ℓ３・４はレンズ状に堆積し、自然堆積とみられる。本遺構からは、破片数にして土師器３点が出土している。いずれもℓ３からの出土で、甕が２点、内面黒色の杯が１点であるが、細片のため図示できる資料はない。なお、ℓ３から鉄滓１点（202.1 ｇ）も出土している。本遺構の時期は検出層位から中世以降に所属するものと考えられる。

16 号土坑　ＳＫ 16【図 55、写真 49】

本遺構は、東区東部のＥ３グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。15 号土坑と重複し、本遺構が古い。遺存部から平面形は楕円形を呈していたとみられる。現存部分の規模は、検出面で直径 84 ㎝、短径 36 ㎝、底面で長径 68 ㎝、短径 28 ㎝、深さは 18 ㎝を測る。壁は外傾し、底面は南西側が少し低くなる。遺構内堆積土は単層である。遺物は出土していない。本遺構の時期は検出層位

から中世以降に所属するものと考えられる。

17 号土坑　ＳＫ 17【図 55、写真 49】

本遺構は、東区東部のＥ３グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。平面形は不整円形である。規模は検出面で直径 1.16 ｍ、底面で直径 84 ㎝、深さは 20 ㎝を測る。壁は緩やかに外傾し、断面形は皿形を呈する。遺構内堆積土は２層に分層され、いずれも堆積状況から自然堆積の可能性がある。遺物は出土していない。本遺構の時期は検出層位から中世以降に所属するものと考えられる。

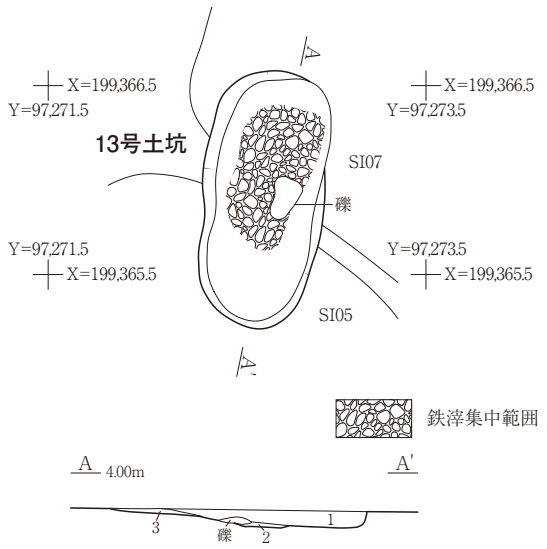
18 号土坑　ＳＫ 18【図 56、写真 49】

本遺構は、東区南部のＤ３グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。平面形は不整円形である。規模は検出面で直径 1.08 ｍ、検出面から深さ約 60 ㎝の部分で直径 68 ㎝を測る。検出面から 60 ㎝程度掘り下げたところ軟弱な土層となり安全面を考慮して掘り下げなかったため、底面は未確認である。遺構内堆積土は４層に分層される。ℓ１は黒褐色シルトでＬⅢａ細粒や炭化物、焼土細粒を含む。ℓ２は黒褐色粘質シルトでℓ１同様にＬⅢａ細粒や炭化物、焼土細粒を含む。ℓ３は灰黄褐色粘質シルトでＬⅢａ塊やＬⅢａ粒を多量に含む。ℓ４は褐色粘土でＬⅢａ塊や暗褐色土を含む。ℓ３下層からは礫とともに板材片、焼土を検出している。ℓ１～３はＬⅢａを含有する土で礫等と共に人為的に埋め戻されたものと考えられる。ℓ４は木枠などを据えるための掘方埋土と推定される。

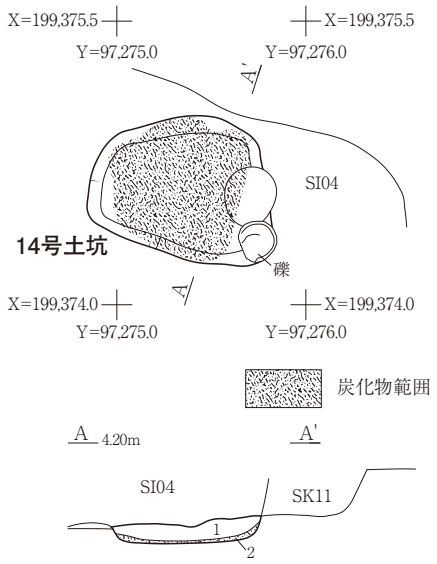
本遺構からは、破片数にして土師器 10 点等が出土している。出土は全てℓ３からである。器種は甕が６点、杯が３点で、杯のうち１点が内面黒色処理されている。いずれも砕片で図示できるものはない。なお、ℓ３から鉄滓 13 点（632.1 ｇ）も出土している。本遺構の時期は検出層位から中世以降に所属するものと考えられる。堆積土及び板材片等の状況から、木枠を伴った井戸であった可能性が考えられる。

19 号土坑　ＳＫ 19【図 56、写真 49】

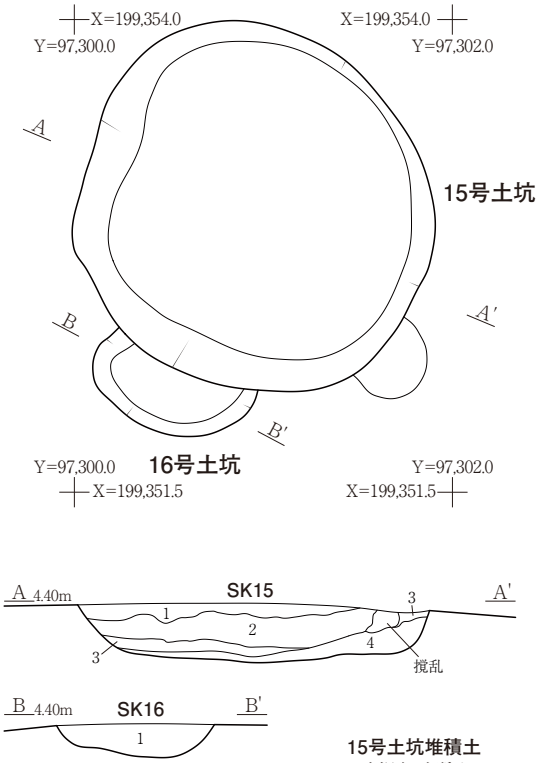
本遺構は、西区北東部のＣ２グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。小穴と重複し、本遺構が古い。平面形は不整円形である。規模は検出面で直径 1.2 ｍ、底面で直径 82 ㎝を測り、深さは 44 ㎝である。壁は外傾し、底面は中央が少し窪む。遺構内堆積土は４層に分層され、ℓ１～３は黒色系を示す。ℓ１は炭化物や焼土細粒を含み、ℓ２はＬⅢａ細粒や炭化物、焼土細粒を含む。ℓ３はグライ化した炭化物層である。ℓ４はＬⅢａ主体となる。ℓ１～３はレンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。ℓ４はＬⅢａを貼り付けた可能性が想定される。本遺構からは、土師器片１点のみが出土している。出土層位はℓ２で、甕の破片であるが、細片であるため詳細は不明である。本遺構の時期は検出層位から中世以降に所属するものと考えられる。

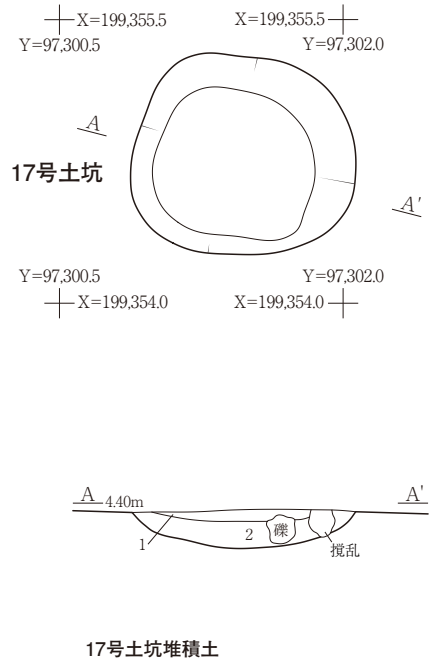


13号土坑堆積土
1　暗褐色粘質シルト　10YR3/3（鉄滓・炭化物やや多量）
2　褐色粘質シルト　10YR4/4（鉄滓多量）
3　明黄褐色粘質シルト　10YR6/8（黄色粘土と白色粘土の混土）



14号土坑堆積土
1　黒褐色粘質シルト　10YR3/1（LⅢc粒と炭化物の混土）
2　黒色粘質シルト　N1.5/0（ほぼ純粋な炭化物層）





15号土坑堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/4（焼土・炭化物）
2　黒褐色砂質シルト　10YR2/2（焼土・炭化物）
3　黒褐色砂質シルト　10YR2/3
4　黒褐色砂質シルト　10YR2/2

16号土坑堆積土
1　黒褐色砂質シルト　10YR3/2

17号土坑堆積土
1　暗褐色砂質シルト　10YR3/4
2　黒褐色砂質シルト　10YR2/3

0　1m
(1/40)

図55　13～17号土坑

20 号土坑　ＳＫ 20【図 56、写真 49】

本遺構は、東区北東部のＣ２グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。３号溝跡と重複し、本遺構が新しい。本遺構の北東部が調査区外にあるため全容は不明だが、平面形は楕円形を呈していたとみられる。現存部分の規模は検出面で長径 1.0 ｍ、短径 88 ㎝、底面で長径 92 ㎝、短径 64 ㎝、深さは 16 ㎝を測る。壁は外傾し、底面は南東側がやや低くなる。遺構内堆積土は単層である。獣類の四肢骨破片、種部位不明骨破片が出土した。本遺構の時期は検出層位から中世以降に所属するものと考えられる。

21 号土坑　ＳＫ 21【図 56、写真 49】

本遺構は、東区北部のＤ２グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。平面形は楕円形である。規模は検出面で長径 76 ㎝、短径 64 ㎝、底面で長径 64 ㎝、短径 52 ㎝、深さは 32 ㎝を測る。壁は垂直に立ち上がり、底面はわずかに起伏がある。遺構内堆積土は単層である。本遺構からは、破片数にして土師器３点、鉄滓１点（6.2ｇ）が出土している。土師器は摩滅した細片である。本遺構の時期は検出層位から中世以降に所属するものと考えられる。

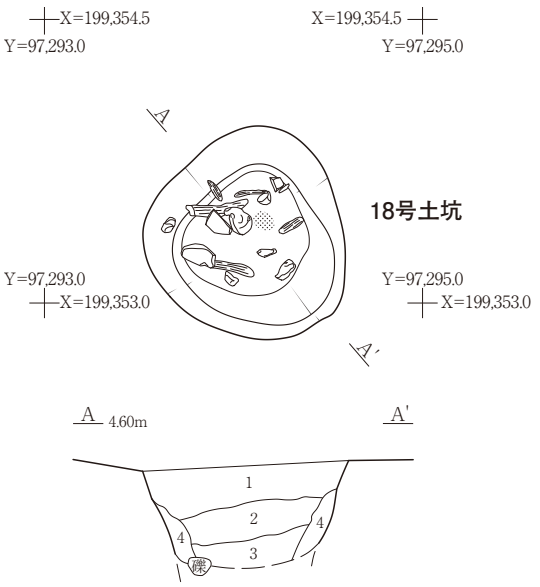
22 号土坑　ＳＫ 22【図 56、写真 49】

本遺構は、東区北東部のＥ２グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。平面形は不整円形である。規模は検出面で直径 60 ㎝、底面で直径 48 ㎝、深さは 16 ㎝を測る。壁は外傾し、底面は平坦である。遺構内堆積土は単層である。本遺構からは摩滅した土師器片１点のみが出土した。器種などの詳細は不明である。本遺構の時期は検出層位から中世以降に所属するものと考えられる。

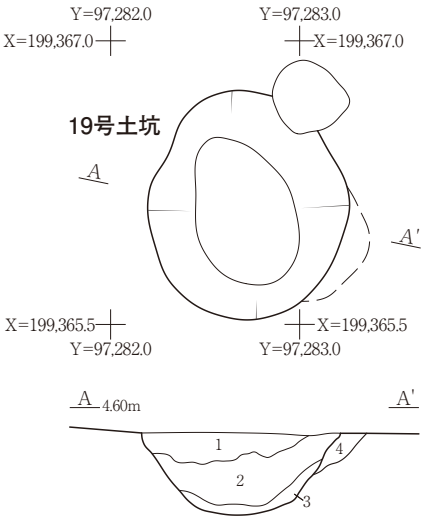
23 号土坑　ＳＫ 23【図 57・62、写真 50・81】

本遺構は、東区北東部のＣ１・２グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。平面形は円形である。規模は検出面で直径 1.4 ｍ、底面で直径 1.0 ｍ、深さは 54 ㎝を測る。壁は底面から垂直に立ち上がったのち、ℓ２上面で中段を設け緩やかに外傾する。底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は７層に分層され、貝殻が混入する点が特徴である。ℓ１はにぶい黄褐色シルトで、強く締まり、土坑廃棄後に人為的に埋め戻された可能性がある。ℓ２は褐色シルト、ℓ３は黒褐色シルトで、いずれも炭化物を含む。ℓ４の灰黄褐色シルトより下層には炭化物は含まれない。ℓ５は貝層状に多くの貝を含む黒褐色シルトであり、人為的な混入である。ℓ６・７は褐色系のシルトであり、強弱のしまりのある土壌を掘方に貼り付けたものと考えられる。

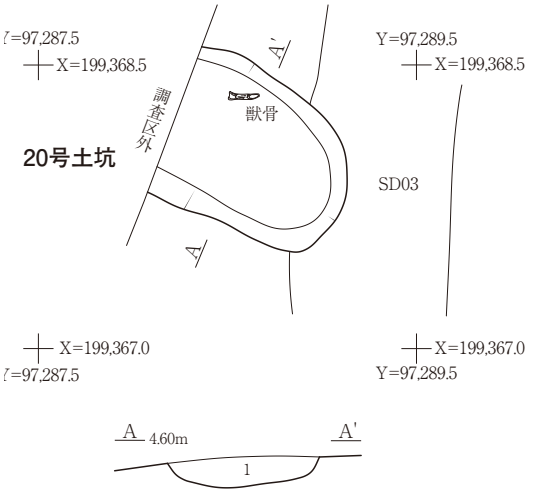
本遺構からは破片数にして土師器 14 点、須恵器１点、銅銭が１点が出土している。ℓ５に多量に含まれる貝はアサリが主体である。土器片はℓ７からの出土が多くいずれも細片であり、土坑構築時に混入したものと考えられる。図 62－８は明銭で永楽通宝（初鋳 1411 年）である。



18号土坑堆積土
1　黒褐色シルト　10YR3/2
（LⅢa細粒やや多量、炭化物・焼土細粒少量）
2　黒褐色粘質シルト　10YR2/2
（炭化物やや多量、LⅢa細粒・焼土細粒少量、1より暗）
3　灰黄褐色粘質シルト　10YR4/2（LⅢa塊・LⅢa粒多量）
4　褐色粘土　10YR4/4（LⅢa塊主体、暗褐色土多量）



19号土坑堆積土
1　黒褐色砂質シルト　10YR3/2（炭化物・焼土細粒少量）
2　黒褐色粘質シルト　10YR3/1（LⅢa 粒多量、焼土細粒・炭化物少量）
3　黒色粘質シルト　N1.5/0（グライ化した炭化物層、上部ではグライ化弱い）
4　暗褐色砂質シルト　10YR3/3（LⅢa細粒主体、黒褐色土多量）



20号土坑堆積土
1　黒褐色シルト　10YR2/3
（暗褐色土塊・粒・炭化物少量、焼土粒微量、しまりややあり）
21 号土坑堆積土
1　黒褐色粘質シルト　10YR2/3
（暗褐色土塊・粒少量、炭化物微量、しまりあり）
22 号土坑堆積土
1　黒褐色シルト　10YR2/2（暗褐色土塊少量、炭化物微量、しまりあり）

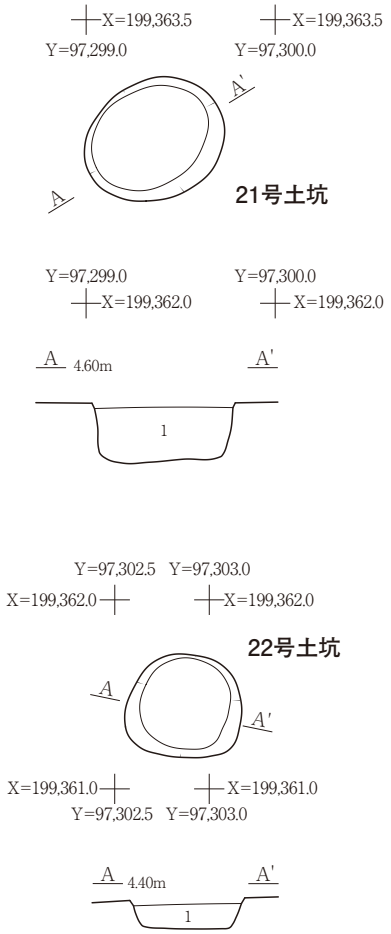


図56　18～22号土坑

ℓ５で出土した貝殻の放射性炭素年代測定では、１σ歴年代範囲において 1333－1441cal ＡＤであり、14 世紀半ばから 15 世紀半ばの年代範囲を示す。検出層位からの検討と併せ、同年代に土坑が機能していたものと考えられる。

24 号土坑　ＳＫ 24【図 57、写真 50】

本遺構は、東区北東部のＥ２グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。平面形は不整円形である。規模は検出面で直径 1.04 m、底面で直径 80 ㎝、深さは 14 ㎝を測る。壁は緩やかに傾斜し、断面形は皿形を呈する。遺構内堆積土は単層である。検出面近くに貝殻が含まれる。また羽口１点が出土している。外面はほぼ全面的に剥落しているが、内面の通風孔の遺存は良好である。胎土にスサを大量に混入していた痕跡が認められる。本遺構の時期は検出層位から中世以降に所属するものと考えられる。

25 号土坑　ＳＫ 25【図 57、写真 50】

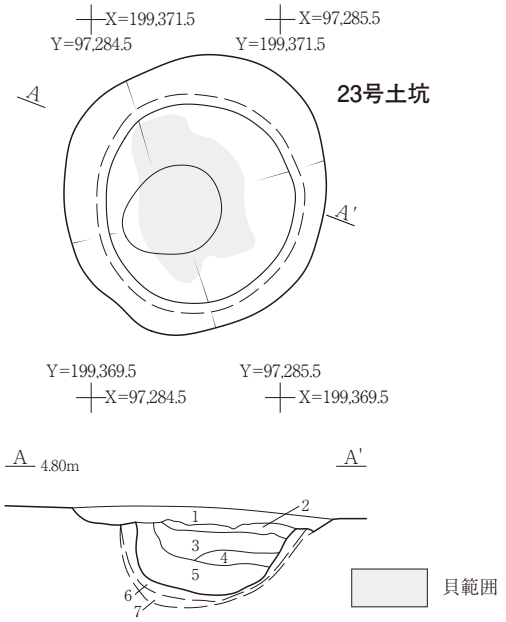
本遺構は、東区北東部のＥ３グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。平面形は円形である。規模は検出面で直径 64 ㎝、底面で直径 48 ㎝、深さは８㎝を測る。壁は緩やかに傾斜し、断面形は皿形を呈する。遺構内堆積土は単層であり、上面に貝殻を少量含む。遺物の出土はない。本遺構の時期は検出層位から中世以降に所属するものと考えられる。

26 号土坑　ＳＫ 26【図 57、写真 50】

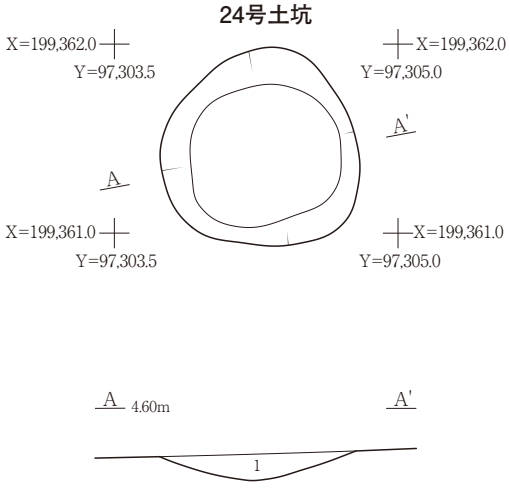
本遺構は、東区北東部のＥ３グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。平面形は不整楕円形である。規模は検出面で長径 1.02 m、短径 84 ㎝、底面で長径 64.4 ㎝、短径 59.6 ㎝、深さは 28 ㎝を測る。壁は外傾し、底面は西に向かって少し低くなる。遺構内堆積土は４層に分層される。ℓ１は黒褐色土粒を含む暗褐色シルト、ℓ２は暗褐色土粒を含む黒褐色シルト、ℓ３は貝殻を多量に含む黒褐色シルトである。ℓ３の貝殻が廃棄された後、ℓ１、２により人為的に埋め戻されたものと考えられる。ℓ４は堆積状況から自然堆積とみられる。本遺構からは破片数にして土師器片２点が出土している。出土層位はいずれもℓ１である。本遺構の時期は検出層位から中世以降に所属するものと考えられる。

27 号土坑　ＳＫ 27【図 58、写真 50】

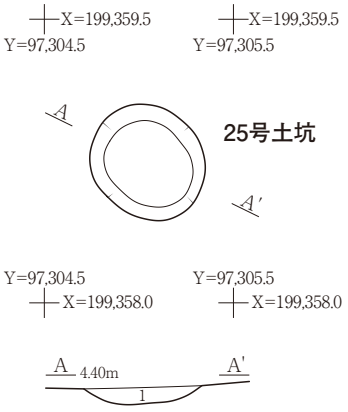
本遺構は、東区北東部のＥ３グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。小穴と重複し、本遺構が古い。平面形は楕円形である。規模は検出面で長径 84 ㎝、短径 72 ㎝、底面で長径 64 ㎝、短径 58 ㎝、深さは 20 ㎝を測る。北壁付近は垂直気味に立ち上がり、南・東・西壁は緩やかに外傾する。底面は中央に向かって椀形を呈する。遺構内堆積土は単層である。遺物の出土はない。本遺構の時期は検出層位から中世以降に所属するものと考えられる。



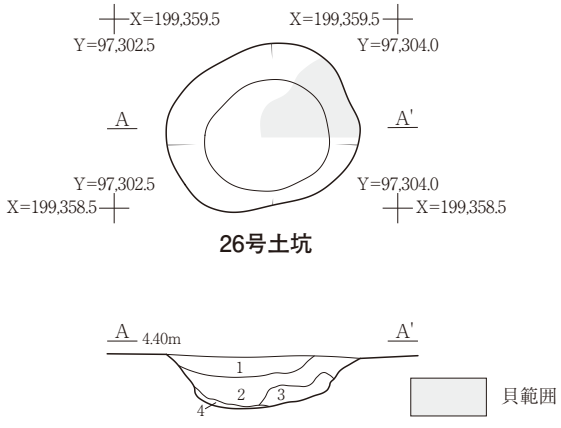
23号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色シルト　10YR4/3（炭化物少量、しまり強）
2　褐色シルト　10YR4/4（炭化物少量）
3　黒褐色シルト　10YR3/2（炭化物やや多量）
4　灰黄褐色シルト　10YR4/2（しまり弱）
5　黒褐色シルト　10YR3/1（混土貝層）
6　黒褐色シルト　10YR3/1（しまり弱）
7　褐色シルト　10YR4/4（しまり強）



24号土坑堆積土
1　黒褐色シルト　10YR2/2（暗褐色土粒・炭化物微量、しまりあり）



25号土坑堆積土
1　黒褐色シルト　10YR2/2（上部に貝殻少量）



26号土坑堆積土
1　暗褐色シルト　10YR3/4（黒褐色土粒少量）
2　黒褐色シルト　10YR2/2（暗褐色土粒少量）
3　黒褐色シルト　10YR2/2（貝殻多量）
4　黒色シルト　2.5Y2/1（ややグライ化）

図57　23～26号土坑

28 号土坑　ＳＫ 28【図 58、写真 50】

本遺構は、東区南東部のＥ３・４グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。平面形は不整楕円形である。規模は検出面で長径 1.32 ｍ、短径 90 ㎝、底面で長径 1.16 ｍ、短径 60 ㎝を測り、深さは 40 ㎝である。壁は南東部で緩やかに外傾し、それ以外はほぼ垂直に立ち上がる。底面は南側で一部窪む。遺構内堆積土は６層に分層される。ℓ１～３はオリーブ褐色を呈する粘質シルトであり、いずれの層にも貝殻が多量に含まれる。ℓ４は黄灰色を呈し、ℓ１～３と同様に貝殻が含まれる。ℓ５は暗灰黄色砂質シルト、ℓ６は黄褐色砂質シルトであり、いずれも北壁付近に堆積している。ℓ１～６は全て人為的な埋め戻し土とみられ、貝殻は本遺構を埋めた際に混入したと推測される。遺物の出土はない。本遺構の時期は検出層位から中世以降に所属するものと考えられる。

29 号土坑　ＳＫ 29【図 58・62、写真 50・82】

本遺構は、東区南東部のＤ４グリッドに位置する。ＬⅢｃで検出した。５号溝跡と重複し、本遺構が古い。平面形は不整楕円形で、西側に方形状の掘り込みが伴う。不整円形部の規模は検出面で長径 1.44 ｍ、短径 1.32 ｍを測る。断面形は漏斗状を呈し、上方の逆円錐形部分の周壁には段が認められ、深さ 45 ㎝の部分で直径 68 ㎝を測る。下方の筒形部分は、湧水があり底面までは掘削していない。方形状の掘り込みは長辺が 2.10 ｍ、短辺が 1.38 ｍを測り、南側は調査区外へ延びる。遺構内堆積土は７層に分層される。ℓ１は不整円形部と掘り込み部に共通して堆積する。ℓ２は黒褐色を呈し、貝殻や砂を含む。ℓ３はオリーブ黒色を呈し、グライ化し湧水が見られる。ℓ１～３は不整円形部に堆積する。ℓ４はＬⅢｃに類似したにぶい黄褐色シルトであり、掘り込み部に堆積する。ℓ５以下の土層は不整円形部の掘方に堆積したものと考えられる。ℓ１は自然堆積土、ℓ２・３は土坑の廃棄に伴う人為的な埋め戻し土とみられる。また、本遺構の北～西～南壁では凝灰岩の切石を貼付している。東壁付近では凝灰岩は未確認であり、これは東壁が他方の比べしまりが強く、粘性があり、強度を保てたものと推測する。

本遺構からは、破片数にして土師器 164 点、鉄滓１点（229.8 ｇ）、不明遺物１点が出土している。

遺物の出土状況は、ℓ６からの出土が 152 点と最も多く、ℓ１が９点、ℓ３が６点である。掘方の下層に遺存度の高い土器が出土している。図 62－９は非ロクロ成形の甕である。体部上半に最大径をもち、口縁部はユビオサエで成形しており歪みが生じている。外面には口縁部にヨコナデ、体上部でヘラナデ、体下部でヘラケズリが施される。内面は横方向のヘラナデである。明赤褐色を呈し、内外面に輪積痕が残る。内面の一部に煤が縦位に付着する。10 は甑の体部から底部にかけての部位である。底部が体部から屈曲気味に下がる。外面は縦方向のヘラケズリ、内面にはヘラナデ及びヘラケズリが施される。

本遺構の時期は出土遺物から 10 世紀前後と考えられる。掘方を伴い壁面に凝灰岩を使用する点、漏斗状となり湧水する下層まで掘り下げている状況から井戸跡と推定される。隣接する方形状の掘

り込みは井戸での作業に関わる施設の可能性が考えられる。

30 号土坑　ＳＫ 30【図 58・62、写真 51・82】

本遺構は、東区南東部のＤ３グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。41 号土坑、５号溝跡と重複し、本遺構が古い。南部分は土層観察用のトレンチによって壊されている。平面形は円形を呈すると推測される。現存する部分の規模は検出面で直径 92 ㎝、底面で直径 56 ㎝、深さは 32 ㎝を測る。壁は緩やかに外傾し、底面は中央に向かって低くなる。遺構内堆積土は単層であるが、炭化物や暗褐色土塊、大型の礫とともに人為的に埋め戻された可能性がある。本遺構から破片数にして土師器６点（甕２点、杯４点）、須恵器１点、鉄滓１点（352ｇ）が出土している。図 62－11 は椀形滓で、周辺に鍛冶遺構が存在していたことを示す。本遺構の時期は平安時代から中世にかけてと想定される。

31 号土坑　ＳＫ 31【図 59、写真 51】

本遺構は、東区南東部のＤ３・４グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。41 号土坑、５号溝跡と重複し、本遺構が古い。平面形は不整楕円形である。規模は検出面で長径 2.16 ｍ、短径 1.08 ｍ、底面で長径 1.08 ｍ、短径 36 ㎝、深さは 68 ㎝を測る。北・南・西壁は外傾し、東壁は垂直気味に立ち上がる。西側に中段があり、中段から緩やかに下降し底面は平坦となる。遺構内堆積土は単層であり、土質の均質性から自然堆積と考えられる。一部貝殻を含むが、周辺の貝殻が落ち込んだものと推測される。

本遺構から破片数にして土師器 11 点が出土している。器種は甕５点、壺２点、杯３点、器種不明が１点である。黒色処理された杯を含む。いずれも小片であり、図示できる資料はない。本遺構は検出層位より平安時代から中世までの時期と考えられる。

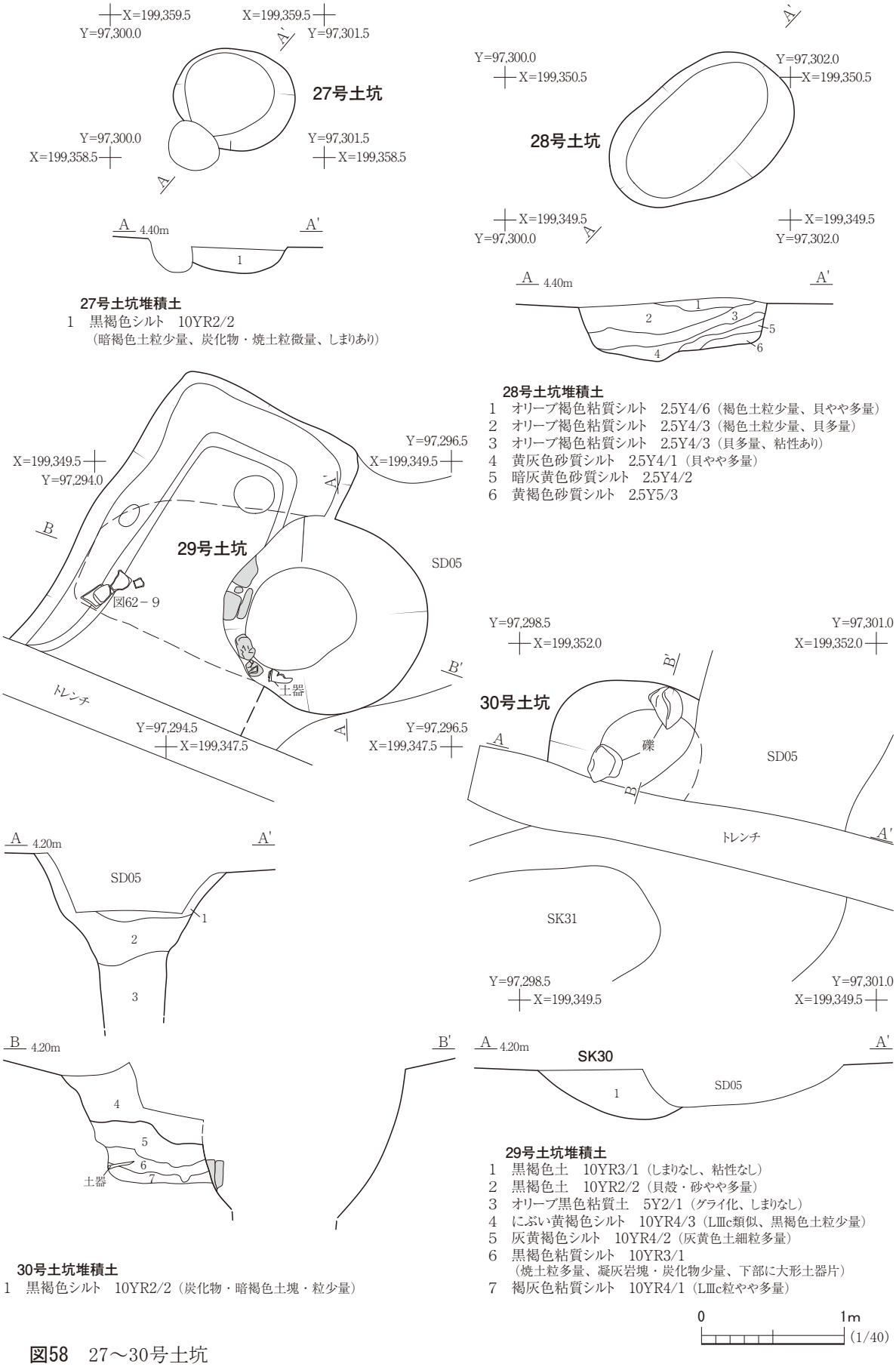
32 号土坑　ＳＫ 32【図 59、写真 51】

本遺構は、東区北東部のＤ２・３グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。平面形は不整楕円形である。規模は検出面で長径 1.12 ｍ、短径 32 ㎝、底面で長径 96 ㎝、短径 24 ㎝、深さは８㎝を測る。壁は緩やかに外傾し、底面は起伏がある。遺構内堆積土は単層であり、ＬⅢｃを利用し人為的に埋め戻された可能性がある。

本遺構からは土師器破片４点（甕１点、杯（黒色処理）３点）、獣歯が出土した。獣骨は分析の結果、馬の左下顎第１前臼歯から第３後臼歯である。本遺構の時期は、検出層位より平安時代から中世までの時期と考えられる。馬の埋葬や骨の廃棄目的等が想定される。

33 号土坑　ＳＫ 33【図 59、写真 51】

本遺構は、東区北西部のＣ２・Ｄ２グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。平面形は不整



27号土坑堆積土

1　黒褐色シルト　10YR2/2
（暗褐色土粒少量、炭化物・焼土粒微量、しまりあり）

28号土坑堆積土

1　オリーブ褐色粘質シルト　2.5Y4/6（褐色土粒少量、貝やや多量）
2　オリーブ褐色粘質シルト　2.5Y4/3（褐色土粒少量、貝多量）
3　オリーブ褐色粘質シルト　2.5Y4/3（貝多量、粘性あり）
4　黄灰色砂質シルト　2.5Y4/1（貝やや多量）
5　暗灰黄色砂質シルト　2.5Y4/2
6　黄褐色砂質シルト　2.5Y5/3

30号土坑堆積土

1　黒褐色シルト　10YR2/2（炭化物・暗褐色土塊・粒少量）

29号土坑堆積土

1　黒褐色土　10YR3/1（しまりなし、粘性なし）
2　黒褐色土　10YR2/2（貝殻・砂やや多量）
3　オリーブ黒色粘質土　5Y2/1（グライ化、しまりなし）
4　にぶい黄褐色シルト　10YR4/3（LⅢc類似、黒褐色土粒少量）
5　灰黄褐色シルト　10YR4/2（灰黄色土細粒多量）
6　黒褐色粘質シルト　10YR3/1
（焼土粒多量、凝灰岩塊・炭化物少量、下部に大形土器片）
7　褐灰色粘質シルト　10YR4/1（LⅢc粒やや多量）

図58　27～30号土坑

隅丸長方形である。規模は検出面で長軸 1.96 m、短軸 1.36 m、底面で長軸 1.76 m、短軸 1.12 m、深さは 14 ㎝を測る。壁はやや垂直気味に立ち上がり、底面は北側に向かって低くなる。遺構内堆積土は単層である。本遺構から土師器破片８点が出土している。

土師器には内面黒色処理した杯を含む。いずれも小片であり、図示できる資料はない。本遺構の時期は、検出層位より平安時代から中世までの時期と考えられる。

34 号土坑　ＳＫ 34【図 59】

本遺構は、西区東部のＢ２・Ｃ２グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。平面形は不整楕円形である。規模は検出面で長径 96 ㎝、短径 60 ㎝、底面で長径 64 ㎝、短径 30 ㎝、深さは 31 ㎝を測る。壁はやや外傾し、底面は中央が低くなり椀形を呈する。遺構内堆積土は２層に分層される。ℓ１は黄色粘土塊・粒・細粒を含む。ℓ２は黒褐色土と混じる。いずれも人為的に埋め戻されたものとみられる。

本遺構から土師器破片４点が出土している。内黒の杯１点を含む。本遺構の時期は、検出層位より平安時代から中世までの時期と考えられる。

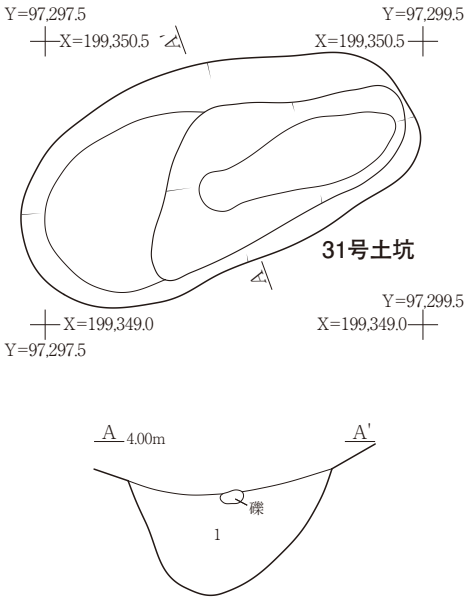
35 号土坑　ＳＫ 35【図 60・62、写真 51・82】

本遺構は、西区東部のＢ２グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。７号住居跡と重複し、本遺構が新しい。平面形は不整楕円形である。規模は検出面で長径 1.00 m、短径 52.4 ㎝、底面で長径 88 ㎝、短径 38 ㎝、深さは 14 ㎝を測る。壁は外傾し、底面は西に向かってやや低くなる。遺構内堆積土は単層である。土師器片、炭化物、焼土細粒を含む。本遺構から土師器破片７点、須恵器破片１点が出土している。

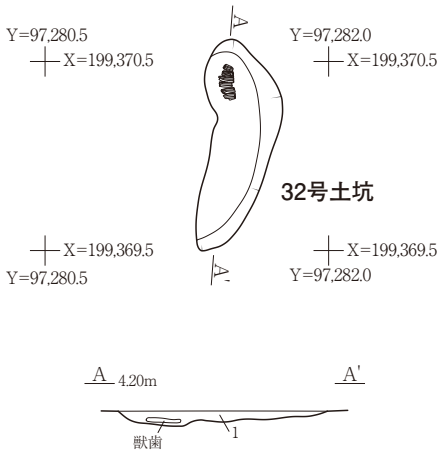
図 62－12 はロクロ成形の高台杯底部である。高台部は内外面ともにヨコナデされ、底部も丁寧にナデ調整されている。内面は劣化が激しく、剥離している。本遺構の時期は出土遺物及び遺構重複関係から 10 世紀以降と考えられる。

36 号土坑　ＳＫ 36【図 60、写真 51】

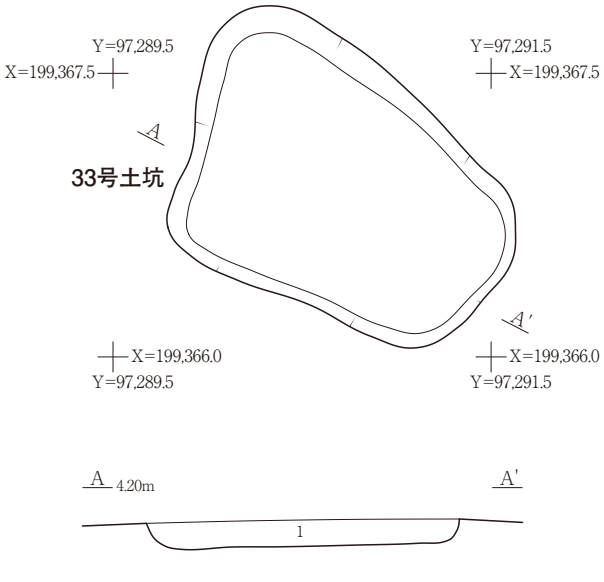
本遺構は、東区北部のＤ２グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。10 号溝跡と重複し、本遺構が古い。南部分は土層観察用のトレンチによって壊されている。平面形は不整隅丸長方形と推測する。現存部分の規模は検出面で長軸 1.72 m、短軸 60 ㎝、底面で長軸 1.22 ㎝、短軸 35.6 ㎝、深さは 32 ㎝を測る。壁は外傾し、底面は中央に向かって低くなる。遺構内堆積土は単層で褐色土塊を用いて埋め戻されたものと考えられる。本遺構から土師器破片 10 点、須恵器破片１点、鉄滓１点（11.5ｇ）が出土している。土師器はロクロ成形のものが主体で、内面黒色された杯が３点含まれる。本遺構の時期は出土遺物及び検出層位から平安時代から中世にかけてと考えられる。



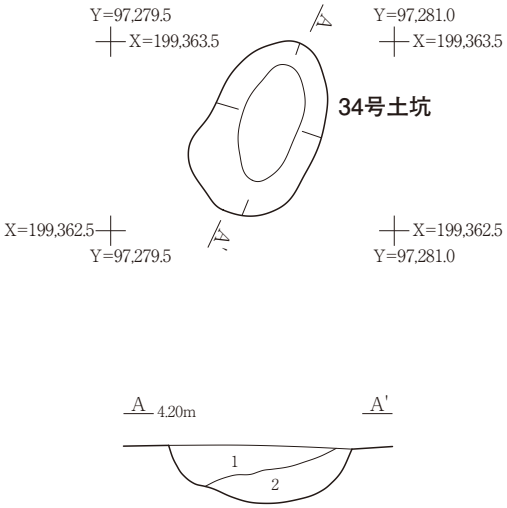
31号土坑堆積土
1　黒褐色シルト　10YR2/3（炭化物少量・貝殻微量、しまりあり）



32号土坑堆積土
1　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（LⅢc細粒多量）



33号土坑堆積土
1　暗褐色砂質シルト　10YR3/4（炭化物少量）



34号土坑堆積土
1　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（黄色粘土塊・粒・細粒少量）
2　黄灰色粘質シルト　2.5Y4/1（黒褐色土との混土）

図59　31～34号土坑

37 号土坑　ＳＫ 37【図 60、写真 51】

本遺構は、東区西部のＤ２グリッドに位置する。検出面はＬⅢｄである。13 号住居跡と重複し、本遺構が新しい。北西部分で掘りすぎている。平面形は不整楕円形を呈しているとみられる。現存部分の規模は検出面で長径 1.72 ｍ、短径 92 ㎝、底面で長径 1.56 ｍ、短径 78 ㎝を測り、深さは 12 ㎝である。壁は外傾し、底面は南に向けて緩く傾斜する。遺構内堆積土は単層で凝灰岩塊や凝灰岩粒を用いて埋め戻されたものとみられる。本遺構からは、土師器破片５点が出土している。本遺構の時期は、遺構重複関係から古墳時代終末期以降と考えられる。

38 号土坑　ＳＫ 38【図 60、写真 51】

本遺構は、東区南東部のＥ３グリッドに位置する。検出面はＬⅢｄである。平面形は不整円形である。規模は検出面で直径 1.04 ｍ、底面で直径 72 ㎝、深さは 12 ㎝を測る。壁は緩やかに外傾し、底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は単層である。遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出層位から古墳時代中期以降と考えられる。

39 号土坑　ＳＫ 39【図 61・63、写真 52・82】

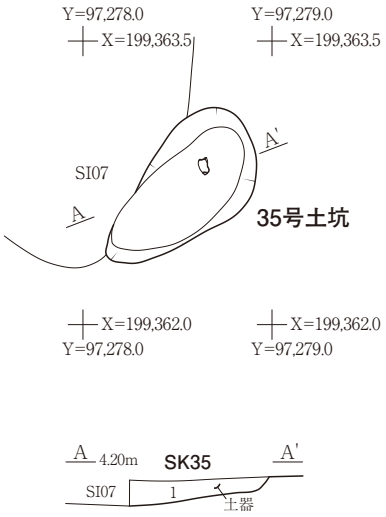
本遺構は､東区北西部のＤ２グリッドに位置する。ＬⅢｄで検出した。平面形は不整楕円形である。規模は検出面で長径 1.24 ｍ、短径 70 ㎝、底面で長径 86 ㎝、短径 50 ㎝を測り、深さは 15 ㎝である。遺構内堆積土は３層に分かれる。ℓ１～３は灰黄褐色を呈し、いずれにも炭化物が含まれる。ℓ１・２は炭化物が多量に含み、被熱等の人為的な影響が考えられる。ℓ３は堆積状況から自然堆積とみられる。

本遺構からは、土師器 21 点、不明遺物３点が出土している。特にℓ３出土の土師器の遺存状態が良好である。図 63－１はロクロ成形の杯である。外面は体部下半の摩滅が著しいが、底部周辺に手持ちヘラケズリが施されている。内面はヘラミガキ後、黒色処理されている。図 63－２は同じくロクロ成形の高台付杯である。外面は高台張り付け後に回転ヘラケズリが施されている。内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。本遺構の時期は、出土遺物から９世紀代に土器類とともに廃棄されたものと考えられる。

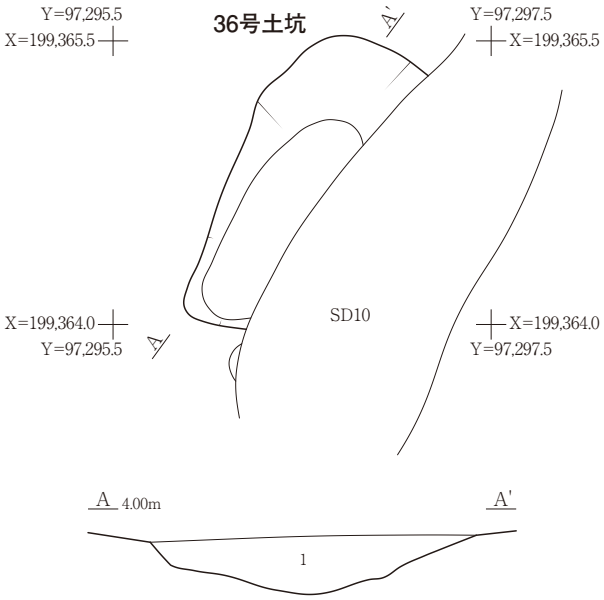
40 号土坑　ＳＫ 40【図 61・63、写真 52・82】

本遺構は、東区北東隅近くのＥ２グリッドに位置する。ＬⅢｅで検出した。本遺構は 16 号住居跡と重複し、本遺構が古い。本遺構の東半は 16 号住居跡によって壊されている。遺存部から推測される平面形は隅丸方形である。規模は検出面で径 72 ㎝、底面で径 51 ㎝を測り、深さは 35 ㎝で断面は鍋底状を呈する。遺構内堆積土は単層で、焼土と凝灰岩粒をやや多量に含みグライ化している。

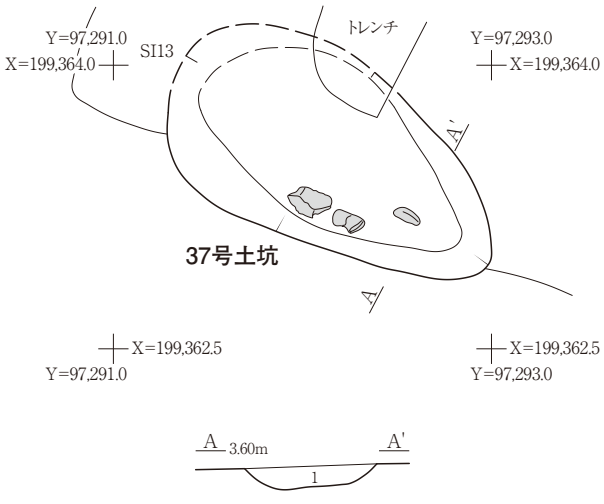
本遺構からは、土師器 53 点が出土している。図 63－３は内外赤彩を施した鉢である。全体に丸



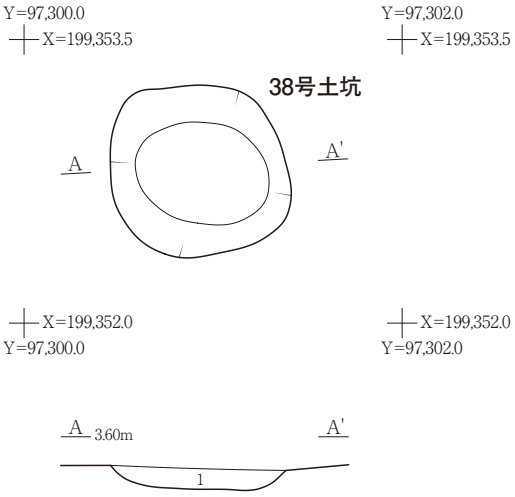
35号土坑堆積土
1　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（炭化物・焼土細粒微量）



36号土坑堆積土
1　黒褐色砂質シルト　10YR2/3（褐色土塊）

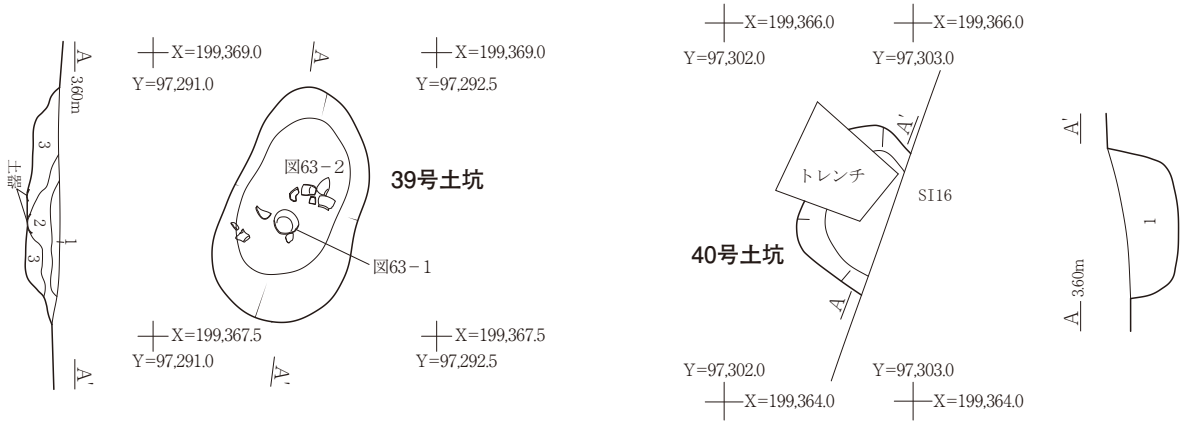


37号土坑堆積土
1　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（凝灰岩塊・粒多量）



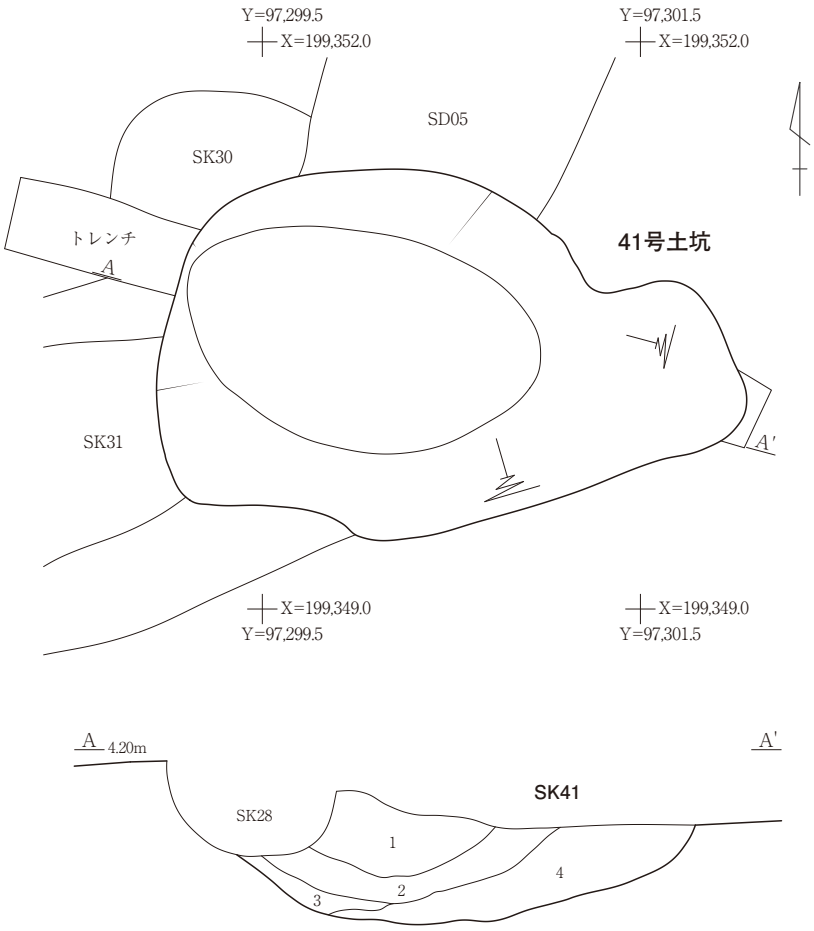
38号土坑堆積土
1　黒褐色粘質シルト　2.5Y3/2（黄色細砂少量、ややグライ化）

図60　35～38号土坑



39号土坑堆積土
1　灰黄褐色粘質シルト　10YR4/2（炭化物多量、焼土粒少量）
2　灰黄褐色粘質シルト　10YR4/2（炭化物やや多量）
3　灰黄褐色粘質シルト　10YR4/2（炭化物少量）

40号土坑堆積土
1　オリーブ黒色粘土　10YR3/1（グライ化、焼土・凝灰岩粒やや多量）



41号土坑堆積土
1　黒褐色粘質シルト　2.5Y3/1（貝殻多量、褐色土粒少量、混貝土層）
2　オリーブ黒色粘質シルト　5Y3/2（貝殻・褐色土粒少量、混貝土層）
3　黒色粘質シルト　5Y2/1（貝殻微量、粘性強）
4　黄灰色砂質シルト　2.5Y4/1（貝殻少量、下部は黒味強）

0　1m
(1/40)

図61　39～41号土坑

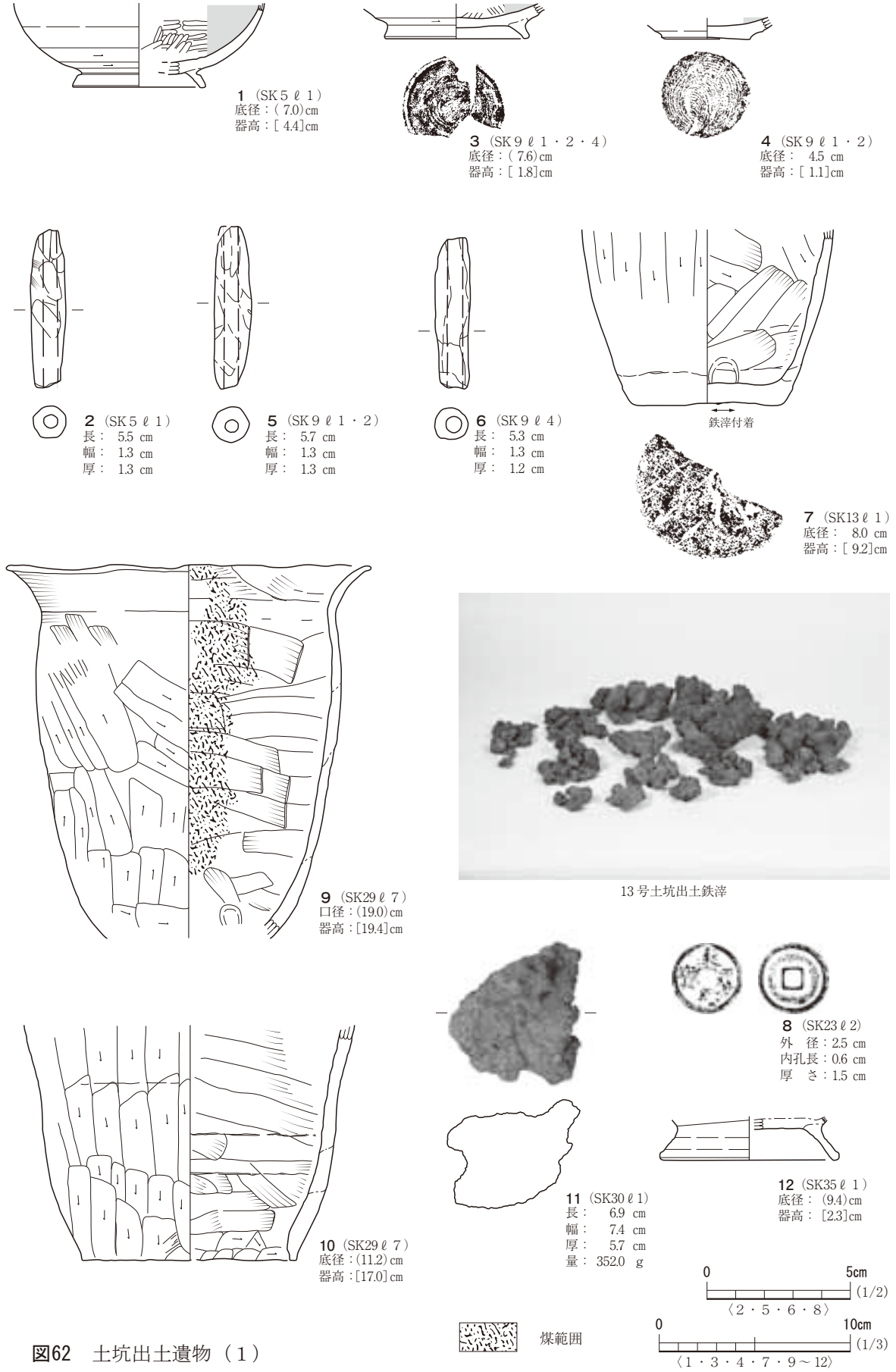

1（SK５ℓ１）
底径：（7.0）cm
器高：［4.4］cm
3（SK９ℓ１・２・４）
底径：（7.6）cm
器高：［1.8］cm
4（SK９ℓ１・２）
底径：4.5 cm
器高：［1.1］cm
2（SK５ℓ１）
長：5.5 cm
幅：1.3 cm
厚：1.3 cm
5（SK９ℓ１・２）
長：5.7 cm
幅：1.3 cm
厚：1.3 cm
6（SK９ℓ４）
長：5.3 cm
幅：1.3 cm
厚：1.2 cm
鉄滓付着
7（SK13ℓ１）
底径：8.0 cm
器高：［9.2］cm
9（SK29ℓ７）
口径：（19.0）cm
器高：［19.4］cm
13号土坑出土鉄滓
8（SK23ℓ２）
外　径：2.5 cm
内孔長：0.6 cm
厚　さ：1.5 cm
10（SK29ℓ７）
底径：（11.2）cm
器高：［17.0］cm
11（SK30ℓ１）
長：6.9 cm
幅：7.4 cm
厚：5.7 cm
量：352.0 g
12（SK35ℓ１）
底径：（9.4）cm
器高：［2.3］cm
0　5cm
（1/2）
〈２・５・６・８〉
0　10cm
（1/3）
〈１・３・４・７・９～12〉
煤範囲

図62　土坑出土遺物（１）

みを帯びた器形で、口縁部はゆるやかに外反する。口縁部外面調整はヨコナデされた後、外面は縦方向の荒いヘラミガキが施されている。体部の調整は摩滅が進み確認が困難である。内面の口縁部はヨコナデ、体部にはナデ調整後に縦方向のヘラミガキの痕跡が確認できる。図 63- ４は甕の口縁から頸部片である。体部上端は内傾し、強く外反して口唇部に向け厚みを減じる。口唇部はやや外側に丸く垂れる印象である。外面口縁部付近はヨコナデ、体部は幅９㎜程度の細い工具でナデが施されている。内面は口縁部にヨコナデ、体部は幅５㎜程度の細い篦状工具で縦方向にヘラケズリが施されている。３・４ともに焼成は良好で、明赤褐色を呈する。本遺構の時期は出土遺物及び重複する遺構との関係から、古墳時代前期と考えられる。

41 号土坑　ＳＫ 41【図 61、写真 52】

本遺構は、東区南東部のＤ３・４、Ｅ３・４グリッドに位置する。ＬⅢｃで検出した。５号溝跡、30・31 号土坑と重複し、５号溝跡より古く 30・31 号土坑より新しい。平面形は不整形である。規模は検出面で長軸 3.08 ｍ、短軸 1.96 ｍ、底面で長軸 1.92 ｍ、短軸 1.16 ｍを測り、深さは 92 ㎝である。遺構内堆積土は４層に分層される。ℓ１には貝殻が多量に含まれており、貝殻の廃棄等による堆積と考えられる。ℓ２・３・４は貝殻が少量含むが堆積状況から自然堆積とみられる。土器等遺物は出土していない。本遺構はＬⅢｃからの検出であるが他遺構との重複関係から、上層より掘り込まれていたものと考えられ、中世以降に廃棄されたものと想定される。

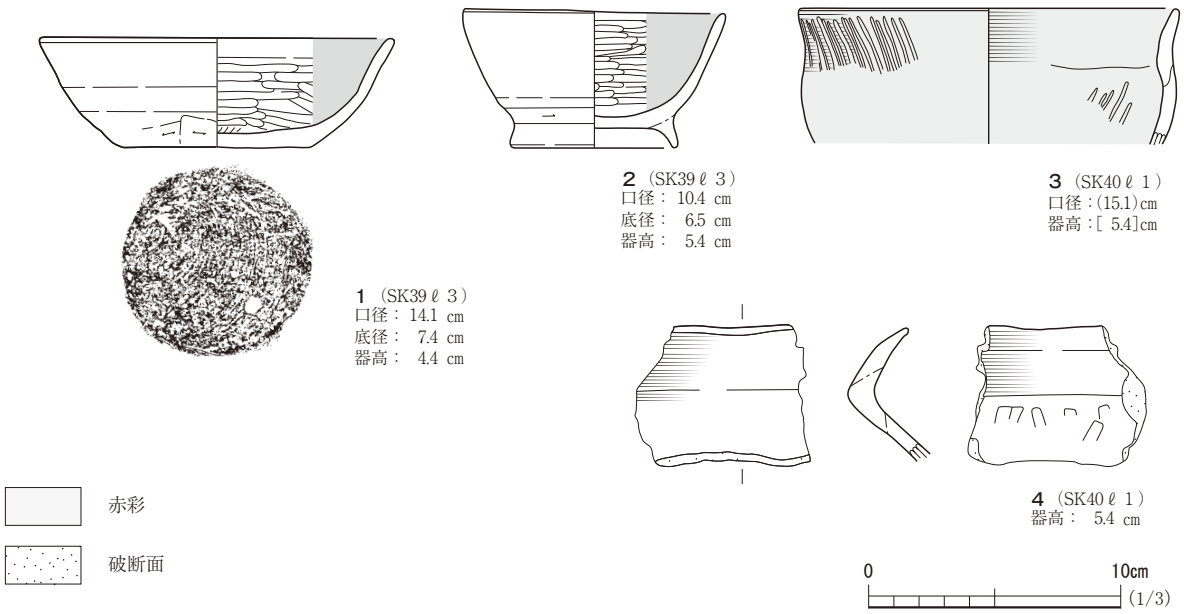


図63　土坑出土遺物（２）

第５節　溝跡

溝跡は17条検出した。検出層位はＬⅢａ・ＬⅢｃの２面あり、西区・東区に分布する。本節ではこれらの溝跡について個別に報告する。

１ａ号溝跡　ＳＤ01ａ【図64・70、写真53・54・83】

１号溝跡は西区北東部のＢ１・２、Ｃ１・２グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。２号溝跡、小穴と重複し、小穴より古く２号溝跡より新しい。本遺構と１ｂ号溝跡は重複する２条の溝跡であるが堆積土の近似から、掘り直し等によるものと判断した。

１ａ号溝跡は西区北東部のＣ１・２グリッドに位置し南北に延びる。北端は調査区外へ延びる。現存部分の規模は長さ約11.5ｍ、上端幅20～70㎝前後、南端では細くなる。検出面からの深さは10～20㎝程度である。底面の横断面は弧状を呈し、部分的に凹凸が認められる。遺構内堆積土は２層に分層でき、共に黒褐色粘質シルトであるがℓ２では部分的に貝殻を多量に含む混土貝層となる。いずれも人為的に廃棄及び埋め戻されたものと考えられる。本遺構からは、土師器23点、須恵器１点、石製模造品１点、鉄製品１点、木片１点、鉄滓６点（463.８ｇ）が出土している。出土はいずれもℓ１からである。

図70－１は石製模造品の有孔円板片である。材質は粘板岩と推定される。剥離が多数存在し、残りが悪い。古墳時代中期の所産であるが、本遺構には伴わない。

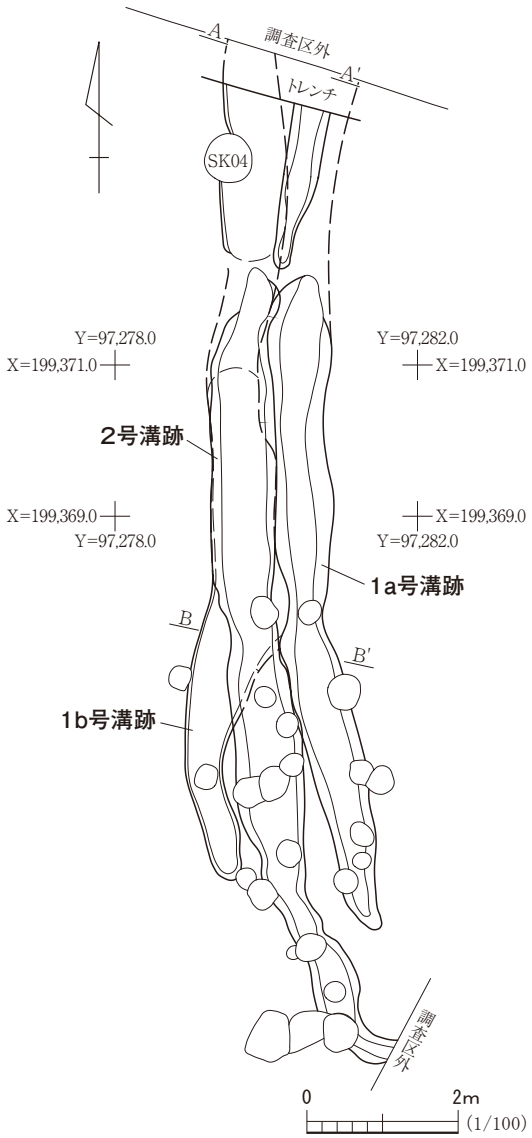
１ｂ号溝跡　ＳＤ01ｂ【図64、写真53・54】

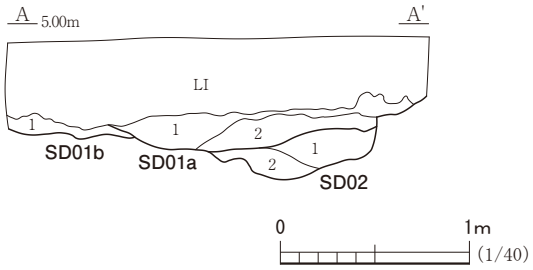
本遺構は西区北東部のＢ１・２、Ｃ１グリッドに位置し、１ａ号溝跡下層に検出された。南北方向に延び、北端は調査区外に延びる。現存部分の規模は長さ約11.1ｍ、北から9.7ｍ付近で緩やかに東側に曲がる。遺存範囲では上端幅35～105㎝前後、南端で細くなる。深さは５～10㎝前後でごく浅く、途中2.1ｍが１ａ号溝跡で壊されている。遺構内堆積土は単層で、部分的に貝殻を多く含む混土貝層であり人為的に貝殻が廃棄されたものと想定される。

本遺構から土師器６点、鉄滓３点（290ｇ）が出土している。１ｂ号溝跡の時期は貝殻の混入状況から同様な混入状況を示す23号土坑の放射線炭素年代測定結果より14世紀半ばから15世紀半ばと考えられる。

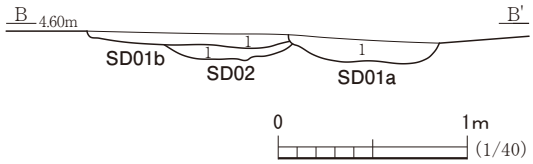
２号溝跡　ＳＤ02【図64、写真53・54】

本遺構は、西区北部から東部にかけてのＢ１・２、Ｃ１・２グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。１号溝跡と複数の小穴と重複し、本遺構が古い。本遺構は南北に延び、北から11ｍ付近で東に曲折する。北端と東端は調査区外へ延びる。検出範囲では長さ約13.3ｍ、上端幅36～14㎝





1・2号溝跡堆積土（A−A'）
1a 号溝跡堆積土
1　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（炭化物・貝殻少量）
2　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（貝殻主体）
1b号溝跡堆積土
1　黒褐色シルト　10YR3/2（東部に貝殻細片多量）
2号溝跡堆積土
1　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3（貝殻細片やや多量）
2　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3
（LⅢa類似でややグライ化、下層に貝殻細片多量）



1・2号溝跡堆積土（B−B'）
1a 号溝跡堆積土
1　黒褐色粘質シルト　10YR3/2
（炭化物・焼土細粒やや多量、部分的に貝殻）
1b 号溝跡堆積土
1　黒褐色シルト　10YR3/2（炭化物・貝殻・焼土細粒少量）
2号溝跡堆積土
1　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3
（暗黄褐色土と砂の混土、上層に貝殻少量）

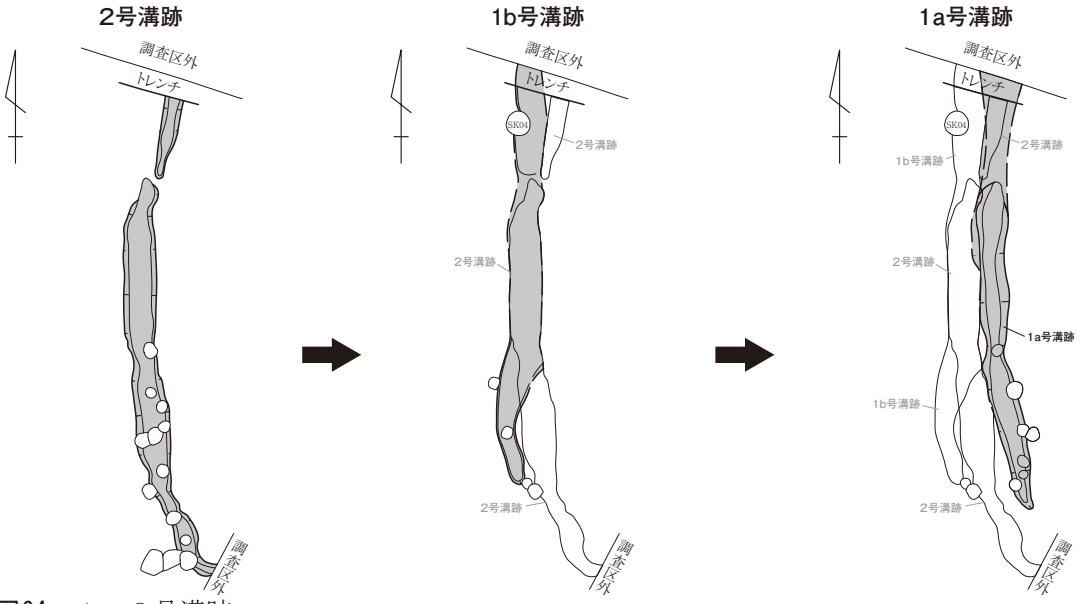


図64　１・２号溝跡

前後、深さ５～20㎝前後を測る。北から2.7ｍ地点で１号溝跡に壊され、一部中断する。断面形は皿状を呈し、底面はわずかに凹凸が認められる。遺構内堆積土は２層に分層し、部分的にℓ２の下部で貝殻が大量に出土しグライ化した土層の上層（ℓ１）で再度貝殻が多く混じる。複数回貝殻が廃棄された状況が推測される。

本遺構から土師器36点、須恵器１点、骨１点、鉄製品１点、鉄滓８点（128ｇ）が出土している。土器片の出土層位はℓ２がやや多いが、鉄滓は全てℓ１からの出土である。２号溝跡の時期は１ｂ号溝跡とあまり時期を隔てない中世後半と考えられる。

３号溝跡　ＳＤ03【図65・70、写真55・83】

本遺構は、東区北西部のＣ１・２グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。20号土坑、小穴と重複し、本遺構が古い。南北方向で北西端は調査区外へ延びる。検出範囲で規模は長さ約7.4ｍ、幅40～80㎝前後、深さ10～15㎝前後を測る。断面形は皿形で底面に凹凸は認められない。遺構内堆積土は単層であり、暗褐色土粒や炭化物、焼土粒が不均衡に含まれることから人為的に埋め戻された可能性がある。

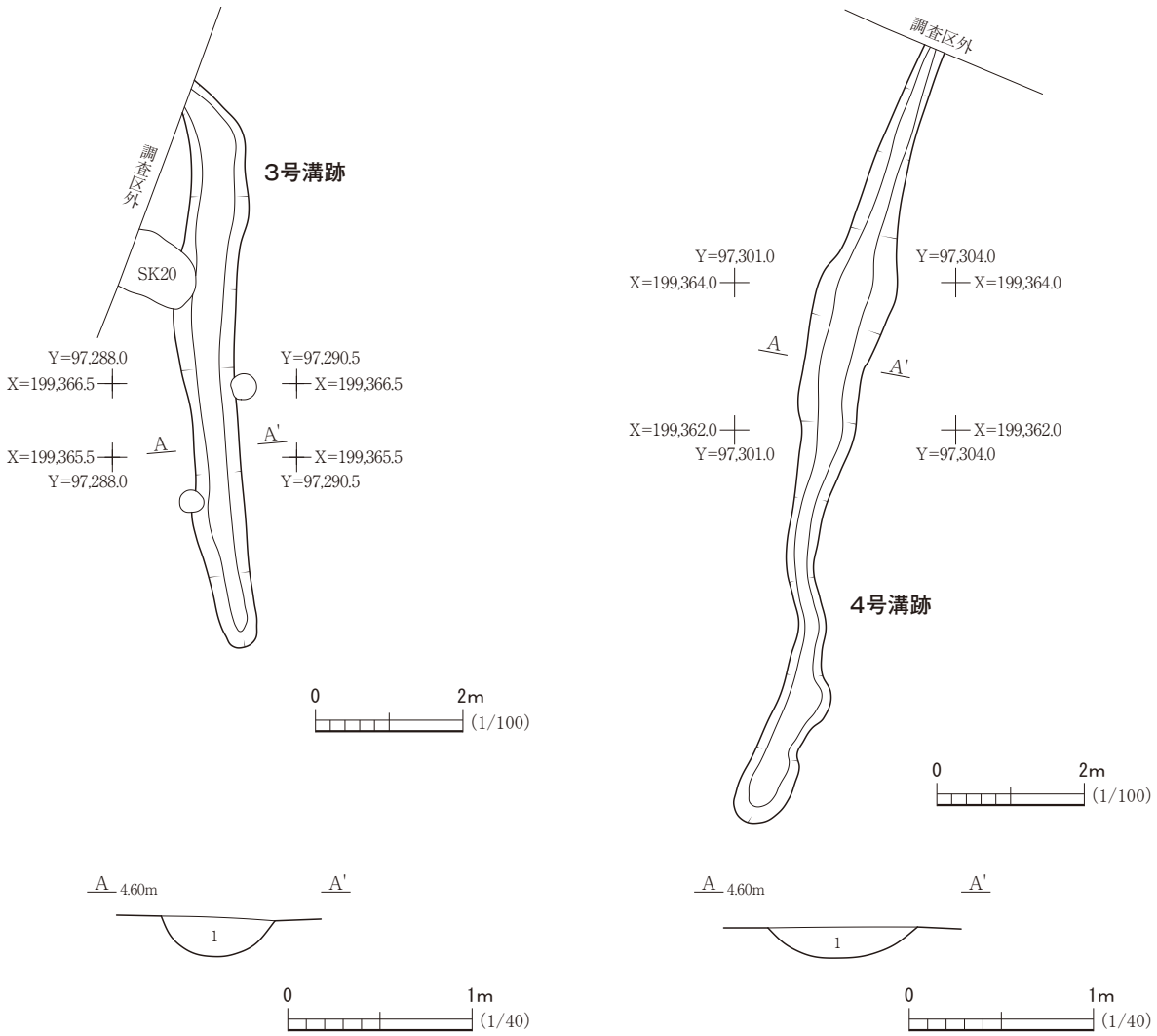
本遺構から土師器９点、須恵器１点、石製品１点、鉄滓４点（1,020.6ｇ）が出土している。図70－２は椀形滓と判別され､周辺に鍛冶遺構が存在したことを示す｡本遺構の時期は検出層位及び１、２号溝跡の並行関係から、同溝跡と同時期に機能していたものと推定され、中世後半から末頃が想定される。

４号溝跡　ＳＤ04【図65・70、写真55・83】

本遺構は、東区北東部のＥ２・３グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。南北方向で北端は調査区外へ延びる。検出範囲では長さ約10.4ｍ、幅20～100㎝前後、深さ５～15㎝前後を測る。断面形は皿形である。遺構内堆積土は単層であり、暗褐色土粒や炭化物が不均衡に含まれることから人為的に埋め戻された可能性がある。本遺構から土師器７点、須恵器１点、鉄滓15点（1,376ｇ）が出土している。図70-３は器種不明の須恵器片である。瑕の口縁から頸部付近又は蓋の一部と考えられる。本遺構の時期は検出層位及び１～３号溝跡の並行関係から、同溝跡と同時期に機能していたものと推定され、中世後半から末頃が想定される

５号溝跡　ＳＤ05【図66・70、写真56・83】

本遺構は、東区Ｄ３・４、Ｅ２・３・４グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。７・８・16・17号溝跡、29・30・31・41号土坑と重複し、本遺構が新しい。南北方向を基本とし、調査区北東端からＤ３・４、Ｅ３・４グリッド付近で角度を変えて南西方向に折れる。屈曲部分北側では、南北長1.2ｍ、溝底面から深さ22㎝となる土坑状の凹みが所在する。北東端はさらに調査区外へ延びる。南西端は29号土坑調査時に壊されている。検出規模は長さ約21ｍ、幅80～1.9ｍ、深さ



3号溝跡堆積土
1　黒褐色シルト　10YR2/3（暗褐色土粒・炭化物少量、焼土粒微量）

4号溝跡堆積土
1　黒褐色シルト　10YR2/3（暗褐色土粒少量、炭化物微量、しまりあり）

図65　３・４号溝跡

30 ～ 40 ㎝を測る。断面形は皿形を呈する。遺構内堆積土は２層に分層できる。ℓ１は本遺構の北側で部分的に堆積し、ＬⅢａ相当の土質であり凹みに自然堆積したものと考えられる。ℓ２は混入物が多く、しまりがあるため人為的に埋め戻されているものとみられる。

本遺構から土師器 109 点、須恵器５点、中世陶器３点、鉄滓４点（336.2 ｇ）が出土している。遺物の出土はℓ２が主体である。図 70－４～６は中世陶器である。４は甕の口縁部で短く外反し、先端で上に折り曲げられ、外面には隆線状の口縁帯が巡る。胎土は暗灰色を呈し、少量の白色粒と石英を含む。外面は暗褐色の釉に覆われている。12 世紀末から 14 世紀前後に機能した白石窯との関連が予想される。５は常滑焼の甕である。胎土には砂粒、白色粒、石英を含み、外面は赤灰色から灰赤色の自然釉で覆われる。６も甕の体部下半である。外面は自然釉で覆われるが、ナデ調整の痕跡が確認できる。断面の一部に漆が付着しており、修復痕と思われる。本遺構の時期は、出土遺物から中世前半期に機能していたと考えられる。

６ａ号溝跡　ＳＤ 06 ａ【図 67、写真 56】

６号溝跡は東区南部のＣ３・４、Ｄ３・４グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。９号住居跡と重複し、本遺構が新しい。南北方向を基本とし、２時期の変遷がある。

６ａ号溝跡は北東から南西へ伸びる。南端は調査区外へ延びる。現存する部分の規模は長さ約 1.9 ｍ、幅 60 ～ 85 ㎝前後、深さは 65 ㎝前後を測る。遺構内堆積土は２層に分層でき、ℓ１にはＬⅢｃ粒が多量に含まれる。ℓ２は黒褐色土と混じる。堆積状況から自然堆積と考えられる。本遺構からは、土師器 11 点が出土している。土師器には内面黒色処理を含む。

６ｂ号溝跡　ＳＤ 06 ｂ【図 67、写真 56】

６ｂ号溝跡は６ａ号溝跡より古い。規模は現状で長さ約 1.8 ｍ、深さは 30 ㎝前後を測る。遺構内堆積土は２層に分層でき、ℓ１にはＬⅢｃ粒が含まれる。レンズ状の堆積から自然堆積とみられる。本溝跡から土師器４点、須恵器１点が出土している。

６号溝跡は 10 世紀前半と想定する９号住居跡より新しいため、同時期以降に機能したものと考えられる。

７号溝跡　ＳＤ 07【図 66・70、写真 56・83】

本遺構は、調査区東区のＤ３、Ｅ２・３グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。東に位置する５号溝跡とほぼ平行し、北端部で５号溝跡と重複する。本遺構が古い。現存する部分の規模は長さ約 13.6 ｍ、幅 40 ～ 1.4 ｍ、深さ約 20 ㎝を測る。断面形は緩やかな皿形を呈し、南端の底面に南北 1.2 ｍ、溝跡底面からの深さ 19 ㎝の土坑状の凹みがある。北端 2.0 ｍで段状に落ち込む。遺構内堆積土は単層であり、多量の炭化物及びＬⅢｃ粒を含む。９号溝跡も同じ堆積土により埋められていることから、ほぼ同時期に機能し、埋め戻されたものと考えられる。

本遺構から土師器 62 点、須恵器 11 点、中世陶器１点が出土している。図 70－７は信楽焼の茶壺とみられる体部上半の破片である。胎土に最大で計５㎜ほどの白色の砂を多く含む。外面はやや緑がかった自然釉で覆われ、内面は赤褐色を呈する。８は須恵器底部周辺の破片で、逆台形状の高台が付き、長頸壺の底部である可能性がある。体部外面下端付近には回転ヘラケズリが施され、内面はヨコナデ調整が認められる。

本遺構の時期は、出土遺物及び遺構との重複状況から中世前半とみられる。東に位置する５号溝跡と方向をほぼ同じくすることから、本溝跡は５号溝跡に先行し本溝跡を埋め返し後に、５号溝跡を構築したものと考えられる。

８号溝跡　ＳＤ 08【図 67・70、写真 56・84】

本遺構は、東区北～北東部のＤ２・Ｅ２グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。本遺構は

５号溝跡・16 号溝跡と重複し、５号溝跡より古く 16 号溝跡より新しい。東西方向の溝跡で直線的に延び、北西部でＬ字形に屈曲する。北端と東端は調査区外に延びる。規模は長さ約 10.4 ｍ、幅 0.9 ～ 1.9 ｍ、深さ 64 ㎝を測る。断面形は皿形を呈する。底面に目立った凹凸は認められない。遺構内堆積土は２層に分層でき、ℓ１から遺物が多量に出土しているため、人為堆積の可能性がある。ℓ２は堆積状況から自然堆積とみられる。本遺構から土師器 158 点、須恵器４点が出土している。出土層位は全てℓ１である。

図 70－９は非ロクロの土師器杯である。体部外面下半に明瞭な段が付き、底面は全面手持ちヘラケズリが施され、丸みを帯びている。内面はヘラミガキ後、黒色処理されている。10 は土師器甕で口縁部は強く外反し、体部は長胴化する。外面は口縁部にヨコナデ、体部は縦方向のハケメが施される。内面の調整は明瞭ではない。その他、ロクロ成形の高台付杯破片が含まれる。９・10 とも古墳時代終末期の所産と考える。

本遺構の時期は、遺構の重複状況及び検出層位から平安時代から中世前半期までに埋め戻されたものと考えられる。一部のみを検出しただけで全容は不明だが、直角に屈曲することから区画溝などの性格が推測される。

９号溝跡　ＳＤ 09【図 66、写真 56】

本遺構は、東区東部のＥ３グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。断面図は少し掘り下げた状況で採録しているが、重複する遺構はない。本遺構の東側には７号溝跡が近接する。北東から南西へ直線的に伸びる。規模は長さ 2.1 ｍ、幅 30 ～ 40 ㎝、深さ 15 ～ 20 ㎝前後を測る。遺構内堆積土は７号溝跡と同一であることから、７号溝跡に付随する遺構と考えられる。本遺構から内黒の土師器片２点が出土している。７号溝跡と同時期と考えられるため、本遺構の時期は中世前半とみられる。

10 号溝跡　ＳＤ 10【図 68・70、写真 56・84】

本遺構は、調査区東区のＤ２・３グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。北端部は 36 号土坑と重複し、本遺構が新しい。中央部がクランク状に屈曲する溝跡で、東西方向を除く南北方向は、西に位置する 12・14・15 号溝跡、東に位置する５号溝跡とほぼ平行する。残存する部分の規模は全長約 13.8 ｍ、幅 40 ～ 100 ㎝、深さ 10 ～ 42 ㎝を測る。深さは北に浅く、南に向かい徐々に深くなる。遺構内堆積土は暗褐色シルトの単層である。南北方向では屈曲部で南側に 14 号溝跡が近接するが、土層堆積が異なり併存状況は不明である。本遺跡から土師器 43 点、須恵器４点、羽口１点が出土している。

図 70－11 はロクロ成形された土師器杯である。底面に回転糸切痕を残し、底部周辺は無調整である。内面は黒色処理される。

本遺構の時期は、検出層位から平安時代から中世までの年代と考えられる。複数の溝跡と並行、直行するような形状から、何らかの区画溝であった可能性も考えられる。

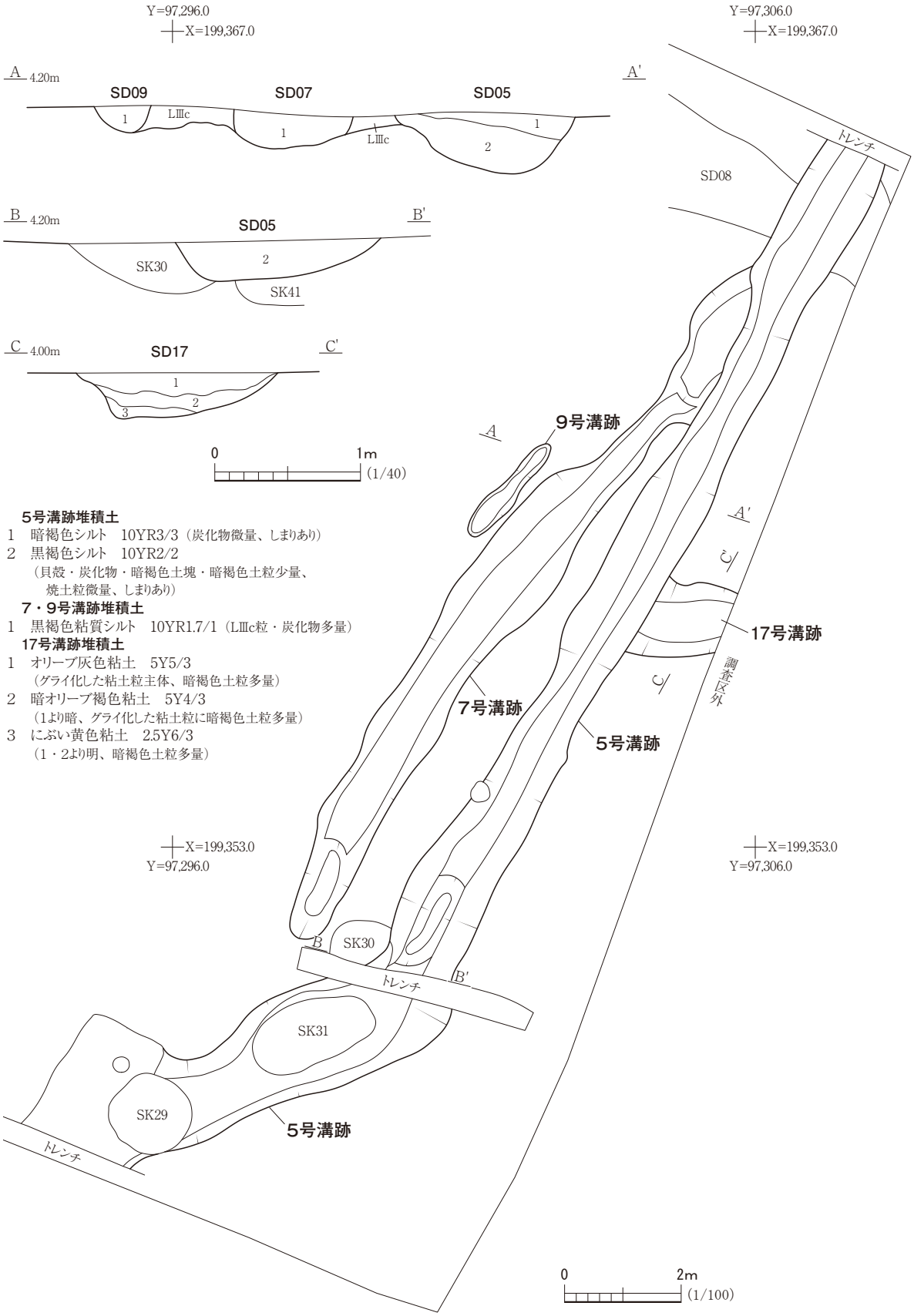
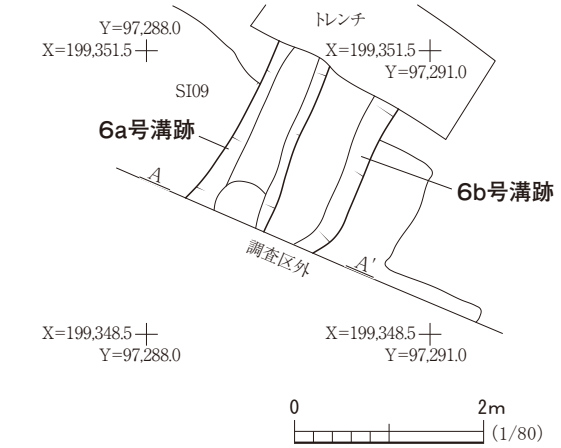
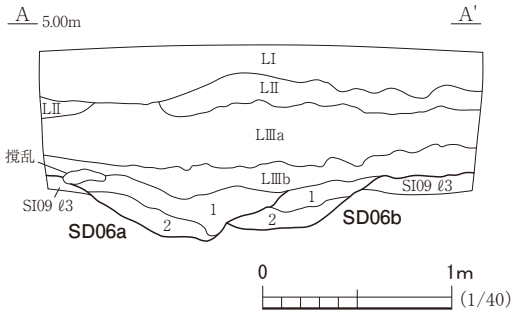


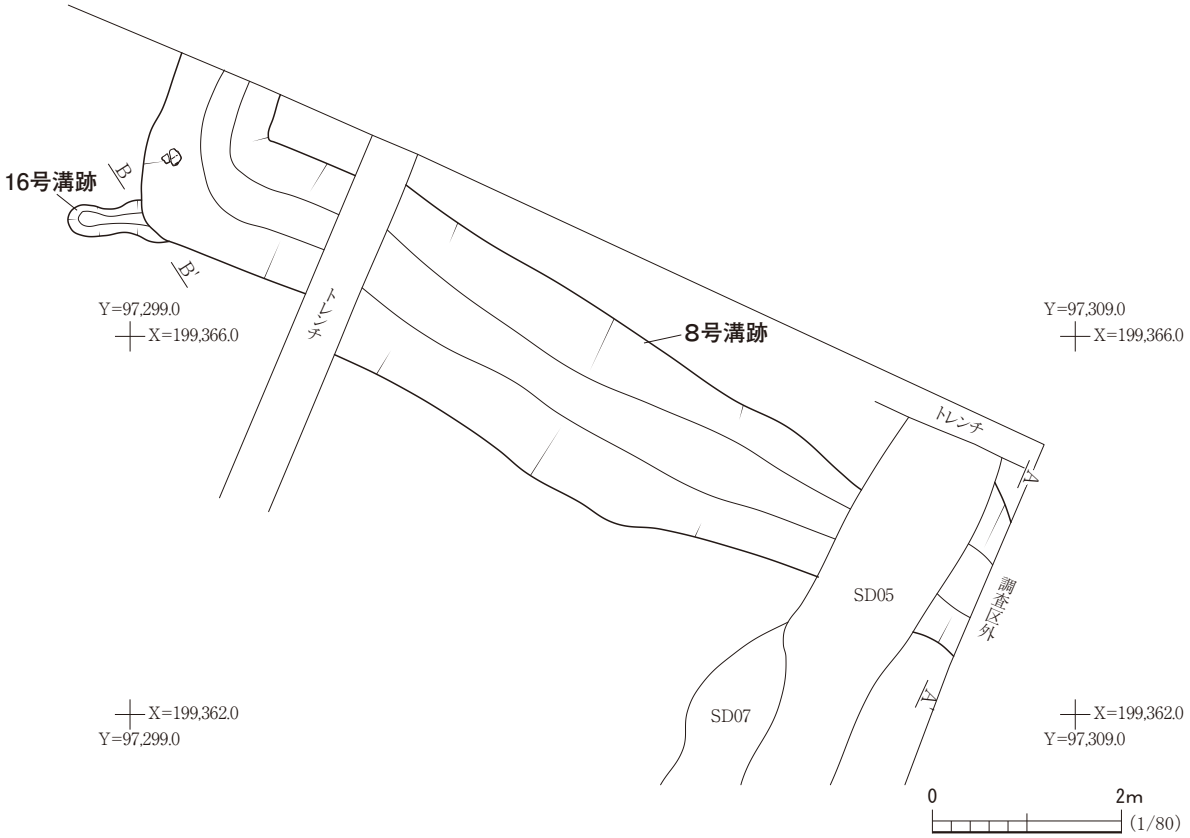
図66　５・７・９・17号溝跡

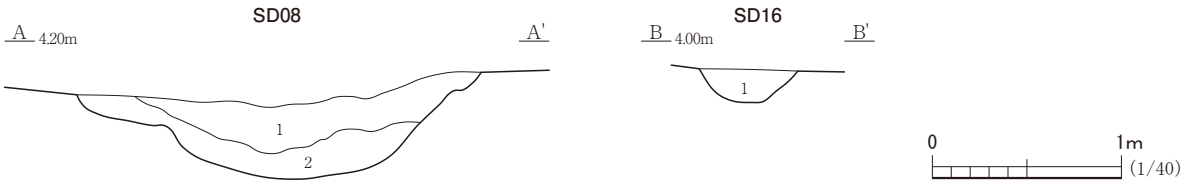




6a号溝跡堆積土
1　黒褐色粘質シルト　2.5Y3/1（LⅢc粒多量）
2　灰黄褐色粘質シルト　10YR4/2（黒褐色土との混土）

6b号溝跡堆積土
1　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（LⅢa細粒少量）
2　にぶい黄褐色粘質シルト　10YR4/3





8号溝跡堆積土
1　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（炭化物微量）
2　褐灰色粘質シルト　10YR4/1（グライ化）

16号溝跡堆積土
1　黒褐色シルト　10YR2/2（褐色土）

図67　６・８・16号溝跡

11 号溝跡　ＳＤ 11【図 68、写真 56】

本遺構は、調査区東区のＤ２グリッドに位置し、東西方向の溝跡で、検出面はＬⅢｃである。15 号溝跡と重複し、本遺構が新しい。また、小穴と重複し、本遺構が古い。西に位置する 12・14・15 号溝跡、東に位置する５号溝跡とほぼ直交し、10 号溝跡の東西方向とほぼ平行する。残存する部分の規模は長さ約 3.3 ｍ、幅 40 ～ 100 ㎝、深さ約 10 ㎝を測る。底面形状は浅い鍋底状を呈する。遺構内堆積土は暗褐色シルトの単層である。遺存状況は良くないが、本溝跡の東端部がやや広がり、堆積土が 10 号溝跡に近似していることから、10 号溝跡の一部であった可能性も考えられる。

本遺構から土師器８点、鉄製品１点が出土している。土師器杯には内面黒色処理を含む。

本遺構の時期は、検出層位から平安時代から中世までの年代と考えられる。

12 号溝跡　ＳＤ 12【図 68・71、写真 57・58・84】

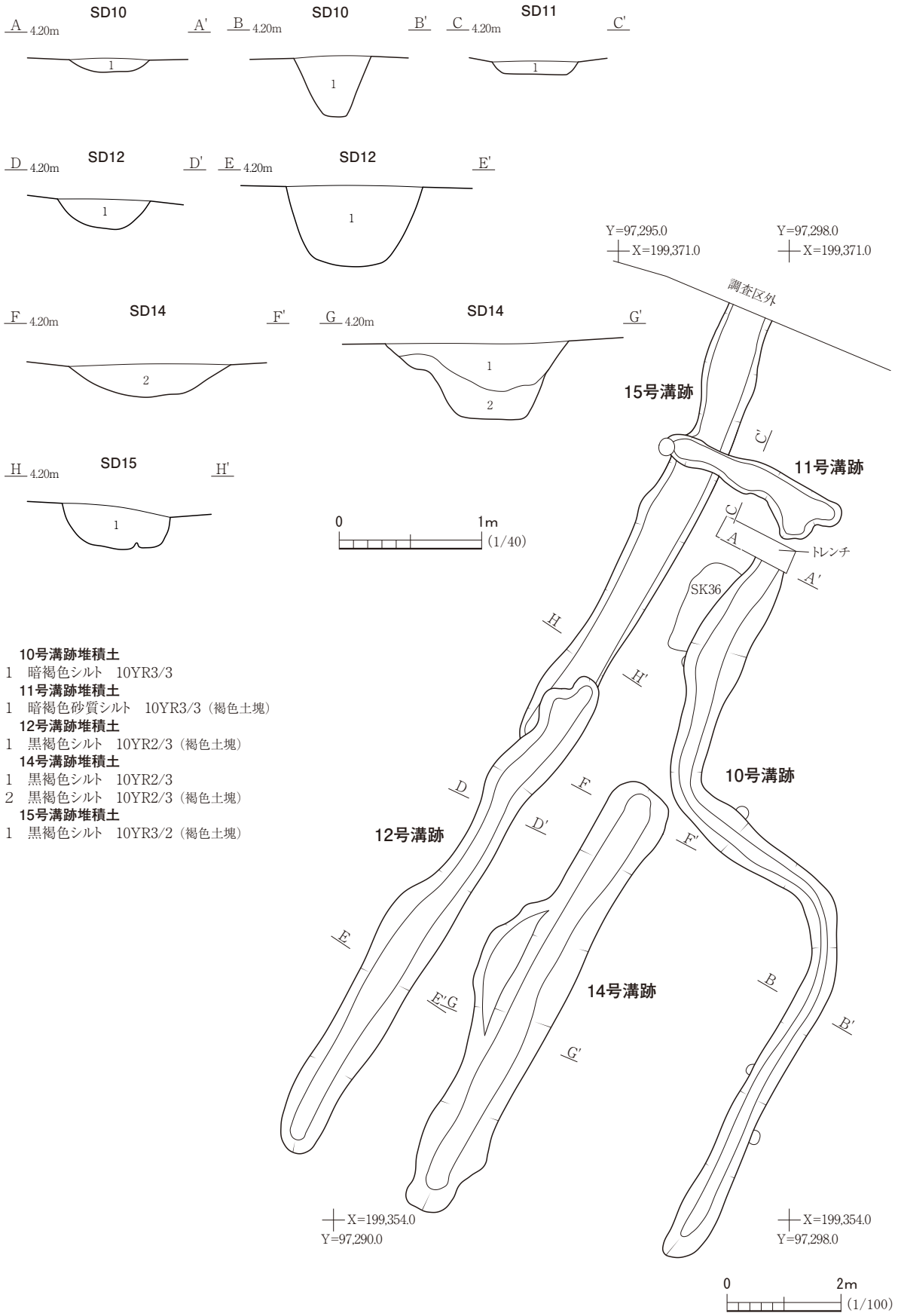
本遺構は、調査区東区のＣ３及びＤ２・３グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。南北方向に延び、15 号溝跡と重複し、本遺構が新しい。南北方向で 15 号溝跡南端から長軸を延長するような形状で延びる。12・14・15 号溝跡、東に位置する５号溝跡とほぼ平行する。残存する部分の規模は長さ約 9.9 ｍ、幅 60 ～ 110 ㎝、深さ 20 ～ 57 ㎝を測る。底面形状は遺存状態の良好な南端部において鍋底状を呈する。遺構内堆積土は単層で、褐色土塊を含む黒褐色シルトであり人為的に埋め戻された可能性が高い。本遺構から土師器 82 点、須恵器１点、石製模造品１点が出土している。図 71－１は非ロクロ成形の土師器杯である。体部外面下半に明瞭な段を持ち、底面は全面手持ちヘラケズリされ、丸みを帯びている。内面は黒色処理されている。古墳時代終末期の所産である。このほか小片であるが、底面に回転糸切痕を残すロクロ成形の杯も確認される。

２は石製模造品の双孔円板片で、古墳時代中期の所産である。流紋岩と思われる材質を薄く円形に整えており、約４分の１程度を欠損している。径約 1.7 ㎜の穴が１箇所穿孔されている。

本遺構の時期は、検出層位及び７号溝跡との近似性から、中世前半の年代と考えられる。北に重複する 15 号溝跡とは長軸方向がほぼ同じで、15 号溝跡を延長するような配置であることから、関連性が強いものと考えられる。

13 号溝跡　ＳＤ 13【図 69・71、写真 58・84】

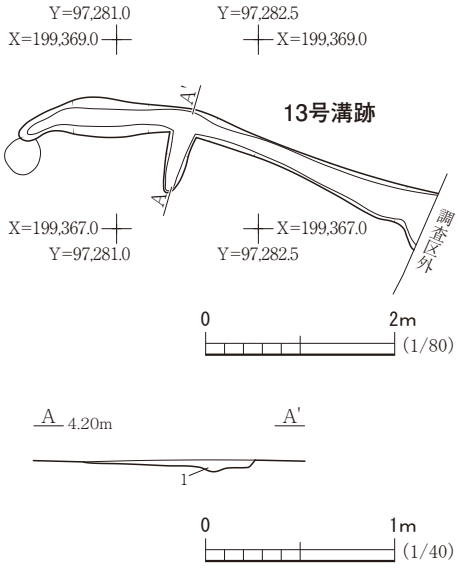
本遺構は、調査区西区のＣ２グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。小穴と重複し、本遺構が新しい。東西方向に延びるが、中央付近で南に約 65 ㎝張り出し、Ｔ字状を呈する。東端部は幅を拡大しながら東区と西区を隔てる調査区外へ達するが、東区に本遺構の延長とみられる溝跡は検出されていない。残存する部分の規模は全長約 4.5 ｍ、幅 40 ～ 60 ㎝、深さは約６～８㎝を測り、ごく浅い。底面は平坦を呈する。遺構内堆積土は単層であり、ＬⅢｃ粒をやや多量に含み炭化物と焼土細粒を少量含む。本溝跡からは、破片数にして土師器 10 点が出土している。



10号溝跡堆積土
1　暗褐色シルト　10YR3/3
11号溝跡堆積土
1　暗褐色砂質シルト　10YR3/3（褐色土塊）
12号溝跡堆積土
1　黒褐色シルト　10YR2/3（褐色土塊）
14号溝跡堆積土
1　黒褐色シルト　10YR2/3
2　黒褐色シルト　10YR2/3（褐色土塊）
15号溝跡堆積土
1　黒褐色シルト　10YR3/2（褐色土塊）

図68　10・11・12・14・15号溝跡

図 71－３はロクロ成形の高台付杯である。高台内外面はナデ調整され、高台内部にわずかに糸切の痕跡が認められる。内面は黒色処理されているが、劣化によりミガキの痕跡は確認できない。本遺構の時期は、検出層位から平安時代から中世までの年代と考えられる。



13号溝跡堆積土
1　黒褐色粘質シルト　10YR3/1（LⅢc粒やや多量、炭化物・焼土細粒少量）

図69　13号溝跡

14 号溝跡　ＳＤ 14

【図 68・71、写真 57・58・84】

本遺構は、調査区東区のＤ２・３グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。南北方向にほぼ直線状に伸びる。中央部で一部西側に張り出す。本遺構の西には 12 号溝跡が約 1.5 ｍを隔て並行して位置する。規模は長さ 4.2 ｍ、幅 1.0 ～ 1.7 ｍ、深さ 24 ～ 54 ㎝を測り、南に向かって深さを増す。断面形は北側で皿状、南側で鍋底状を呈する。遺構内堆積土の２層は同質であるが、ℓ２は褐色土塊を含むため人為的に埋め戻された可能性がある。本遺構から土師器 181 点、須恵器 10 点、鉄滓２点（145.8 ｇ）が出土している。出土遺物はℓ１から出土が主体である。

図 71－４は須恵器壺の体部破片である。赤みの強い胎土で、少量の砂粒、白色粒などの他、海綿骨針を含む。内外面ともに、体部下半に縦方向のヘラケズリが施されている。５は土師器杯である。底面は回転糸切後、無調整である。内面はヘラミガキ後、黒色処理されている。

前述の 12 号溝跡と規模、軸線方向が非常に近く堆積土も同質であり、関連する遺構の可能性が高く、年代は同様に中世前半と考えられる。

15 号溝跡　ＳＤ 15【図 68・71、写真 57・58・85】

本遺構は、東区北部のＤ１・２グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。本遺構は 11・12 号溝跡と重複し、本遺構が古い。南北方向に伸び、南西端で 12 号溝跡と重複する。北東端はさらに調査区外へ延びる。現存する部分の規模は長さ約 8.6 ｍ、幅 70 ～ 100 ㎝前後、深さ 80 ㎝を測る。断面形は皿形である。遺構内堆積土は単層であり、褐色土塊を含むため人為的に埋め戻されているものとみられる。

本遺構から土師器 104 点、須恵器 17 点、鉄滓３点（214 ｇ）が出土している。

図 71－６はロクロ成形の高台付杯である。高台周辺はナデ調整されているが、底面中央は無調整で回転糸切痕が明瞭に残る。内面はヘラミガキ後、黒色処理されている。７は須恵器で、外面に弧状の細い隆帯を持つ。内面にはロクロ目が残る。壺の肩部又は瓶の一部と考えられる。

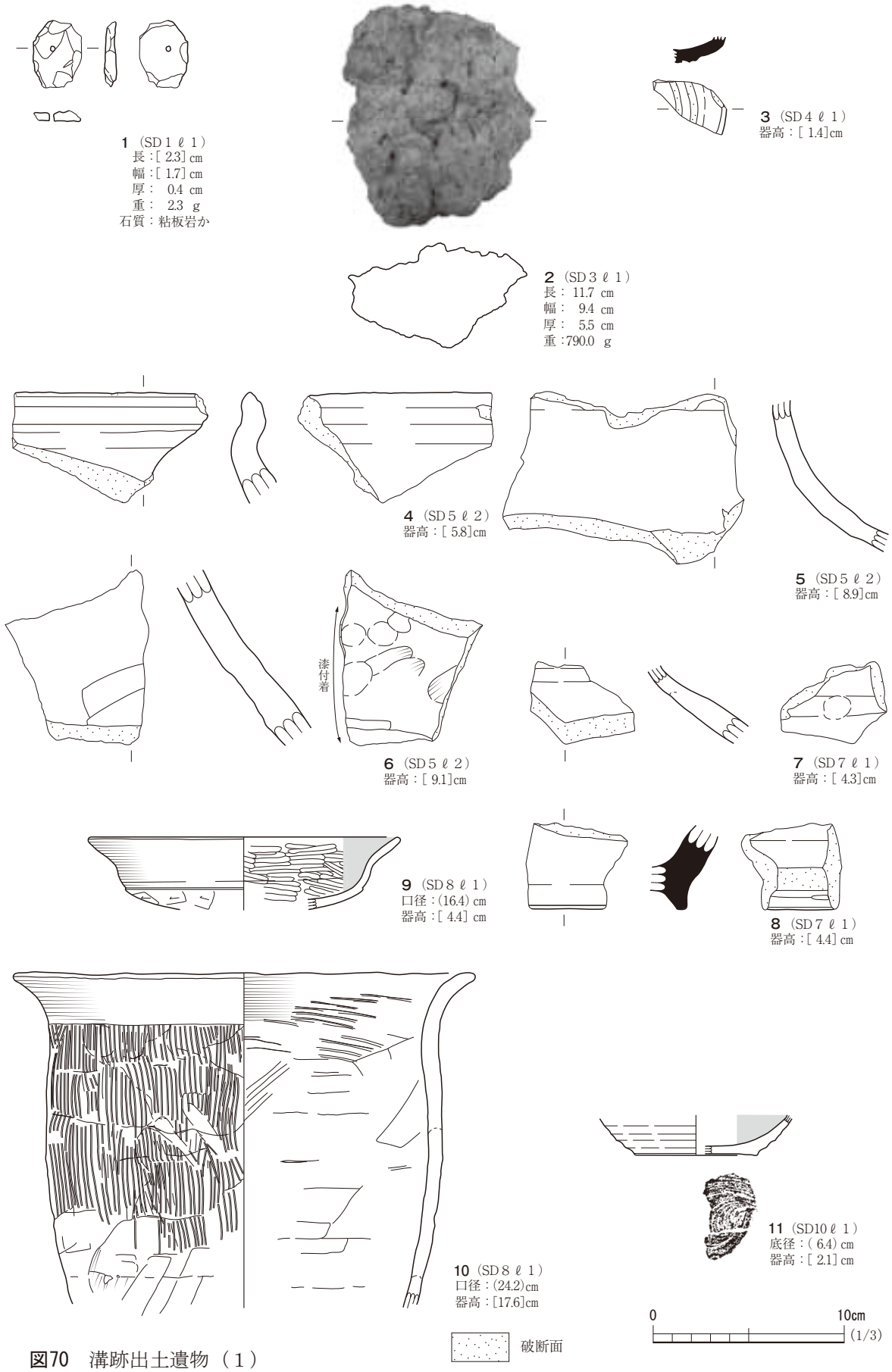

1（SD１ℓ１）
長：[2.3] cm
幅：[1.7] cm
厚： 0.4 cm
重： 2.3 g
石質：粘板岩か
2（SD３ℓ１）
長：11.7 cm
幅： 9.4 cm
厚： 5.5 cm
重：790.0 g
3（SD４ℓ１）
器高：[1.4]cm
4（SD５ℓ２）
器高：[5.8]cm
5（SD５ℓ２）
器高：[8.9]cm
漆付着
6（SD５ℓ２）
器高：[9.1]cm
7（SD７ℓ１）
器高：[4.3]cm
9（SD８ℓ１）
口径：(16.4) cm
器高：[4.4] cm
8（SD７ℓ１）
器高：[4.4] cm
10（SD８ℓ１）
口径：(24.2)cm
器高：[17.6]cm
11（SD10ℓ１）
底径：(6.4) cm
器高：[2.1] cm
破断面
0
10cm
(1/3)

図70　溝跡出土遺物（１）

本遺構の時期は、検出層位及び７号、12 号溝跡との近似性から中世前半の年代と考えられる。

16 号溝跡　ＳＤ 16【図 67、写真 59】

本遺構は、東区北部のＤ２グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。本遺構は８号溝跡と重複し、本遺構が古い。東西方向の溝跡である。東端は８号溝跡と重複する。規模は長さ 88 ㎝、幅 20 ～ 50 ㎝前後、深さ約 18 ㎝を測る。小規模であり溝状の土坑の可能性がある。断面形は皿形を呈する。遺構内堆積土は単層であり、褐色土粒が混入していることから人為的埋め戻しの可能性がある。遺物は出土していないが、遺構の重複状況及び検出層位から平安時代から中世前半期までに埋め戻されたものと考えられる。

17 号溝跡　ＳＤ 17【図 66、写真 59】

本遺構は、東区東部のＥ３グリッドに位置する。検出面はＬⅢｃである。本遺構は５号溝跡と重複し、本遺構が古い。東西方向に伸び、西端は５号溝跡に壊されている。東端は調査区外へ続いている。現存する部分の規模は長さ約 1.3 ｍ、幅 110 ～ 150 ㎝前後、深さ約 30 ㎝を測る。底面は南側に向かって深くなる。遺構内堆積土は３層に分層できるがグライ化しており堆積要因は不明である。遺構内から遺物は出土していない。検出層位及び遺構重複状況から、本遺構の時期は平安時代から中世前半期までには機能が終了していたものと推定される。

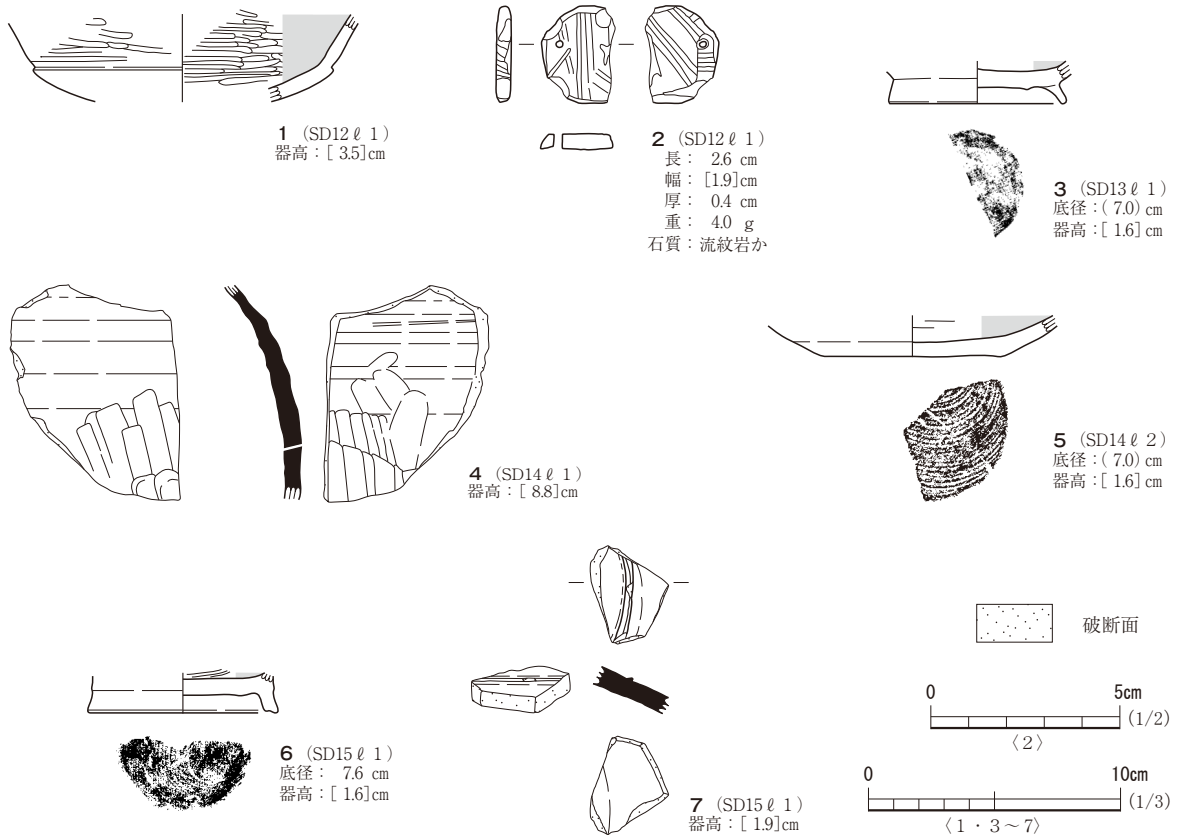


図71　溝跡出土遺物（２）

第６節　小穴群

遺　構【図 72 ～ 74、写真 60・61】

本遺跡では小穴が第１面で 266 基、第２面で 135 基の合計 401 基確認されている。第３面、第４面では確認されていない。小穴番号はグリッドごとに付し、「Ｂ２Ｐ１」のように呼称した。第１面において遺物が出土した小穴及び図示した小穴については、グリッドごとの小穴番号を図 72 に記入した。

検出した小穴の分類としては、４つに大別した。Ａ類は堆積土に貝殻がまとまって混じる小穴である。Ｂ２Ｐ 53 やＣ２Ｐ 11 のように堆積土に貝殻が多量にみられることから、小穴内に廃棄したと推測される。Ｂ類は堆積土に焼土・凝灰岩粒・炭化物等の混入物を含む小穴である。Ｃ２Ｐ１のように遺構内堆積土は単層が多いが、Ｂ３Ｐ５のように柱痕跡を残す堆積状況を確認できるものも存在する。Ｃ類はＡ・Ｂ類以外で柱痕と掘方が明確な小穴である。Ｄ類は柱痕と掘方が明確ではなく、遺構内堆積土は単層である。Ｄ類に分類されるＢ２Ｐ１等で遺物を確認した。Ａ～Ｄに分類された小穴の比率は、第１面ではＡ類：４％、Ｂ類：９％、Ｃ類：21％、Ｄ類：66％、第２面ではＡ類：１％、Ｂ類:10％、Ｃ類: ４％、Ｄ類:85％である。第１面においてはＡ類とＣ類がＢ２・３グリッド、Ｂ類がＢ２・Ｃ２・Ｄ２グリッドに、第２面においてはＢ類がＣ２グリッドに分布が集中する傾向がある。また、Ａ類の小穴の大半は第１面で検出した。第１面において柱痕状の堆積が残る小穴とＡ～Ｄ類の小穴については図 72 に網点で示した。各分類を代表するものを図 73・74 に示した。

第１面では、小穴は西区調査区の中央から南東側及び東区調査区の西壁付近に集中し、西区調査区の中央から北側、東区調査区の中央から東側では散在的になる。特に、掘立柱建物跡や柱穴列跡（第３節）を想定したＢ２・３グリッドに密集する。

第２面では、小穴は西区調査区の南東側及び東側にやや集中するが、建物跡や柱穴列跡の輪郭を確認することはできなかった。それ以外の範囲では小穴の分布は散在的である。

各小穴の径は検出面で直径 10 ～ 60 ㎝前後、深さ５～ 70 ㎝前後を測る。平面形は円形ないし不整円形を呈するものが大半である。

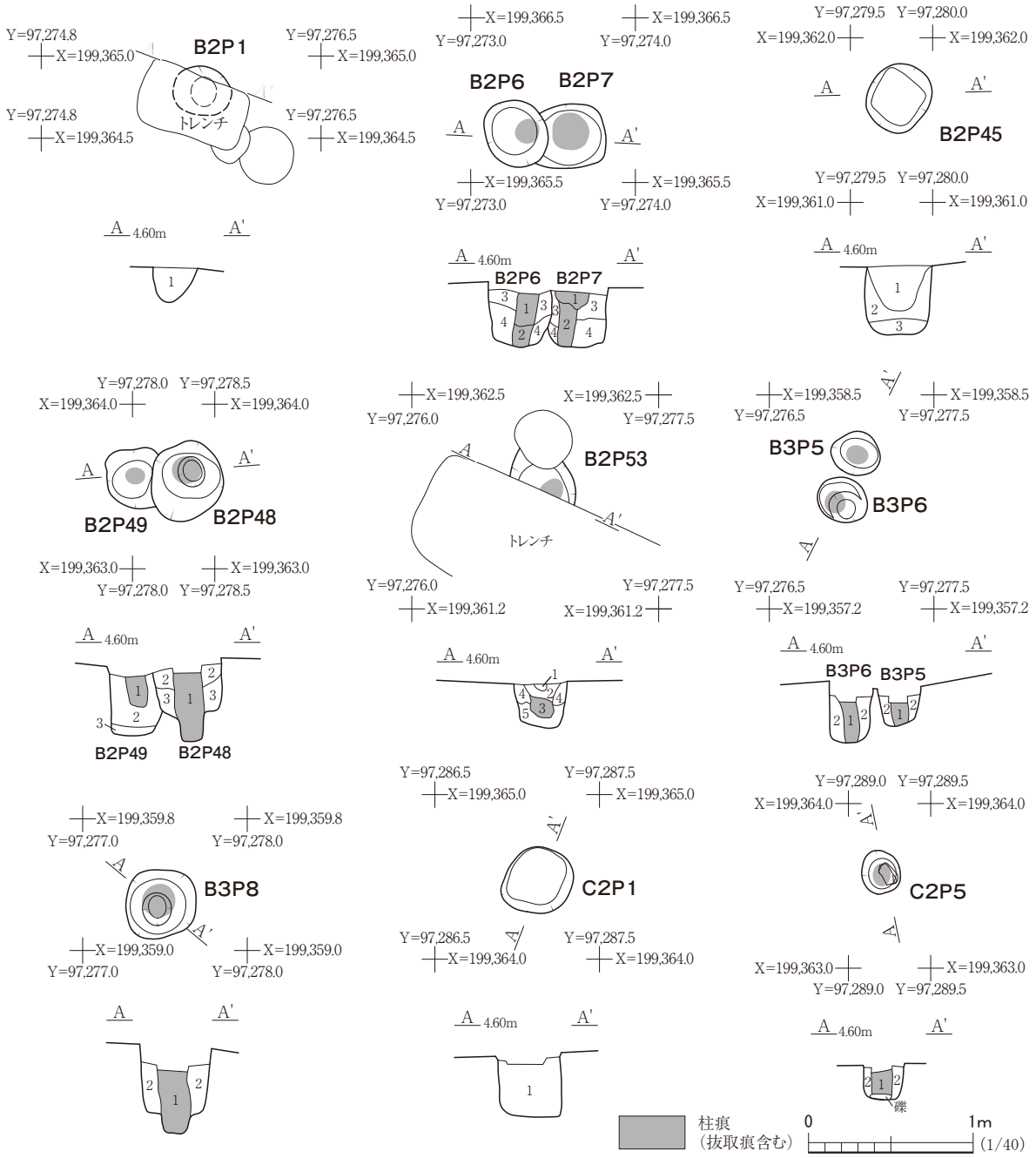
底面に石を確認した小穴は第１面のＣ２グリッドで３基確認した。底面に石を伴う小穴による掘立柱建物跡の柱穴の組み合わせを検討したが、Ｃ２Ｐ５・Ｃ２Ｐ８のように直線的に並ぶものはあるものの、それに対応するものを見つけることはできなかった。

柱痕状の堆積を確認した小穴は第１面で 83 基、第２面で８基の合計 101 基確認した。第１面のＢ２・３グリッドに密集しており、建物跡や柱穴列跡の柱穴と推測されるが、小穴の数が多くかつ密集しているため、建物跡を想定した組み合わせを断定することは困難であった。

遺　物【図 75、写真 85】

小穴堆積土から合計 280 点の遺物が出土している。内訳は、破片数にして土師器片 192 点、須恵

図72　第１面小穴配置図



B2P1堆積土
1　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3（しまりあり）

B2P6堆積土
1　灰黄褐色シルト　10YR4/2（炭化物・灰黄色砂少量）
2　黒褐色シルト　10YR3/2（黄褐色土細粒少量）
3　褐灰色シルト　10YR4/1（灰黄色砂多量）
4　灰黄褐色シルト　10YR4/2（LⅢb類似）

B2P7堆積土
1　灰黄褐色シルト　10YR4/2（炭化物やや多量）
2　黒褐色シルト　10YR3/1（黄褐色土細粒少量）
3　褐灰色シルト　10YR4/1（灰黄褐色砂多量、炭化物微量）
4　黒褐色シルト　10YR3/2（灰黄褐色細砂多量）

B2P45堆積土
1　暗褐色シルト　10YR3/4（炭化物・貝殻少量）
2　にぶい黄褐色シルト　10YR4/3
3　暗褐色シルト　10YR3/3

B2P48堆積土
1　黒褐色シルト　10YR3/2（炭化物少量）
2　暗褐色シルト　10YR3/4（貝殻少量）
3　黒褐色シルト　10YR3/2

B2P49堆積土
1　黒褐色シルト　10YR3/2（炭化物少量）
2　暗褐色シルト　10YR3/4（貝殻少量）
3　暗灰色粘土　N3/（しまりなく粘性強い）

B2P53 堆積土
1　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（LⅢa細粒主体、炭化物少量）
2　黒褐色粘質シルト　2.5Y3/2（LⅢa細粒多量、炭化物微量）
3　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（貝殻主体の混土貝層）
4　暗オリーブ褐色シルト　2.5Y3/3（炭化物微量）
5　黒褐色粘質シルト　10YR3/2（LⅢa細粒やや多量）

B3P5堆積土
1　黒褐色砂質シルト　10YR2/2（炭化物少量）
2　黒褐色砂質シルト　10YR3/2（炭化物やや多量）

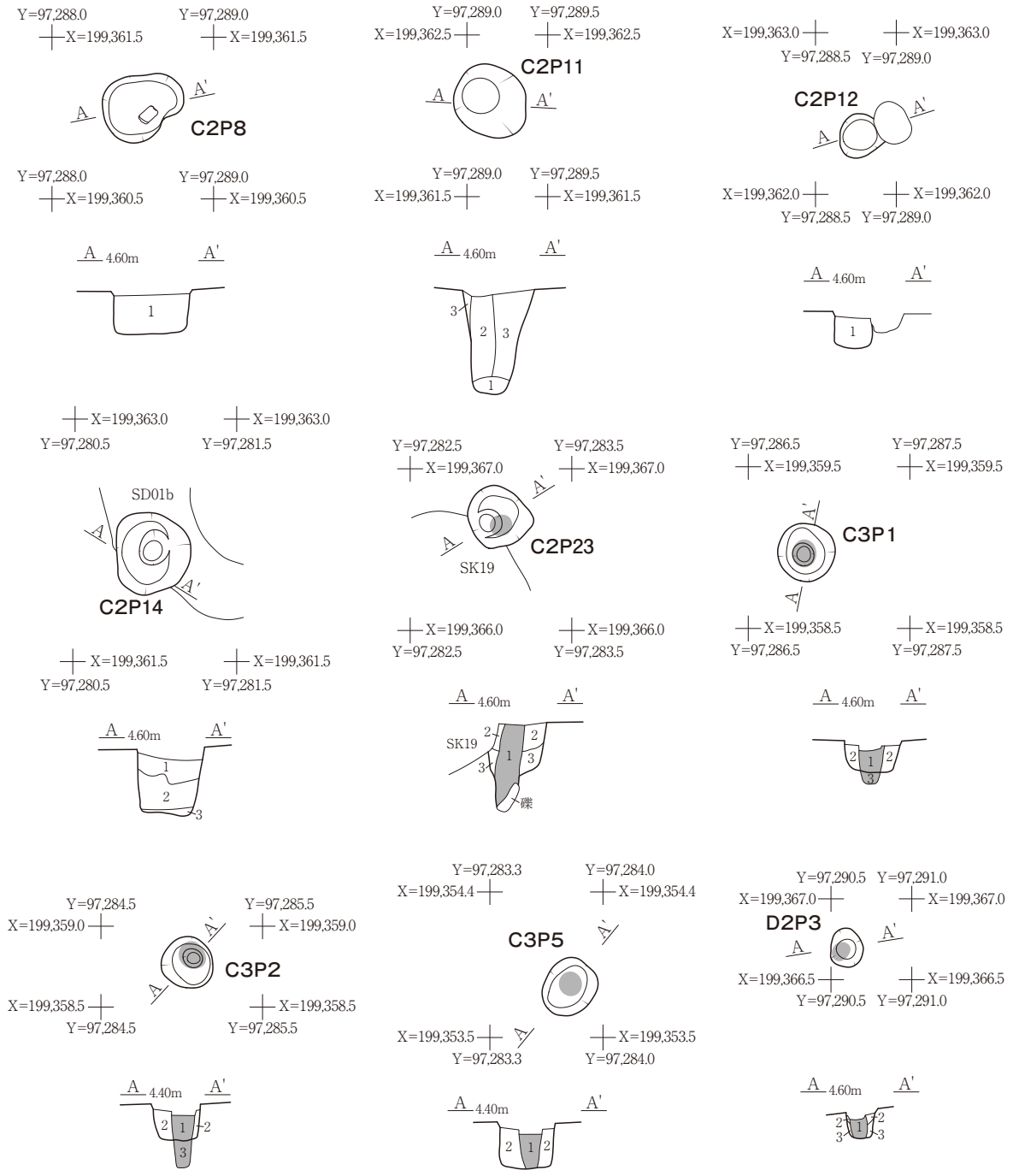
B3P6堆積土
1　褐灰色シルト　10YR4/1（炭化物微量）
2　暗褐色粘質シルト　10YR3/2（LⅢaと暗褐色シルトの混土、しまり強）

B3P8堆積土
1　黒褐色シルト　10YR3/2
2　暗褐色シルト　10YR3/4（貝殻少量）

C2P1堆積土
1　黒褐色砂質シルト　10YR2/3（焼土・炭化物微量）

C2P5堆積土
1　黒褐色粘質シルト　10YR2/2（焼土・炭化物微量）
2　暗褐色砂質シルト　10YR3/4

図73　遺構外小穴（１）



C2P8堆積土
1　黒褐色砂質シルト　10YR2/3

C2P11堆積土
1　黒褐色シルト　10YR3/2
2　黒褐色シルト　10YR3/2（貝殻多量）
3　暗褐色シルト　10YR3/4

C2P12堆積土
1　黒褐色砂質シルト　10YR2/3

C2P14堆積土
1　暗褐色シルト　10YR3/4（貝殻・黄褐色土多量）
2　暗褐色シルト　10YR3/3（貝殻多量）
3　黒褐色シルト　10YR3/2（貝殻少量）

C2P23堆積土
1　黒褐色シルト　10YR3/2（下部粘質）
2　暗褐色シルト　10YR3/4
3　灰黄色シルト　2.5Y6/2

C3P1堆積土
1　黒褐色粘質シルト　10YR2/3
（焼土・炭化物微量）
2　暗褐色砂質シルト　10YR3/4
3　暗灰黄色粘土　2.5Y4/2（しまりなし）

C3P2堆積土
1　暗褐色砂質シルト　10YR3/3
2　黒褐色粘質シルト　10YR2/3
3　暗灰黄色粘土　2.5Y4/2（しまりなし）

C3P5堆積土
1　暗褐色砂質シルト　10YR3/3（炭化物微量）
2　暗褐色砂質シルト　10YR3/4

D2P3堆積土
1　黒褐色粘質シルト　10YR2/3
（焼土・炭化物微量）
2　褐色砂質シルト　10YR4/4
3　暗褐色砂質シルト　10YR3/4

図74　遺構外小穴（２）

器片 15 点、陶磁器片２点、土製品 15 点、石製品 11 点、鉄製品４点、動物遺体等７点、鉄滓 18 点（1,349.4ｇ）、不明遺物 16 点である。

図 75－１は砥石である。長さ 13.4 ㎝、幅４㎝前後の角柱状で、灰白色を呈する泥岩もしくは砂岩製である。４面とも使用され、小口面にも深い溝状の使用痕がある。２～３は石臼の破片である。２は黒褐色を呈するきめの粗い火成岩製である。周縁部には成形のための敲打痕が一面に付いている。下臼の一部とみられ、上臼と接する部分には放射状に３条の溝が確認できる。３は下臼の一部とみられる。暗褐色を呈するきめの粗い火成岩製である。外周部は中央から下部が細くなり、ノミ状工具の加工痕跡が残る。上面の外周部には受け状の突帯が回り、その内側は敲打により平面に仕

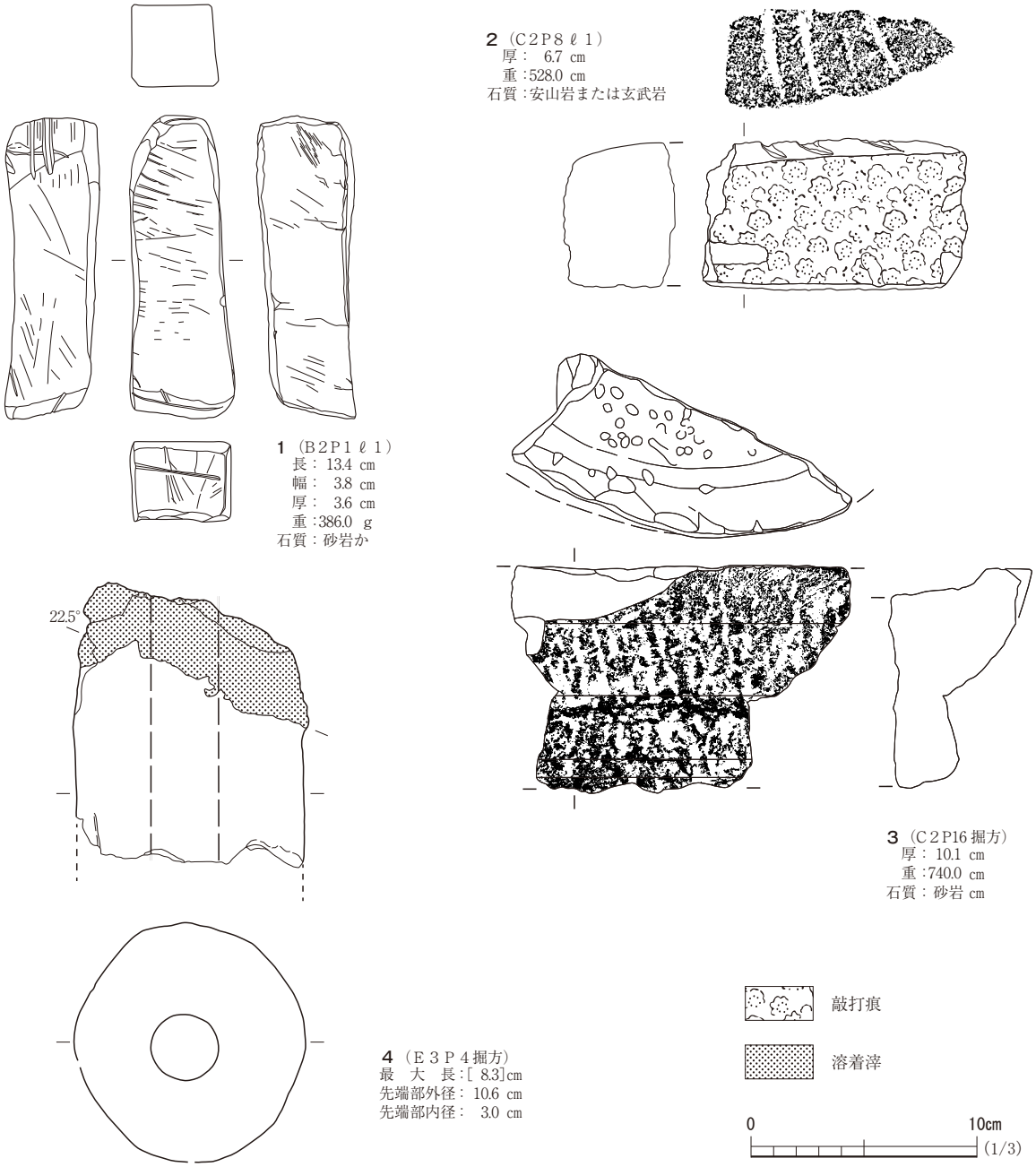


図75　小穴群出土遺物

上げられている。４は羽口で、外径 10.6 ㎝ 、内径は約３㎝を測る。胎土には微量の砂、小石粒、白色粒、雲母、石英を含む。一方の端部には溶結した鉄滓が付着し、内面は橙色に焼けている。

第７節　遺物包含層

東区調査区の西半（Ｃ２、Ｄ１・２グリッド）及び北東部（Ｅ２グリッド）のＬⅢｃの下位において、２つの遺物包含層が確認された。前者を東区西遺物包含層、後者を東区北東部遺物包含層と呼称する。両遺物包含層から合計 825 点の遺物が出土している。内訳は、土師器片 809 点、須恵器片１点、土製品１点、石製品 14 点である。

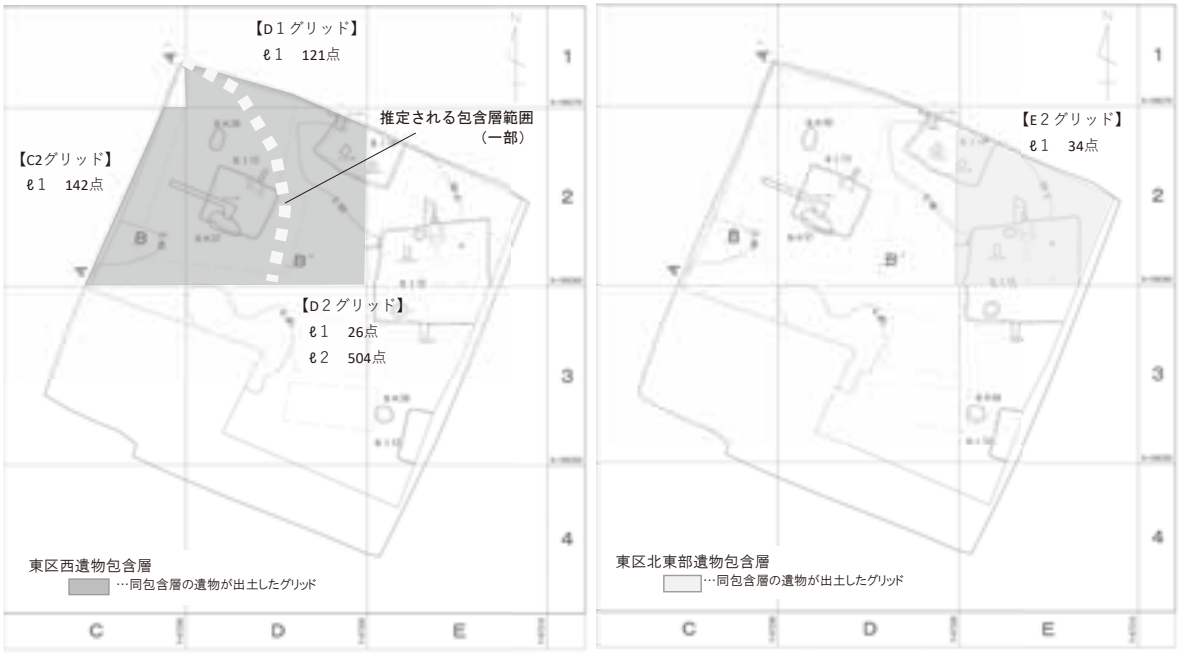


図76　遺物包含層のグリット別出土遺物点数

東区西遺物包含層【図 10・図 77 ～ 79・写真 86 ～ 88】

同遺物包含層の堆積状況は、東区西壁（図 10 Ａ－Ａ’）、東区の西側で深掘りした地点（図 10 Ｂ－Ｂ’）で確認している。遺物包含層はＬⅢｃの下位に存在し、ℓ１・２に大別し、ℓ１はℓ１ａ～ｅ、ℓ２はℓ２ａ・ℓ２ｂに細分した。ℓ１ａ～ｅはいずれも砂質シルトないし砂である。ℓ２ａ・２ｂはいずれも粘質シルトである。ℓ１ａ、１ｂ、１ｄ、１ｅ、２ａには炭化物や焼土、凝灰岩塊、凝灰岩粒といった混入物が含まれる。ℓ１ｂとℓ２ａには互層状に砂層が入り、ℓ２ｂはグライ化している。

部分的な確認であるが、図 10 Ａ－Ａ’断面で南側に、図 10 Ｂ－Ｂ’断面で西側に同包含層が落ち込む様子が看取された。併せて、東区のＣ２、Ｄ２グリッドで、標高 3.40 ｍレベルで凹状の地形

を確認し、遺物が同地形に流れ込んだことにより、遺物包含層が形成されたと推測した。一方、整理過程において、切合関係の観点では遺物包含層より新しい 13 号住居跡と同時期の遺物が下層のℓ１・２から確認され、層位的矛盾が生じた。このことは、土層の類似性のため、現場では認識できなかった複数の遺構または異なる遺物包含層を含んでいた可能性が考えられる。層位的矛盾は残るが、本節ではそれらも含め凹状地形に形成された遺物包含層として報告する。

出土遺物については、大別層位で整理した。層別の出土点数は、ℓ１から土師器片 284 点、須恵器片１点、石製品２点が出土し、ℓ２からは土師器片 491 点、土製品１点、石製品 12 点が出土した。これらの出土遺物のうち、19 点について図示した。なお、土師器については器種を問わず全て非ロクロ成形である。

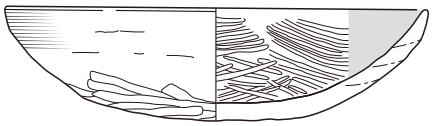
図 77－１～図 78－５・７・８はℓ１からの出土遺物である。図 77－１・２は土師器杯である。１・２ともに底部は全面ヘラケズリが施される。１は体部外面の段はわずかで丸底状を呈する。２の底部外縁には段を持ち、口縁部付近に煤の付着が認められる。ともに内面はヘラミガキ後、黒色処理されている。１・２は古墳時代終末期の所産とみられる。

３は荒い造りの土師器鉢である。外面下半及び内面のほぼ全面に指頭圧痕が認められ、粘土の輪積痕が明瞭に残る。４は土師器甕で、外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のヘラナデが施されている。

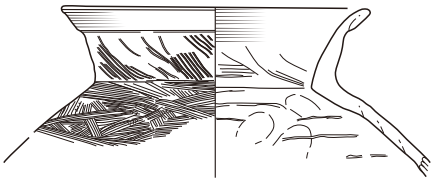
５は複合口縁を持つ土師器壺である。口縁部はヨコナデ、頸部はハケメ後にナデ調整され、体部はハケメのみである。内面の口縁近くはナデ調整されているが、体部には指頭圧痕と輪積痕が残る。６も土師器壺で、複合口縁を持ち、胴の張った丸い器形と思われる。口縁部はハケメの後、ヨコナデ調整される。頸部は縦方向のハケメ、頸部直下の体部上端には横方向のヘラナデが施される。口縁端部の内面は、ユビオサエで成形している。体部下端付近は、内外面ともにヘラケズリ調整されている。５・６は古墳時代前期の所産とみられる。

７は土師器杯で、体部は丸みを持ち、口縁部が内湾する。底面は緩やかな丸底である。外面は口縁部外面にヨコナデ、体部下半にわずかにヘラナデの痕跡が認められるが、ヘラミガキの痕跡は失われている。内面はナデの後、縦方向のヘラミガキが施される。内外面ともに赤彩されていたものとみられる。８も土師器杯である。口縁部は肥厚し直線的に上へ立ち上がり、内面の口縁部下端に稜を持つ。底部は平底になる。体部にはほぼ全面に横方向のヘラミガキが密に施されている。内外面共に赤彩されていたとみられる。７・８は、古墳時代中期の所産とみられる。

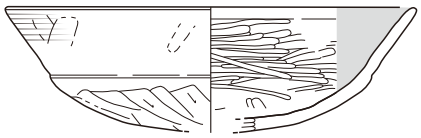
図 78－１～３は口縁部が緩やかに外反し、体部の張り出しがあまり強くない土師器甕である。１の体部外面はヘラケズリ、内面はナデ調整される。外面の一部に赤彩が確認できる。２の体部外面には幅の狭い工具のためか、縦方向のミガキ状の細い調整痕がみられる。内面はヘラナデである。３は小型で、内外面ともにヘラナデされているが、外面にはヘラナデ前にハケメ調整した痕跡が認められる。４は須恵器甕とみられる底部付近の破片である。丸底で､胴部が張り出す器形と思われる。外面底部付近には平行タタキ目、内面には同心円状のタタキ目が認められる。



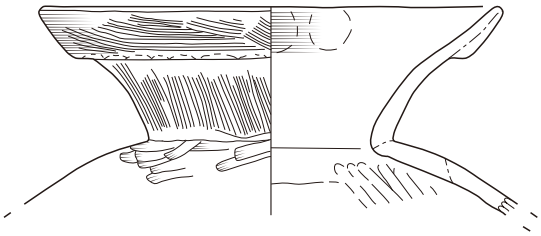
1（Ｄ２東区西遺物包含層ℓ１）
口径：16.8 ㎝
底径：8.1 ㎝
器高：4.5 ㎝

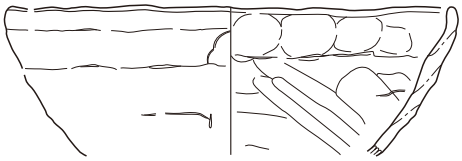


5（Ｃ２東区西遺物包含層ℓ１）
口径：12.0 ㎝
器高：[6.7]㎝

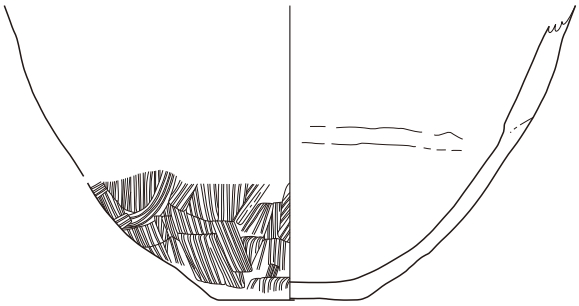


2（Ｃ２東区西遺物包含層ℓ１）
口径：(16.4)㎝
底径：(8.0)㎝
器高：4.6 ㎝

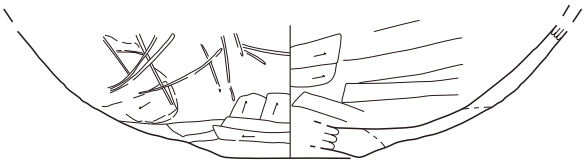




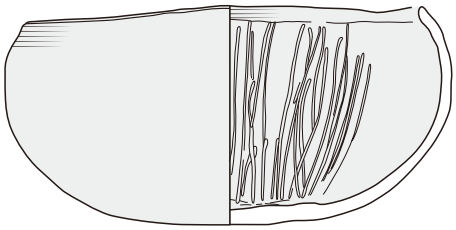
3（Ｃ２東区西遺物包含層ℓ１）
口径：(18.0)㎝
器高：[5.9]㎝



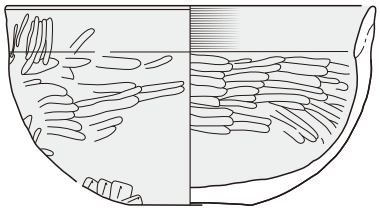
4（Ｃ２東区西遺物包含層ℓ１）
底径：(5.8)㎝
器高：[11.9]㎝



6（Ｃ２東区西遺物包含層ℓ１）
口径：(18.5)㎝
底径：(5.4)㎝
器高：[8.3]㎝
[5.4]㎝



7（Ｄ１東区西遺物包含層ℓ１）
口径：17.0 ㎝
底径：10.6 ㎝
器高：8.7 ㎝



8（Ｄ１東区西遺物包含層ℓ１）
口径：(14.7)㎝
底径：4.7 ㎝
器高：7.9 ㎝

赤彩

0　10cm
(1/3)

図77　遺物包含層出土遺物（１）

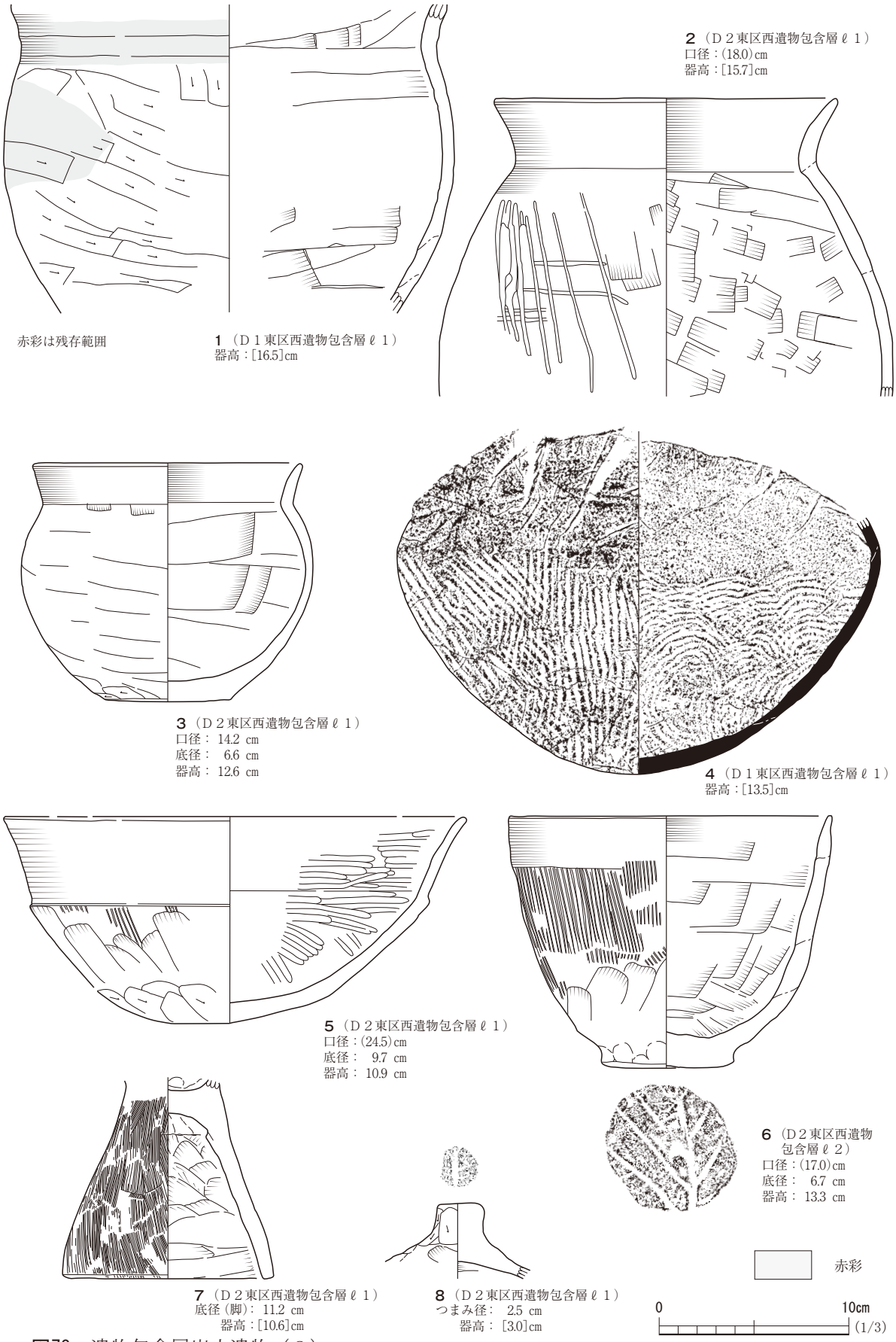


図78　遺物包含層出土遺物（２）

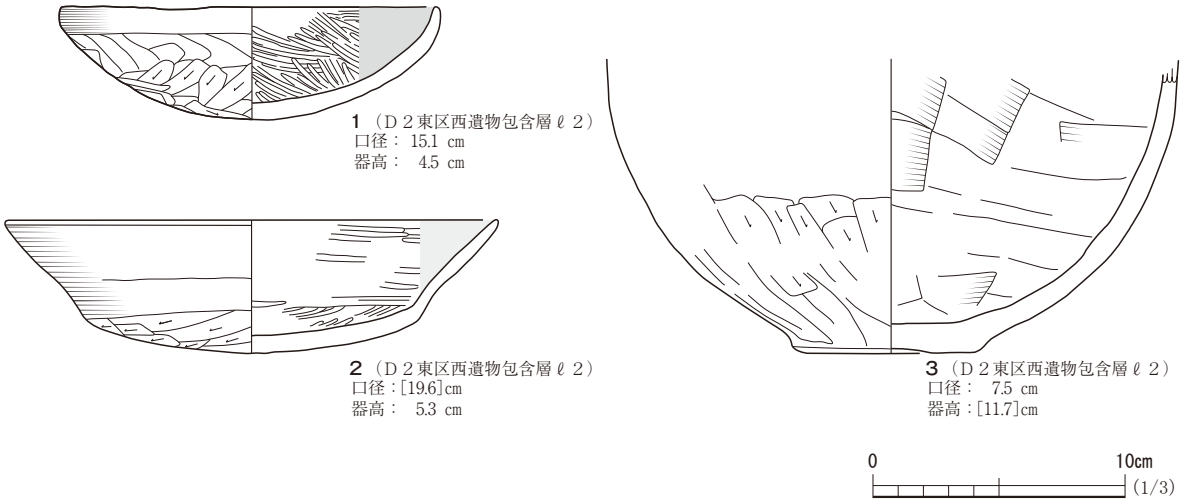


図79　遺物包含層出土遺物（３）

５は大型の土師器杯である。外面中央付近に明瞭な段を持ち、それより下部は縦方向のハケメの後、ヘラナデされている。底部は全面ヘラケズリされ、丸底である。古墳時代終末期の所産と思われる。

７は高杯の脚部である。底径 11.2 ㎝、器面までの高さ 9.6 ㎝を測り大型である。外面は丁寧なハケメ調整、内部はヘラナデが施される。古墳時代前期の所産と思われる。

８は土師器蓋とみられる。つまみ部の周囲はヘラケズリされ、体部はナデ調整の痕跡が認められる。つまみ部の頂部に沈線が通り、裏返して成形した際についた木葉痕かとも思われる。

図 78－６・79－１～３はℓ２出土の資料である。図 78－６は土師器鉢であり、体部外面には縦方向のハケメが施され、下部はヘラナデによってハケメが消されている。底部は約９㎜の高さを持ち、周囲をユビオサエされ成形されている。底面には木葉痕が残る。図79－１の土師器杯は外面下半を全面ヘラケズリしており、稜はなく、緩やかに丸底に繋がる。内面はヘラミガキ後、黒色処理される。２は有段丸底の大ぶりな土師器杯である。底面は全面ヘラケズリ、内面はヘラミガキ後、黒色処理される。いずれも古墳時代終末期の所産と考える。３は土師器甕の底部破片であり、体部下半を縦方向のヘラケズリで調整されている。内面は横方向のヘラナデである。底部は５㎜程度の高さを持つ。以上のことから、異なる遺構を含む可能性があるため断定できないが、古墳時代前期～終末期の範囲に形成された包含層と考えられる。

東区北東部遺物包含層【図 48】

同遺物包含層についてはＥ２グリッドの狭い範囲のみで確認した。遺物包含層の堆積状況は、ＬⅢｃの下位でＬⅢｄ上面に位置し、混入物を含むℓ１ａ・ℓ１ｂが堆積したものである。

遺物はℓ１で整理し、土師器片 34 点が出土しているが図示できるものはない。

第８節　遺構外出土遺物

今回の調査では、遺構外から合計 3,697 点の遺物が出土した。内訳は、土師器片 3,376 点、須恵器片 70 点、陶磁器片 18 点、土製品 22 点（内勾玉１点、土錘８点、羽口４点）、石製品 51 点（内石製模造品１点）、鉄製品 14 点、銅製品（銅銭）１点、鉄滓 108 点（11,978 ｇ）、その他不明品等 37 点である。なお、総数には層位不明な資料も含まれる。

各グリットの出土状況は、Ｃ２・Ｄ２・Ｄ３・Ｅ２グリッドで遺物が集中する。西区に遺構が集中する状況とは異なっている。各グリットの層位ごとの出土数をみるとＬⅢｃまたはＬⅢｄの出土量が大半を占める。分布域が重複する遺物包含層または第３・４面の遺構との関連性を想定できる。

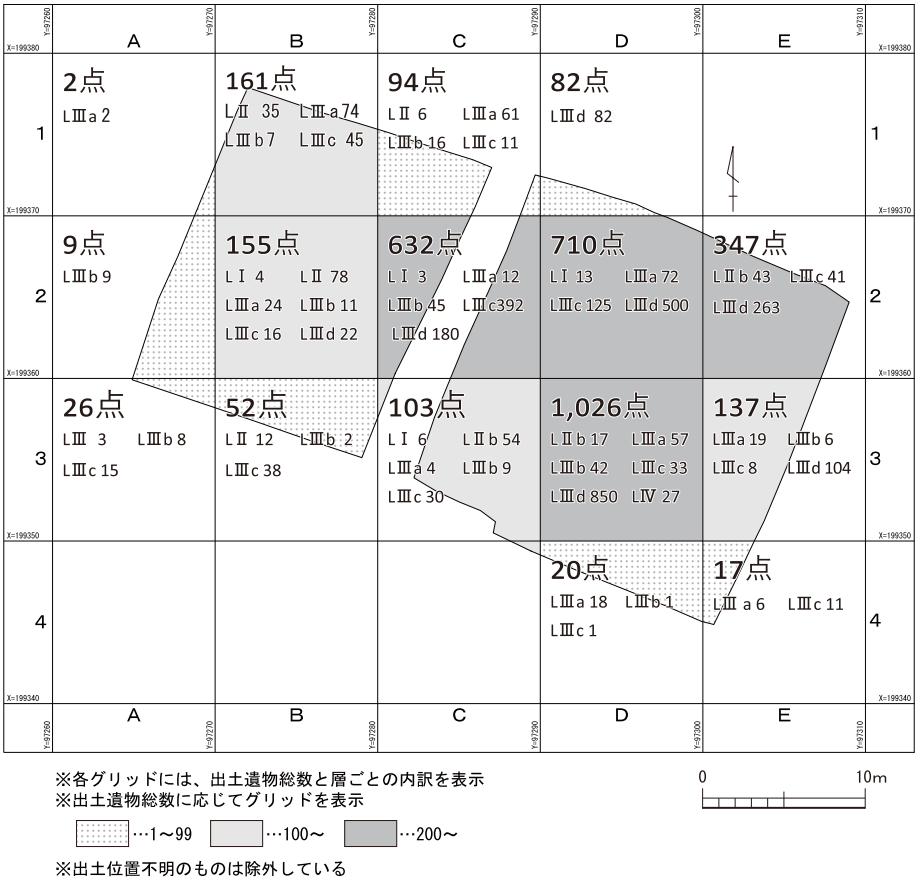


図80　遺構外遺物のグリッド別出土点数

これらの遺構外出土遺物の内、遺存状態の良いものや特徴的なもの 17 点を図化し掲載した。なお、記述については層位別に示す。

ＬⅠ・ＬⅡ出土遺物

ＬⅠから土師器片 32 点、須恵器片１点、鉄製品１点が出土し、ＬⅡからは土師器片 71 点、須恵器片１点、陶磁器片７点、土錘１点、石製品４点、鉄製品３点、鉄滓 37 点（7,858.6 ｇ）、その他

不明品等 30 点が出土している。年代不明遺物も多く、図示できるものはない。

ＬⅢａ・ＬⅢｂ出土遺物【図 81、写真 88】

ＬⅢａからは土師器片 328 点、須恵器片６点、陶磁器片７点、土製品２点、石製品８点、鉄製品２点、鉄滓 19 点（1,595.7 ｇ）、その他不明品等 13 点が出土している。ＬⅢｂからは土師器片 174 点、須恵器片７点、土製品３点、石製品８点、鉄製品１点、銅製品１点、鉄滓 17 点（835.7 ｇ）、不明品４点が出土した。

図 81－１はＬⅢｂで出土した銅銭である。表面は摩滅が著しいが、皇宋通宝（初鋳 1039 年）である。

ＬⅢｃ出土遺物【図 81、写真 88】

ＬⅢｃからは土師器片 682 点、須恵器片 38 点、陶磁器１点、土製品９点、石製品 13 点、鉄製品５点、鉄滓 17 点（899.7 ｇ）、不明品７点が出土している。

図 81－２はロクロ成形の土師器杯である。底面外縁に幅９㎜ほど、沈線状の強いケズリ調整を行い、高台状に作り出している。底面中央は無調整で、糸切痕が残されている。内外面とも二次被熱により劣化が激しく、内面黒色処理の有無は判断できない。３は土錘で、本遺跡出土の他の土錘に比べてやや短めである。外面は強く黒変している。４は環状の鉄製品である。断面は方形とみられ、両端は接合されず１㎜ほどの隙間があり、耳環のような形状を呈する。

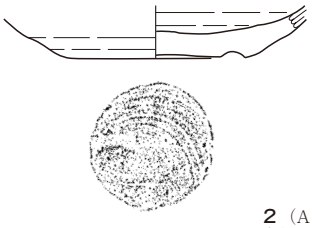
ＬⅢｄ出土遺物【図 81・82、写真 89・90】

ＬⅢｄからの出土点数が最も多く、土師器片 1,957 点、須恵器片 13 点、土製品４点、石製品 15 点、鉄製品１点、鉄滓４点（789.0 ｇ）、不明品 11 点である。

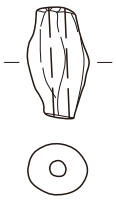
図 81－５はロクロ成形の高台を持つ土師器杯である。器壁はかなり強く外に傾き、皿状の形状を呈する。内外面とも劣化が激しいが、外面はロクロ目のみ確認できる。内面は平滑なことからミガキ及び黒色処理された可能性があるが、煤状の黒色面のみが確認できる。籾痕かと思われる窪みが１箇所確認できる。高台は底面までの高さは 15 ㎜を測る。高台内底面には回転糸切痕が残されている。６は非ロクロ成形の土師器杯である。器壁の傾きが大きく、比較的浅い。外面は口縁部付近にヨコナデ、体部にヘラナデの痕跡が認められる。底面から底部外周にかけて手持ちヘラケズリされ、底面はやや丸みを帯び、外周に段を持つ。７は須恵器杯である。胎土には微量の白色、黒色、石英等の砂粒を含む。全体に自然降灰がかかり、灰オリーブ色を呈するが、口縁部に一部黄褐色を呈する部分がある。底面は回転ヘラキリ後、手持ちヘラケズリされている。６・７は、奈良時代の所産と考えられる。８は非ロクロ成形の杯で、全面が赤彩されている。丸みを帯びた器形で、口縁部のヘラナデ後、全面にヘラミガキが施される。９は非ロクロ成形の土師器壺で、口頸部中段に明瞭な段が認められる。頸部内面にユビオサエの痕跡が認められる。

10 は胴部が丸みを帯びた非ロクロ成形の素口縁壺である。口縁部は強く外反する。体部に横方向のヘラナデ、口縁部にヨコナデの痕跡が認められる。外面全体が被熱により赤化している。11 は小型高杯の杯部と考えられる破片であり、外面にヘラナデ、内面にヘラミガキの痕跡が認められるが、凹凸が多い。12 は手づくね土器で、底径 7.6 ㎝を測る。内面から周縁に粘土をつまみ出しており、

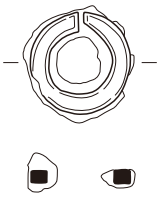
1（B２LⅢb）
外　径：2.4 cm
内孔長：0.9 cm
厚　さ：0.1 cm



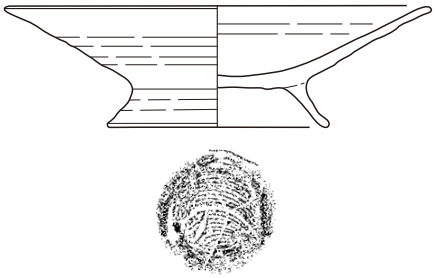
2（A３LⅢc）
底径：　7.0　cm
器高：［2.1］cm



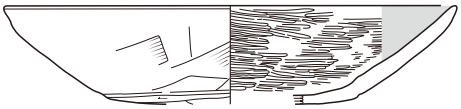
3（B３LⅢc）
長：　3.0　cm
幅：　1.6　cm
厚：　1.3　cm



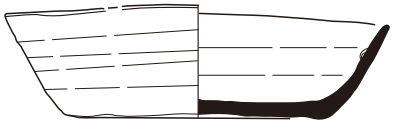
4（E２LⅢc）
外　径：　2.7　cm
内　径：　1.7　cm
厚　：　0.4　cm

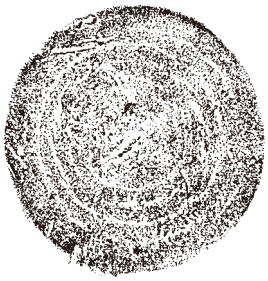


5（D３LⅢd）
口径：(17.0)cm
底径：(　8.8)cm
器高：　4.8　cm

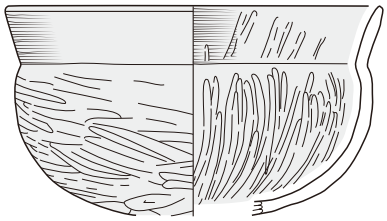


6（D２LⅢd）
口径：(18.0)cm
底径：(10.0)cm
器高：　3.9　cm

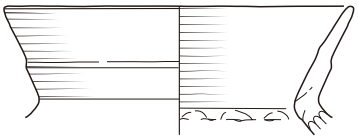




7（D２LⅢd）
口径：　15.3　cm
底径：　10.9　cm
器高：　4.5　cm

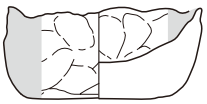


8（D３LⅢd）
口径：(15.0)cm
器高：[　8.3]cm

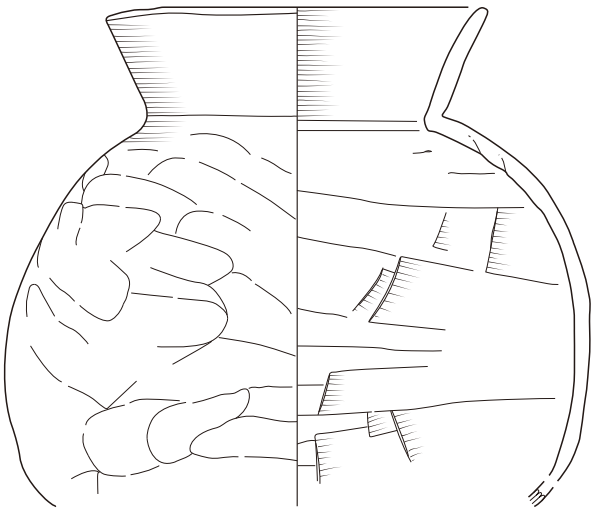


9（D２LⅢd）
口径：(13.9)cm
器高：[　5.1]cm

11（D３LⅢd）
口径：　(8.0)cm
器高：　[2.2]cm



12（D３LⅢd）
口径：　7.6　cm
底径：　6.1　cm
器高：　3.6　cm



10（D３LⅢd）
口径：　15.1　cm
器高：[19.8]cm

赤彩

0　5cm　(1/2)
〈１・３・４〉

0　10cm　(1/3)
〈２・５～12〉

図81　遺構外出土遺物（１）

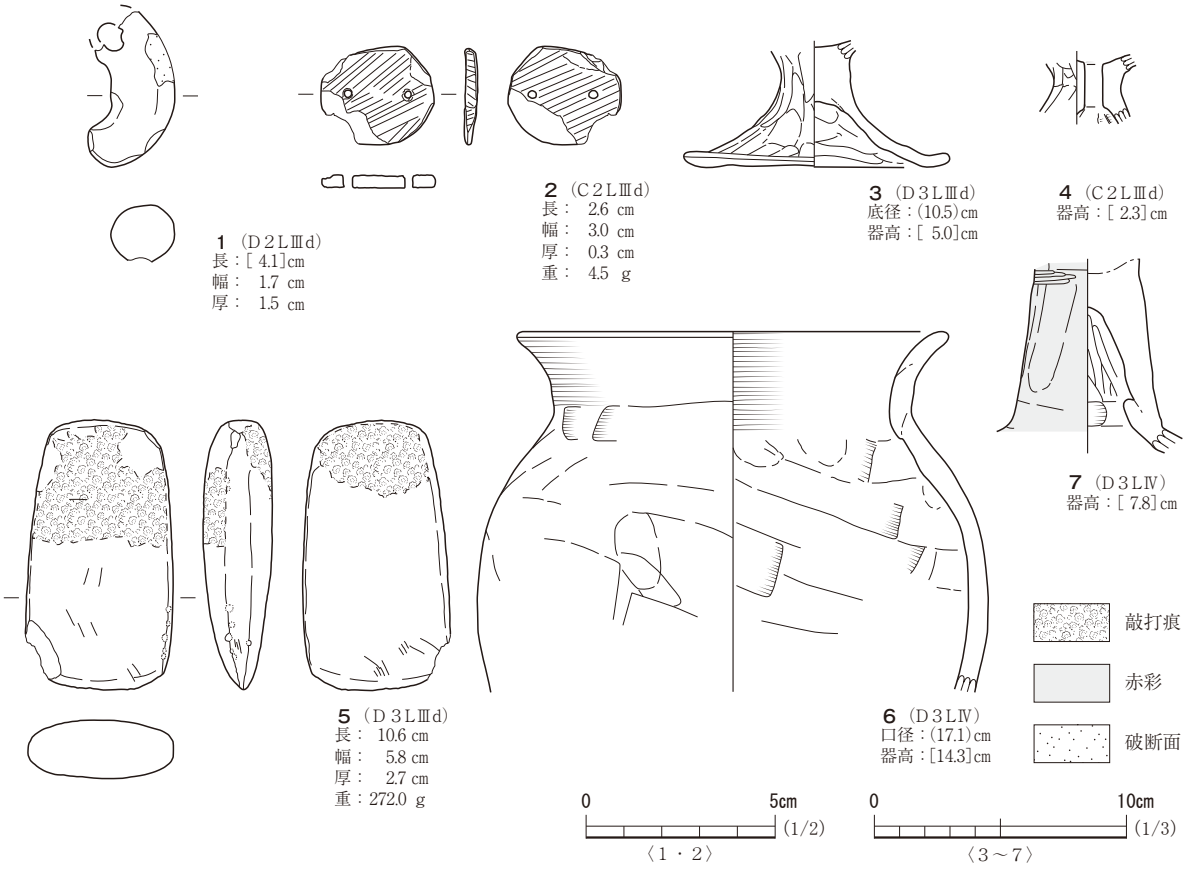


図82　遺構外出土遺物（２）

底部を除く全ての面が強く黒変している。

図 82－１は土製勾玉である。穿孔部から先を欠損している。表面はナデ調整されており平滑だが、穿孔時の粘土のはみ出しがそのまま残る。２は石製模造品の双孔円板である。両面とも研磨され、側面も面取りされている。直径約２㎜の孔が２箇所穿孔されている。図 81－８～12、図 82－１・２については、いずれも古墳時代中期～後期前葉の所産と考えられる。３は土師器高杯の脚部で、一部に杯の内面が遺存している。脚部は大きく開き、端部がやや上に反りあがる形状で、全面にナデ調整されるが、二次調整の痕跡はみられない。４は器台の受部から軸部にかけての破片である。径約 7.5 ㎜の穴が貫通している。表面は劣化が激しいが、ナデ調整されているものとみられる。３・４については古墳時代前期の所産と考えている。５は磨製石斧である。基部を中心とする付近に敲打痕を残す。刃部の一部を欠損するが、ほぼ完形品である。弥生時代の太型蛤刃石斧とみられるが、本遺跡で弥生土器の出土はない。

ＬⅣ出土遺物【図 82、写真 90】

ＬⅣからの出土は土師器片 27 点が出土した。図 82－６は非ロクロ成形の土師器甕である。胴部は丸みを帯びた形状で、頸部から口縁部にかけて外反する。７は土師器高杯の軸部の破片である。内外面とも縦方向のヘラナデ後、一部に横方向のナデ調整が加えられ、丁寧なつくりである。軸部に赤彩されていた痕跡が確認できる。６・７については、いずれも古墳時代中期の所産と考えられる。

第３章　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

大毛内Ｂ遺跡（福島県相馬市大曲字大毛内に所在）は、宇多川右岸の沖積地に位置し、中近世と想定する掘立柱建物跡、９～10 世紀代の集落跡、古墳時代の集落跡などが確認されている。この内、中近世と想定する掘立柱建物跡の柱穴底面に貝殻が詰まっている状況が確認された。そこで、第１面の時代を把握するために放射性炭素年代測定を行う。また、検出された骨・貝類についてその種類を明らかに、また貝類については貝殻成長線分析を行い、当時の動物利用に関する情報を得ることにした。

1. 試料

骨同定を行う試料は、20 号土坑（以下、ＳＫ20)、Ｄ３グリッド検出の５号溝跡（以下、Ｄ３グリッドＳＤ05)、貝層、32 号土坑（以下、ＳＫ32）から検出された骨である。貝同定を行う試料は、Ｂ２Ｐ５、１ａ号溝跡（以下、ＳＤ01ａ）、１号建物跡（以下、ＳＢ01）のＰＡ１・ＰＣ３、Ｃ２Ｐ11、２号溝跡（以下、ＳＤ02)、23 号土坑（以下、ＳＫ23)、29 号土坑（以下、ＳＫ29)、Ｅ４グリッド貝層、31 号土坑（以下、ＳＫ31)、貝層土壌サンプル 1/2・2/2 の合計 12 試料である。骨貝同定の試料について詳細を表２に示す。

表２　大毛内B遺跡の骨貝同定試料一覧

分析項目	トレンチ・遺構	出土層位	年月日	試料重量
骨同定	ＳＫ20	ℓ１	2020/11/13	558.53g
	Ｄ３グリッド ＳＤ05	ℓ１	2020/12/１	1.78kg
	Ｅ４グリッド貝層	ℓ１	2020/12/４	27.66g
	ＳＫ32	底面	2020/12/17	1.26kg
貝同定	Ｂ２Ｐ５	ℓ２	2020/９/29	118.14g
	ＳＤ01ａ	ℓ１	2020/10/２	379.56g
	ＳＢ01 ＰＡ１	貝層	2020/10/６	19.73g
	ＳＢ01 ＰＣ3	ℓ２	2020/10/６	100.39g
	Ｃ２Ｐ11	ℓ１	2020/11/12	400.25g
	ＳＤ02	ℓ１	2020/11/13	36.24g
	ＳＫ23	ℓ２	2020/11/17	180.46g
	ＳＫ29	ℓ１	2020/12/３	20.97g
	Ｅ４グリッド貝層	ℓ１	2020/12/４	186.32g
	ＳＫ31	貝層	2020/12/７	266.97g
	貝層（土壌サンプル1/2）	ℓ１	2020/12/９	334.48g
	貝層（土壌サンプル2/2）	ℓ１	2020/12/９	312.25g

この内、貝同定を行った試料中から、ＳＢ01 のＰＣ３及びＳＫ23 のアサリ右殻について放射性炭素年代測定を行う（表３）。

貝殻成長線分析は、Ｅ４グリッド貝層から検出されるハマグリ左殻２点とアサリ右殻２点、ＳＤ01ａから検出されるアサリ右殻２点、合計４点について実施する。ただし、Ｅ４グリッド貝層ℓ１のハマグリ左殻１点、Ｅ４グリッド貝層ℓ１のアサリ右殻２点は、保存が悪かったため、切断作業に耐えられなかった。そのためＥ４グリッド貝層のℓ１で検出されるアサリ右殻１点、ＳＤ01ａのℓ１で検出されるアサリ右殻３点を追加して分析する。この内、状態が良好なもの２点を選択して成長線の計測を行う（表３）。

表３　大毛内B遺跡の年代測定・貝殻成長線分析試料

分析項目	分析No.	グリッド・遺構	出土層位	年月日	種類	殻長(mm)	殻高(mm)	殻厚(mm)	重量(g)
放射性炭素年代測定	1	ＳＢ01 ＰＣ３	ℓ２	2020/10/６	アサリ右殻	32.98	25.43	10.01	3.06
	2	ＳＫ23	ℓ２	2020/11/17	アサリ右殻	38.85	28.03	12.28	2.96
貝殻成長線	1	Ｅ４グリッド貝層	ℓ１	2020/12/４	ハマグリ左殻	64.42+	53.99	15.75	10.16
	2	Ｅ４グリッド貝層	ℓ１	2020/12/４	ハマグリ左殻	49.54+	42.12	15.34	5.63
	3	Ｅ４グリッド貝層	ℓ１	2020/12/４	アサリ右殻	44.83	35.81	14.16	8.20
	4	Ｅ４グリッド貝層	ℓ１	2020/12/４	アサリ右殻	37.03	27.66	10.46	3.79
	5	Ｅ４グリッド貝層	ℓ１	2020/12/４	アサリ右殻	40.80	31.52	12.48	4.40
	6	ＳＤ01ａ	ℓ１	2020/10/２	アサリ右殻	33.60+	25.26	9.13	2.80
	7	ＳＤ01ａ	ℓ１	2020/10/２	アサリ右殻	33.41	26.46	10.57	3.47
	8	ＳＤ01ａ	ℓ１	2020/10/２	アサリ右殻	40.01	29.44	10.60	3.84

２．分析方法

（１）放射性炭素年代測定

貝は、表面の付着物を取り除いたあと、塩酸でエッチングして保存状態の悪い表面部分を溶解し、中心部分のみを粉砕して分析する。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）はElementar社のvario ISOTOPE cube とIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径１mmの孔にプレスし､測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を用いて、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C)、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-Ⅱ)、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6等)、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。δ^{13}Cは試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウエアは、OxCal4.4（Bronk,2009）である。使用した較正曲線は、Marine20（Heaton et. al.,2020）である。

（２）骨同定

各試料の状態に応じて筆、ブラシ、竹串などを用いてクリーニング作業を実施の後、肉眼で観察を行い、種・部位を特定する。また一部試料においては骨試料表面のクリーニングに加えて、工作用接着剤用いて接合・復元や計測を行うことで、試料の情報を記録する。

（３）貝同定

肉眼及び実体顕微鏡下で観察し、形態的特徴から種・部位を特定する。最も多く検出されたアサリに関しては左殻について殻長を計測する。計測は、デジタルノギスを用いて測定する。なお、貝類の生態等については、奥谷ほか（2000)、奥谷編著（2004）などを参考とする。

（４）貝殻成長線

分析方法及び脂肪季節の推定は、基本的に小池の方法（Koike,1980）、富岡（2003）に準じる。以下、具体的な手法を記す。選択した貝殻の殻長、殻高、殻幅を計測し、乾燥重量を計量する。つぎに殻頂と腹縁の殻高計測点を結ぶ線を引き、そこから約５～10mm 程度離した場所で切断する。樹脂で包埋し、一昼夜放置して硬化させた後、殻頂と腹縁の殻高計測点を結ぶ線で切断し、切断面を研磨（最終研摩#4000）する。0.1N 希塩酸に約５分浸漬してエッチングを行い、水洗する。十分に乾燥させた後、切断面に酢酸メチルを滴下してアセテートフィルムを張り付ける。十分に乾燥するまで数時間放置した後に剥離して貝殻断面のレプリカを作成する。これをスライドグラスとカバーグラスに挟んでプレパラートを作成する。

成長線の観察はメカニカルステージ付きの生物顕微鏡下で観察した。全ての試料について冬輪の数を確認し、最終冬輪から腹縁までの日成長線数を計数する。

採取された貝類は、遺跡の近隣沿岸部で採取されたものである。ハマグリは、水温約 10℃以下になるとほとんど成長が出来ないため冬輪が形成される。福島県相馬市の松川浦の定地水温は、図 83 に示すように４月上旬から 12 月下旬までの 253 日が 10℃を上回り、12 月下旬から翌年４月上旬までの 113 日間が 10℃を下回る。そして、２月の定地水温が最も低い。よって、ここでは、12 月下旬から翌年４月上旬までを冬輪形成時期とし、その中心時期を２月中旬とみなす。

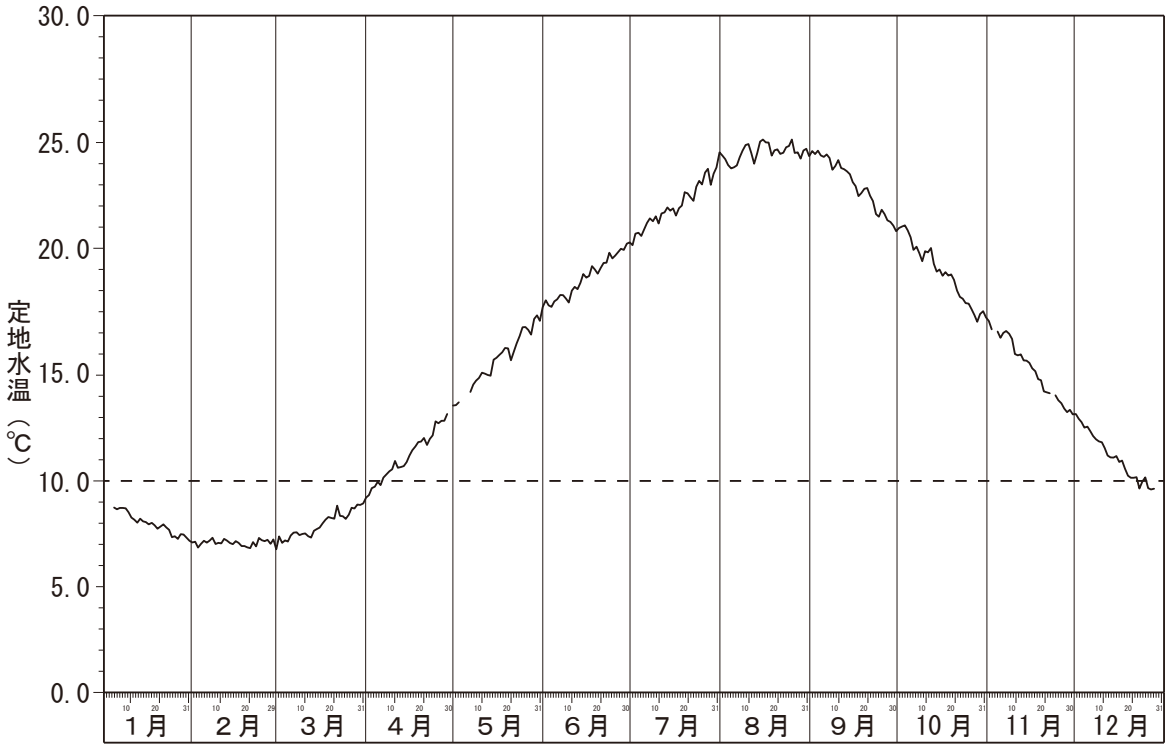


図83　相馬市松川浦のS60～H31平均日別定地水温（℃）
データは、福島県水産海洋研究センターのホームページに基づく
(https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/363616.pdf)

３．結果

（１）放射性炭素年代測定

結果を表４、図 84 に示す。同位体補正を行った値は、ＳＢ 01 のＰＣ３が 990 ± 25BP、ＳＫ 23 が 1135 ± 30BP である。暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。貝に用いるデーターセットは Marine20（Heaton et. al., 2020）を用いる。2 σの値は、ＳＢ 01 のＰＣ３が calAD 1411 ～ 1651、ＳＫ 23 が calAD1287 ～ 1496 である。今回貝を暦年代にするにあたり、リザーバー効果を全海洋の平均値である 500 年として計算している。ただし、アサリは、潮間帯中部から水深 10 ｍの砂礫泥底とされており、陸域の影響も受けている可能性が高い。海洋の影響を小さく見積もれば、リザーバー効果も小さくことから、今回の場合、500 年以下になる可能性がある。すると、貝の年代値は、今回の暦年代より古くなる可能性がある。

表４　放射性炭素年代測定結果

試料	性状	方法	補正年代（暦年較正用）BP	δ ^{13}C（‰）	暦年較正年代				Code No.	
						年代値		確率%		
ＳＢ01 ＰＣ３	貝殻 アサリ	HCl (1M)	990±25 (988±27)	-0.37 ±0.51	σ	cal AD 1445 - cal AD 1575	505 - 375 calBP	68.3	YU-14733	pal-13750
					2σ	cal AD 1411 - cal AD 1651	540 - 300 calBP	95.4		
ＳＫ23	貝殻 アサリ	HCl (1M)	1135±30 (1137±28)	-2.83 ±0.52	σ	cal AD 1333 - cal AD 1441	617 - 509 calBP	68.3	YU-14734	pal-13751
					2σ	cal AD 1287 - cal AD 1496	664 - 454 calBP	95.4		

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68.2%が入る範囲）を年代値に換算した値。
4)HClは、塩酸によるエッチング処理を示す
5)暦年の計算には、OxCal v4.4を使用
6)暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。
7)較正データーセットは、Marine20を使用。
8)較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
9)統計的に真の値が入る確率は、σが68.3%、2σが95.4%である

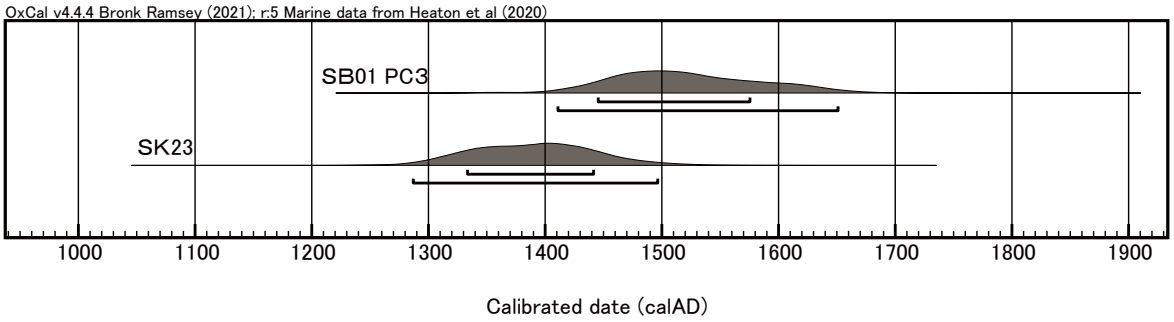


図84　暦年較正結果

（２）骨同定

同定の結果、哺乳綱のウマ、獣類、種部位ともに不明の骨破片を検出する。同定結果を表５に示す。以下、地点毎に結果を示す。

・ＳＫ 20　ℓ１層

獣類の四肢骨破片、種部位不明骨破片を検出する。

・Ｄ３グリッド　ＳＤ 05ℓ１層

種・部位不明の土塊状の骨を検出する。

・貝層　ℓ１層

獣類の四肢骨破片を検出する。

・ＳＫ 32 底面

ウマの歯である。土塊状であり舌側面が露出された状態にある。舌側面表面と歯冠面をクリーニングして同定した結果、左下顎第１前臼歯から第３後臼歯までの歯が並んでいる状態で保存されていることを確認する。なお、試料が破損しているため正確ではないが、松井（2009）を参考に歯冠高を、Driesch（1976）に従い臼歯列長を計測する（表６）。

（３）貝同定

検出された種類は、腹足綱４種類（キサゴ・ウミニナ・フトヘナタリ・ヒラマキミズマイマイ）、二枚貝綱５種類（マガキ・シオフキ・アサリ・ハマグリ・オオノガイ）である（表７）。同定結果及びそこから求めた最小個体数を表８に示す。

全体を通してみると、アサリが同定標本数 187 点と最も多く検出され、最小個体数も 112 個体である。特にＣ２Ｐ 11（最小個体数 26 個体）、貝層土壌サンプル（２試料併せて最小個体数 31 個体）で最も多く検出される。次いでＳＤ 01 a（最小個体数 19 個体）で多い。なお、殻長は、計測できた個体が少ないものの、殻長 30 ～ 35mm の個体が最も多く、35 ～ 45mm 程度の個体も比較的多い（表９・図 85）。

次いで多いのが、マガキが 13 点（最小個体数９個体）、ハマグリが 11 点（最小個体数 10 個体）、キサゴ･キサゴ類が６点（最小個体数６個体）である。その他の種類は、１点検出される程度である。

（４）貝殻成長線

分析を行った試料の中で、Ｅ４グリッド貝層のℓ１で検出されたハマグリ左殻（分析 No. １）、同試料のアサリ右殻（分析 No. ６）の２点について成長線を観察できた（表 10）。分析 No. １のハマグリ左殻は、第５冬輪を確認することができ、第５冬輪から腹縁部までの日成長線数が 61 本である。分析 No. ６のアサリ右殻は、第２冬輪を確認することができ、第２冬輪から腹縁部までの日成長線数が 86 である。

表５　骨同定結果

トレンチ・遺構	出土層位	種類	部位	左	右	部分	数量	備考
ＳＫ20	ℓ1	獣類	四肢骨			破片		
						土塊状		
		不明	不明			破片		
		残渣				土塊状		骨片混り
Ｄ３グリッド ＳＤ05	ℓ1	不明	不明			土塊状		
Ｅ４グリッド貝層	ℓ1	獣類	四肢骨			破片	2	
		残渣						
ＳＫ32	底面	ウマ	下顎第２前臼歯-第３後臼歯	左		土塊状		第４前臼歯萌出直前 第３後臼歯萌出直後
		残渣						

表６　ウマ歯冠高・臼歯列長測定結果

遺構	出土層位	計測部位	計測箇所		計測値(mm)
ＳＫ32	底面	左下顎	歯冠高	第２前臼歯	+63.09
				第３前臼歯	+71.81
				第４前臼歯	+67.76
				第１後臼歯	+81.77
				第２後臼歯	+65.25
				第３後臼歯	+53.67
			臼歯列長	前臼歯列	87.1
				後臼歯列	81.2
				全臼歯列	168.3

表７　検出動物分類群一覧

軟体動物門　Phylum　Mollusca
　腹足綱　Class　Gastropoda
　　前鰓亜綱　Subclass　Prosobranchia
　　古腹足目　Order　Vetigastropoda
　　ニシキウズガイ科　Family　Trochidae
　　キサゴ　*Umbonium costatum*
　　盤足目　Order　Discopoda
　　ウミニナ科　Family　Batillariidae
　　ウミニナ　*Batillaria multiformis*
　　フトヘナタリ科　Family Potamididae
　　フトヘナタリ　*Cerithidea (Cerithidea) rhizophorarum*
　　有肺亜綱　Subclass　Pulmonata
　　基眼目　Order　Basommatophora
　　ヒラマキガイ科　Family　Planorbidae
　　ヒラマキミズマイマイ　*Gyraulus spirillus*
　二枚貝綱　Class　Bivalvia
　　翼形亜綱　Subclass　Pteriomophia
　　カキ目　Order Ostreoida
　　カキ亜目　Suborder　Ostreina
　　イタボガキ科　Family　Ostreidae
　　マガキ　*Crassostrea gigas*
　　異歯亜綱　Subclass　Heterodonta
　　マルスダレガイ目　Order Veneroida
　　バカガイ科　Family　Mactridae
　　シオフキ　*Mactra veneriformis*
　　マルスダレガイ科　Family　Veneridae
　　アサリ　*Ruditapes philippinarum*
　　ハマグリ　*Meretrix lusoria*
　　オオノガイ目　Order Myoida
　　オオノガイ亜目　Suborder　Myoida
　　オオノガイ科　Family　Myidae
　　オオノガイ　*Mya arenaria oonogai*

表８　貝類検出個数及び最小個体数

試料				Ｂ２	ＳＤ01ａ	ＳＢ01		Ｃ２	ＳＤ02	ＳＫ23	ＳＫ29	Ｅ４グリッド	ＳＫ31	貝層		
				Ｐ５		ＰＡ１	ＰＣ３	Ｐ11				貝層		土壌ｻﾝﾌﾟﾙ		
														1/2	2/2	
種類	LR	状態		ℓ２	ℓ１	貝層	ℓ２	ℓ１	ℓ１	ℓ２	ℓ１	ℓ１	貝層	ℓ１	ℓ１	合計
キサゴ		破片	NISP						4						1	5
			MNI	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	1	5
キサゴ類		破片	NISP						1							1
			MNI	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
ウミニナ		破片	NISP												1	1
			MNI	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
フトヘナタリ		破片	NISP						1							1
			MNI	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
ヒラマキミズマイマイ		破片	NISP												1	1
			MNI	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
マガキ	L	破片	NISP		1								4		1	6
	R	破片	NISP	1	1				1			1	2		1	7
			MNI	1	1	0	0	0	1	0	0	1	4	0	1	9
シオフキ	L	破片	NISP	1												1
	R	破片	NISP				1									1
			MNI	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
アサリ	LR	略完	NISP					2								2
	L	略完	NISP		1			5		1		3		3	1	14
		破片	NISP	4	8	2	5	19		5	4	6		12	15	80
	R	略完	NISP		3		1	7		3		4		4	2	24
		破片	NISP	4	16	3	7	11	1	4	1	2	1	8	9	67
			MNI	4	19	3	8	26	1	7	4	9	0	15	16	112
ハマグリ	L	破片	NISP	1				1		2		2				6
	R	破片	NISP		2			2						1		5
			MNI	1	2	0	0	2	0	2	0	2	0	1	0	10
オオノガイ	L	破片	NISP							1						1
			MNI	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
二枚貝網	L	破片	NISP			2						2		1	2	7
	R	破片	NISP											2	2	4
			MNI	0	0	2	0	0	0	0	0	2	0	2	2	8
貝類		破片	重量(g)	9.32	24.84	1.71	14.20	12.71	1.91	4.87	0.41	6.57	14.78	9.35	4.05	105
木片		破片	NISP										1			1
炭化物		破片	NISP	4	3			4				3			14	28
礫			NISP		45					1	4	8	11	27	33	129
土塊			NISP					1								1
残渣			重量(g)	1.38	13.34	1.13	2.29	5.62	0.87	5.20	1.75	3.96	8.66	11.02	10.99	66
			分析量(g)	118.14	379.56	19.73	100.39	400.25	36.24	180.46	20.97	186.32	266.97	334.48	312.25	

注）　NISP：同定標本数　MNI：最小個体数

表９　貝計測結果

試料		種類	左右	殻長(mm)		備考
ＳＤ01ａ	ℓ１	アサリ	左	44.07		
Ｃ２P11	ℓ１	アサリ	左	40.25	+	
		アサリ	左	40.58	+	
		アサリ	左	30.04		
		アサリ	左	30.21		
		アサリ	左	30.54		
		アサリ	左右	34.62		合貝
		アサリ	左右	30.58		合貝
SK23	ℓ２	アサリ	左	38.81	+	
Ｅ４グリッド 貝層	ℓ１	アサリ	左	42.31		
		アサリ	左	36.84		
		アサリ	左	31.41		
貝層(土壌サンプル1/2)	ℓ１	アサリ	左	33.98		
貝層(土壌サンプル2/2)	ℓ１	アサリ	左	28.96		
		アサリ	左	35.95		
		アサリ	左	32.65	+	

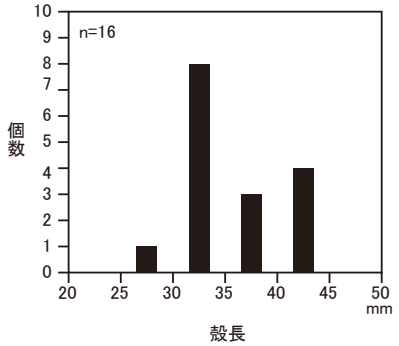


図85　アサリ左殻殻長分布

表10　貝殻成長線分析結果

分析No.	遺構	出土層位	種類	左右	殻長(mm)		殻高(mm)	冬輪数	最終冬輪からの日成長線数	前年冬輪間の日成長線数	殻高(mm)				
											W1	W2	W3	W4	W5
1	Ｅ４グリッド貝層	ℓ１	ハマグリ	左	64.42	+	53.99	5	61	239	50.5	40.4	32.5	21.2	8.8
6	ＳＤ01ａ	ℓ１	アサリ	右	33.60	+	25.26	2	86	286	13.4	25.2			

W：冬輪

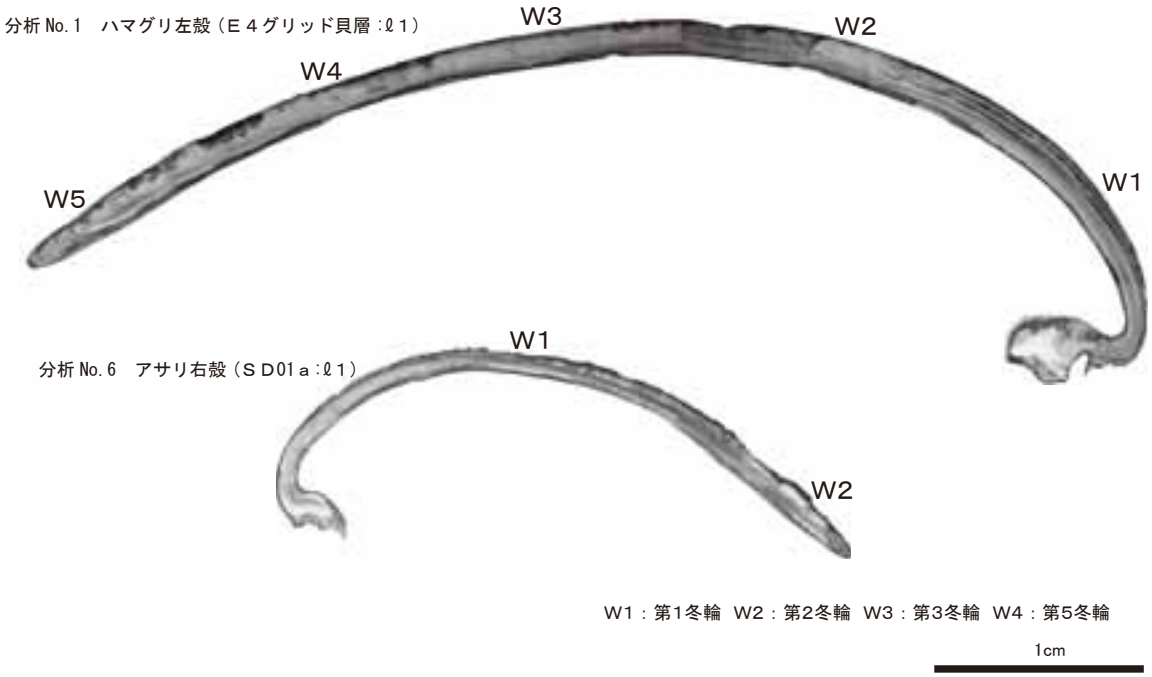


図86　貝殻成長線

４．考察

ＳＫ20、Ｄ３グリッドＳＤ05、貝層の３地点で検出された骨は、保存状態が極めて悪く、詳細な種・部位の同定できなかった。唯一、ＳＫ32底面で検出されたもののみ、ウマの左下顎歯と同定できた。ウマ左下顎歯は土塊状ではあったが、歯の並びがそのまま保存された状態にあることからこれらの歯は同一個体のものである。舌側を上にしていることから、右側が上にして埋まっていたが、右下顎骨が後代の影響によって削剥されたと思われる。他部位も検出されていないことから、もしかしたら下顎骨のみを埋めていた可能性もある。各歯を舌側面側から観察すると、第４前臼歯が明らかに下がっているのが確認され、また未咬耗である。このことから、第４前臼歯は、未萌出の状態であったと判断できる。さらに第３後臼歯は、前位が咬耗しているが、後方が未咬耗であることから、萌出直後であったと判断できる。このような萌出状況から推定すると、3.5～４歳程度の個体と考えられる。また、全臼歯列長を西中川ほか（1991）により下顎骨最大長を計算し、その計算値をウマの体高推定式（林田・山内，1957）に当てはめると体高132cmとなり、中型馬程度の大きさであった可能性がある。

また、検出された貝類の内、ヒラマキミズマイマイは日本各地に分布し、池沼や水田などの水草や石の上に棲息するとされている。周辺に棲息していたものが流れ込んだものと思われる。それ以外の種類は、潮間帯付近に棲息する海産貝類であり、ウミニナ・フトヘナタリが泥底、マガキが汽水性の砂礫底・泥底、キサゴ・シオフキが砂底、アサリ・ハマグリ・オオノガイが砂礫泥底に棲息する。遺跡東側に広がる沿岸部でアサリを主体として、マガキ・ハマグリを中心に採取され、食用

残渣として遺構内等に廃棄されたものと思われる。

また、Ｅ４グリッド貝層のハマグリ左殻が最終冬輪から 61 本、ＳＤ 01 ａのアサリ右殻が最終冬輪から 86 本の日成長線数を読み取ることができた。２月中旬から計算するといずれも採取時期は夏季前半頃となる。ただし、前述した通り、松川浦の定地水温が 10℃を上回る時期が４月上旬であり、この点を考慮すると死亡推定時期は約２ヶ月弱遅くなり、夏季後半～秋季前半頃と考えられる（図 87)。海水温が 20℃近くなる時期と重なり、比較的温暖な季節に貝類を採取していた可能性もある。

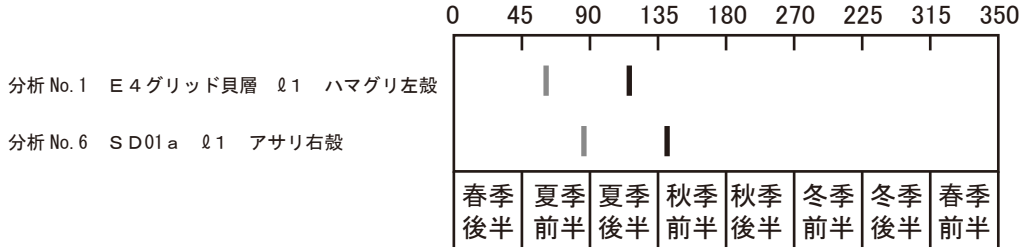


図87　貝類死亡季節

引用文献

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51,337-360.

Driesch,Angela Von Den,1976,A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites. Peabody Museum Bulletins 1,Peabody Museum Press,137

林田重幸・山内忠平,1957,馬における骨長より体高の推定法.鹿兒島大學農學部學術報告,6,146-156.

Heaton T., Koehler P., Butzin M., Bard E., Reimer R., Austin W., Bronk RC., Grootes P., Hughen K., Kromer B., Reimer P., Adkins J., Burke A., Cook M., Olsen J., Skinner L.,2020,Marine20 - the marine radiocarbon age calibration curve (0-55,000 cal BP) . Radiocarbon, 62,779-820.

Koike H., 1980, Seasonal dating by growth-line counting of the clam,Meretrix lusoria. University Museum, University of Tokyo, Bulletin18, 104p.

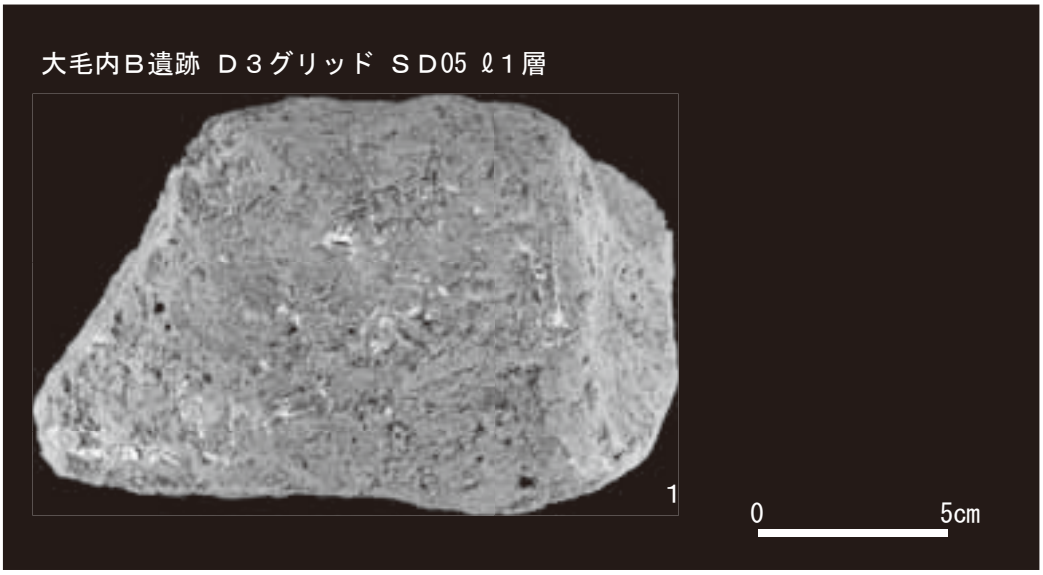
西中川　駿・本田　道輝・松元　光春,1991,古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究.平成２年度文部省科学研究費補助金（一般研究Ｂ）研究成果報告書, 鹿児島大学農学部獣医学科,197p.

松井章,2009,動物考古学.京都大学学術出版会.

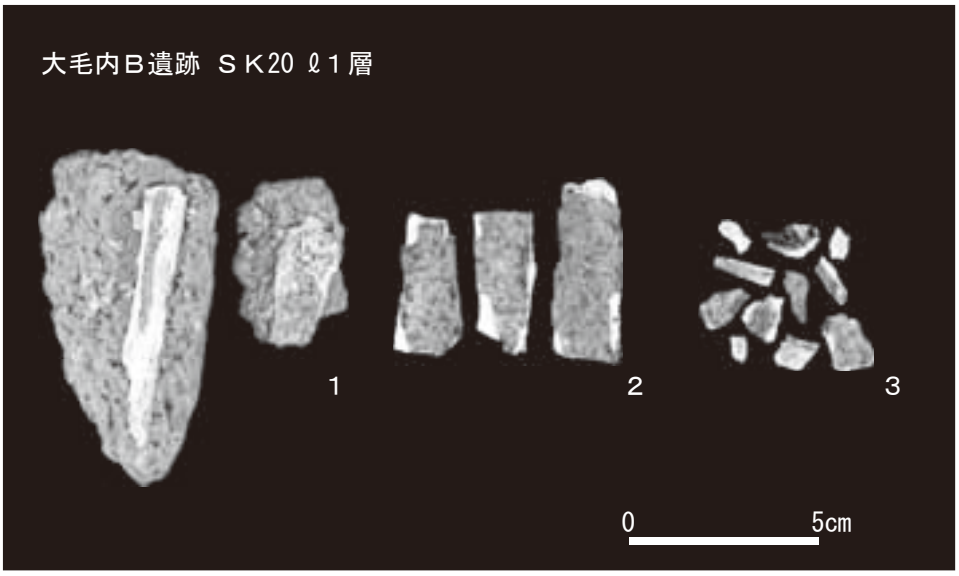
Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

樋泉岳二,1999,干潟町桜井平遺跡・千葉市誉田高田貝塚におけるハマグリ成長線分析.貝塚出土資料の分析-重要遺跡確認調査の成果と課題2-,公益財団法人千葉県教育振興財団文化財センター,p.40-53.

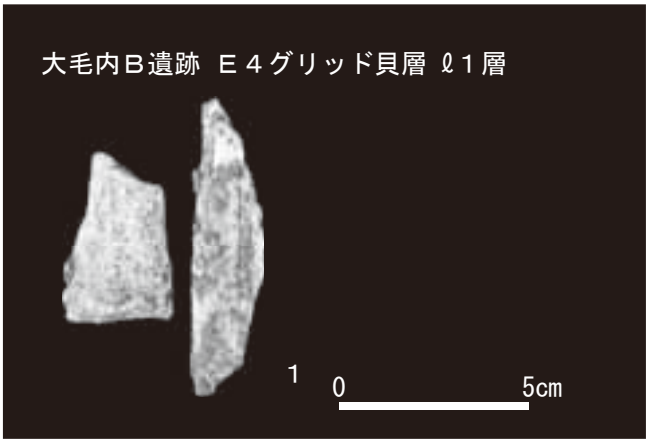
富岡直人,2003,貝殻成長線分析.松井章編著「環境考古学マニュアル」,同成社,237-250.



１．種・部位不明骨（土塊状）

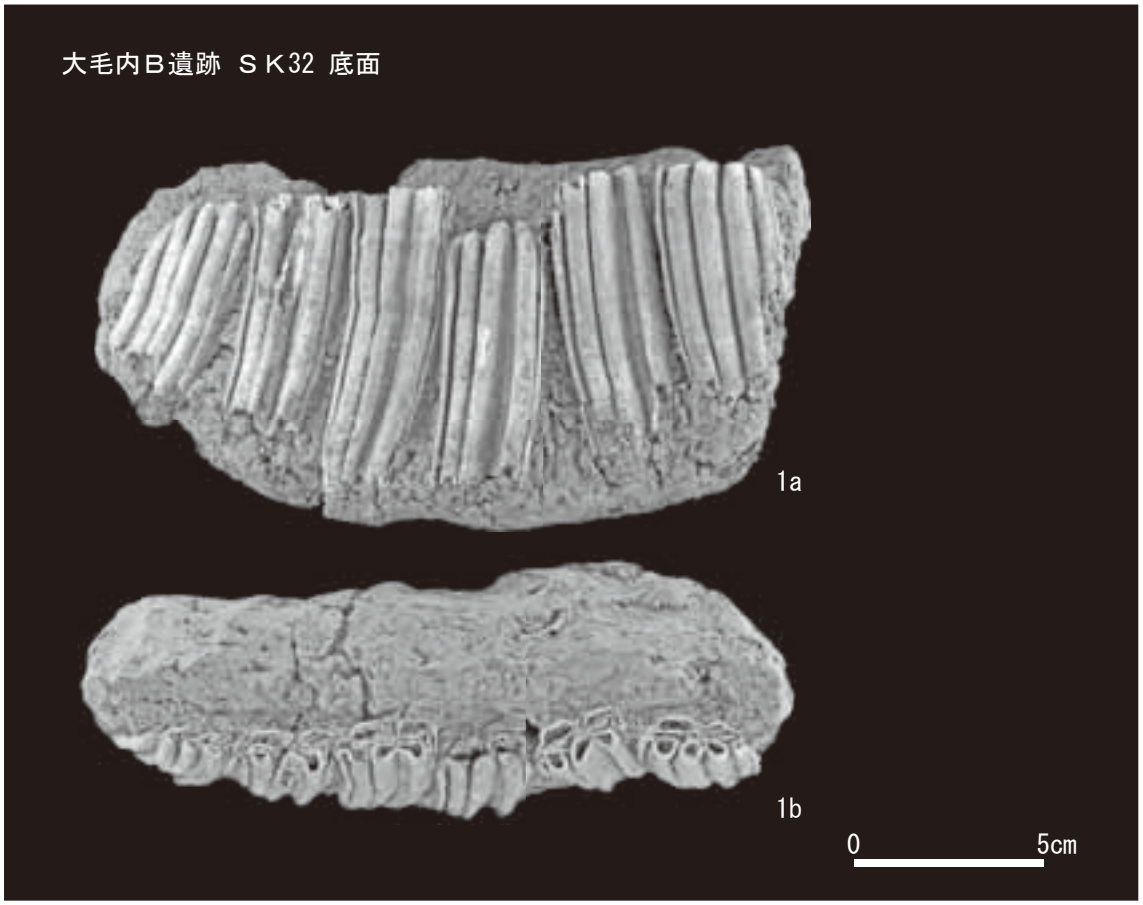


１．獣類四肢骨（土塊状）　２．獣類四肢骨　３．種部位不明骨



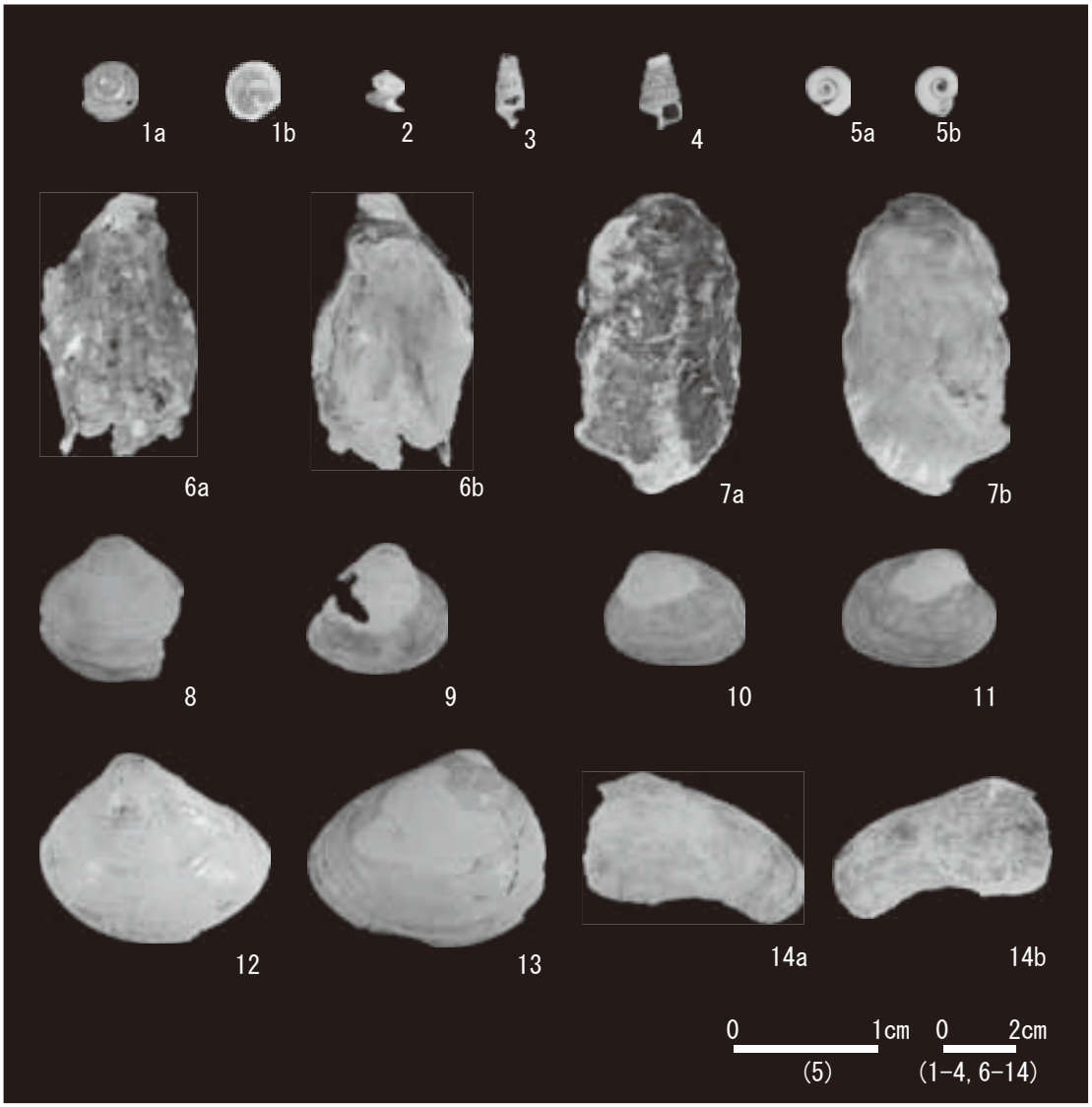
１．獣類四肢骨

図88　出土骨（１）



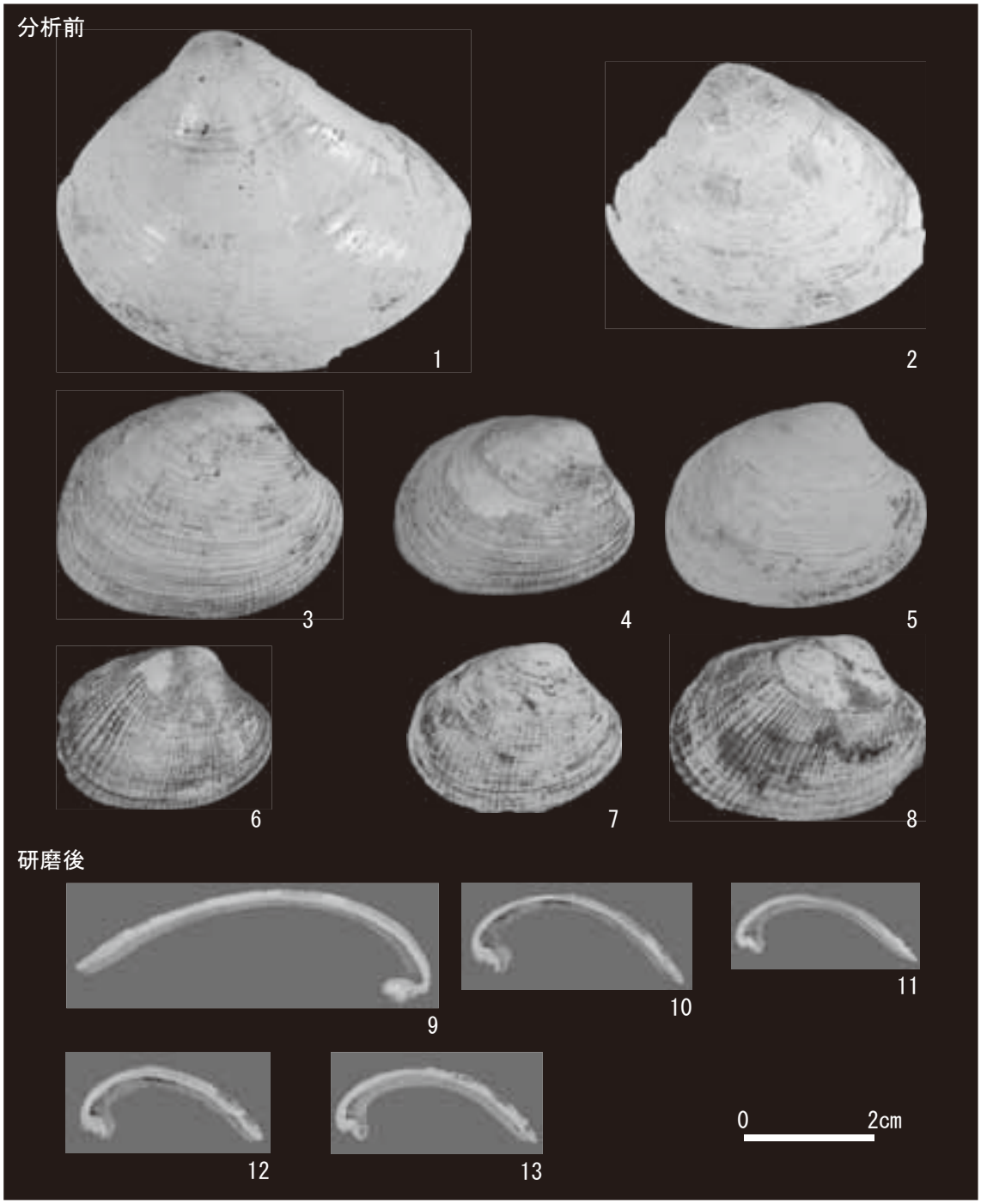
1. ウマ左下顎第２前臼歯－第３後臼歯

図89　出土骨（２）



1. キサゴ殻（ＳＤ02；ℓ１）
2. キサゴ類殻（ＳＤ02；ℓ１）
3. ウミニナ殻（貝層（土壌ｻﾝﾌﾟﾙ2/2）；ℓ１）
4. フトヘナタリ殻（ＳＤ02；ℓ１）
5. ヒラマキミズマイマイ殻（貝層（土壌サンプル2/2）；ℓ1）
6. マガキ左殻（ＳＫ31；貝層）
7. マガキ右殻（ＳＫ31；貝層）
8. シオフキ左殻（B2P5；ℓ２）
9. シオフキ右殻（ＳＢ01　ＰＣ３；ℓ２）
10. アサリ左殻（C2P11；ℓ１）
11. アサリ右殻（C2P11；ℓ１）
12. ハマグリ左殻（Ｅ４グリッド貝層；ℓ１）
13. ハマグリ右殻（C2P11；ℓ１）
14. オオノガイ左殻（ＳＫ23；ℓ２）

図90　腹足綱・二枚貝綱



1. 分析No. 1ハマグリ左殻（Ｅ４グリッド貝層ℓ１）分析前
2. 分析No. 2ハマグリ左殻（Ｅ４グリッド貝層ℓ１）分析前
3. 分析No. 3アサリ右殻（Ｅ４グリッド貝層ℓ１）分析前
4. 分析No. 4アサリ右殻（Ｅ４グリッド貝層ℓ１）分析前
5. 分析No. 5アサリ右殻（Ｅ４グリッド貝層ℓ１）分析前
6. 分析No. 6アサリ右殻（ＳＤ01ａℓ１）分析前
7. 分析No. 7アサリ右殻（ＳＤ01ａℓ１）分析前
8. 分析No. 8アサリ右殻（ＳＤ01ａℓ１）分析前
9. 分析No. 1ハマグリ左殻（Ｅ４グリッド貝層ℓ１）研磨後
10. 分析No. 5アサリ右殻（Ｅ４グリッド貝層ℓ１）研磨後
11. 分析No. 6アサリ右殻（ＳＤ01ａℓ１）研磨後
12. 分析No. 7アサリ右殻（ＳＤ01ａℓ１）研磨後
13. 分析No. 8アサリ右殻（ＳＤ01ａℓ１）研磨後

図91　貝殻成長線試料

第４章　総　括

本遺跡では、竪穴住居跡 16 軒、掘立柱建物跡１棟、柱穴列跡３列、土坑 41 基、溝跡 17 条、小穴 401 基、遺物包含層２箇所を調査した。また、古墳時代前期、古墳時代中期～後期初頭、古墳時代終末期、平安時代、中世の遺物が遺構内から出土している。ここでは、前章までに記述した事実報告を基に、各時期の遺構と遺構内出土遺物についてまとめる。

第１節　遺物について

古墳時代前期

16 号住居跡と 40 号土坑・東区西遺物包含層から出土している。遺物はいずれも土師器である。土師器には高杯、鉢、壺、甕、有孔鉢、小型丸底鉢がある。16 号住居跡から出土の遺物は、いずれも（青山 2010）による編年の塩釜２式新相段階と判断される。同段階の小型丸底鉢は、「底部の厚みが増し、底面に小さなくぼみを持つ凹底を通有の特徴としている」（青山 2010）指摘に合致し、他の器種についても同段階に位置づけられるものと相違がない。

古墳時代中期～後期初頭

15 号住居跡、１・12 号溝跡、東区西遺物包含層から土師器、石製品が出土している。土師器には杯、鉢、壺、甕、ミニチュアがある。石製品には砥石と石製模造品（剣形・双孔円板）がある。

15 号住居跡からは多量の土器が出土し、なかでも手づくね成形によるミニチュア土器が多くみられ、砥石は置砥石と考えられる大型のものが出土している。同住居の土師器は、（青山 1999）による編年の様相Ⅲ段階である引田式中相と判断される。同時期の特徴である、「杯Ａ　半球形の体部に短く外反する口縁をもつ。底部は丸底と平底がある。」「杯Ｂ　半球形の体部と内彎する口縁部からなる。体部と口縁部の境に稜線を持たない。底部には丸底と平底がある。」（青山 1999）の２器型を確認した。一方、次の段階の特徴である扁平な半球状の体部や垂直に立ちあがる口縁部をもつ器型の杯も存在するため、一時期に限定することができず、後期初頭までの幅で考えたい。他の器種及び石製模造品についても同様の時間幅におさまる。

古墳時代終末期

13・14 号住居跡、13 号土坑、東区西遺物包含層から出土している。遺物には、土師器、須恵器がある。土師器には杯、鉢、壺、甕がある。須恵器には甕がある。住居出土遺物の総量は他の時期の遺物量に比べ少ない。

13・14 号住居跡では、時期の異なる土器が堆積層上層から確認されるが、（菅原 2007）による編年のＶ期、栗囲式（中）に位置づけられると考える。土師器は、有段丸底杯の器種は確認されなかったが、須恵器模倣・金属器模倣の平底の杯が出土し、甕は長胴でケズリを施した器種と小型の甕

が確認でき、同時期の範疇と考えられた。

遺物包含層を含むその他の遺構からは、大型の土師器杯や有段丸底杯が出土しており、出土状況は良好ではないが、栗囲式の時期に相当する土師器を確認した。

平安時代

１・２・３ａ・３ｂ・４～11 号住居跡、９～36・39 号土坑から出土している。遺物には、土師器、須恵器、赤焼土器、陶磁器、土製品、石製品、鉄製品、銅製品がある。土師器には杯、壺、甕がある。須恵器には甕がある。赤焼土器には杯がある。陶磁器には白磁椀がある。石製品には砥石がある。土製品には羽口、土錘がある。石製品には砥石がある。鉄製品には鉄鏃、刀子がある。銅製品には椀がある。

各遺構の出土土器は、ロクロ成形の内面黒色処理を施した土師器杯とロクロ成形で黒色処理を施さない杯である赤焼土器を主体とする、９～10 世紀の土器である。各住居跡出土土器を（木本 1990）による編年から位置づけると、杯の口径に対して底径が大きい２ａ段階またはやや深い器形の杯となる２ｂ段階に６・７号住居跡出土土器、杯・甕ともに非ロクロ成形の土師器が少数となる３段階に３ｂ・８号住居跡出土土器、赤焼土器が出現し、非ロクロ成形の甕が再度現われる４段階に２・３ａ・４・９号住居跡出土土器が該当する。

また、７号住居跡出土の内外面にミガキと黒色処理された高台杯（図 30－１）や５号住居跡出土の銅椀（図 25－１）などは仏具としての役割が想定され、同じく５号住居跡出土の白磁（図 25－３）は今回の調査で確認された集落の中では特異な存在である。

中世

23 号土坑、５・７号溝跡から出土している。遺物には陶磁器、銭貨がある。

陶磁器はいずれも小片であるが、常滑・信楽・在地の各窯で生産されたと想定される。５号溝跡から出土した常滑焼の甕（図 70－５）は（中野 1995）編年４～６型式に位置づけられ、12 世紀後半から 13 世紀の年代が想定される。７号溝跡から出土した信楽焼の茶壺（図 70－７）は、詳細は不明であるが（木戸 1995）編年から 15 世紀前半を下限と考えられる。５号溝跡出土の甕（図 70－４・６）は、宮城県白石窯出土甕と口縁部形状が類似するが胎土が黒く色調が異なり、周辺地域の在地窯産とみられる。年代は白石窯の例から 12 世紀末から 14 世紀前後と想定される。

鉄滓

１～８・13 号住居跡、１号建物跡、４・13・15・18・21・29・30・36 号土坑、１～５・14・15 号溝跡、小穴から出土し、遺構外も含めると約 24kg の重量を測る（表 11）。製鉄・鍛冶に関係する遺構は確認されていないが、多くの遺構から鉄滓が出土し、大半は埋土堆積過程に混入したものと考えられる。一方、13 号土坑の様に集積された状況で出土した鉄滓も存在した。出土した鉄滓は、炉壁・炉内滓・炉底滓・流出滓・椀形滓・再結合滓を確認し、椀形滓・再結合滓が主体を占める。椀形滓・炉内滓の存在から、鍛冶関連遺構が存在したと想定され、これらは精錬鍛冶と推測される。

表11　鉄滓集計

単位:g

出土位置			炉壁	炉内滓		炉底滓	流出滓	椀形滓	再結合滓	分類不明	計	【参考】羽口	
遺構	グリッド	層位		磁性あり	磁性なし							個数(点)	重量(g)
SI01		01		46.3	2.9						49.2		
		02		9.3							9.3		
		04		15.3	11.7			109.9			136.9	1	50.9
		05						32.8			32.8		
	計			70.9	14.6			109.9			228.2	1	50.9
SI02		01			5.7						5.7		
SI03a		01		5.6							5.6		
		02		21.1				183.4			204.5		
		03a	49.5								49.5		
	計		49.5	26.7				183.4			259.6		
SI03b		03b		7.3				30.2			37.5		
SI04		01			18.7						18.7		
		02						76.8			76.8		
		03		12.3	8.3						20.6		
	計			12.3	27.0			76.8			116.1		
SI05		01			4.0			22.2			26.2		
		02	12.1	29.1	12.5			67.2			120.9		
		03	40.9	12.0	38.6			108.9	28.2	107.7	336.3		
	計		53.0	41.1	55.1			198.3	28.2	107.7	483.4		
SI06		01	4.1	21.4	21.0	29.9	12.9	16.2	23.1	7.9	136.5		
SI07		01	27.7							55.6	83.3		
		02	7.2	7.0	51.6			111.2			177.0		
		03		7.0							7.0		
		04	92.0	6.7	19.9						118.6		
		04(床直)						69.6			69.6		
	計		126.9	20.7	71.5			180.8		55.6	455.5		
SI08		01	13.0								13.0		
		02		6.1							6.1		
		04			3.3						3.3		
	計		13.0	6.1	3.3						22.4		
SI13		01b								75.6	75.6		
		02						85.0			85.0		
		02上面								41.4	41.4		
	計							85.0		117.0	202.0		
SB01	PA2	掘方		10.5							10.5		
SK13		01	10.3		171.4			142.9			324.6		
		03上面						361.5	2,469.1	46.1	2,876.7		
		底面	73.9		170.4			61.6	28.1		334.0		
	計		84.2		341.8			566.0	2,497.2	46.1	3,535.3		
SK15		03				202.1					202.1		
SK18		03				618.5				13.6	632.1		
SK21		01					6.2				6.2		
SK29		01						229.8			229.8		
SK30		01						352.0			352.0		
SK36		01				11.5					11.5		
SD01a		01			39.3			424.5			463.8		
SD01b		01				284.1					284.1		
SD02		01		27.6	0.1			89.0	10.0		126.7		
SD03		01			50.1			970.5			1,020.6		
SD04		01						1,376.0			1,376.0		
SD05		02						336.2			336.2		
SD14		01						145.8			145.8		
SD15		01						213.2	0.8		214.0		
A2P1	A2	03				212.5					212.5		
A2P3	A2	掘方				226.2					226.2		
B2P3	B2	01				7.1					7.1		
B2P5	B2	掘方			11.9						11.9		
B2P7	B2	掘方				27.7					27.7		
B2P13	B2	掘方					8.4				8.4		
B2P19	B2	掘方				77.0					77.0		
B2P24	B2	掘方			14.4						14.4		
B2P39	B2	掘方						21.7			21.7		
B3P7	B3	01				76.4					76.4		
	B3	02				40.4					40.4		
	計					116.8					116.8		
B3P38	B3	掘方						16.2			16.2		
C2P15	C2	掘方			14.6						14.6		
C2P16	C2	掘方				367.5					367.5		
C2P25	C2	掘方	45.0								45.0		
C3P1	C3	01		19.6							19.6		
C3P4	C3	01								31.5	31.5		
D1P1	D1	01			9.5						9.5		
遺構外	A1	LⅢa		4.9	56.1						61.0		
	A2	LⅢb		7.7							7.7		
	A3	LⅢb						49.4			49.4		
		LⅢc			5.9						5.9		
	B1	LⅡ				2,367.0					2,367.0		
		LⅡ						3,034.0			3,034.0		
		LⅢa	4.3								4.3		
		LⅢc						40.1			40.1		
	B2	LⅡ	12.5	25.3	26.4		16.5	1,462.9		8.0	1,551.6	2	70.6
		LⅢa						1,111.9			1,111.9		
		LⅢb						18.5			18.5		
		LⅢd		5.3							5.3		
	B3	LⅡ		11.8							11.8		
		LⅢc		18.8	78.0			43.6			140.4		
	C1	LⅡ						28.8			28.8		
	C2	LⅢb							7.7		7.7		
		LⅢc		29.8		193.1		95.8			318.7		
	C3	LⅢb	17.8								17.8		
	D1	LⅢd								41.9	41.9		
	D2	LⅢa		3.2				13.1			16.3		
	D3	LⅡb					26.9	161.4			188.3		
		LⅢd				91.8		650.0			741.8		
	D4	LⅢa								20.9	20.9		
		LⅢc						132.7			132.7		
	E2	LⅡb	66.1					611.0			677.1		
		LⅢc(検出面)										1	25.7
	E3	LⅢa						234.1			234.1		
	E4	LⅢc						261.9			261.9		
	グリット不明	LⅢa(検出面)							147.2		147.2		
		LⅢb			118.4	81.2		535.0			734.6		
	計		100.7	106.8	284.8	2,733.1	43.4	8,484.2	154.9	70.8	11,978.7	3	96.3
	合計		426.9	344.3	964.7	4,914.0	70.9	13,922.3	2,714.2	450.2	24,099.9	4	147.2

第２節　遺構について

本遺跡では、第４面（ＬⅢｅ）で古墳時代前期、第３面（ＬⅢｄ）で古墳時代中～後期初頭・終末期、第２面（ＬⅢｃ）で平安時代・中世前半、第１面（ＬⅢａ）で中世後半の遺構を確認した（図 92）。ここでは各時期の主要な遺構の特徴を概観する。

古墳時代前期

本遺跡で最初に人々の営みの痕跡を確認できたのは、古墳時代前期からである。第４面において、竪穴住居跡１軒（16 号住居跡）と土坑１基（40 号土坑）を確認した。

（１）　竪穴住居跡

16 号住居跡は１辺５ｍ前後を測る。カマドは存在せず、地床炉が存在した可能性がある。遺構内堆積土の状況から、住居の上屋構造の燃焼もしくは住居廃絶に伴う祭祀儀礼を想定したが、堆積土がグライ化した状況からは断定できなかった。住居に伴う貯蔵穴や主柱穴、貼床の有無についても遺構内堆積土のグライ化及び湧水が著しいため、確認できなかった。

遺跡としては、調査区の北または北東方向に当該期の住居跡などの遺構が分布している可能性がある。

古墳時代中期～後期初頭

第３面において竪穴住居跡１軒（15 号住居跡）を確認した。

（１）　竪穴住居跡

１辺６ｍ前後を測る比較的大型の住居跡である。カマドのソデ部については、整形した凝灰岩を３個ずつ並べて、これに粘土を貼り付けて構築している。燃焼部に据えられた支脚には土師器の杯が被せられていた。時期は異なるが、須賀川市高木遺跡の古墳時代後期に属する住居跡において、支脚に小型の鉢が被せられていた事例があり、カマド廃絶時の祭祀行為とされている（(公財）福島県文化振興財団 2019）。また、住居跡南部からは手づくね土器が多数出土している。手づくね土器自体は祭祀用具としての用途が想定されている（篠原 2008）。南相馬市五畝田Ｂ遺跡の古墳時代後期に属する１号住居跡のカマド燃焼部からは土製模造鏡と共に手づくね土器が出土しており、カマド廃絶時の祭祀行為とされている（(公財）福島県文化振興財団 2017）。カマドからの出土ではないものの、カマドまたは住居廃絶時の祭祀行為が想定される。貼床は確認できなかった。主柱穴については、床面がグライ化しているためか１基を確認したのみである。貯蔵穴は住居跡南西部に１基、左ソデ部の西側で１基を確認した。

当該期の遺構は 15 号住居跡のみだが、本来は古墳時代前期と同様に調査区外に当該期の遺構が広がるものと推測する。

古墳時代終末期

第３面において竪穴住居跡３軒（12 ～ 14 号住居跡）、土坑２基（37・38 号土坑）を確認した。

（１）　竪穴住居跡

検出した住居跡３軒は、平面形は方形を基調とし、重複や作り替えはない。13・14 号住居跡は軸線方向がほぼ並行し、同時期に存在していたと考える。これらの住居跡と 12 号住居跡は軸線方向が異なることから、存在していた時期に若干の時間差があると推測される。規模は１辺 3.5 ～４ｍ前後を測り、古墳時代中期の 15 号住居跡と比べると、いずれも小型の住居跡であった。

カマドは 13・14 号住居跡で確認した。カマドの位置は､13 号住居跡が北壁中央からやや東寄りに、14 号住居跡が西壁に位置する。カマドの規模は、古墳時代中期と比べて、ソデが短く、燃焼部の幅がやや広い傾向にある。いずれの住居跡でも貼床や主柱穴、貯蔵穴は確認していない。また、14 号住居跡のカマド左ソデ部付近の床面から出土した土師器は伏せ置かれた状態を想定し、住居廃絶時に祭祀行為が行われたと推察する。

平安時代～中世前半

第２面において竪穴住居跡 11 軒（１～ 11 号住居跡)､土坑 17 基（７～ 14・29 ～ 36・39 号土坑）、溝跡 13 条（５～ 17 号溝跡)、小穴 135 基を確認した。当該期の住居跡は古墳時代に遺構が展開しなかった西区調査区を中心に展開している｡遺構は､古墳時代終末期の集落が廃絶後に堆積するＬⅢｂ・ＬⅢｃを掘り込んで作られている。

（１）　竪穴住居跡

検出した住居跡 11 軒は、９号住居跡以外が西区調査区内にまとまって位置している。重複関係にあるものは２・５号住居跡、４・６号住居跡、４・８号住居跡、７・８号住居跡である。３ａ・３ｂ号住居跡では建て替えが行われていた。２・４号住居跡及び５・８号住居跡は軸線方向がほぼ並行し、同時期に存在していたと考える。これに加え、カマドの位置についても５・８号住居跡においてはいずれも北壁中央からやや東寄りの位置にあるという点で共通する。住居跡の規模は、大きさが判明しているものを対象にすると１辺３～４ｍ前後の小型のもの（２・３ｃ・４・５・８号住居跡）と、１辺５～６ｍ前後の大型のもの（３ａ・３ｂ・６・７号住居跡）に二分される特徴がある。出土遺物の様相から大型の住居跡は９世紀代におさまる一方で、小型の住居跡は９世紀後半～ 10 世紀前半期が大半であり、小型の住居跡と比べて大型の住居跡の方が比較的古い傾向にある。

カマドは６軒で確認した。このうち、東壁に位置するものは３軒（３ｃ・９・11 号住居跡)、西壁に位置するものは１軒（６号住居跡)、北壁に位置するものは２軒（５・８号住居跡）存在する。床面に貼床を施す事例は２・３ａ・３ｂ・８号住居跡で確認した。貼床は床面全面ではなく、部分的に施されている。確実に主柱穴といえるものは確認していない。５号住居跡で確認した貯蔵穴の堆積土中からは入れ子状に完形の杯が出土し、住居廃絶に関わる祭祀行為などが想定される。

（２）　土坑

検出した土坑 17 基は、西区調査区に 12 基存在し、分布にやや偏りがある。出土遺物の様相などから当該期の土坑は平安時代～中世前半を中心に構築されたものと推測する。多くは性格が不明であるが、10・14 号土坑は何らかの焼成を行った痕跡があり、また 29 号土坑は井戸であったと考

えられる。13 号土坑については類例として、南相馬市天化沢Ａ遺跡（(公財）福島県文化振興財団 2016）で検出された２号鍛冶炉跡（10 世紀代）が挙げられる。この遺構は炉跡と２基の土坑が一体をなす遺構であり、土坑内からは椀形滓や粒状滓、鍛造剥片が出土している。13 号土坑近くでは炉跡を検出していないが、同様の遺構である可能性がある。また、32 号土坑からは馬の左下顎歯が出土しており、馬の埋葬や骨の廃棄が推測される。

（３）　溝跡

溝跡は主に東区調査区の北東部から南東部にかけて構築され、西区調査区を中心に分布する住居跡とは対照的な分布を呈する。出土遺物の様相などから当該期の溝跡は平安時代～中世前半を中心に構築されたものと推測する。重複関係から、まず東西方向を主軸とする８・17 号溝跡が構築されたものと考えられる。８号溝跡は、幅が最大 1.9 ｍと当該期の溝跡のなかでは大規模なものであり、東西方向でＬ字形を成している。調査区外のため確認できていないが、８号溝跡に区画され、東区調査区の北または北東方向には今回の調査区で検出した遺構とは異なる様相の遺構が広がっている可能性も考えられる。一方、南北方向を主軸とし、ほぼ並行する５・７・12・14・15 号溝跡は、ほぼ同時期に機能していたことが推定され、５・７号の供伴土器から中世前半の年代が考えられよう。また、５－14 号溝跡間及び７－12、15 号溝跡間はそれぞれ 9.5 ｍ前後を測り、幅が近似する。このことは、５、14 号溝跡及び７、12、15 号溝跡はそれぞれ同時期に機能していたものと推測される。重複関係から７－12、15 号溝跡→５－14 号溝跡の変遷が想定される。これらの溝跡は道路の側溝跡や区画溝の性格を有する可能性があるが、今回の調査ではその性格を明らかにすることはできなかった。その他の溝跡との新旧関係については不明である。

中世後半

第１面において掘立柱建物跡１棟（１号建物跡)、柱穴列跡３列（１～３号柱穴列跡)、土坑 21 基（１～６・15 ～ 28、41 号土坑)、溝跡４条（１～４号溝跡)、小穴 266 基を確認した。

（１）　掘立柱建物跡

建物跡は西区調査区中央付近に１棟存在する。建物の機能について言及はできないが、西側に南北の主軸方向が概ね一致する１号柱穴列跡が存在することを踏まえると、屋敷を構成する建物の１つであった可能性がある。なお、柱穴の中には貝殻を底部に敷くもの、柱痕に貝殻が流入するものがある。柱穴底面及び柱痕に貝殻を混入させる行為について機能的理由は不明である。類例も管見の限りでは見つからず、本遺跡を特徴づける遺構の１つといえる。なお、１号建物跡のＰＣ３で出土した貝殻に対して放射性炭素年代測定を行った結果、１σ歴年代範囲において 1445-1575cal ＡＤであり、15 世紀半ばから 16 世紀後半の年代範囲を示している。

（２）　柱穴列跡

柱穴列跡は３列検出した。いずれも西区調査区の中央部及び西部に位置する。１号柱穴列跡については長軸方向が概ね一致する１号建物跡と関連して機能していたと考える。

（３）　土坑

検出した 21 基の土坑の性格については多くが不明だが、18 号土坑は井戸と推測される。また、当該期の小穴と同様、堆積土に貝殻が多く混入する土で人為的に埋め戻し、または貝殻を廃棄した土坑が一定数存在する。

（４）　溝跡

溝跡は１・２号溝跡が西区調査区北東側、３号溝跡が東区調査区北西側、４号溝跡が東区調査区北東側に位置し、１・２号溝跡が重複関係にある。１・２号溝跡については２号溝跡→１号溝跡の順に変遷する。１・２号溝跡と３号溝跡は方向が概ね一致しているため、同時期に存在していたと考える。４号溝跡についても３号溝跡などと方向が近いため、同時期に存在していた可能性はある。１～３号溝跡を境に小穴分布状況が西では密集し、東はまばらとなる傾向がある。このことから、区画溝や道路側溝跡等の機能を想定することもできよう。また、いずれの溝跡も南端が調査区内で終結する特徴がある。

（５）　小穴

西区調査区を中心に小穴を多数検出した。柱痕跡が残る小穴も多かったが、密集しており、建物跡としての構造を確認することは困難であった。建物や柱穴列の作り替えが繰り返された可能性がある。また、１号建物跡同様、小穴内から貝殻が出土するものが一定数存在する。柱穴底面に粉砕したもの、柱を抜き取ったところに入れたもの、堆積土全体に混入したものに形態が分類される。いずれも意図的な行為があったものと推測される。

第３節　まとめ

本遺跡では、今回の調査で古墳時代前期から中世まで概ね５時期にわたる複合遺跡であることが判明した。ここでは、時期ごとに総括し、まとめとする。

１. 古墳時代前期

調査区北東部に第４面で確認した竪穴住居跡１軒と土坑１基が構築される。調査区の北及び北東方向の微高地や沖積地に同時期の遺構が存在する可能性はあるが、今回の調査では明らかにできなかった。

２. 古墳時代中期～後期初頭

東区調査区北東部に第３面で確認した竪穴住居跡１軒が構築される。住居内では支脚上に土師器を被せる状況や手づくね土器が多数出土することから、カマドまたは住居廃絶に関わる祭祀行為が想定される。出土遺物から住居跡は古墳時代中期～後期初頭に構築されたと判断した。本遺跡南側の梅川を挟んだ段丘には古墳時代初頭の方形周溝墓と考えられる周溝及び古墳時代前・中期の円墳または前方後円墳の周溝が検出されている寺内遺跡が存在する（株式会社パスコ 2017）。これは段丘上に支配者層墓域が存在し、梅川を挟んだ北側の平野部に本遺跡を含む集落が営まれていたことを示すと考えられる。

３. 古墳時代終末期

東区調査区の第３面で確認した竪穴住居跡３軒と土坑２基が構築される。出土遺物から栗囲式期の集落跡と推測する。なお、出土遺物から同時期の住居跡が７世紀代を中心とする一方、８世紀代の遺構は確認できず、遺物も希薄であるため、８世紀代には集落が一旦途絶えたと考えられる。当該期の集落の廃絶要因は特定できないが、基本土層では梅川や宇多川の氾濫による堆積が推測され、集落の廃絶後にＬⅢｂ・ＬⅢｃが形成されていることから、水害が集落存続に影響を与えた可能性も考えられる。

４. 平安時代～中世前半

第２面で確認した竪穴住居跡 11 軒、土坑 17 基、溝跡 13 条、小穴 135 基が構築される。住居跡は古墳時代の住居跡と分布域が異なり、調査区西側に分布が集中する。一方、調査区東側には同時期の溝跡が主体となる。出土遺物の様相から住居跡は９世紀から 10 世紀前半に機能し、調査区西側を中心に集落が形成されていた。溝跡は、中世前半に比定されるものと確実な年代が判別できないもの（平安時代から中世前半まで）に二分される。主軸方向の違いからも、平安時代から中世前半に

かけては、２時期の遺構機能時期が想定されるが、検出層位や出土土器等による明確な時期比定が困難であるため、ここでは１つの時期として扱う。また、多くの遺構で鉄滓が出土し、椀形滓も存在していることから、集落内で鍛冶を行っていた可能性がある。

住居跡からは日常的に用いられる土器の他に銅椀や貿易陶磁器である白磁が出土している点が注目される。銅椀や白磁は当該期の相馬地域では出土例が少なく、本集落の一部の住居跡が一般集落の住居跡とは異なる社会階層を有していた可能性を意味する。当該期の集落内で銅椀等の社会階層を示唆する遺物が出土する背景については、本遺跡が太平洋に注ぐ河川三角州の南縁に立地することから、本遺跡から西へ約２㎞に位置する宇多郡衙、寺院に比定される黒木田遺跡への水運による流通等何らかの役割を担った集落である可能性を考えたい。また、第２面の機能時期が律令制の崩壊に向かう時期にあたることを踏まえると、その集落形成には律令制の崩壊に伴って力をつけた在地勢力が関与した可能性も推察できる。このほか住居跡等から土錘の出土が目立つ点も特徴である。漁労に関わる遺物であり、本遺跡における河川や海岸での生業を反映する遺物と考える。

５. 中世後半

第１面で検出した掘立柱建物跡１棟、柱穴列跡３列、土坑21基、溝跡４条、小穴266基が構築される。１号建物跡は柱穴列跡に近接する様相を推定し、当時の屋敷を構成する建物の１つであった可能性がある。１号建物跡の柱穴出土の貝殻に対して放射性炭素年代測定を行ったところ、15世紀半ばから16世紀後半の年代を示している。溝跡を境に東西で小穴の分布に差がみられ、建物配置に何らかの規制があったものと推定される。主に西区調査区内で小穴の分布が密であり、柱穴と推測されるものが多数存在し、建物等の作り替えがあったことが想定される。当該期の屋敷または集落が西区調査区を中心に形成されたとみる。また、土坑や小穴から羽口や鉄滓が出土しており、鍛冶が行われていた可能性がある。加えて、小穴や土坑、溝跡内からは貝殻が出土しており、柱穴底面に敷いた状況や廃棄した状況等、意図的な行為がみられた。特に柱穴底面に粉砕した貝殻を敷いた上で柱を建てている状況は、本遺跡の特徴であり、その機能的な効果については今後の検討が必要である。

確実に近世とされる遺構は検出できなかった。

以上、今回の調査において、梅川左岸で古墳時代、平安時代、中世と複数の時代に形成された集落跡を検出層位４面にわたり確認することができた。これは梅川による沖積層において、各時代の遺構が典型的な層位堆積により残存していたことによるものである。また、遺構外の出土遺物には、弥生時代の太型蛤刃石斧や奈良時代の土器が含まれ、本遺跡周辺には重層的に遺構面が存在する遺跡が広がる可能性は高いと想定される。今回の調査成果も含め、今後の調査資料の蓄積により、宇多川・梅川流域における古墳時代から中世へ至る社会構造が明らかになっていくことを期待したい。

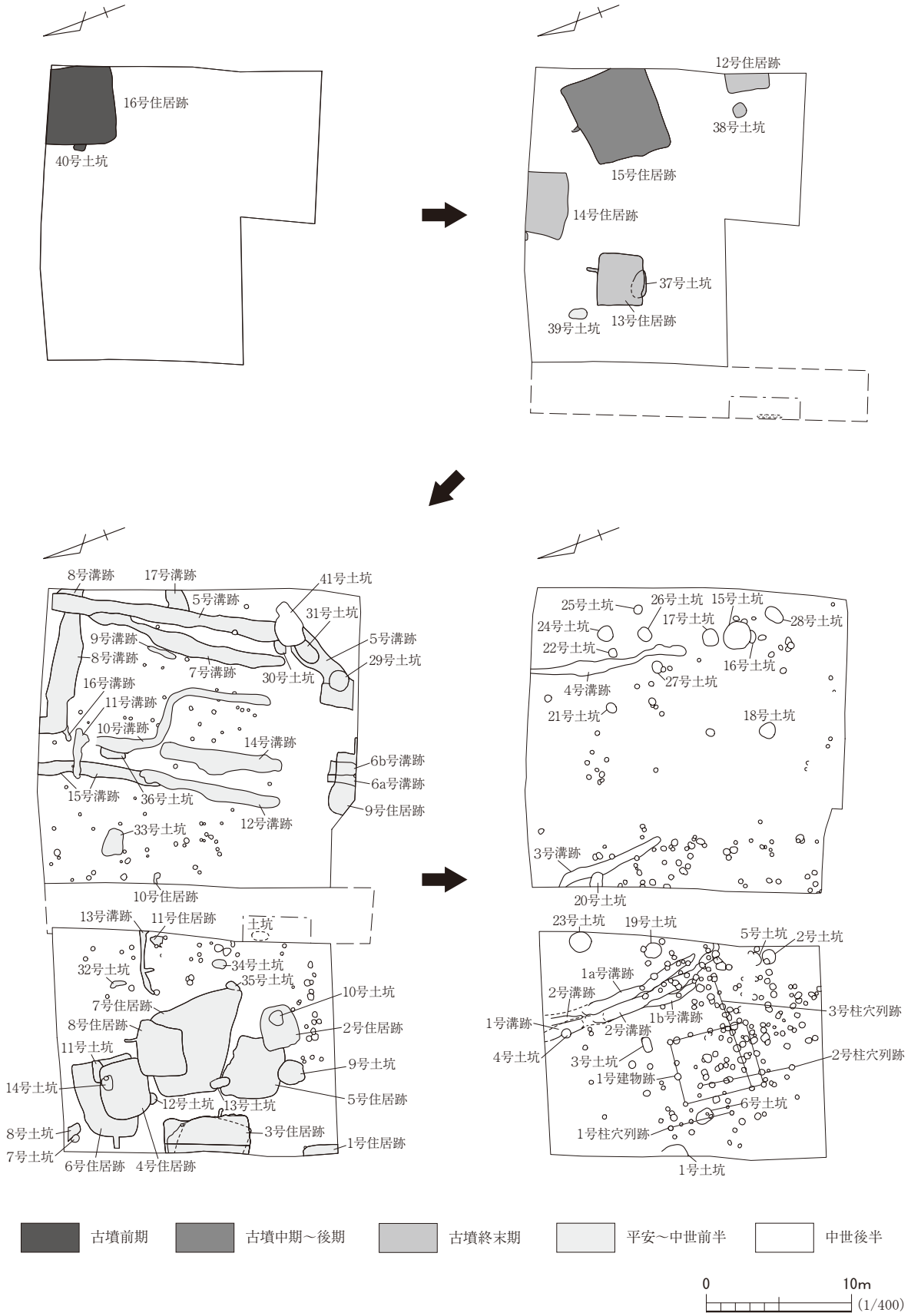

16号住居跡
40号土坑
12号住居跡
38号土坑
15号住居跡
14号住居跡
37号土坑
39号土坑
13号住居跡
8号溝跡
17号溝跡
41号土坑
5号溝跡
31号土坑
9号溝跡
5号溝跡
8号溝跡
29号土坑
7号溝跡
30号土坑
16号溝跡
11号溝跡
10号溝跡
14号溝跡
6b号溝跡
6a号溝跡
15号溝跡
36号土坑
9号住居跡
12号溝跡
33号土坑
10号住居跡
25号土坑
26号土坑
15号土坑
24号土坑
17号土坑
28号土坑
22号土坑
16号土坑
4号溝跡
27号土坑
21号土坑
18号土坑
3号溝跡
20号土坑
13号溝跡
11号住居跡
土坑
32号土坑
34号土坑
35号土坑
10号土坑
7号住居跡
8号住居跡
2号住居跡
11号土坑
9号土坑
14号土坑
12号土坑
13号土坑
5号住居跡
8号土坑
3号住居跡
7号土坑
1号住居跡
6号住居跡
4号住居跡
23号土坑
19号土坑
5号土坑
2号土坑
1a号溝跡
2号溝跡
3号柱穴列跡
1号溝跡
1b号溝跡
2号溝跡
4号土坑
3号土坑
2号柱穴列跡
1号建物跡
6号土坑
1号柱穴列跡
1号土坑
古墳前期
古墳中期～後期
古墳終末期
平安～中世前半
中世後半
0
10m
(1/400)

図92　遺構変遷図

引用・参考文献【１・２・４章】

青山博樹　1999「古墳時代中～後期の土器編年－福島県中通り地方南部を中心に－」『福島考古』第40号記念号　福島県考古学会　pp. 45-69

青山博樹　2010「古墳時代前期の土器編年－仙台平野とその周辺－」『北杜－辻秀人先生還暦記念論集－』辻秀人先生還暦記念論集刊行会　pp. 17-36

飯村　均　1988「福島県における中世陶器生産の様相」『東国土器研究』第１号　東国土器研究会　pp. 101-113

株式会社パスコ（編）　2017『寺内遺跡発掘調査報告書』相馬市文化財報告書　株式会社パスコ

木戸雅寿　1995「９中世陶器　〔３〕信楽」中世土器研究会（編）『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社　pp. 401-411

木本元治　1989「福島県内の黒色土器（古墳時代～奈良時代）」『東国土器研究』第２号　東国土器研究会　pp. 38-53

木本元治　1990「福島県内の黒色土器（平安時代）」『東国土器研究』第３号　東国土器研究会　pp. 17-30

木本元治　2017「平安時代の土師器編年と^{14}Ｃ年代の有効性」『福島考古』第58号　福島県考古学会　pp. 59-78

（公財）福島県文化振興財団　遺跡調査部（編）　2016『農山漁村地域復興基盤総合整備事業関連遺跡調査報告１』福島県文化財調査報告書第508集　福島県教育委員会

（公財）福島県文化振興財団　遺跡調査部（編）　2017『県道北泉小高線関連遺跡発掘調査報告２』福島県文化財調査報告書第516集　福島県教育委員会

（公財）福島県文化振興財団　遺跡調査部（編）　2018『県道浪江鹿島線関連遺跡発掘調査報告１』福島県文化財調査報告書第524集　福島県教育委員会

（公財）福島県文化振興財団　遺跡調査部（編）　2019『阿武隈川上流河川改修事業高木地区遺跡調査報告』福島県文化財調査報告書第531集　福島県教育委員会

（財）福島県文化振興事業団 遺跡調査部（編）　2002『一般国道６号 相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅲ』福島県文化財調査報告書第396集　福島県教育委員会

（財）福島県文化振興事業団　遺跡調査部（編）　2009『阿武隈東道路遺跡調査報告２』福島県文化財調査報告書第463集　福島県教育委員会

（財）福島県文化振興事業団　遺跡調査部（編）　2010『常磐自動車道遺跡調査報告64』福島県文化財調査報告書第473集　福島県教育委員会

（財）福島県文化振興事業団　遺跡調査部（編）　2011『常磐自動車道遺跡調査報告66』福島県文化財調査報告書第479集　福島県教育委員会

（財）福島県文化振興事業団　遺跡調査部（編）　2011『常磐自動車道遺跡調査報告67』福島県文化財調査報告書第480集　福島県教育委員会

佐久間正明　2007「福島県における古墳時代後期土器の特質」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究Ｂ）研究成果報告　東北学院大学文学部　pp. 340-370

篠原祐一　2008「マツリで使われる石製模造品と土製模造品」『山梨県考古学協会2008年度研究集会　土製模造品から見た古墳時代の神マツリ資料集』山梨県考古学協会　pp. ９-18

菅原祥夫　2007「東北・北海道における６-８世紀の土器変遷と地域の相互関係－福島県浜通り地方南部－」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究Ｂ）研究成果報告　東北学院大学文学部　pp. 73-91

相馬市史編さん委員会・相馬市教育委員会生涯学習部生涯学習課市史編さん室（編）　2015『相馬市史』第４巻 資料編Ⅰ　原始・古代

高橋　透（編）　2020『多賀城施釉陶磁器』宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅴ　宮城県多賀城跡調査研究所

太宰府市教育委員会　2000『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第49集　太宰府市教育委員会

東北古代土器研究会福島・宮城支部（編）　2005『東北古代土器集成－古墳後期～奈良・集落編－〈福島〉』東北古代土器研究会福島・宮城支部

中野晴久　1995「９中世陶器　〔２〕常滑・渥美」中世土器研究会（編）『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　pp. 383-400

中山雅弘　1988「福島県における中世土器の様相」『東国土器研究』第１号　東国土器研究会　pp. 114-125

写　真　図　版

64　１号住居跡出土遺物・２号住居跡出土遺物（１）

65　２号住居跡出土遺物（２）・３ａ号住居跡出土遺物（１）

66　３ａ号住居跡出土遺物（２）・３ｂ号住居跡出土遺物（１）

67　３ｂ号住居跡出土遺物（２）・４号住居跡出土遺物（１）

68　４号住居跡出土遺物（２）・５号住居跡出土遺物（１）

69　５号住居跡出土遺物（２）

70　５号住居跡出土遺物（３）

71　６号住居跡出土遺物・７号住居跡出土遺物（１）

72　７号住居跡出土遺物（２）・８号住居跡出土遺物

73　9・10・11 号住居跡出土遺物

74　13 号住居跡出土遺物・14 号住居跡出土遺物（1）

75　14 号住居跡出土遺物（２）・15 号住居跡出土遺物（１）

76　15 号住居跡出土遺物（２）

77　15 号住居跡出土遺物（３）

(SI15)
46-8

(SI15)
46-9

(SI15)
46-10

(SI15)
46-11

(SI15)
46-12

(SI15)
46-13

(SI15)
46-14

(SI15)
46-15

78　15 号住居跡出土遺物（４）

79　15 号住居跡出土遺物（５）・16 号住居跡出土遺物（１）

80　16 号住居跡出土遺物（２）

(SB01)
50－1

(SK05)
62－1

(SK05)
62－2

(SK09)
62－3

(SK09)
62－4

62－5　62－6
(SK09)

(SK13)
62－7

(SK23)
62－8

81　掘立柱建物跡出土遺物・土坑出土遺物（１）

(SK29)
62-9

(SK29)
62-10

(SK30)
62-11

(SK35)
62-12

(SK39)
63-1

(SK39)
63-2

(SK40)
63-3

(SK40)
63-4

82　土坑出土遺物（2）

(SD01)
70－1

(SD03)
70－2

(SD04)
70－3

(SD05)
70－4

(SD05)
70－5

(SD05)
70－6

(SD07)
70－7

(SD07)
70－8

83　溝跡出土遺物（１）

(SD08)
70-9

(SD08)
70-10

(SD10)
70-11

(SD12)
71-1

(SD12)
71-2

(SD13)
71-3

(SD14)
71-4

(SD14)
71-5

84　溝跡出土遺物（２）

85　溝跡出土遺物（３）・小穴出土遺物

（東区西遺物包含層）
77－1

（東区西遺物包含層）
77－2

（東区西遺物包含層）
77－3

（東区西遺物包含層）
77－4

（東区西遺物包含層）
77－5

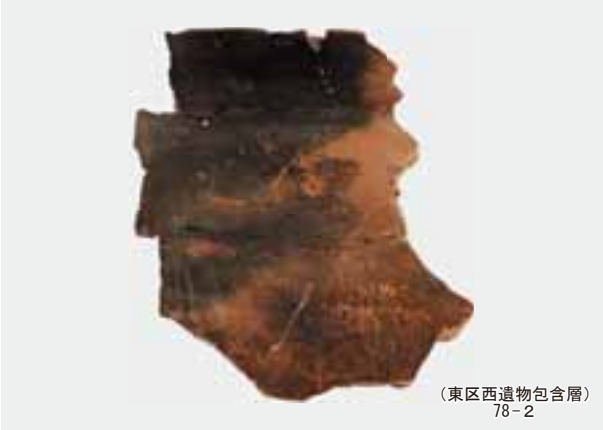
（東区西遺物包含層）
77－6

（東区西遺物包含層）
77－7

86　遺物包含層出土遺物（1）

（東区西遺物包含層）
77－8

（東区西遺物包含層）
78－1


（東区西遺物包含層）
78－2

（東区西遺物包含層）
78－3

（東区西遺物包含層）
78－4

（東区西遺物包含層）
78－5

（東区西遺物包含層）
78－6

（東区西遺物包含層）
78－7

87　遺物包含層出土遺物（２）

（東区西遺物包含層）
78－8

（東区西遺物包含層）
79－1

（東区西遺物包含層）
79－2

（東区西遺物包含層）
79－3

（遺構外）
81－1

（遺構外）
81－2

（遺構外）
81－3

（遺構外）
81－4

88　遺物包含層出土遺物（３）・遺構外出土遺物（１）

（遺構外）
81－5

（遺構外）
81－6

（遺構外）
81－7

（遺構外）
81－8

（遺構外）
81－9

（遺構外）
81－10

（遺構外）
81－11

（遺構外）
81－12

89　遺構外出土遺物（２）

（遺構外）
82－1

（遺構外）
82－2

（遺構外）
82－3

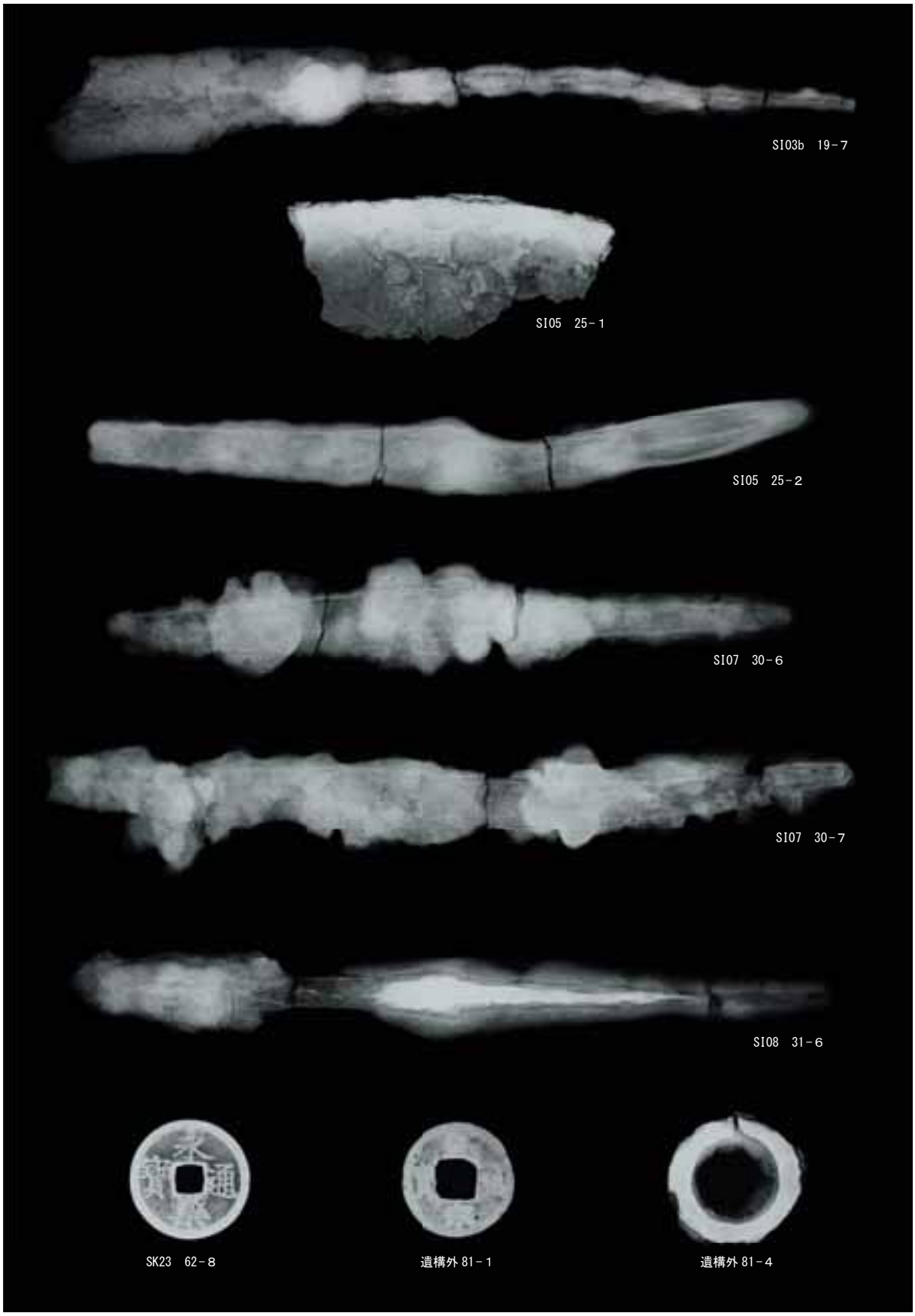
（遺構外）
82－4

（遺構外）
82－5

（遺構外）
82－6

（遺構外）
82－7

90　遺構外出土遺物（３）


SI03b 19-7
SI05 25-1
SI05 25-2
SI07 30-6
SI07 30-7
SI08 31-6
SK23 62-8
遺構外 81-1
遺構外 81-4

91　金属製品Ｘ線写真

報 告 書 抄 録

ふりがな	うめかわすじかいしゅうじぎょういせきはっくつちょうさほうこく１
書名	梅川筋改修事業遺跡発掘調査報告１
シリーズ名	福島県文化財調査報告書
シリーズ番号	第554集
編著者名	木村 直之・岡部 睦美・入倉 徳裕・渡部 紀・大栗 行貴・安藤 淳・佐藤 啓
編集機関	福島県教育委員会 〒960-8688　福島県福島市杉妻町２－16　TEL 024-521-1111
発行年月日	令和４年３月25日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
大毛内Ｂ遺跡（だいもうちびーいせき）	福島県相馬市大曲（ふくしまけん そうまし おおまがり） 字大毛内（あざだいもうち）	2095	0218	37° 47′ 29″	140° 56′ 17″	20200914 ～ 20210210	800㎡	河川改修(梅川筋河川整備事業)に伴う記録保存調査

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
大毛内Ｂ遺跡（だいもうちびーいせき）	集落跡	古墳時代 平安時代 中世	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 柱穴列跡 土坑 溝跡 小穴 遺物包含層	16軒 １棟 ３列 41基 17条 401基 ２箇所	土師器 須恵器 赤焼土器 陶磁器 土製品 石器 石製品 鉄製品 銅製品 鉄滓 動物骨 貝殻	梅川左岸に立地する古墳時代前期、同中期～後期初頭、同終末期、平安時代（９～10世紀）、中世の複合遺跡。

要　約

大毛内Ｂ遺跡は、相馬市の低地の沖積地を東流する梅川の左岸に位置する遺跡である。

調査の結果、古墳時代前期、同中期～後期初頭、同終末期、平安時代（９～10世紀）、中世の複合遺跡であることが判明した。

古墳時代前期の遺構としては、竪穴住居跡１軒と土坑１基を確認した。調査区の周囲に同時期の遺構が広がる可能性はある。

古墳時代中期～後期初頭の遺構としては、竪穴住居跡１軒を確認した。住居跡内からは支脚の上に土師器が被せられていた状況や多数の手づくね土器を確認しており、カマドまたは住居廃絶時に関わる祭祀が行われていたと考える。

古墳時代終末期の遺構としては、竪穴住居跡３軒、土坑２基を確認した。

平安時代～中世前半の遺構としては、竪穴住居跡11軒、土坑17基、溝跡13条、小穴135基を確認した。５号住居跡からは銅椀や白磁が出土したことが特筆される。出土遺物からみて、当該期の集落の一部の住居跡が一般的な集落の住居跡とは異なる性格を有していたと想定される。

中世後半の遺構としては、掘立柱建物跡１棟、柱穴列跡３列、土坑21基、溝跡４条、小穴266基を確認した。建物跡の柱穴底面では粉砕された貝殻が敷かれている状況を確認できた。建物跡の柱穴から出土した貝殻に対して放射性炭素年代測定を行ったところ、15世紀半ばから16世紀後半の年代がでている。

＊経緯度数値は世界測地系(測地成果2011)による。

福島県文化財調査報告書第 554 集

梅川筋改修事業遺跡発掘調査報告 1

大毛内（だいもううち）Ｂ遺跡

令和４年３月 25 日発行

編　集・発　行	福島県教育委員会	（〒 960-8688）	福島県福島市杉妻町 2-16
	福島県土木部	（〒 960-8670）	福島県福島市杉妻町 2-16
印　　刷	株式会社　神奈川機関紙印刷所	（〒 236-0004）	横浜市金沢区福浦 2-1-12

1　遺跡遠景（西から）

2　遺跡遠景（東から）

3　西区西半調査区〈第１面〉全景（上が西）

4　西区東半・東区調査区〈第１面〉全景（上が北）

5　西区西半調査区〈第２面〉全景（上が西）

6　西区東半調査区〈第２面〉全景（上が西）

7　東区調査区〈第２面〉全景（上が北）

8　東区調査区〈第３面〉全景（上が北）

9　調査前状況（西から）

10　基本土層〈東区西壁〉（東から）

11　１号住居跡全景（東から）

12　２号住居跡全景（南から）

13　２号住居跡（１）

a　土層（北西から）　b　遺物出土状況（１）（西から）
c　遺物出土状況（２）（西から）　d　カマド全景（南から）

14　３ａ号住居跡全景（南から）

15　３a・3b・3c 号住居跡

a　３号住居跡土層（東から）　b　３号住居跡土層（南から）
c　３a号住居跡カマド全景（西から）　d　３a号住居跡カマド土層（西から）

16　３ｂ号住居跡全景（南から）

17　３ｂ号住居跡（１）

a　カマド全景(西から)　b　カマド土層(西から)
c　遺物出土状況(１)(西から)　d　遺物出土状況(２)(西から)

18　３ｃ号住居跡全景（南から）

19　３ｃ号住居跡（１）

a　カマド全景(西から)　b　カマド煙道全景(西から)
c　カマド煙道土層(北西から)

20　４号住居跡全景（東から）

21　４号住居跡（１）

a　土層（南東から）　b　焼土面（南から）
c　遺物出土状況（西から）

22　５号住居跡全景（西から）

23　５号住居跡（１）

a　土層（南西から）　b　カマド全景（南東から）
c　遺物出土状況（東から）　d　Ｐ１全景（東から）

24　６号住居跡全景（東から）

25　６号住居跡（１）

a　土層（東から）　b　カマド全景（東から）
c　カマド土層（東から）　d　遺物出土状況（南から）

26　７号住居跡西部分（南から）

27　７号住居跡（１）

a　土層（西から）　b　Ｐ８全景（東から）
c　焼土面土層(1)（南から）　d　焼土面土層(2)（南西から）

28　８号住居跡全景（南から）

29　８号住居跡（１）

a　土層（南から）　b　カマド全景（南から）
c　カマド土層（南から）　d　遺物出土状況（南から）

30　９号住居跡全景（南から）

31　９号住居跡（１）

a　土層(北から)　b　カマド土層(北から)
c　カマド燃焼部・支脚土層(北から)

32　10 号住居跡

a　カマド煙道全景(南から)　b　カマド煙道土層(南から)

33　11 号住居跡

a　全景(西から)　b　土層(南から)

34　12 号住居跡全景（西から）

35　13 号住居跡全景（南から）

36　13 号住居跡（1）

a　カマド全景(南から)　b　カマド土層(南から)

37　14 号住居跡全景（上が北）

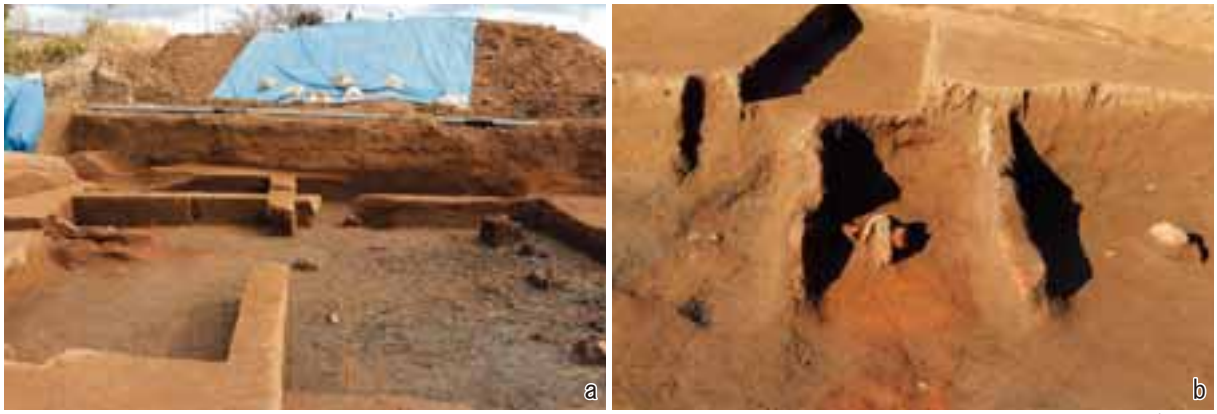
38　14 号住居跡（1）

a　土層(南から)　b　カマド土層(西から)

39　14 号住居跡（２）

a　遺物出土状況（１）（西から）　b　遺物出土状況（２）（西から）

40　15 号住居跡全景（南から）



41　15 号住居跡（１）

a　土層（西から）　b　カマド全景（南から）

42　15 号住居跡（２）

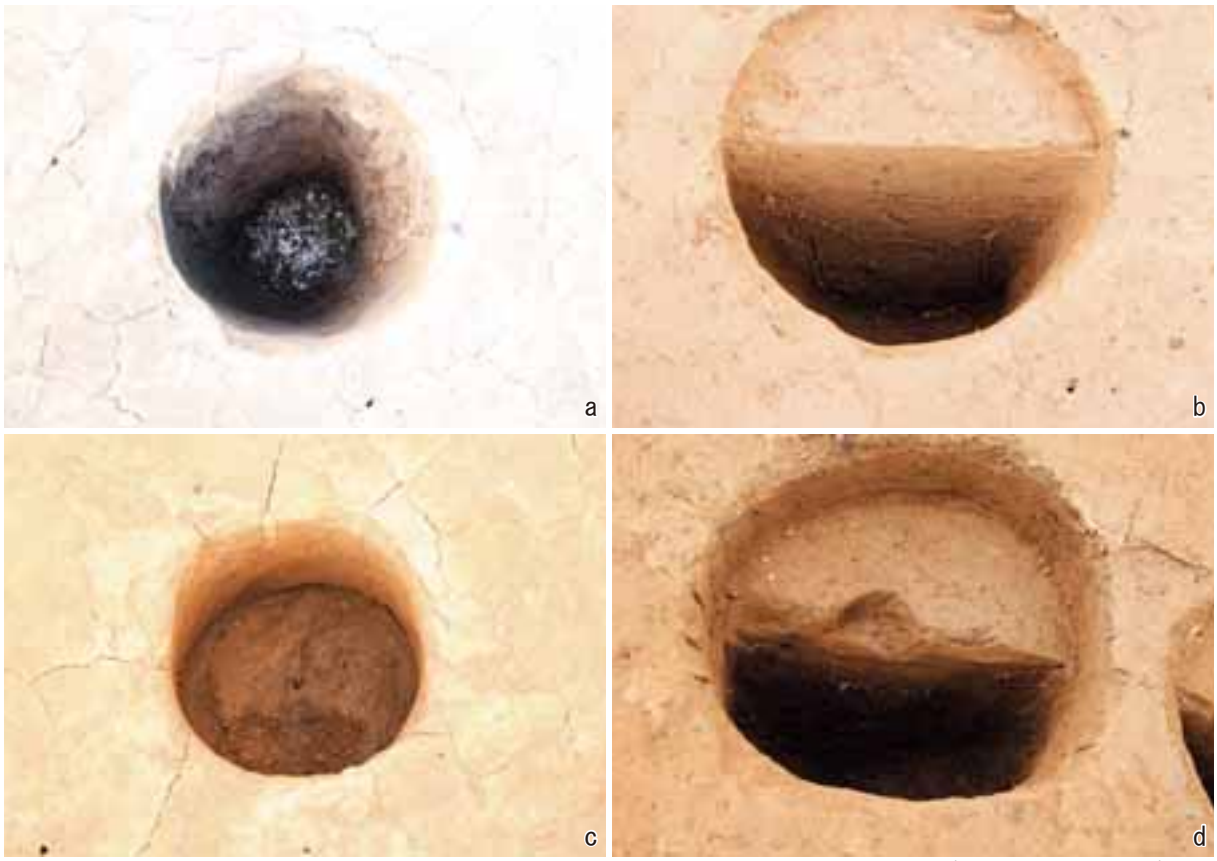
a　カマド土層（南から）　b　遺物出土状況（１）（西から）
c　遺物出土状況（２）（南から）　d　Ｐ１全景（南西から）

43　16 号住居跡全景（南から）

44　16 号住居跡（１）

a　土層（南から）　b　焼土面１・２（南から）
c　焼土面３（南から）

45　１号建物跡全景（東から）



46　１号建物跡（１）

a　ＰＡ１貝殻検出状況（南から）　b　ＰＡ１土層（南から）
c　ＰＣ１全景（南から）　d　ＰＣ１土層（南から）

47　１～４号土坑

a　１号土坑土層（東から）　b　２号土坑土層（南から）
c　３号土坑全景（南から）　d　４号土坑全景（南から）

48　6～14号土坑

a　6号土坑土層（南西から）
b　7・8号土坑全景（南から）
c　9号土坑土層（南西から）
d　10号土坑土層（南から）
e　11号土坑全景（北西から）
f　12号土坑全景（西から）
g　13号土坑鉄滓出土状況（西から）
h　14号土坑全景（南から）

49　15 ～ 22 号土坑

a　15号土坑全景(南から)　b　16号土坑全景(北から)
c　17号土坑全景(南から)　d　18号土坑全景(東から)
e　19号土坑全景(南から)　f　20号土坑全景(東から)
g　21号土坑全景(南から)　h　22号土坑土層(南から)

50　23 ～ 29 号土坑

a　23号土坑土層(南から)　b　24号土坑全景(北西から)
c　25号土坑土層(南から)　d　26号土坑土層(南から)
e　27号土坑全景(西から)　f　28号土坑土層(東から)
g　29号土坑全景(東から)　h　29号土坑掘形土層(南から)

51　30 ～ 38 号土坑

a　30号土坑全景(南から)　b　31号土坑全景(南から)
c　32号土坑全景(西から)　d　33号土坑全景(南から)
e　35号土坑全景(南東から)　f　36号土坑土層(東から)
g　37号土坑土層(東から)　h　38号土坑全景(西から)

52　39 ～ 41 号土坑

a　39号土坑全景（東から）　b　39号土坑土層（西から）
c　40号土坑全景（東から）　d　41号土坑土層（北から）

53　１・２号溝跡全景（南東から）

54　１・２号溝跡土層（南西から）

55　３・４号溝跡

a　３号溝跡全景（南東から）　b　３号溝跡土層（南東から）
c　４号溝跡全景（南東から）　d　４号溝跡断面（南から）

a　5・7～9・10号溝跡（上が北）　b　5・7号溝跡土層（南から）
c　6号溝跡全景（南から）　d　8号溝跡土層（西から）
e　10号溝跡土層（南から）　f　11号溝跡全景（西から）

56　5～11号溝跡

57　12・14・15 号溝跡全景（上が西）

58　12 ～ 15 号溝跡

a　12号溝跡土層（南から）　b　13号溝跡全景（西から）
c　14号溝跡土層（南から）　d　15号溝跡土層（北から）

59　16・17 号溝跡全景（北東から）

a　16号溝跡全景（北東から）　b　16号溝跡土層（北東から）
c　17号溝跡全景（西から）　d　17号溝跡土層（西から）

60　小穴群（１）

a　Ｂ２Ｐ１遺物出土状況（北から）　a　Ｂ２Ｐ48･49土層（南から）
b　Ｂ２Ｐ53土層（南から）　b　Ｂ３Ｐ５・６土層（東から）

61　小穴群（２）

a　Ｃ２Ｐ11土層（南から）　b　Ｃ３Ｐ２全景（東から）
c　Ｃ３Ｐ10土層（北から）　d　Ｅ３Ｐ３土層（東から）

62　遺物出土状況

a　Ｄ１グリッド遺物包含層ℓ１（南から）
b　Ｅ３グリッドＬⅢd（西から）

63　作業風景

a　西区調査区第１面遺構検出風景（西から）
b　西区調査区第１面遺構精査風景（北西から）